

北谷町文化財調査報告書 第22集

うふ さく ぼる
大作原古墓群

—嘉手納(12)・(13)送油管移設に係る文化財発掘調査報告—

2003年3月

沖縄県北谷町教育委員会

うふ さく ばる
大作原古墓群

—嘉手納(12)・(13)送油管移設に係る文化財発掘調査報告—

2003年 3 月

沖縄県北谷町教育委員会

正 誤 表

大作原古墓群発掘調査報告書

北谷町

頁	訂正前	訂正後	頁	訂正前	訂正後
巻首図版	15・8・9号墓	16・8・9号墓	45頁 図版番号	図版28の9	図版28の11
例言 4と8	真喜屋	眞喜屋	44頁 図版番号	図版28の4	図版28の2
例言 8	名嘉間	名嘉真	45頁 図版番号	図版28の10	図版28の8
2頁 1行目	豊里初枝	豊里初江	45頁 第32図10 分類の欄	B3	A4
報告書抄録	936-7706	936-3490	45頁 図版番号	図版28の2	図版28の3
報告書抄録の編著者名	真喜屋	眞喜屋	45頁 図版番号	図版28の3	図版なし
報告書抄録 遺物散布地 主な遺物	土器 石器 須恵器	土器 石器 類須恵器 青磁 染付	45頁 図版番号	図版28の8	図版28の10
1頁 34行目	真喜屋	眞喜屋	45頁 図版番号	図版28の5	図版28の4
2頁 22行目	吉本	吉元	45頁 図版番号	図版27の3	図版27の4
7頁 第2図の図中	⑩⑬⑰	⑩⑮⑰	45頁 図版番号	図版27の4	図版27の3
8頁 9行目	13・17号墓、	13・15・17号墓、	46頁 第33図2 観察事項	「き」なし	「き」あり
9頁 8行目	方形状	不定形	46頁 図版番号	図版30の7	図版30の9
11頁 9行目	北東	北北西	46頁 図版番号	図版30の8	図版30の7
13頁 34行目	C地区	B地区	46頁 第34図8 分類の欄	A1イ②	A1イ①
14頁 18行目	南南西	南南東	46頁 図版番号	図版30の9	図版30の8
14頁 30行目	南南東	西南西	46頁 第29図2 分類の欄	空欄	Ⅱ類
15頁 8行目	南東	南南東	47頁 第36図1 図版番号	図版32の1	図版32の2
16頁 5号墓 タナの数 正面の欄	空欄	5	47頁 分類の欄	甕形	Ⅲ類
16頁 6号墓 墓口の向き	北東	北北西	47頁 図版番号	図版32の2	図版32の1
16頁 17号墓 墓口の向き	南南西	南南東	47頁 図版番号	図版32の4	図版32の3
16頁 15号墓 墓口の向き	南南西	南南東	47頁 図版番号	図版32の3	図版32の4
38頁 24行目	(…第28図2…)	(…第28図1…)	47頁 図版番号	図版31の3	図版31の4
38頁 25行目	(第23図2…)	(第23図1…)	47頁 第35図3 分類の欄	B2イ	B1ア①
39頁 26行目	2. 径の…	2. 口径の…	47頁 図版番号	図版31の4	図版31の5
40頁 11行目	(…第34図2 (6)…)	(…第33図2…)	47頁 図版番号	図版31の5	図版31の3
40頁 13行目	(第34図6)	(第34図2)	47頁 図版23の墓番号	4号墓	6号墓
40頁 18行目	(…第35図4)	(…第35図4、第35図2)	65頁 26行目	議会棟建設	議会棟建設
40頁 19行目	(第34図1、第35図2、)	(第34図1)	69頁 第5表a 猪口の分類(釉)欄	Ⅲ	I b
41頁 4号墓 光緒の欄	1906年 光緒32年	削除	69頁 第5表a 不明の小計・合計欄	11	12
41頁 4号墓 明治の欄	1906年	1897年	91頁 14行目	(15号墓)	(1号墓)
42頁 表項目のⅡ類A1 とⅡ類A2部位の欄	胴部 胴部	胴部 底部	91頁 14行目	の平葺墓	の亀甲墓(5号墓)・平葺墓
45頁 第27図1 観察事項	(明治30)。	(明治30)のうち後者は干支が一致。光緒三十二年は光緒二十三年の誤記とみられる。	92頁 11行目	10基	11基
44頁 第25図1 蓋の銘書	十二月	一月十二日	92頁 14行目	女性3体)	女性3体、幼児1体)
44頁 第25図2 分類の欄	B2	A2	102頁 3行目	石器は11点出土	石器は13点
44頁 第26図2 分類の欄	A1	A1イ	102頁 4行目	敲石が3点	敲石が5点
44頁 図版番号	図版28の11	図版28の9	111頁	図版6 3段右…「ロ」…	図版6 3段右…「×」…
			128頁	図版23…4号墓…	図版23…6号墓…
			175頁 表1 No.2 銘書の内容	七月	旧七月
			175頁 表1 No.5 銘書の内容	十二月	一月十二日



卷首図版 上段：A地区 1号墓
下段：C地区 15・8・9号墓（左から）

はじめに

本報告書は、米軍基地の嘉手納基地に所在する「大作原古墓群」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

近年、墓も埋蔵文化財として認識され、県内各地で多くの古墓の発掘調査が行われるようになり、文献には記されない歴史・文化の一面が、墓やそれに伴う遺構・さまざまな遺物から近世沖縄の様子を見ることができます。

今回調査を行った大作原古墓群は、平安山・浜川・伊礼集落に暮っていた人達の墓で、集落から離れた丘陵に築かれた古墓が確認されました。外観は亀甲墓・平葺墓・掘込墓等で、墓からは、蔵骨器などの遺物が出土し、墓から検出された蔵骨器である厨子甕（方言名：ジーシガーミ）に記された銘書からみると18世紀前半から戦前（昭和）・現在までの古墓群であることが判明しました。

町内には、まだ多くの古墓を含め、貴重な埋蔵文化財が残されております。今後、さらに調査研究を行うことで、私たちの祖先が築き上げてきた歴史や文化を解明することができることと確信しております。

他方、貴重な文化遺産を記録・保存するだけでなく後世に残すことも私たちの使命であります。

本書が多くの方々に活用され、さらなる文化財保護思想の高揚はもとより・諸開発事業における調整・協議、学術研究の一助ともなれば幸いです。

なお、発掘調査・資料整理にあたり御指導、御協力を頂いた関係各位に、深く感謝申し上げます。

平成15年3月

北谷町教育委員会
教育長 瑞慶覧 朝宏

例 言

1. 本報告書は平成12・13年度事業として「嘉手納（12）送油管移設に係る文化財発掘調査」「嘉手納（13）送油管移設に係る文化財発掘調査」として、那覇防衛施設局と受託契約をおこない『大作原古墓群』の緊急発掘調査報告書として、その成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地形図は国土地理院の承認を得て北谷町役場が複製した25,000分の1の地形図と、沖縄県の承認を得た北谷町役場都市計画課作成の地形図、那覇防衛施設局建設部作成の平面図（300分の1）を借用した。
3. 遺物の同定は下記の先生方による。記して謝意を表します。

陶磁器	金武 正紀（那覇市教育委員会文化財課課長）
人 骨	松下 孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）
貝 類	黒住 耐二（千葉県立中央博物館 上席研究員）
4. 附記として下記の先生方から玉稿を戴いた。記して謝意を申し上げます。

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長	松下 孝幸
千葉県立中央博物館 上席研究員	黒住 耐二
北谷町文化課嘱託	真喜屋 隆（民俗）
北谷町文化課嘱託	伊波 直樹（民俗）
5. 蔵骨器（厨子甕：ジーシガーミ）の銘書（ミガチ）の文字判読は下記の先生方による。記して感謝申し上げます。

那覇市歴史資料室	島尻克美
北谷町文化課町史編集	玉木順彦
6. 本古墓群の聞き取り調査で、字浜川の方々に御教示を戴いた。記して感謝申し上げます。

島袋善弘・照屋仁政・新垣高明・島袋吉盛・新垣政男・島袋善助・照屋仁盛・照屋文吉

7. 本書の執筆は下記の分担で行った。編集は山城・島袋 春美で行った。

第Ⅰ・Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章1、第Ⅴ章、第Ⅵ章1	山城 安生
第Ⅳ章5・6、第Ⅵ章4	松原 哲志
第Ⅳ章2・4・13	尾木 綾
第Ⅳ章9	安里 美紀
第Ⅳ章11・12	縄田 雅重
第Ⅳ章8、第Ⅵ章3	菊池 恒三
第Ⅳ章7、第Ⅵ章2	砂川 正幸

8. 遺物洗浄・接合・実測・集計・図面整理・表・トレース・図版等の資料整理は下記の人員で行った。

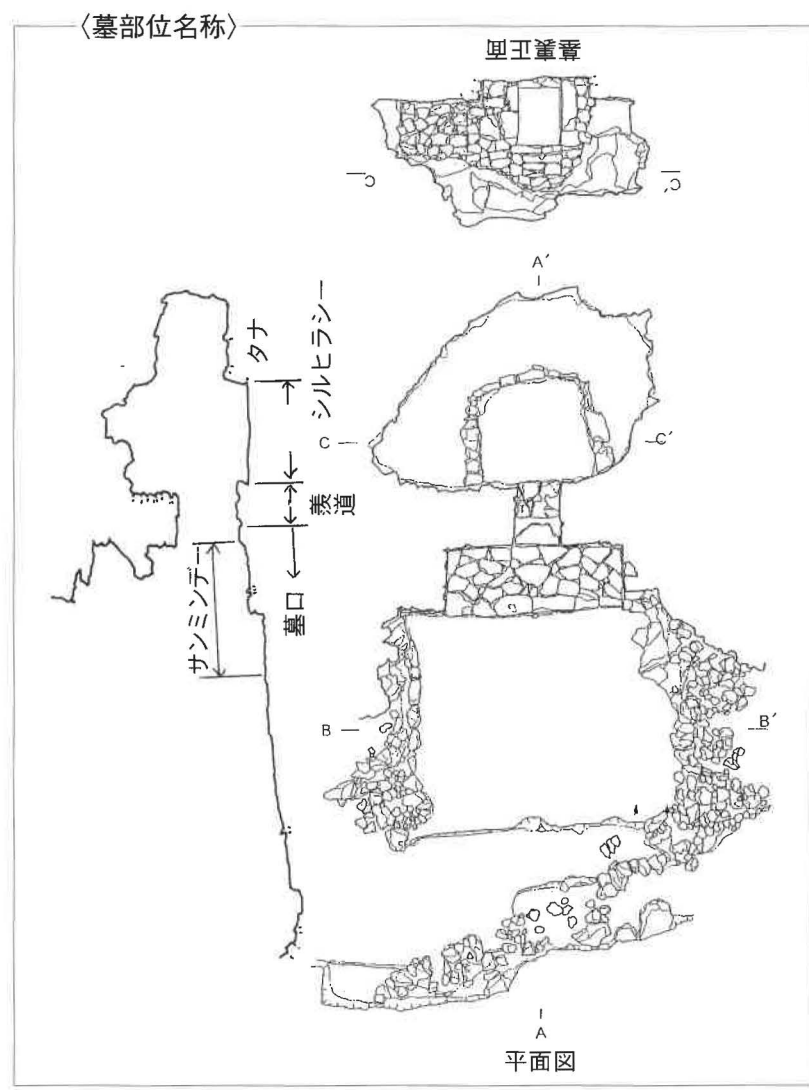
喜友名勇人 真喜屋 隆 伊波 直樹 嘉陽田 恒 古波蔵 均 宮平 諭 名嘉間 清介
添石 雄一 山内 真治 菊池 恒三 新垣 政一 宇根 美智子 前田 和枝 知念 均
豊里 初江 我如古 真弓 前川 恵子 曾木 菊枝 鳥袋 春美 富平 砂綾子
上間 真寿美 上原 恵 (順不同)

9. 本報告書に掲載した写真は現場は山城安生・出土遺物は菊池恒三が撮影を担当した。

10. 墓の部位の「墓面」・「裏正面」・「羨道」等の呼称については「山川原古墓群（2）」（北谷町教育委員会）で使用した呼称である。（下図参照）

11. 墓の計測値の基準についても「山川原古墓群（2）」（北谷町教育委員会）と同じである。

12. 発掘調査で得られた出土遺物及び資料は、北谷町教育委員会に保管されている。



報告書抄録

ふりがな	うふさくばるこぼぐん							
書名	大作原古墓群							
副書名	嘉手納(12)・(13)送油管移設に係る文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	北谷町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	山城安生・松下孝幸・黒住耐二・真喜屋 隆・伊波直樹・安里美紀・尾木綾・菊池恒三・砂川正幸・縄田雅重・松原哲志							
発行機関	北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-7706							
発行年月日	西暦2003年3月31日(平成15年)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
大作原古墓群	北谷町字大作原	473260		26° 19' 25" ～ 26° 19' 27"	127° 45' 21" ～ 127° 45' 50"	12年度 2000 07 ～ 2001 03 13年度 2001 04 ～ 2001 10	1,6200m ²	那覇防衛施設局の嘉手納米軍基地内の送油管移設工事に係る緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大作原古墓群	古墓	18世紀初めから第二次大戦後(昭和)・現在	亀甲墓 平葺墓 岩陰墓 掘込墓	蔵骨器 転用蔵骨器 沖縄産陶器 中国産陶磁器 本土産陶磁器 銭貨 金属製品 ガラス製品 プラスチック製品 根付			ハワイ移民の人の墓に英語の墓建築月日の刻印あり。墓周辺から後期遺物の出土。 近くに遺跡あり、古墓群はその遺物散布地でもある。	
	遺物散布地	後期 グスク		土器 石器 須恵器			近くに遺跡あり、古墓群はその遺物散布地でもある。	

目 次

巻首図版

はじめに

報告書抄録

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
3. 調査経緯	3
第Ⅱ章 位置と環境	4
第Ⅲ章 遺構	8
・ 1号墓	8
・ 2号墓	8
・ 3号墓	9
・ 4号墓	9
・ 5号墓	10
・ 6号墓	10
・ 7号墓	11
・ 8号墓	11
・ 9号墓	12
・ 10号墓	12
・ 11号墓	12
・ 12号墓	13
・ 13号墓	13
・ 14号墓	13
・ 15号墓	14
・ 16号墓	14
・ 17号墓	14
第Ⅳ章 遺物	38
第1節 蔵骨器	38
第2節 青磁	64
第3節 白磁	64
第4節 染付	65
第5節 沖縄産陶器	67
第6節 陶質土器	73
第7節 本土産磁器	75

第8節	玉類	78
第9節	円盤状製品	79
第10節	銭貨	80
第11節	金属製品	81
第12節	ガラス製品	88
第13節	根付	90
第V章	まとめ	91
第VI章	遺物散布地（試掘No.1トレンチ）	93
第1節	調査経緯	93
第2節	土器	95
第3節	類須恵器	101
第4節	石器	102
附編		
1.	沖縄県北谷町大作原古墓群出土の人骨	149
2.	貝類遺体	163
3.	大作原古墓群1号墓	173
4.	大作原古墓群についての聞き取り調査	177
挿 表 目 次		
第1表	各墓の特徴、墓庭・墓室の部位別計測値一覧	16
第2表	出土蔵骨器銘書と造営年号比較	41
第3表	蔵骨器出土一覧	42
第4表	蔵骨器観察一覧	44
第5表a	沖縄産施釉陶器出土一覧	69
第5表b	沖縄産施釉陶器観察一覧	70
第6表	陶質土器出土一覧	73
第7表	本土産磁器観察一覧	76
第8表	円盤状製品観察一覧	79
第9表	銭貨観察一覧	80
第10表	金属製品出土一覧	81
第11表	釘観察一覧a・b	82
第12表	指輪観察一覧a・b	84
第13表	煙管観察一覧	86
第14表	ガラス製品出土一覧	88
第15表	土器出土一覧	96
第16表	土器観察一覧a・b	97
第17表	石器観察一覧	102

第18表	石器出土一覧	103
------	--------	-----

挿 図 目 次

第1図	北谷町の位置と遺跡分布	6
第2図	大作原古墓群の墓の配置	7
第3図	各地区の墓の配置	18
第4図	A地区1号墓(1) 平面図・側面図	19
第5図	A地区1号墓(2) 正面図、墓室	21
第6図	A地区2号墓	22
第7図	A地区3号墓	23
第8図	B地区4号墓	24
第9図	B地区5号墓	25
第10図	B地区6号墓	27
第11図	B地区7号墓	29
第12図	C地区9号墓	29
第13図	C地区8号墓	30
第14図	C地区10号墓	31
第15図	B地区11号墓	33
第16図	B地区12号墓	35
第17図	B地区13号墓	35
第18図	C地区15号墓	36
第19図	C地区16号墓	36
第20図	C地区17号墓	37
第21図	蔵骨器<1>1号墓 II類陶製家形蔵骨器 No.1(蓋・身)	48
第22図	蔵骨器<2>1号墓 II類陶製家形蔵骨器 No.2(蓋・身)	49
第23図	蔵骨器<3>1号墓 II類陶製家形蔵骨器 No.3(身)	50
第24図	蔵骨器<4>1号墓 II類陶製家形蔵骨器 No.4(蓋・身)	51
第25図	蔵骨器<5>1号墓 II類陶製家形蔵骨器 No.5(蓋・身)	52
第26図	蔵骨器<6>1号墓 III類陶製有頸甕形蔵骨器 No.6(1・2)、No.7(3・4)	53
第27図	蔵骨器<7>4号墓 II類陶製家形蔵骨器(1・2)	54
第28図	蔵骨器<8>4号墓 II類陶製家形蔵骨器	55
第29図	蔵骨器<9>17号墓 II類陶製家形蔵骨器	56
第30図	蔵骨器<10>8号墓 I類石製家形蔵骨器	57
第31図	蔵骨器<11>8号墓 III類陶製有頸甕形蔵骨器(3・4)、 IV類陶製軒付甕形蔵骨器(1・2)	58
第32図	蔵骨器<12>2号墓(1)、3号墓(2~10) III類陶製有頸甕形蔵骨器(1~4)	59
第33図	蔵骨器<13>11号墓(1)、12号墓(2・3)、15号墓(4・5)	

	Ⅲ類 陶製有頸甕形蔵骨器	60
第34図	蔵骨器<14>12・13号墓(7・8)、13号墓(1～6、9～12)	
	Ⅲ類 陶製有頸甕形蔵骨器	61
第35図	蔵骨器<15>17号墓 Ⅲ類 陶製有頸甕形蔵骨器(1～7)	62
第36図	蔵骨器<16>17号墓 Ⅲ類 陶製有頸甕形蔵骨器(1～4)	63
第37図	青磁・白磁	66
第38図	染付	66
第39図	沖縄産陶器<1>	71
第40図	沖縄産陶器<2>	72
第41図	陶質土器	74
第42図	本土産磁器	77
第43図	玉類	78
第44図	円盤状製品の大きさ分布	79
第45図	円盤状製品	80
第46図	鉄製品	83
第47図	煙管の呼称	85
第48図	指輪、簪、煙管、煙管入れ	87
第49図	ガラス製品、他	89
第50図	根付	90
第51図a	大作原古墓群B地区試掘No.1トレンチの位置	94
第51図b	大作原古墓群B地区試掘No.1～3トレンチの設定	94
第52図	試掘No.1トレンチ層位柱状模式	93
第53図	土器(口縁部)	99
第54図	土器(底部)	100
第55図	類須恵器	101
第56図	石器<1>(敲石類)	104
第57図	石器<2>(石斧・他)	105

図版目次

図版1	1段左：A地区遠景(南西から)	1段右：C地区伐採後(西側から)	106
	2段：B地区伐採後{5号墓(右)・11号墓(奥)}		
	3段左：5号墓の伐採作業風景	3段右：6号墓周辺検出作業風景	
図版2	1号墓		107
	1段：全景		
	2段左：墓室内	2段右：1号墓(東側より)	
	3段左：墓室内(左タナ)	3段右：墓室裏正面	
図版3	2・3号墓		108

	1段	: 2・3号墓全景 (右から)	
	2段左	: 3号墓左袖垣 (外側)	2段右: 2号墓左袖垣 (内側より)
	3段左	: 3号墓室内	3段右: 2号墓室
図版4	4号墓	109
	1段左	: 全景	
	2段左	: 左袖垣	2段右: 4・5号墓伐採後 (左から)
	3段左	: 墓室正面	3段右: 墓外出土状況
図版5	5号墓	110
	1段	: 全景	
	2段左	: 墓室内	2段右: 裏正面
	3段左	: 築造月日 (サンミデー左角)	3段右: シルヒラシ
図版6	6号墓	111
	1段	: 全景	
	2段左	: 墓正面	2段右: 墓室天井に残る漢数字 (「一」「二」)
	3段左	: 墓室	3段右: 墓室天井に残る漢数字と片仮名 (「三」「ロ」「イ」)
図版7	7号墓	112
	1段	: 全景	
	2段左	: 7号墓 (奥は6号墓)	2段右: 墓室
	3段左	: 6号墓左側の石積	3段右: 墓室
図版8	8号墓	113
	1段	: 全景	
	2段左	: 墓庭	2段右: 石厨子の墓室での検出状況
	3段左	: 裏正面	3段右: 左側タナ
図版9	9・10号墓	114
	1段左	: 9号墓 正面	1段右: 10号墓 墓室
	2段左	: 9号墓 墓室	2段右: 10号墓 墓室右側
	3段	: 8~10・15号墓 (左側)	
図版10	11号墓	115
	1段	: 全景	
	2段左	: 墓室正面	2段右: 墓口 (内側から)
	3段左	: 墓右タナ	3段右: シルヒラシ
図版11	12・13号墓	116
	1段	: 12・13号墓と墓道への石橋	
	2段左	: 12号墓正面	2段右: 13号墓正面
	3段左	: 12号墓の蔵骨器出土状況	3段右: 13号墓の蔵骨器出土状況

図版12	15号墓	117
	1段 : 近景 (右は8号墓)	
	2段 : 墓正面	2段右 : 裏正面
	3段左 : 墓室	3段右 : 伐採後の状況
図版13	16号墓	118
	1段 : 遠景 (右は8号墓)	
	2段 : 全景	
	3段左 : 墓室	3段右 : 伐採後の状況
図版14	17号墓	119
	1段 : 全景	
	2段左 : 墓室内の蔵骨器出土状況	2段右 : 裏正面 (右側)
	3段左 : 墓室	3段右 : 裏正面 (左側)
図版15	17号墓	120
	1段左 : 墓口	1段右 : 瓶 (沖縄産施釉) の検出状況
	2段左 : 蔵骨器・瓶・指輪・釘の 検出状況 (墓庭)	2段右 : 蔵骨器の検出状況
	3段左 : 指輪・釘の検出 (左袖垣端下)	3段右 : 酒注 (沖縄産施釉) の検出状況
	4段左 : 指輪・釘の一部取り上げ後	4段右 : 土坑完掘状況 (墓庭外)
図版16		121
	1段左 : 14号墓検出状況	1段右 : 試掘No.1 トレンチ (全景)
	2段左 : D地区の石積	2段右 : 試掘No.1 トレンチ (東壁)
	3段左 : D地区の石積裏側	3段右 : 試掘No.2 トレンチ (北壁)
	4段左 : 鏝の検出状況	4段右 : 試掘No.2 トレンチ (南壁)
図版17	蔵骨器<1>1号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 No.1(蓋・身) 122
図版18	蔵骨器<2>1号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 No.2(蓋・身) 123
図版19	蔵骨器<3>1号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 No.3(身) 124
図版20	蔵骨器<4>1号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 No.4(蓋・身) 125
図版21	蔵骨器<5>1号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 No.5(蓋・身) 126
図版22	蔵骨器<6>1号墓	Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器甕型 No.6(1・2)、No.7(3・4) 127
図版23	蔵骨器<7>4号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 128
図版24	蔵骨器<8>4号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 129
図版25	蔵骨器<9>17号墓	Ⅱ類陶製家形蔵骨器 130
図版26	蔵骨器<10>8号墓	Ⅰ類石製家形蔵骨器 131
図版27	蔵骨器<11>8号墓	Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器(3・4)、 Ⅳ類陶製軒付甕形蔵骨器(1・2) 132
図版28	蔵骨器<12>2号墓(1)、3号墓(2~11)	Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器(1~4) 133
図版29	蔵骨器<13>11号墓(1)、12号墓(2・3)、15号墓(4・5)	

	Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器	134
図版30	蔵骨器<14>12・13号墓(7・8)、13号墓(1～6、9～12)	
	Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器	135
図版31	蔵骨器<15>17号墓 Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器(1～7)	136
図版32	蔵骨器<16>17号墓 Ⅲ類陶製有頸甕形蔵骨器(1～4)	137
図版33	白磁・青磁	138
図版34	染付	138
図版35	類須恵器	139
図版36	陶質土器	139
図版37	沖縄産施釉陶器(1)	140
図版38	沖縄産施釉陶器(2)	141
図版39	本土産磁器	142
図版40	錢貨	143
図版41	円盤状製品	143
図版42	ガラス製品	143
図版43	鉄製品(右下：レントゲン写真)	144
図版44	金属製品(1) 指輪	145
図版45	金属製品(2) 簪・煙管・他	145
図版46	玉類	78
図版47	根付	90
図版48	土器口縁部(上：表面 下：裏面)	146
図版49	土器底部(上：表面 下：裏面)	147
図版50	石器	148

第 I 章 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

大作原古墓群発掘調査は、那覇防衛施設局との委託事業である。

本古墓群は、平成11年8月に那覇防衛施設局より、「キャンプ瑞慶覧ほか3施設における埋蔵文化財の有無について」の照会があり、同文書で照会があった計画地域について、試掘・現場踏査が平成12年2月4日から2月29日間の16日間で行われた。

そのうち、キャンプ桑江の新設パイプライン計画の嘉手納基地内部分にあたる、県道23号線沿いの地域では、伐採以前の現場踏査で古墓が11基（大型亀甲墓2基・破風墓1基、中型フィンチャー4基、小型フィンチャー墓2基、仮墓2基）が確認され、さらに増加の可能性があると回答された。

本古墓群は、新発見の「大作原古墓群」として平成12年5月30日付けで遺跡発見の通知の届け出が行われた。

本古墓群については、パイプラインの計画がキャンプ桑江から嘉手納基地までの広い範囲であることも含め、その対応について沖縄県文化課と調整を行い、嘉手納基地内の古墓については、北谷町で調査を行うこととなり那覇防衛施設局と事業調整を進め緊急発掘調査が行われた。

2. 調査体制

今回の調査体制は、発掘調査から資料整理、報告書の刊行まで含めて下記のとおりであった。

調査組織

調査主体	北谷町教育委員会
調査責任者	教育長 瑞慶覧 朝 宏（平成12年度） 文化課長 嘉手納 昇（平成12～14年度）
調査総括	文化係長 中 村 愿（平成12～14年度）
調査事務	比 嘉 ゆかり（平成12～14年度） 我那覇 智 美（平成12年度） 山 口 まゆみ（平成13年度）
調査担当者	主任主事 山 城 安 生
調査補助員（嘱託職員）	喜友名 勇 人 真喜屋 隆
	伊 波 直 樹
（臨時職員）	宇 根 美智子 前 田 和 枝

(臨時職員)

豊里初枝
我如古真弓
新垣政一
嘉陽田恒
古波蔵均
宮平諭
名嘉間清介
添石雄一
山内真治

発掘調査作業員

《沖縄市シルバー人材センター》

安慶名 栄吉・石原 昌俊・伊志嶺 正男・金城 孝次郎・佐久間 政一・島田 浩
島袋 常憲・宮里 勇三郎・名嘉 正文・仲地 脩昭・仲松 行正・名嘉 正文・高江洲 昌吉・
呉屋 天爵・普天間 直純・田畑 政夫・石原 昌珍・砂辺 光男・下地 富夫・島袋 政弘・
島袋 盛厚・大城 修・金城 貞重・比嘉 定義・与那嶺 幸一・真玉橋 勝春・新垣 真康・
古堅 松三・郡山 隆彦・下地 寛勝・伊佐 眞儀

《宜野湾市シルバー人材センター》

古賢 勇・幸喜 信正・久志 安貞・仲村 信一・大城 安章・島袋 定雄・高良 浩二・
武島 儀行・上原 和正

《北谷町シルバー人材センター》

新垣 好惟・新垣 義孝・儀間 義忠・比嘉 盛徳・平田 盛和・熊谷 嘉文・仲村渠 春義・
小渡 善昌・大嶺 明文・徳嶺 栄吉・内間 千福・吉田 昌博・吉本 光清・四本 正

《調査助言・鑑定・分析》

中山 清美 (笠利町歴史民俗博物館 副館長)
樋泉 岳二 (早稲田大学 日本学術振興会 特別研究員)
黒住 耐二 (千葉県立中央博物館 上席研究員)

《人骨分析鑑定》

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
松下 孝幸 (館長)
松下 玲子
中野 範子

《調査協力》

島袋 善弘・照屋 仁政・新垣 高明・島袋 吉盛・新垣 政男・島袋 善助・照屋 仁盛・
照屋 文吉

3. 調査の経緯

調査は、嘉手納（12）送油管移設に係る文化財発掘調査、嘉手納（13）送油管移設に係る文化財発掘調査として、平成12・13年度にまたがる約9ヶ月間で行なった。

調査は平成12年8月に那覇防衛施設局による調査支援が行われ、調査範囲とそれに伴う重機などの侵入道の伐採作業が行なわれた。それと同時に、基地への立入りの手続が行われたが、その手続には日数を要し、その後、重機、作業員を投入しての発掘作業は、平成12年12月21日から平成13年3月31日までと、平成13年4月9日から平成13年10月31日までであった。

今回の発掘調査の作業員は、これまでとは異なり、当該年度は町内で数カ所の発掘調査があり作業員の確保は、沖縄市・宜野湾市のシルバー人材センター、さらに、平成13年度に北谷町シルバー人材センターが設立されたことから、同人材センターからも発掘作業員が新たに加わった。

調査は、工事計画が4つの谷間にまたがっていることからA・B・C・D地区に分け、調査範囲の東側にあたるC地区を、後の建設工事との兼合いから優先して行った。その結果3つの谷間で総数17基の墓が検出された。A地区3基・B地区8基・C地区6基である。D地区では墓の確認はされていないが、防空壕ではないかと考えられる石積と斜面の窪みがあり、検出作業を行なったが確認されなかった。また、A地区では、閉じられたままの墓（1号墓）があり、その墓の持ち主の御理解・御協力を得て、墓を開けて調査を行い、蔵骨器に納められていた人骨について、形質人類学の視点からの分析鑑定調査を行った。B地区で発見された14号墓は、左側の袖垣部分以外は、嘉手納基地のフェンスから外側にあり、調査範囲内にかかる部分については、基地のフェンスの地盤が不安定になることから、それを保持するためにバックホーによる検出状態での写真撮影のみで終了した。

本調査期間中は、度重なる台風の襲来や2001年9月11日の同時多発テロが発生し、基地内への立入り検査が厳重になり、出入りに要する時間に影響が生じた。

本古墓群は、調査範囲が幅約30mで、長さ約1.6kmと細長く、4つの谷間またがる地形や、嘉手納基地内の排水溝が敷設されていることから車輛の侵入ができない地域で、必要な資材を人力で担いでいかなければならない厳しい側面もあり、バックホーの作業工程との連携が重要であった。

また、本古墓群一帯は、前述した基地内からの排水溝が設置された地域であることから、赤水流失対策として、伐採した樹木や表土剥ぎ土を利用した土手、ブルーシート被覆だけでなく、那覇防衛施設局と調整し地表面の硬化剤を塗布して対策を行った。

検出された墓のうち建設計画範囲に、その一部が掛かるものについては、建設作業行程の範囲内で留意して保存された。

第Ⅱ章 位置と環境

大作原古墓群は、北谷町字伊平大作原538番地ほかに所在する。

北谷町は、沖縄本島中部に位置し、県庁所在地の那覇から北に直線距離で約16 kmの東シナ海に面した西海岸側にある（第1図）。本町の北側は嘉手納町、東側は沖縄市、北中城村、南側は宜野湾市と接し、東西に4.31 km、南北に5.91 kmを測り、総面積13.62 km²である。

本古墓群が位置する一帯を町域の地形で見ると、北側の丘陵地にあたる。本町は、東高西低の地形で、町域の東側は標高約100mの海成段丘の縁にあたり、しだいに西側へ低くなり海成段丘に囲まれるように沖積平野がひろがる。

町域の北側には本古墓群が所在する嘉手納基地があり、西側の沖積低地部には平成14年度3月に北側地区が返還されるキャンプ桑江、南側にはキャンプ瑞慶覧がある。

現在は、町域の約57%が米軍基地であるが、沖縄戦の上陸地点であった本町は、町域の約90%が接収されていた。そのなかに日本軍が建設した中飛行場があり、ここを含めた広大な範囲が、西太平洋最大の滑走路を有する嘉手納基地である。この基地の南側の丘陵地帯にあった多くの墓も接収によって移動を余儀なくされ、そのうちの1つが本古墓群である。

本古墓群は、その北東から南西方向に伸びる丘陵の斜面中腹に形成された標高約20～30 mの丘陵地帯に形成されている。町域北側の国頭礫層と隆起石灰岩が露頭する地域にあたり、近世～現代の古墓群で、大半が谷間を挟んで向かい合うように築かれている（第1図）。

A・B地区にある墓は、字平安山・浜川、C地区は字伊礼の人々の墓が築かれている。

字浜川・字平安山ともに、町内の古村の一つで、字浜川には明治44年には村役場が移設されている。沖積低地の北端に位置する同集落には、くびれ平底土器が採集され、祭祀遺跡の可能性が考えられている浜川ウガン遺跡がある。この遺跡には1713年の『琉球国由来記』に記される「島森ヨリアゲの森」と考えられている拝所がある。また、字平安山にある「平安山ウガン」と呼ばれる拝所が、「オヤギヤクイ君ガ嶽」と記されたものと考えられている。

A地区の谷間は、「シリンサク」と称された道で、大雨の際には、流水がひどくて通れなかったという。また、このあたりに、字浜川・平安山・伊礼の共同使用のガンヤー（棺箱を運ぶ輿を納める小屋。）があったが、その位置は県道23号線の下にあたるという。

さらに、1号墓がある丘陵とその西側の小丘陵の間には、戦前、嘉手納にあった製糖工場で終点となる軽便鉄道の線路が通っていたようである。

B地区の一帯は「カンジャーヤヌスバ」（方言：鍛冶屋の側の意）と呼ばれ、集落から字下勢頭に至る道で、現在の沖縄市越久に至る小さな道があり、墓の前には畑があったという。

C地区は、字伊礼の伊平徳川原にあたる。字伊礼は古村の一つで、沖積平野部に立地していた。丘陵地の部分は大正14年に行政字上勢頭として分離している。

字浜川・平安山を含むキャンプ桑江には、平成7年度から行ってきた試掘調査や範囲確認調査によって沖積平野部とその境目で7つの遺跡が発見されている。平野部や丘陵との境目

にあたる地域に、縄文時代早期に相当する前I期からグスク時代までの全時期の遺跡が発見されている。そのなかでも、伊礼原C遺跡では曾畑式土器が出土し、木製品・堅果類・種子などの植物残滓どが出土する重要な遺跡がある。

海側にある遺跡の広がりとは別に、平野の北側地域に徳川を上がっていくと、そこは字上勢頭・下勢頭の人々の墓である上勢頭古墓群や上・下勢頭古墓群がある。前者は、墓の調査の際に発見されたグスク時代の遺跡でもあり、谷間を横切って石列を設けて階段状にした遺構が検出され、水田の可能性が考えられる12世紀～16世紀の伊礼伊森原遺跡がある。

《参考文献》

『北谷村誌』 北谷町役場 1961年9月

『北谷町史 第二巻 資料編1 前近代・近代文献資料』 昭和61年12月

『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗 上』 平成4年10月

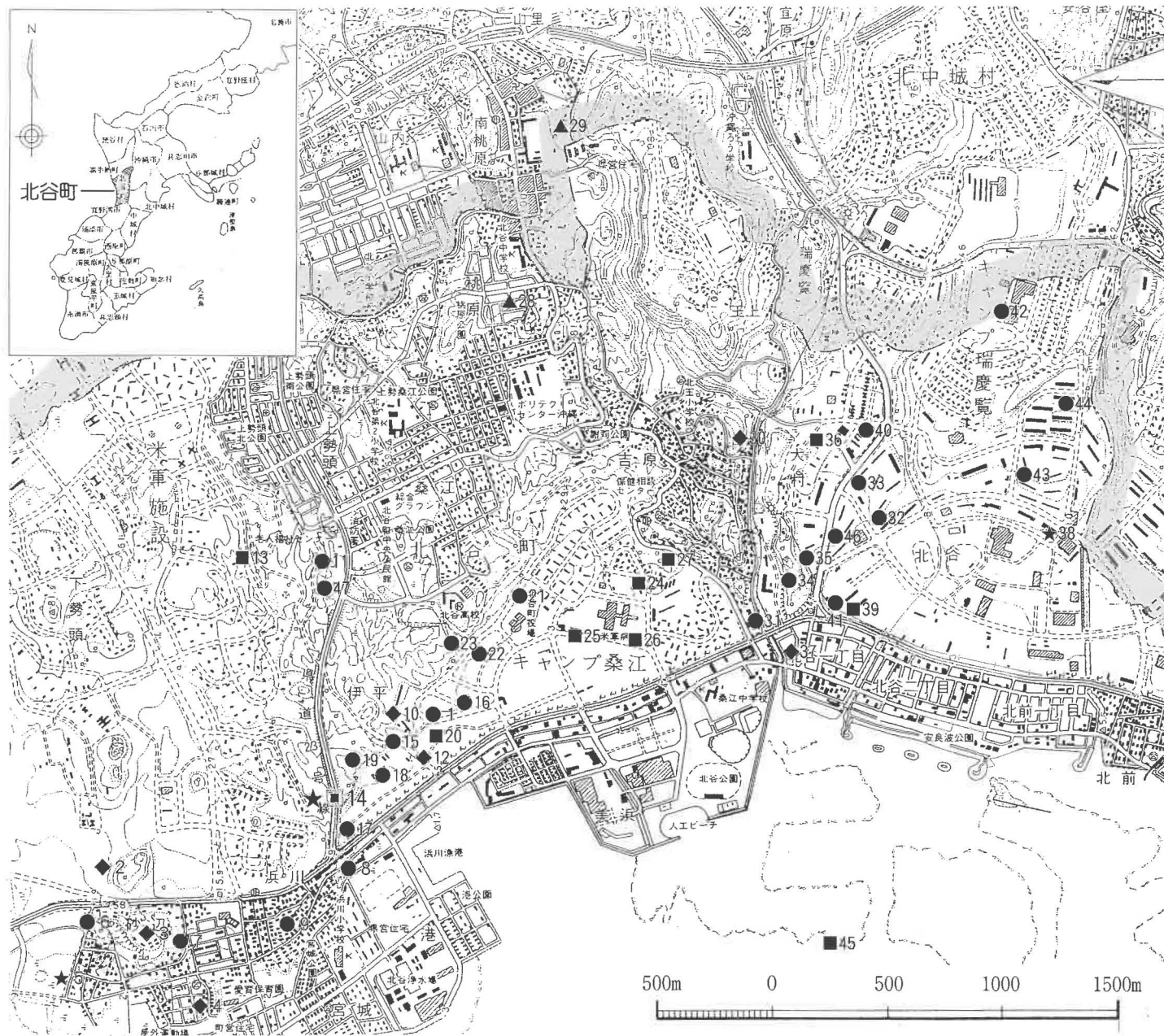
『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗 下』 平成6年2月

『北谷町史 第六巻 資料編5 北谷の戦後』 昭和63年11月

『北谷町の自然・歴史・文化』 北谷町教育委員会 平成8年3月

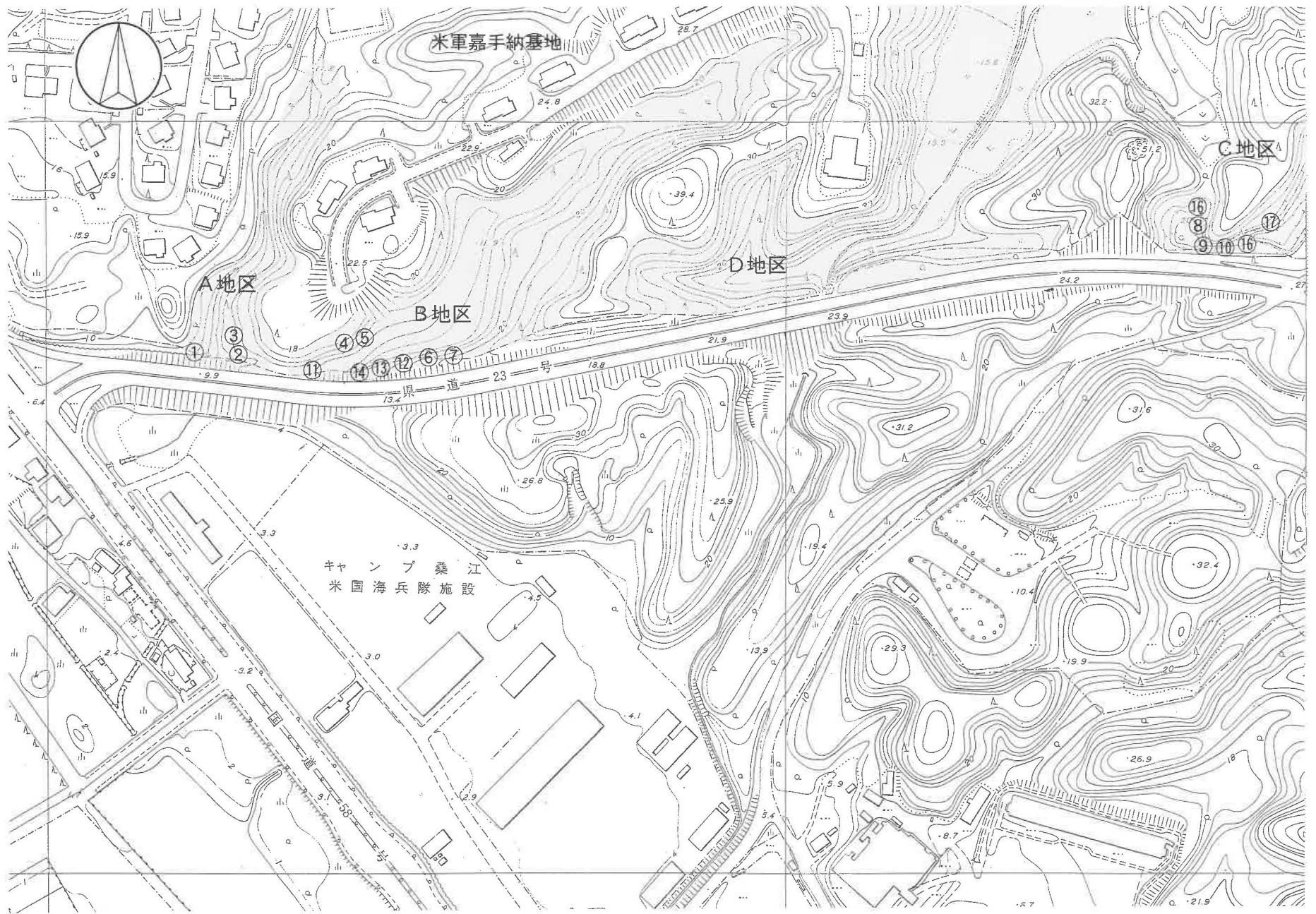
『北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－』 北谷町教育委員会 1994年3月

『沖縄大百科辞典』 沖縄タイムス社 1983年5月



- 1 伊礼原A遺跡
- 2 カーシーノポントン遺物散布地
- 3 砂辺貝塚
- 4 クマヤー洞穴遺跡
- 5 砂辺サークバル貝塚
- 6 砂辺サークバル遺跡
- 7 砂辺ウガン遺跡
- 8 浜川ウガン遺跡
- 9 浜川千原岩山遺物散布地
- 10 伊礼原C遺跡
- 11 伊礼伊森原遺跡
- 12 伊礼原B遺跡
- 13 上・下勢頭区古墓群
- 14 大作原古墓群
- 15 伊礼原D遺跡
- 16 伊礼原E遺跡
- 17 千原遺跡
- 18 平安山原A遺跡
- 19 平安山原B遺跡
- 20 伊礼原A遺跡
- 21 後兼久原遺跡
- 22 小堀原遺跡
- 23 桑江ノ殿遺物散布地
- 24 伊地差久原古墓
- 25 前原古島A遺跡
- 26 前原古島B遺跡
- 27 前原古墓群
- 28 鹿化石出土地
- 29 桃原洞穴遺跡
- 30 吉原東角双原遺物散布地
- 31 池グスク
- 32 長老山遺物散布地
- 33 玉代勢原遺跡
- 34 北谷城
- 35 北谷城第7遺跡
- 36 山川原古墓群
- 37 白比川河口遺物散布地
- 38 稲千原遺跡
- 39 北谷番所址
- 40 後原遺跡
- 41 北谷城遺跡群
- 42 横高原遺跡
- 43 大道原A遺跡
- 44 大道原B遺跡
- 45 インディアン・オーク号の座礁地
- 46 塩川原遺跡
- 47 上勢頭古墓群

第1図 北谷町の位置と遺跡分布



第2図 大作原古墓群の墓の配置

第三章 遺構

本古墓群の今回の発掘調査範囲内では、総数17基が検出された。亀甲墓が2基、平葺墓が2基、掘込11基、岩陰墓1基、不明1基であった。以下、各墓について記述する。

尚、今回の調査範囲内で検出された不明1基（14号墓）は、聞き取り調査で、戦時中に直撃弾を受けた墓がここにあるとのことであった。聞き取りによる墓の位置から、それを裏付けるように墓の袖垣の一部が検出された。その形態から亀甲墓又は、平葺墓等の大形の墓と考えられるものであった。また、1・2・4・5・7・8・11～13・17号墓、12・13号墓前トレンチから人骨が出土した。墓の位置を第2・3図に示した。

・ 1号墓：亀甲墓。A地区。

〔概要〕大型墓。発掘調査で墓を開けることになった。納骨された7個の蔵骨器が納められていた。右袖垣部分の規模が大きく、最大で高さ約4mの石積で築いている。墓の屋根の部分は石灰岩礫を敷いている。墓の左側は基地のフェンス外にあり、フェンス設置の際に壊されている。その範囲は、調査範囲外である（第4・5図）。

〔造営特徴〕丘陵斜面下部の岩盤に横穴を掘り込んで造った墓（フィンチャー）の墓室を持ち、墓の右側袖垣を丘陵と墓の傾斜に合わせて高い石積を施す。

〔屋根〕大小の石灰岩切石を組み合わせ屋根は、敷石を施す。

〔墓庭〕墓の規模の割には小さ目の印象を受ける。

〔サンミデー〕2段。カビアンジをもたない。

〔墓面〕石灰岩切石を組んで、漆喰で仕上げる。

〔墓口〕北西に向く。

〔羨道〕石灰岩切岩を配する。羨道と墓口では施された石灰岩礫は分かれている。

〔墓室〕石灰岩岩盤に横穴を掘り込んだもの。天井・壁面の窪む部分に漆喰を施して仕上げる。天井は右壁面側で高く左側に次第に低くなる。タナは正面が3段、左右は各1段である。墓室左側の壁には石灰質の流れ出た状況がある。その影響が、この下にあった蔵骨器No.7にも及んでおり器面に石灰分が付着していた。

・ 2号墓：掘込墓。A地区。

〔概要〕中型墓。本古墓は墓主の話によると大正14年頃に作ったと言うことである。墓庭の左側の縁辺付近から遺物が出土した。屋根の部分は、調査で石列は検出されなかったが、聞き取りによると3号墓と同様な形であったという。墓庭を囲む袖垣は崩落している（第6図）。

〔造営特徴〕丘陵斜面の中腹の石灰岩岩盤に横穴を掘り込んで造った墓（フィンチャー）。

〔屋根〕墓口の上部分には岩盤が露出するのみで、石列は検出されていないが、聞き取り調査では3号墓と同様な屋根の造りであったという。

〔墓庭〕斜面中腹にあることから造成して、庭の範囲を確保しているようである。左側から正面にかけては石積が残る。墓庭入口は右手前隅。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕左側に大形の石灰岩礫を使用している。

〔墓口〕南西を向く。両脇・上を大型石灰岩切石を積んでつくる。

〔羨道〕厚みのある石灰岩切石を配しているが、これには蓋石を止める段差が無いことから、この石がその役目を果たしていたことも考えられる

〔墓室〕平面形は方形状を呈し、中央奥に蔵骨器を置くための空間を設けた可能性が考えられる。

・ 3号墓：掘込墓。A地区。

〔概要〕中型墓。2号墓と同様な形態の墓である。屋根を囲むように石列を有し、方形状の形態を意識しているものではないかと考えられる事から、平葺墓の要素を有する掘込墓と捉えられる。墓面は石灰岩礫を積んでつくる（第7図）。墓室内からは、割れた蔵骨器が出土した。タナは持たない。墓室の壁面や天井の仕上げは雑である。

〔造営特徴〕丘陵斜面の下部にある石灰岩岩盤に横穴を掘り込んだ墓である。

〔屋根〕石灰岩の岩盤の露出部を利用し、左袖垣の延長上に側面の石積を施し、屋根の範囲を確保するように石列を施す。

〔墓庭〕左側袖垣が正面まで回り込んでいいる。墓庭入口は2号墓と同様に右側手前隅にある。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕石灰岩礫を積んで造る。墓口部分は厚みのある石灰岩の切石で造る。

〔墓口〕南西に向く。

〔羨道〕奥行約30cmである。墓口を造る石灰岩礫の幅となる。床には石灰岩切石を配する。それには蓋石を止める段差は羨道天井では明瞭であるが床に配された礫には僅かな掛かりを設けている。

〔墓室〕墓室内にタナは無いが、奥に板状の石灰岩礫が検出された。

・ 4号墓：掘込墓。B地区

〔概要〕中型墓。丘陵斜面下部にある。屋根に石積などをもたない。墓面を石灰岩礫を積んで作り、漆喰を施して仕上げている。墓室の成形は雑で、岩盤の間には土の部分がある。石灰岩岩盤の状態があまり良くないところに築かれているものと判断される。左袖垣は石積が残る。右側は崩落している。屋根の部分に加工を持たない墓である（第8図）。墓室からは人骨が出土した。

〔造営特徴〕丘陵下部の石灰岩岩盤に、横穴を掘り込んだ墓である。

〔屋根〕石積などをもたず、自然の状態と判断される。

〔墓庭〕丘陵斜面を掘削して設けていると考えられる。左側の袖垣は僅かに石積が残る。

〔サンミデー〕1段。石灰岩切石を縁石にし、内側は土である。

〔墓面〕石灰岩切石を積んで造り、漆喰で仕上げる。

〔墓口〕南に向く。石灰岩切石で造る。

〔羨道〕墓口に使用した石灰岩切石の幅である。蓋石を止める段差部分を石灰岩を整形したものを配す。

〔墓室〕平面形は方形。検出時の状態では天井が高いが、本墓の造られた岩盤を見ると脆い様相を呈し、割れ目が多く隙間には土があること、墓室床面には石灰岩の粉状土が堆積し、礫が混じっていたことから天井部分は崩落したのではないかと考えられる。

・ 5号墓：亀甲墓。B地区。

〔概要〕大型墓。丘陵斜面に作られている。シルヒラシーからは人骨が散在した状態で出土した。サンミデーには墓の築造年月日が英文・漢字で刻まれている。墓庭外には道がある（第9図）。

〔造営特徴〕墓室の作りは、石灰岩の長方形の切石積で造られている。方言で「マチ墓」と称されるものである。

〔屋根〕セメントを施して仕上げている。一部それが剥がれた部分や袖垣の作りなどから大型石灰岩礫を多用した作りと見られる

〔墓庭〕墓庭入口は、墓口の正面にある。庭からの排水穴が正面石垣の左側にある。

〔サンミデー〕2段。1段目の左側に「J A N . 25 1937 M A d E I N 昭和十二年」と刻まれている。これについては、ハワイに移民していた方が、帰沖して造ったもので、その墓の所有者が刻んだということであった。

〔墓面〕眉の下の石を噛み合わせを施して組んでいる。

〔墓口〕南東に向く。

〔羨道〕蓋石を止める段差もつ。この段差から墓室側の床面は墓口より僅かに低い。

〔墓室〕平面形は長方形。正面の棚は5段、左右は各1段である。長方形の石灰岩の切石を積んで築いており屋根の横断面形はアーチ状である。シルヒラシーから散乱した人骨が出土した。

・ 6号墓：平葺墓。B地区

〔概要〕大型墓。マチ墓である。墓室天井に積まれた切石には墨書の漢数字で「一・二・三」、カタカナ「イ」、「×」が記されている。「一」と「一」を合せた場所が確認出来る事から、石を組む際にこの番号で組み合せたことが窺える。左袖は、検出時には残存していたが、台風の影響によって緩んだことで崩壊した。屋根は米軍基地のフェンス設置によって一部壊されている。

墓の左側は階段状に石積が施されている。右側は石灰岩の岩盤を基礎にして石積を施している。墓道を有する（第10図）。

〔造営特徴〕丘陵下部の岩盤を基礎として利用した墓と考えられ、墓の右外側面では石灰岩に築かれた墓で、一定の規格で成形された石灰岩切石を積んで造っている。しかし石積は角

柱状の石灰岩切石を積んでその境目をセメントで固定する方法がとられており、石がずれることを防ぐための掛かりが見られない作りであった。

〔屋根〕造成して仕上げにセメントを施している。上部は米軍基地のフェンスが設置されているため未発掘である。

〔墓庭〕墓庭入口は墓口正面にある。正面石積の左側には排水用の穴がある。左袖垣は調査中に崩壊した。右側同様に長方形の石灰岩切石を積んで造られていた。

〔サンミデー〕1段。左隅にカビアンジをもつ。

〔墓面〕石灰岩切石を積んで造る。

〔墓口〕北東に向く。

〔羨道〕蓋石を止める段差は墓室に近い位置にあり、墓室側に低くなる。この段差の外側、墓口が奥行があることは石灰岩製の香炉を置くための奥行の確保ではないかと考えられる。

〔墓室〕平面形は方形。正面のタナは3段、左右は各1段であるが正面の1段目と左右は連続し、段差をもたない。

・ 7号墓：掘込墓。B地区

〔概要〕小型墓。墓室が墓庭部分より低い形である。小型の蔵骨器が検出され、墓室内から人骨が出土した（第11図）。

〔造営特徴〕石灰岩の岩盤に小さな横穴を掘りこんだ墓である。墓室が外の地面より低い。岩盤は板状に割れる石灰岩岩盤部分に築かれている。

〔屋根〕人為的なものはない。岩盤の状態である。

〔墓庭〕墓庭としての明確な区画はないが墓口の前面に平坦部をもち、6号墓から続く土留めの石列が本墓の前面まで達している。

〔サンミデー〕ない。

〔墓面〕岩盤の状態で整形の痕跡は見られない。

〔墓口〕北北西に向く。小さな厚みのある板状の石灰岩礫の石積が残る。

〔羨道〕殆ど無い状態である。

〔墓室〕平面形は方形。天井高が低い。

・ 8号墓：掘込墓。C地区。

〔概要〕中型墓。小丘陵の先端に露頭する石灰岩の岩盤に造られている（第13図）。

〔造営特徴〕岩陰状の部分に横穴を掘り込んだものと考えられ、墓口両側に大形の石灰岩礫を使用している。

〔屋根〕人工的に成形、加工した屋根を持たない。自然の状態である。

〔墓庭〕左側は袖垣が残るが右側はほとんど壊れている。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕大形の石灰岩礫を使用するが、内側の裏正面では小型のものを積んでいる。

〔墓口〕南西と南南西の間に向く。

〔羨道〕石灰岩礫を敷く。

〔墓室〕墓室のタナは正面・左右ともに1段で連続した平坦面である。左右に高低差は無い。

・ 9号墓：岩陰墓。C地区。

〔概要〕小型墓。方言で言うチンマーサーにあたるのではないかと考えられる墓である。残存状況から、数段の石積みで終わるものと考えられる（第3図）。

〔造営特徴〕石灰岩岩盤のノッチ状に抉れた岩陰を利用している。

〔屋根〕自然の岩盤の状態である。

〔墓庭〕墓庭をもたないが、人が一人通れる程度の幅が残っていた。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕岩陰状の墓のため、墓面は見られない。チンマーサーの可能性があり、仮に石積みがあったとしても数段と考えられる。

〔墓口〕南南西に向く。正面を石灰岩の自然礫を積んで墓室を区画している。入口として開たものはない。

〔羨道〕もたない。

〔墓室〕一見すすけたように見えるが、苔が付着した状態であった。

・ 10号墓：掘込墓。C地区。

〔概要〕中型墓。岩陰状の墓室を有する墓である。墓の前面には石灰岩礫が崩落したと考えられる状態で検出された（第14図）。

〔造営特徴〕石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んだ墓。墓の前面の斜面に石灰岩礫の集中が見られる。

〔屋根〕自然の岩盤である。人工的な屋根を持たない。

〔墓庭〕不明。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕墓面は残存しない。

〔墓口〕南に向く。

〔羨道〕奥に向って幅を狭める。

〔墓室〕奥に向って幅を狭める。

・ 11号墓：平葺墓。B地区。

〔概要〕大型墓。石積を多用した墓である。墓室部分が基地内にあるので、伐採時は墓口が埋められていた（第15図）。

〔造営特徴〕石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んだ墓である。

〔屋根〕屋根の平坦部分に敷石を施す。

〔墓庭〕一部のみ検出。敷石などは見られない。

〔サンミデー〕石灰岩の切石で造る。

〔墓面〕石灰岩の切石を積み、漆喰で整形している。

〔墓口〕南東に向く。

〔羨道〕南東に向く。

〔墓室〕屋根が、墓に向かって右角が最も高く、左側に傾斜している。墓の外観からは、墓室も整っていると思われたが、この形状から、改修されたことも考えられる。

・ 12号墓：掘込墓。B地区。

〔概要〕B地区で13号と並んで検出された小型の墓である。石灰岩の岩盤の状態がよくない場所にある。小型の厨子甕を納められる程度である。墓室からは蔵骨器とそれに納められていない人骨が出土した（第16図）。

〔造営特徴〕丘陵岩盤の少ない所に、横穴を掘り込んだ墓である。

〔屋根〕自然の状態。人工的なものを持たない。

〔墓庭〕墓庭を、13号と共有するかのようになっている。6号墓に至る墓道の脇から一段上がった所にある。

〔サンミデー〕無し。

〔墓面〕自然の岩盤である。

〔墓口〕北に向く。墓口の脇に立位で石灰岩礫を立てる。

〔羨道〕墓口に使用した礫の幅の分である。

〔墓室〕小さい墓口に対して、墓の右側に奥行がある。

・ 13号墓：掘込墓。B地区。

〔概要〕B地区で13号と並んで検出された小型の墓である。石灰岩の岩盤の状態がよくない場所でもある。小型の厨子甕を納められる程度である。墓室から人骨が出土した（第17図）。

〔造営特徴〕丘陵岩盤の少ない所で、横穴を掘り込んだ墓である。

〔屋根〕自然の状態。人工的なものを持たない。

〔墓庭〕墓には、12号と共有するかのようになっている。6号墓に至る墓に行く道の脇から一段上がった所にある。

〔サンミデー〕もたない

〔墓面〕自然の岩盤である。

〔墓口〕北に向く。墓口の脇に立位で石灰岩礫を立てる。

〔羨道〕墓口に使用した礫の幅の分である。

〔墓室〕小さい。天井の高さが低い。小型の厨子甕が入る程度。

・ 14号墓：不明。C地区。

〔概要〕聞き取り調査によって、太平洋戦争中に防空壕としてなかに人が入っていたが、砲撃を受け、老婦人が死亡し、幼い女子が怪我をしたため日本軍の医者の方に連れていったという（第2図）。

〔造営特徴〕大形の切石を使用している。亀甲墓又は平葺墓であったと思われる。

〔屋根〕不明

〔墓庭〕不明

〔サンミデー〕不明

〔墓面〕不明

〔墓口〕不明

〔羨道〕不明

〔墓室〕不明

・15号墓：掘込墓。C地区。

〔概要〕小型墓。丘陵斜面の中腹に露頭する大型石灰岩を利用した状態のものである。墓室から人骨が出土した（第18図）。

〔造営特徴〕露頭した大型石灰岩の下を掘り込んだものである

〔屋根〕自然の状態。

〔墓庭〕小さな平場を有する。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕石積みは見られない。

〔墓口〕南南西に向く。墓室の幅で開いており、納骨後は礫を積んで塞ぐものであったと考えられる。

〔羨道〕もたない。

〔墓室〕小さい。小型の蔵骨器が納められる程度で横幅も短い。仮墓の印象を受ける。

・16号墓：掘込墓。C地区。

〔概要〕小型墓。石灰岩の岩盤に小さく掘り込まれた、掘込墓である（第19図）。

〔造営特徴〕小さな墓ではあるが、墓庭を有する。

〔屋根〕自然の岩盤である。

〔墓庭〕小さな平場を有する。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕石灰岩の礫を積んだ後に漆喰で面をつくる。内側の漆喰は少ない。

〔墓口〕南南東に向く。

〔羨道〕礫の幅でほとんど無い状態。

〔墓室〕小さい。奥行があまり無いが天井は他の小型墓に比して高い。

・17号墓：掘込墓。C地区。

〔概要〕中型墓。C地区の最も東側に位置する墓である。墓庭外の墓口正面にあたる位置から性格不明の土坑が検出された。平面形は不定形で、墓口に向いた長軸は約1.2m、石灰岩礫が集中していた短軸は約90cmである。

〔造営特徴〕掘込墓。石灰岩の岩盤を掘って墓室を造るが、墓には、左右の範囲を区切る程度の石積みがあるのみで。墓庭正面石積を持たない。

〔屋根〕自然の状態である

〔墓庭〕左右に約15cm大の石灰岩礫を積み上げた袖垣を有するが、基盤の岩盤に対して直口する状態である。正面には石積を持たない。

〔サンミデー〕もたない。

〔墓面〕石灰岩の切石を積んでいる。

〔墓口〕南東に向く。

〔羨道〕敷石はない。

〔墓室〕天井の低さが低い。墓室の奥と手前を区画したものと思われる礫の並びが見られたが。約10cm程度の高さで、一般的なタナとは様相を異にしている。墓室内からは打ち割られた厨子甕が出土した。

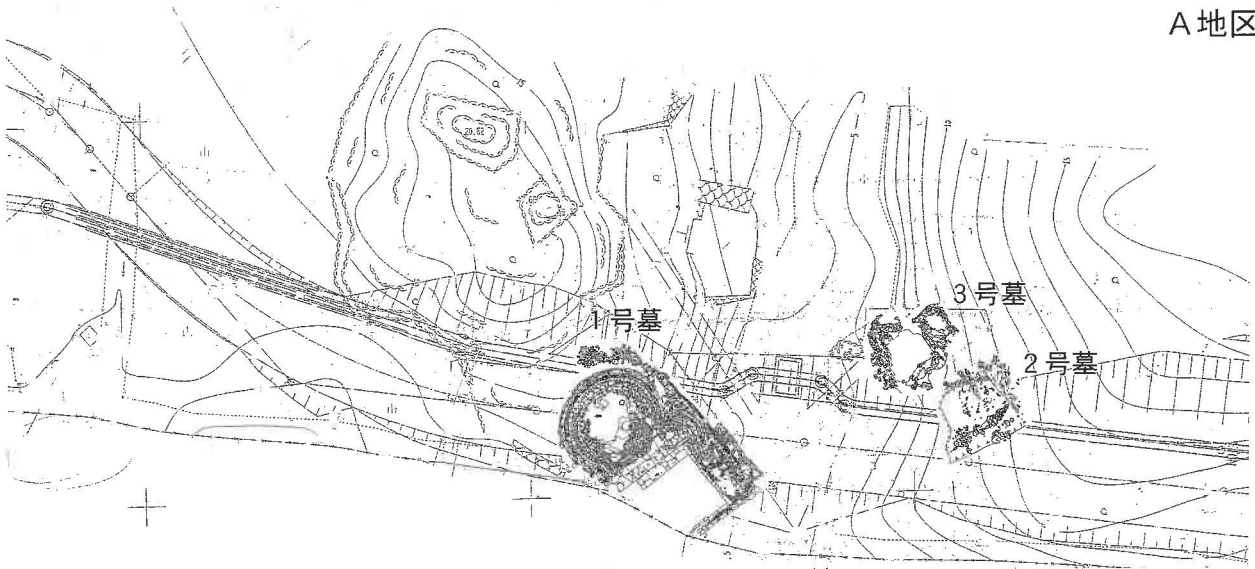
(山城安生)

第1表 各墓の特徴、墓庭・墓室の部位別計測値一覧

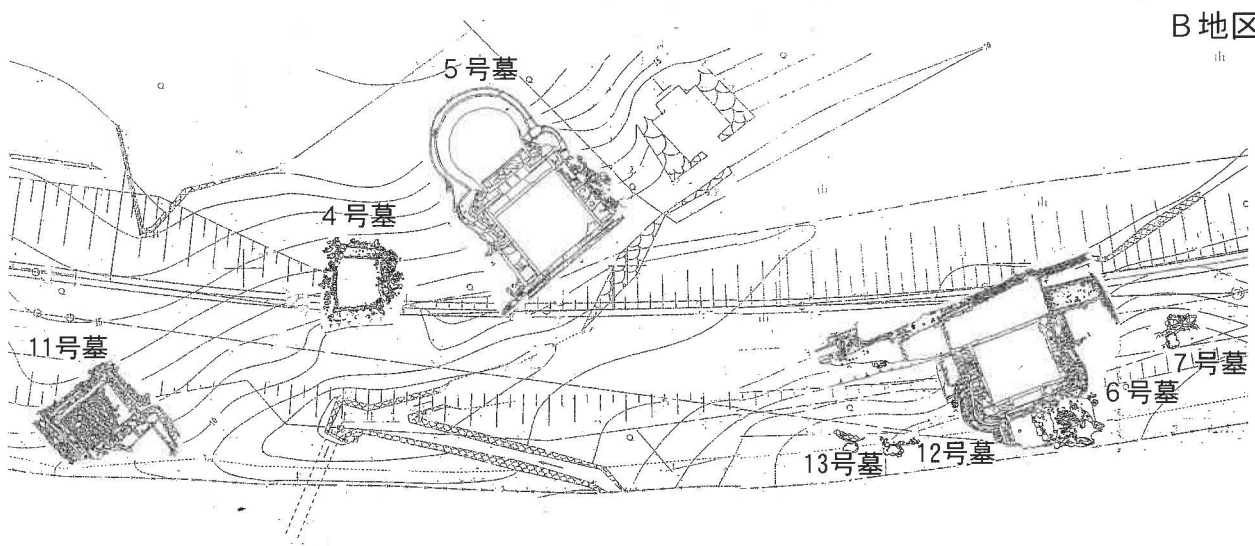
墓番号	墓外観種類	規模	墓室平面形状	墓口の向き	位置	タナの数			墓庭 (㎡)						墓口 (墓面～蓋石段差)				羨道 (蓋石段差～シルヒラシの境目)						
						正面	右	左	面積 (㎡)	幅	奥行	サンミデ						高さ	幅	天井奥行	床面奥行	高さ	幅	天井奥行	床面奥行
												1段目			2段目										
												面積 (㎡)	1段目幅	1段目奥行	面積 (㎡)	2段目幅	2段目奥行								
1号墓	亀甲墓	大型	方形	北西	A地区	3	1	1	-	-	6.44	5.31	-	0.90	2.45	2.74	0.9	1.02	0.64	0.48	0.45	0.90	0.64	0.40	0.47
5号墓	亀甲墓	大型	長方形	南東	B地区		1	1	60.82	6.01	6.38	6.0	6.0	1.0	2.21	2.26	0.92	1.05	0.64	0.45	0.47	0.95	0.64		0.41
6号墓	平葺墓	大型	方形	北東	B地区	3	1	1	26.68	5.84	4.36	2.18	2.35	0.88	-	-	-	1.05	0.64	0.47	0.50	0.93	0.64	0.32	0.38
11号墓	平葺墓	大型	方形	南東	B地区	3	1	1	-	-	-	-	-	0.96	-	-	-	1.04	0.63	0.40	0.46	0.95	0.63	0.49	0.42
2号墓	掘込墓	中型	不定形	南西	A地区				13.87	2.05	4.80	-	-	-	-	-	-	0.97	0.62	0.15	0.10	0.87	0.62	0.19	0.30
3号墓	掘込墓	中型	不定形	南西	A地区				10.62	3.34	4.20	-	-	-	-	-	-	1.02	0.62	0.38	0.49	0.90	0.62	0.21	-
4号墓	掘込墓	中型	方形	南	B地区				14.45	3.14	4.76	1.97	2.63	0.97	-	-	-	1.07	0.66	0.40	0.30	0.96	0.66	0.25	0.30
8号墓	掘込墓	中型	不定形	南西と南南西の間	C地区	1	1	1	12.16	3.86	3.20	2.68	2.68	0.98	-	-	-	0.99	0.70	0.44	0.46	0.87	0.65	0.37	0.57
10号墓	掘込墓	中型	不定形	南	C地区				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.70	2.17	-	-	-	-	-	-
17号墓	掘込墓	中型	不定形	南南西	C地区	1			6.28	1.34	2.45	1.04	2.43	0.54	-	-	-	0.89	0.61	-	-	0.90	0.61	0.30	0.48
7号墓	掘込墓	小型	方形	北北西	B地区				-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.37	0.51	-	-	-	-	-	-
12号墓	掘込墓	小型	不定形	北	B地区				-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.59	0.46	-	-	-	-	-	-
13号墓	掘込墓	小型	長方形	北	B地区				-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.46	0.43	0.10	0.15	0.32	0.45	-	-
15号墓	掘込墓	小型	方形	南南西	C地区				5.05	2.65	2.26	-	-	-	-	-	-	1.00	0.33	0.23	0.25	0.90	0.30	0.23	0.35
16号墓	掘込墓	小型	不定形	西南西	C地区				3.51	1.36	2.20	-	-	-	-	-	-	0.60	0.76	-	-	-	-	-	-
9号墓	岩陰墓	小型	不定形	南南西	C地区				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.65	1.85	-	0.55	1.65	1.85	-	-
14号墓	不明	不明	不明	不明	B地区				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

墓口 + 羨道	墓室			シルヒラシ				タナ (正面)															タナ (左右)							
								1番タナ			2番タナ			3番タナ			4番タナ			5番タナ			右			左				
	奥行 (床面)	面積 (m ²)	幅	奥行	面積 (m ²)	幅	奥行	天井 高	高さ	幅	奥行	高さ	幅	奥行	高さ	幅	奥行	高さ	幅	奥行	高さ	幅	奥行	高さ	幅	奥行				
0.92	6.83	2.45	2.80	2.32	1.50	1.52	1.84	0.18	2.41	0.41	0.16	2.43	0.44	0.26	2.45	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	0.22	1.52	0.46	0.20	1.53	0.48
0.88	9.99	1.53	3.65	2.07	1.53	1.35	2.75	0.24	2.74	0.45	0.20	2.74	0.46	0.22	2.72	0.45	0.24	2.73	0.46	0.18	2.72	0.47	0.22	1.36	0.60	0.20	1.36	0.60		
0.88	6.50	2.40	2.73	2.25	1.50	1.50	2.45	0.27	2.40	0.42	0.25	2.40	0.40	0.25	2.40	0.39	-	-	-	-	-	-	-	-	0.27	1.52	0.40	0.27	1.50	0.46
0.90	8.28	2.62	2.96	2.27	1.51	1.50	1.70	0.18	2.78	0.65	0.17	2.95	0.38	0.26	2.97	0.38	-	-	-	-	-	-	-	-	0.20	1.46	0.65	0.20	1.50	0.55
0.37	1.48	1.37	1.45	-	-	-	1.20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	1.94	1.65	1.44	-	-	-	1.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
0.60	2.68	1.88	1.70	-	-	-	2.22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
1.03	8.95	1.60	1.53	2.44	1.60	1.53	1.80	0.35	3.80	1.17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.30	1.50	0.65	0.30	1.37	1.5	
-	3.03	1.87	1.54	-	-	-	1.30	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
0.48	4.70	2.37	2.06	2.03	2.43	0.54	1.10	0.15	2.40	1.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	0.61	0.9	0.92	-	-	-	0.75	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	0.98	1.50	0.73	-	-	-	0.55	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	0.68	1.05	0.70	-	-	-	0.46	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	1.98	1.63	1.35	-	-	-	0.82	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	0.50	0.84	0.59	-	-	-	0.52	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	1.01	1.38	0.95	-	-	-	1.90	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

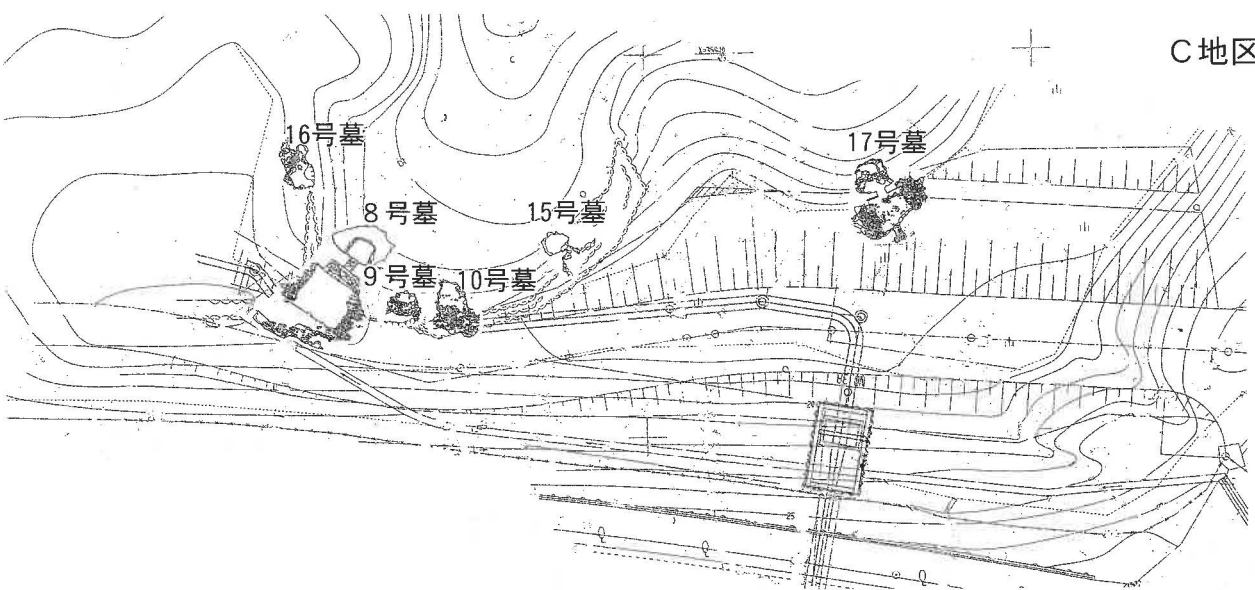
A地区



B地区



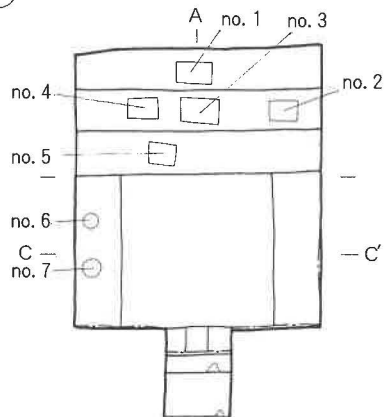
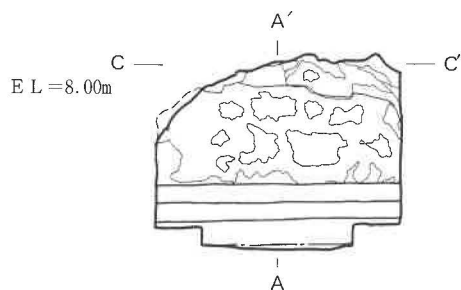
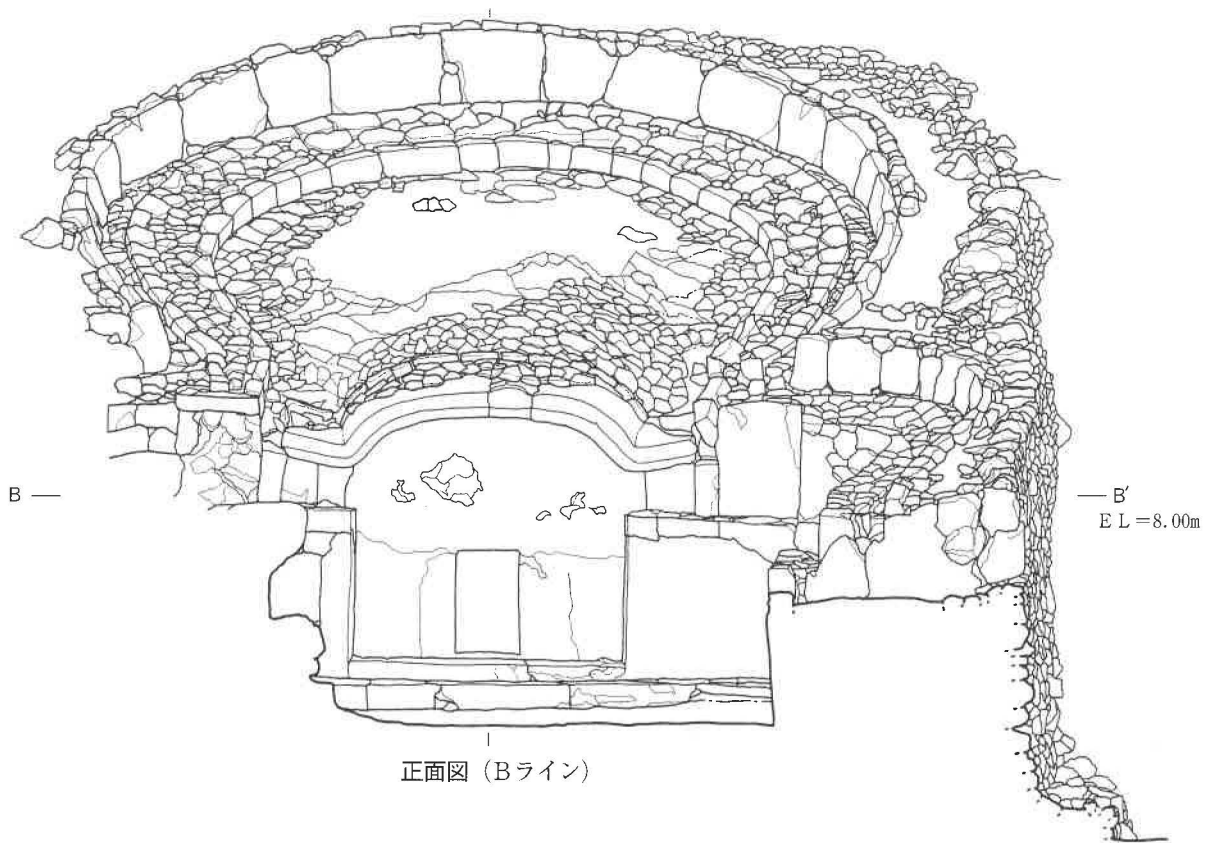
C地区



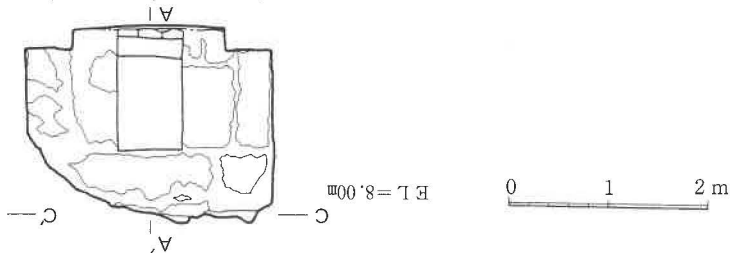
第3図 各墓の墓の配置 上：A地区 中：B地区 下：C地区



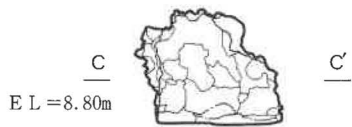
第4図 A地区1号墓(1) 平面図・側面図



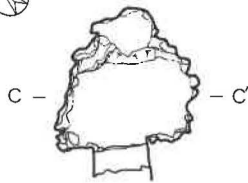
墓室平面 A
(ノノノ) 図面工筆



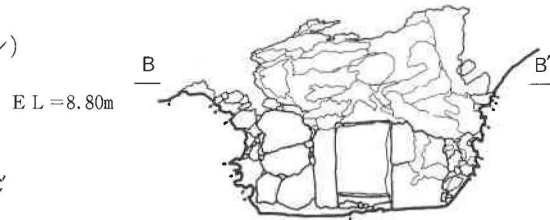
第5図 A地区 1号墓 (2) 正面図、墓室



墓室正面図 (Cライン)



墓室平面図



正面図 (Bライン)



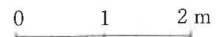
左断面見通図 (Aライン)



平面図



右断面見通図 (Aライン)

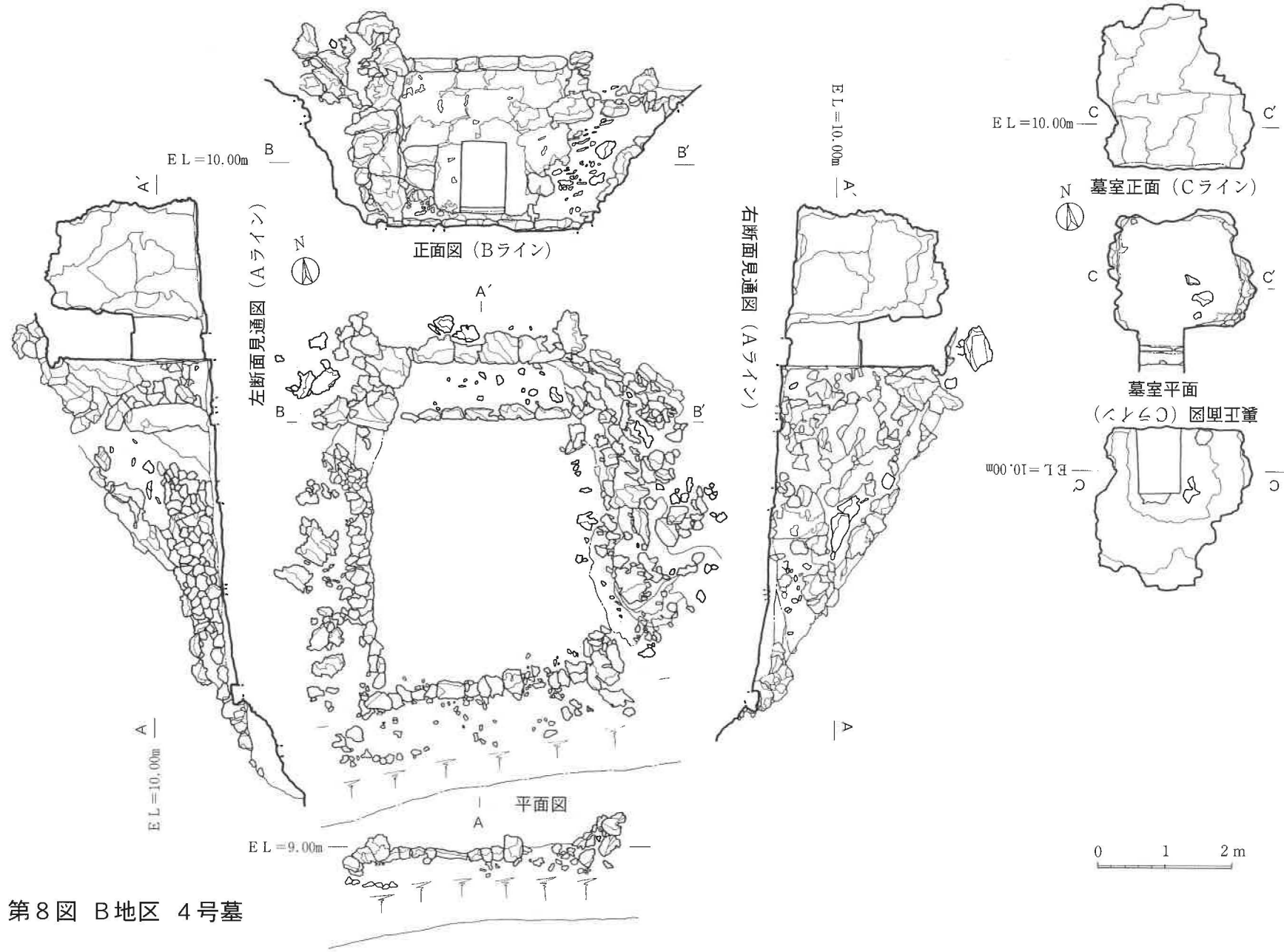


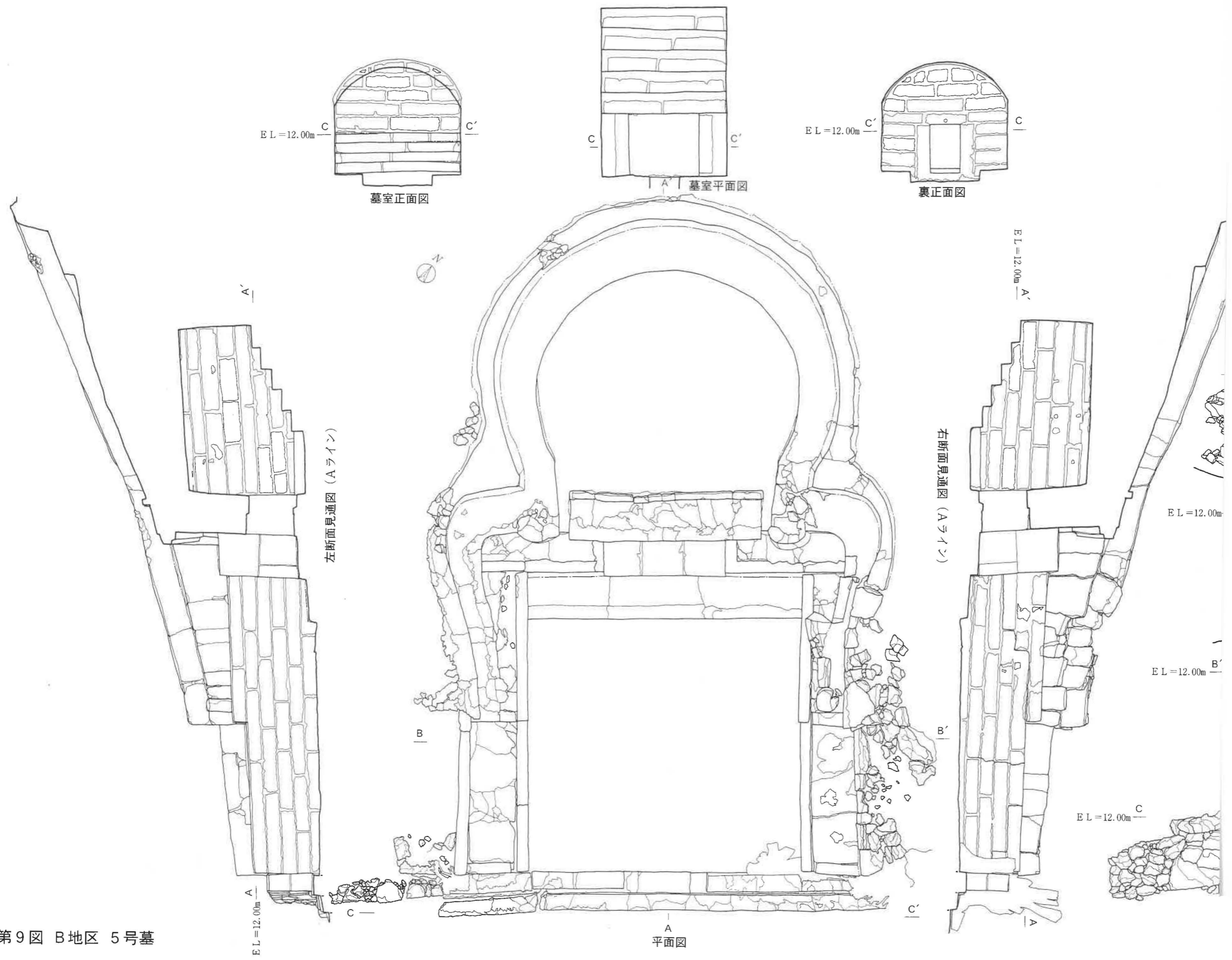
第6図 A地区 2号墓



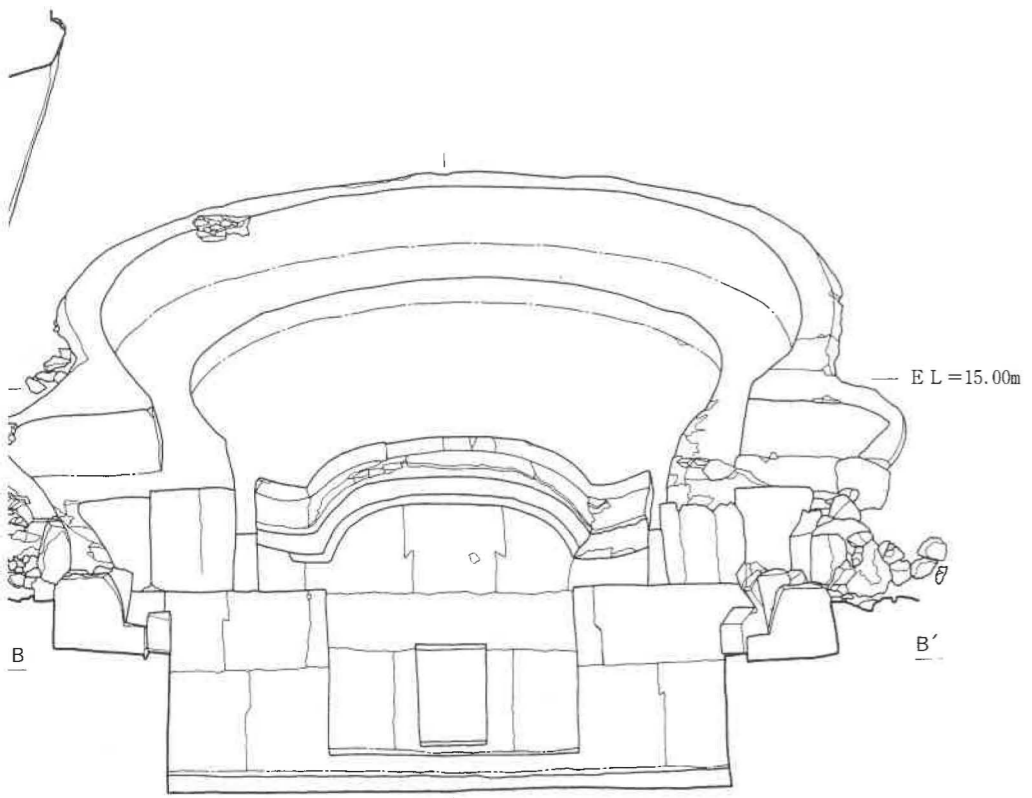
第7図 A地区 3号墓

第8図 B地区 4号墓

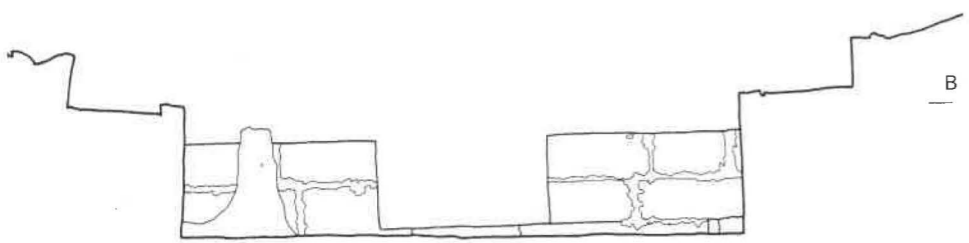




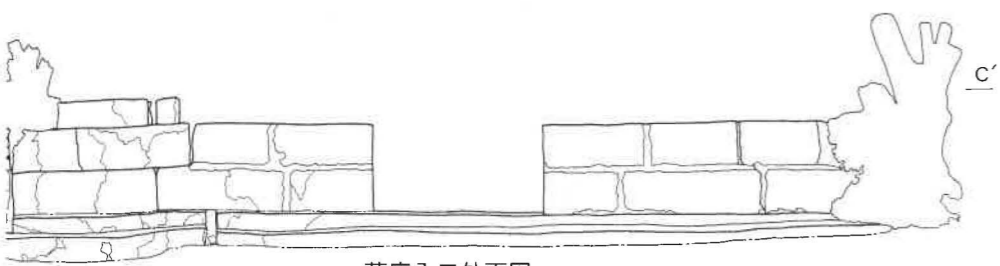
第9図 B地区 5号墓



正面図 (Bライン)

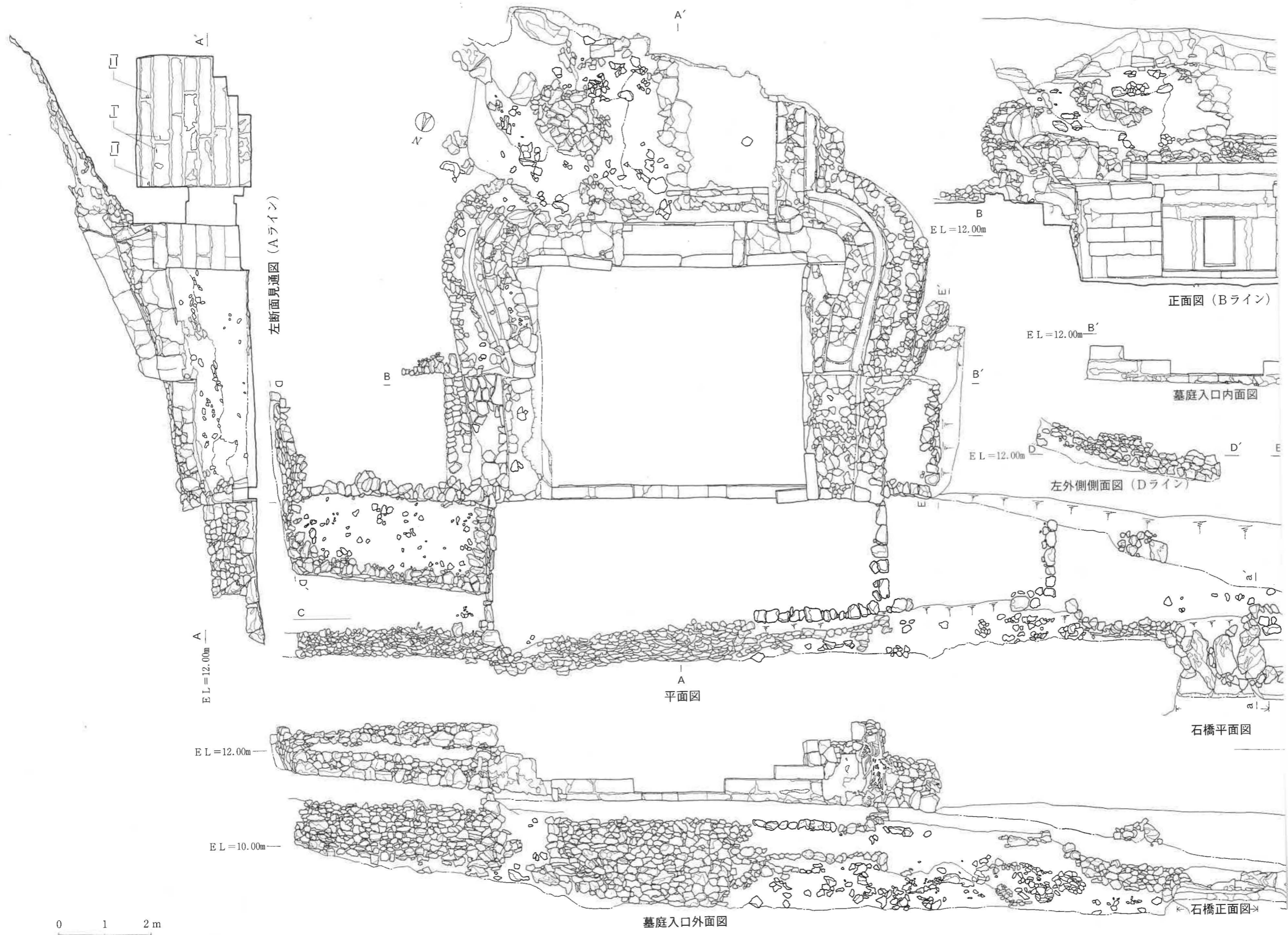


墓庭入口内面図 (Bライン)

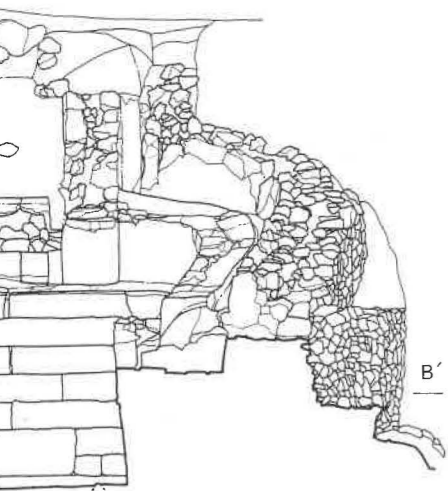


墓庭入口外面図

0 1 2 m



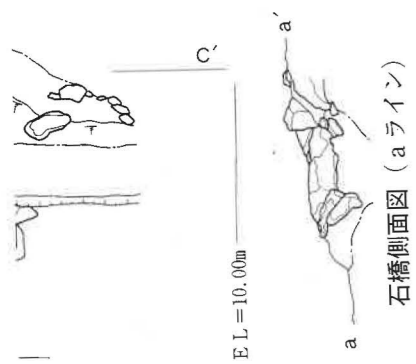
第10図 B地区 6号墓



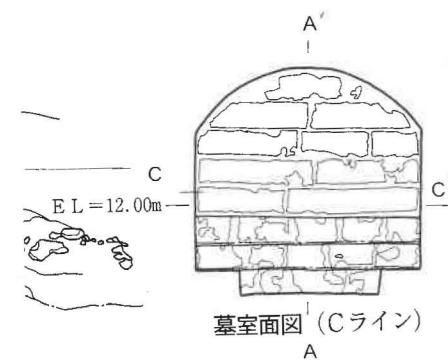
B



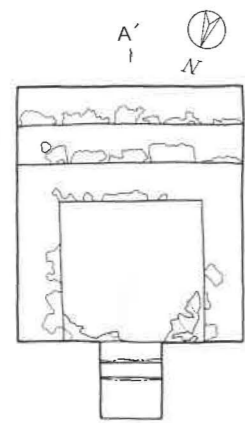
右外側側面図 (Eライン)



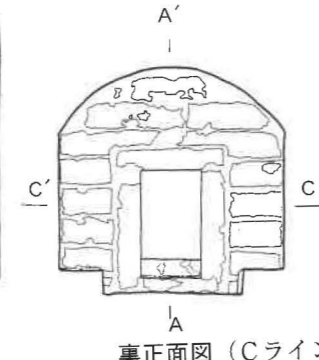
石橋側面図 (aライン)



墓室面図 (Cライン)

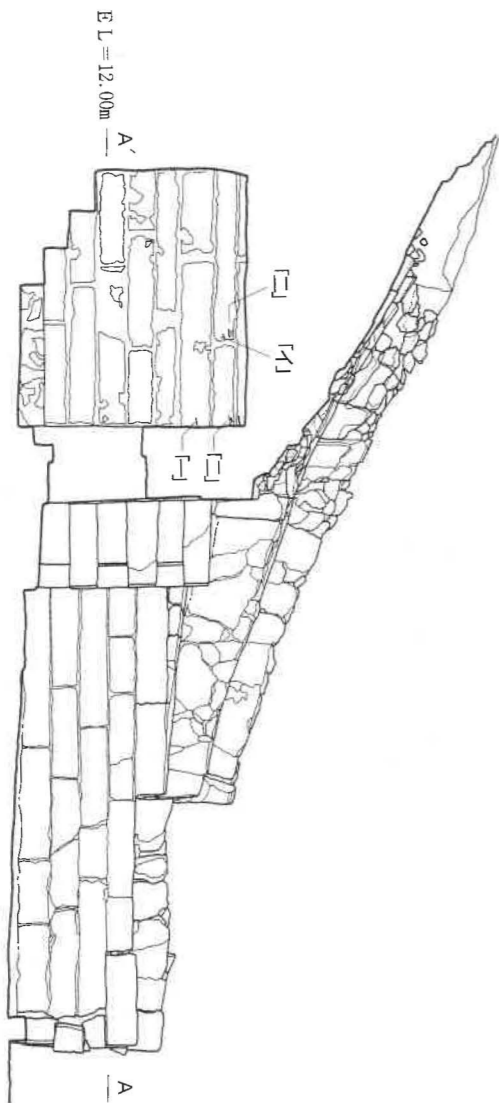


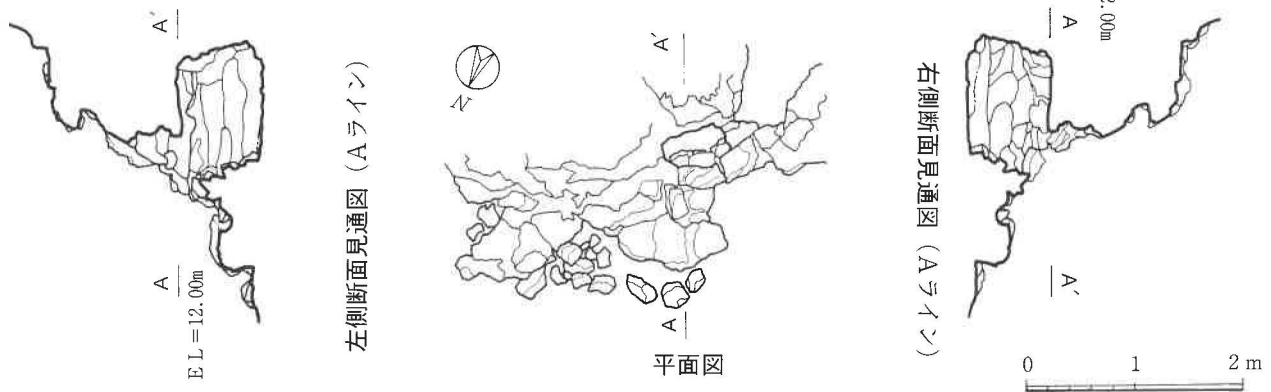
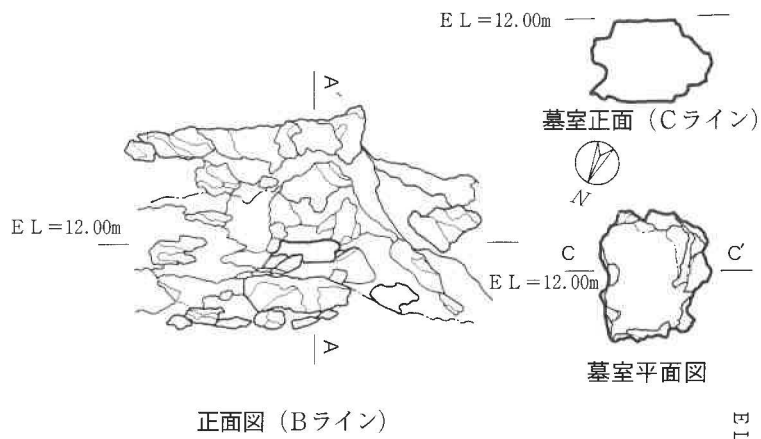
墓室平面



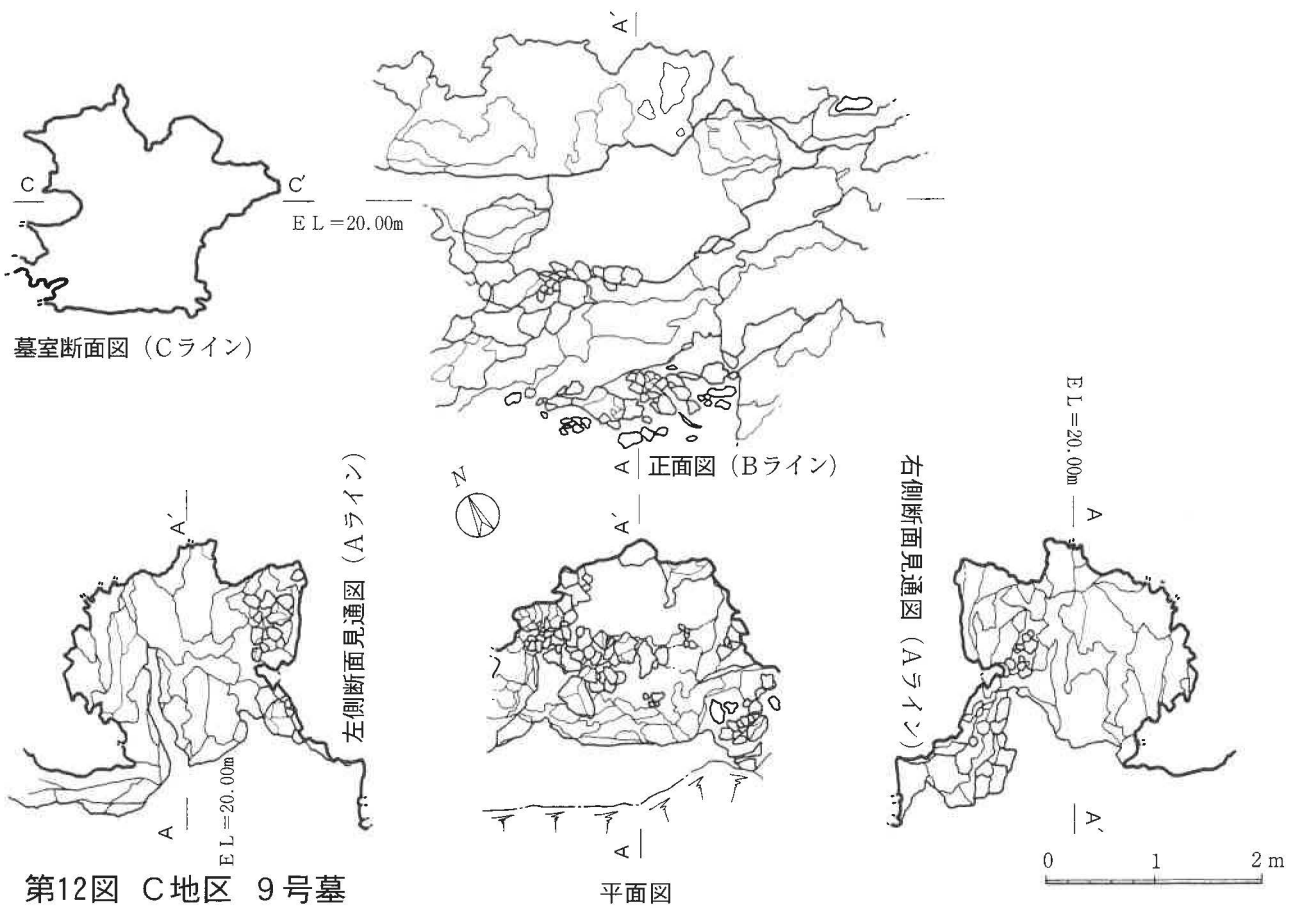
裏正面図 (Cライン)

右断面見通図 (Aライン)

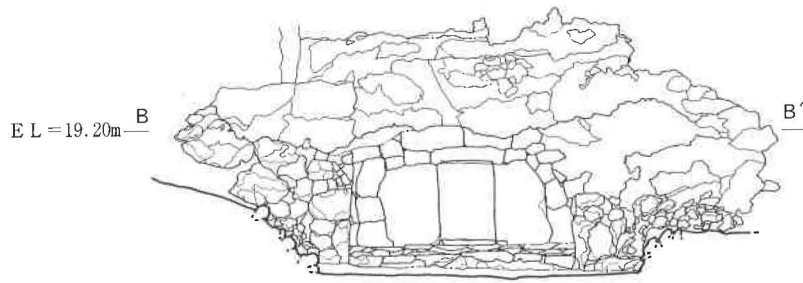




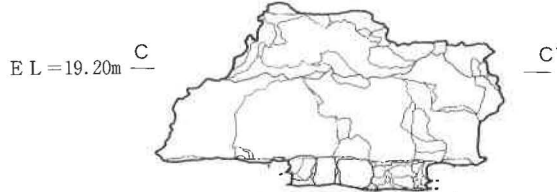
第11図 B地区 7号墓



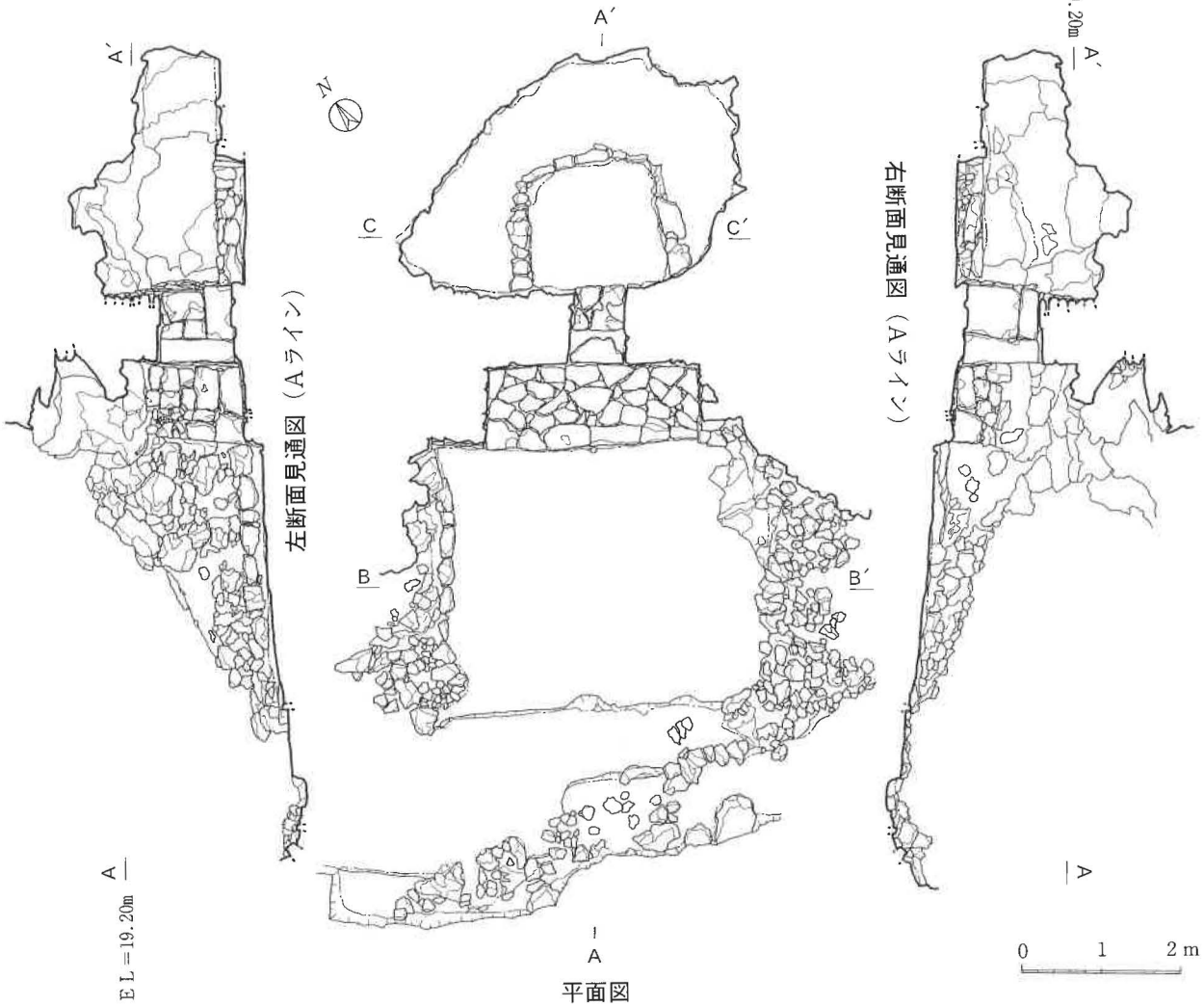
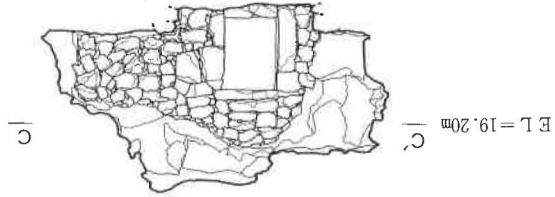
第12図 C地区 9号墓



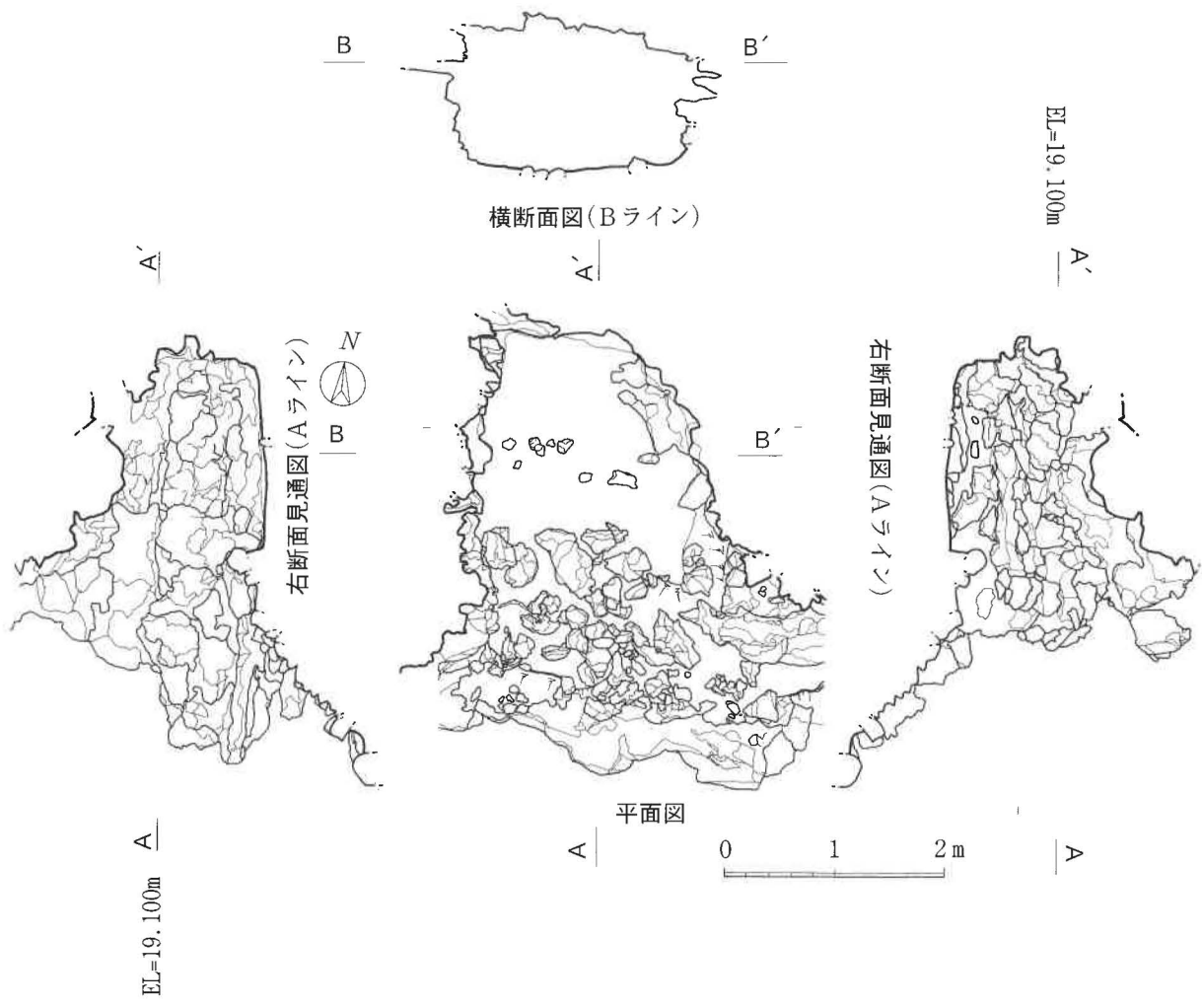
正面図 (Bライン)



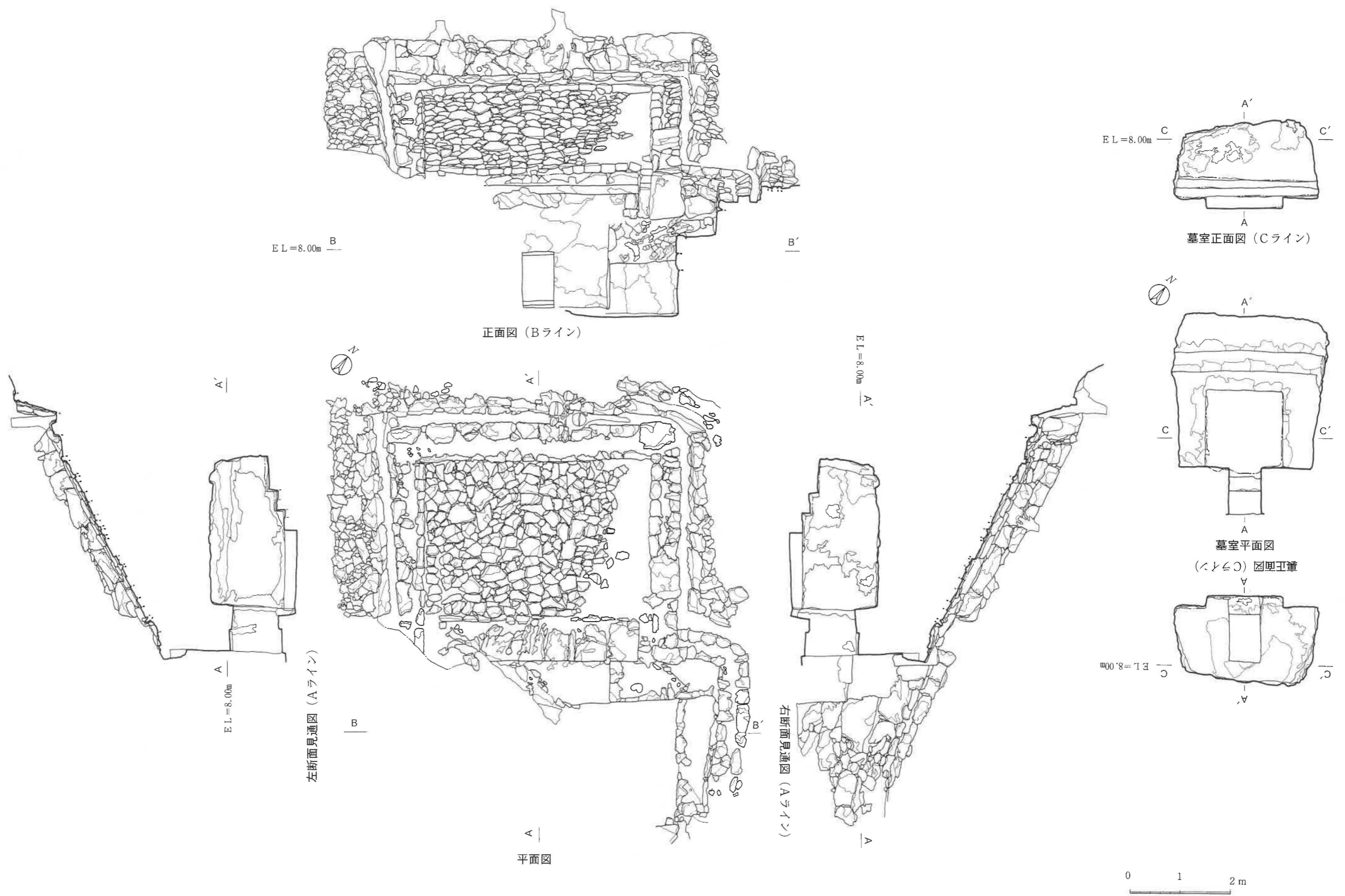
墓室正面 (Cライン)
真正面図 (Bライン)



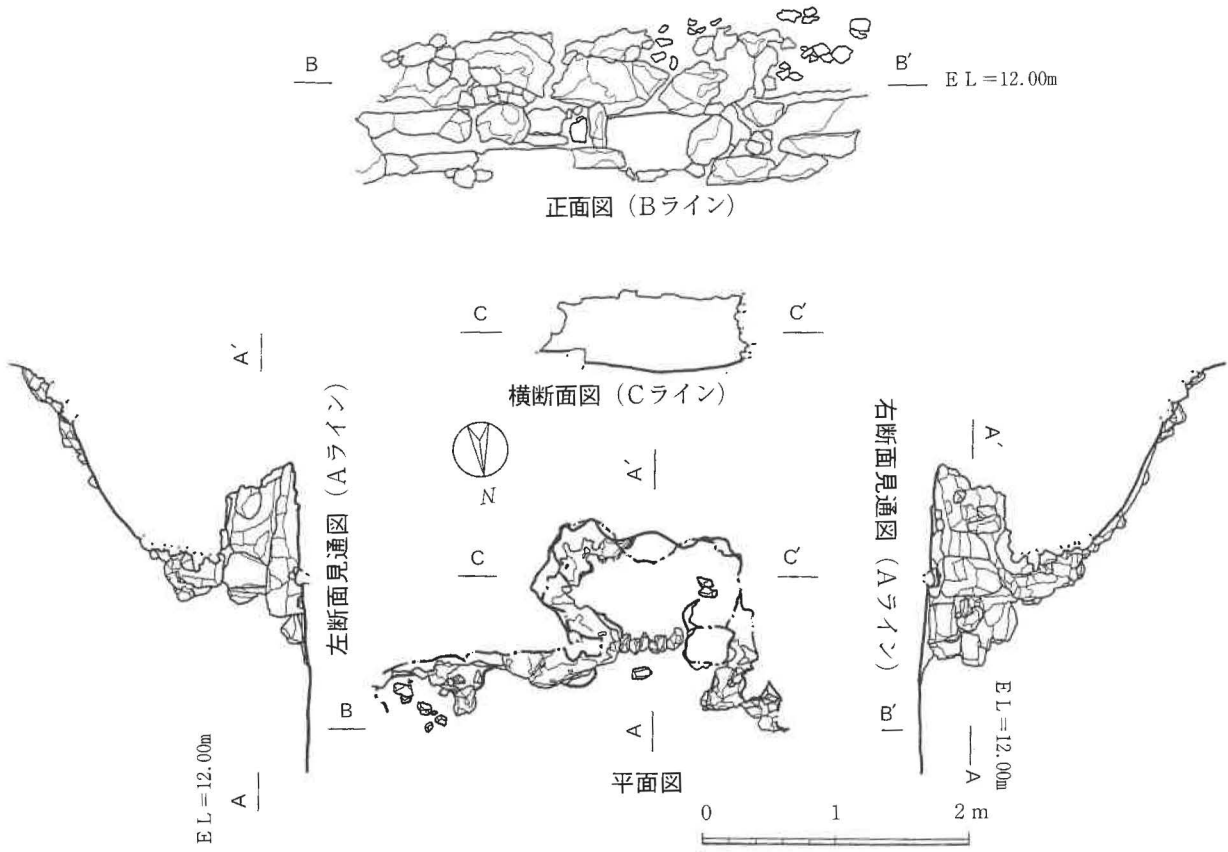
第13図 C地区 8号墓



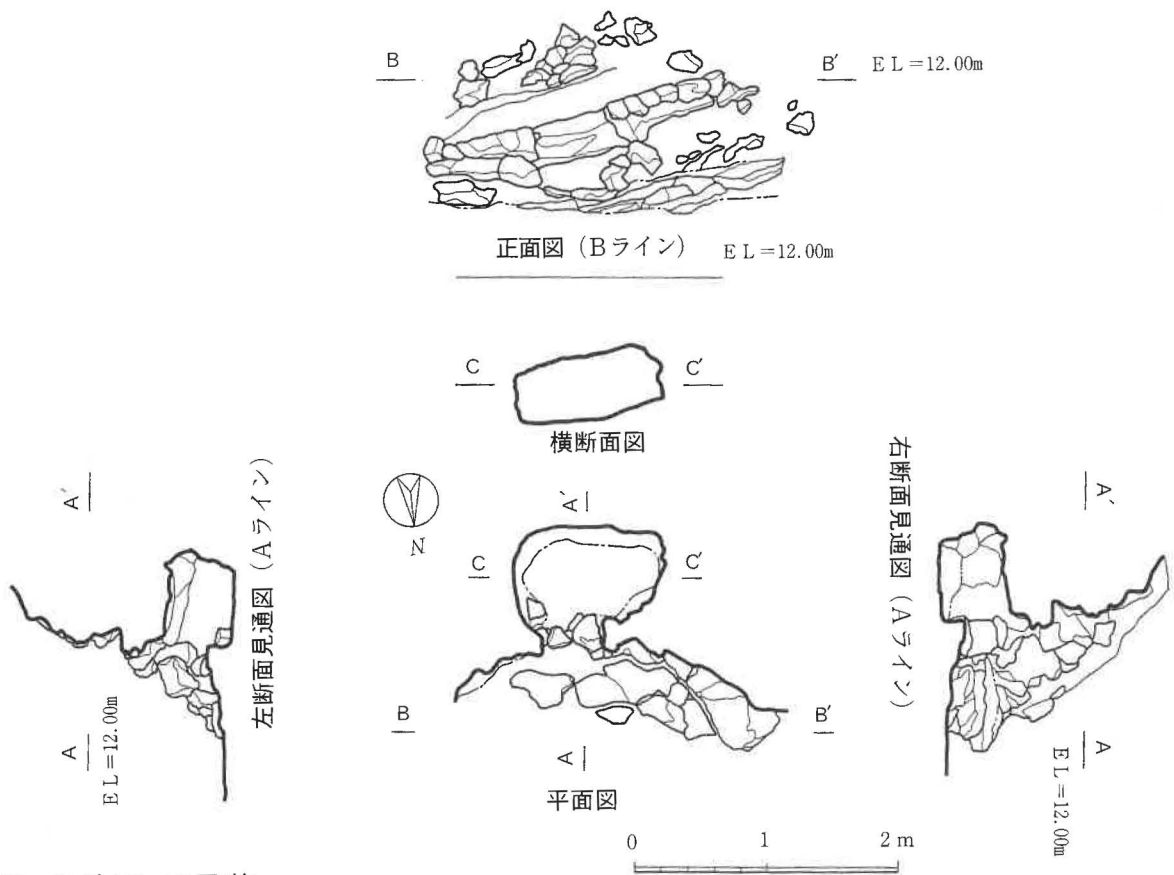
第14図 C地区 10号墓



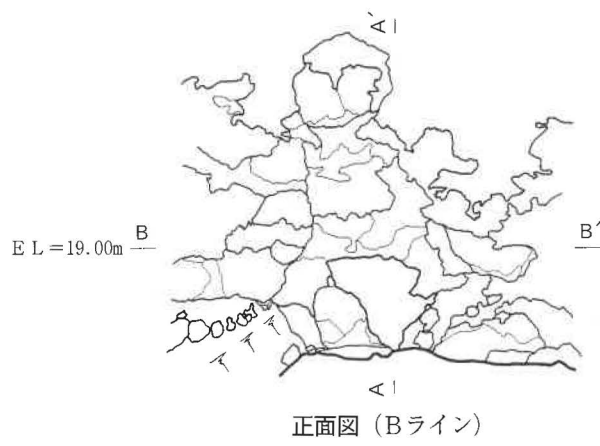
第15図 B地区 11号墓



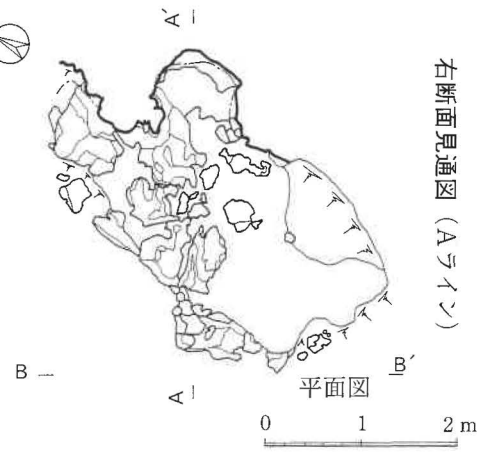
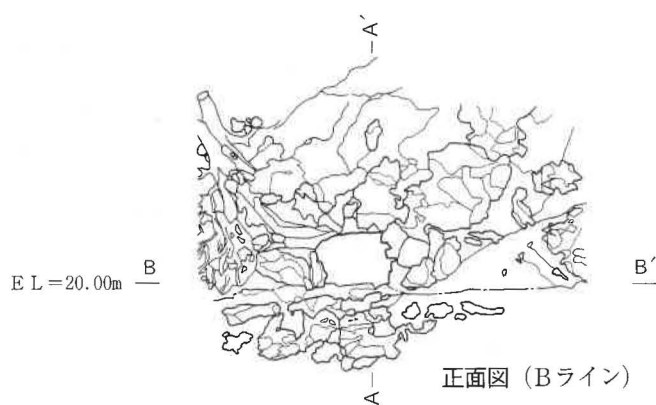
第16図 B地区 12号墓



第17図 B地区 13号墓

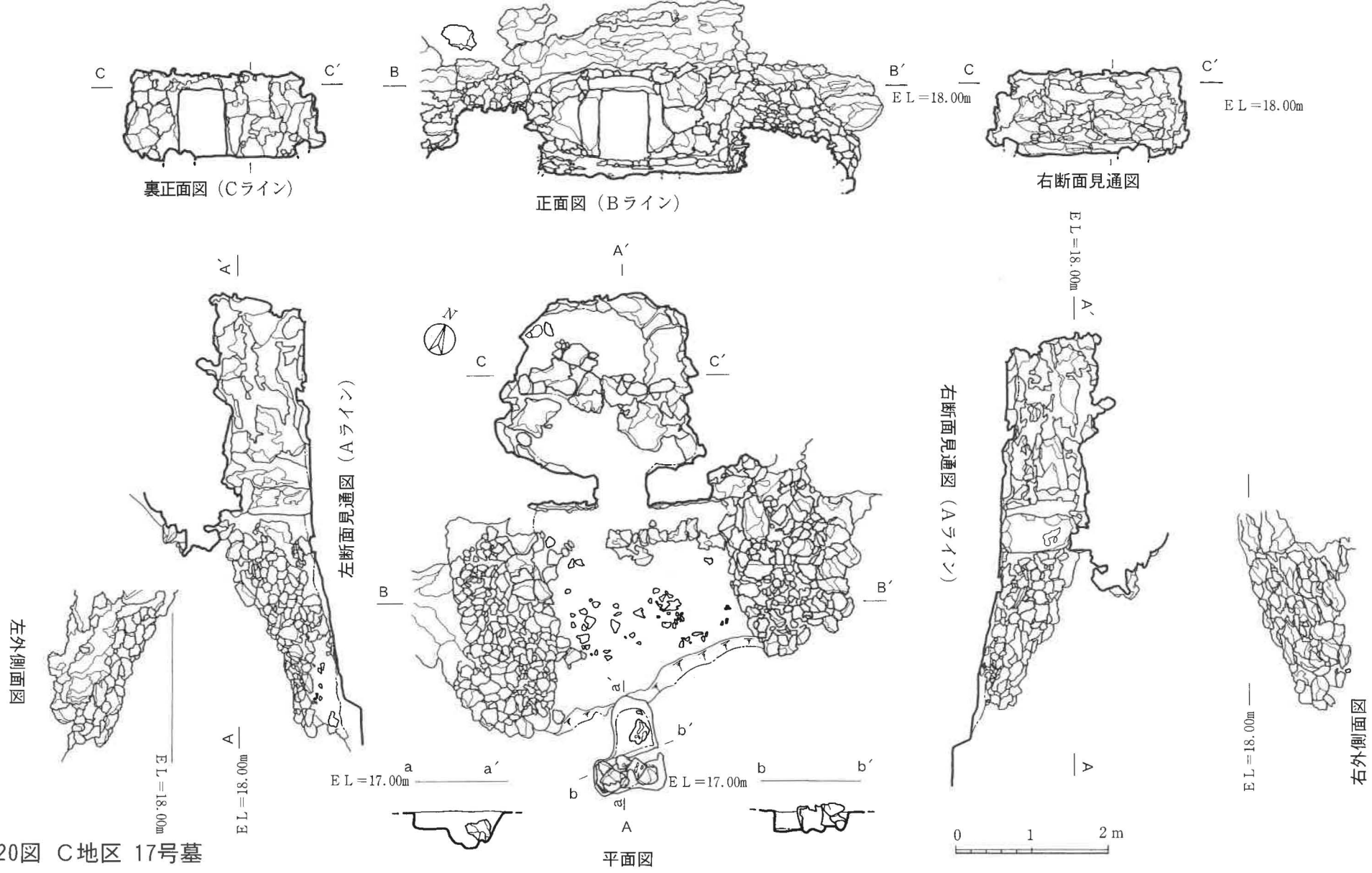


第18図 C地区 15号墓



第19図 C地区 16号墓

第20図 C地区 17号墓



第IV章 遺物

本古墓群からは蔵骨器・中国産磁器・沖縄産陶器・陶質土器・玉類・円盤状製品・金属製品・ガラス製品・根付などの遺物が出土した。これらの遺物について個々に述べる。

第1節 蔵骨器

本古墓群から出土した蔵骨器は総数196点で、家形と甕形の蔵骨器である。前者は石製と施釉陶器製があり、後者は陶器製である。これらは方言で「ジーシ（厨子）・ジーシガーマ（厨子甕）」などと呼称されるものである。

出土状況を第3表に示した。墓室内に納骨されて納められていたものは1号墓出土の7基であった。また、本古墓群出土の蔵骨器で銘書が記されたものは16基で、第2表に年代比較表を示した。本古墓群出土の蔵骨器の分類を以下に示す。分類は銘苅古墓群Ⅰ・Ⅱ、ナーチャーモー古墓群などを参考に行った。

Ⅰ類. 石製家形蔵骨器

A. 身：箱型で4脚が付く（第30図2）。

B. 蓋：寄棟形。（第30図1）。

身の胴部の装飾は正面のみで、蓋は棟に装飾が付く。いずれもサンゴ石灰岩製である。

Ⅱ類. 陶製家形蔵骨器

A. 身：箱型で4脚が付くもの。

1. 口縁下に軒が付くもの（第21図2・第22図2・第28図2・第29図2）。

2. 口縁下に軒が付かないもの（第23図2・第24図2・第25図2）。

B. 蓋：寄棟形。重ね焼きのための「ツノ」を有する。

1. 屋根の上層と下層にツノ付獅子頭を有するもので、上層の正面中央と背面の左右隅に2個もつもの。

ア. 下層の4隅に付くもの。（第25図1）。

イ. 下層の4隅とその間にあるもので、4隅間の正・背面が2個、左右1個をもつもの。（第21図1）

2. 屋根の上層と下層にツノ付獅子頭を有するもので、上層の正面中央に「ツノ」を有し上層・下層ともに4隅に付くもの（第22図1、第24図1、第27図1、第29図1）。

身・蓋ともに貼付による装飾が施されるもので、施釉されており、は、白化粧+緑釉+鉄釉（第21図1・2、第22図1・2）、第27図1は白化粧+緑釉+鉄釉、白化粧+コバルト釉+鉄釉+緑釉（第25図1・2）、白化粧+コバルト釉+鉄釉（第24図1・2、第27・28

図、第29図1・2)によって装飾部分などに掛け分けされており、基本的には屋根や格子部分・柱(?)の部分や貼付の装飾に緑釉やコバルト釉が施され、壁にあたる部分は白化粧、そこに貼り付けられた蓮華・龍・獅子・坊主などに鉄釉や緑釉を施している。中には背面の装飾が施されていない部分に鉄釉の大・小の丸文の列を交互に施すものがある。また、身・蓋の内器面に鉄釉が施されるものがある。(第21・22図)。いわゆるツノ付御殿型厨子甕と称されるものである。身のⅡ類A2はⅡ類A1に比して小振りで脚が長く装飾が少ないが、蓋に見られる装飾の貼付などは大きくは変わらない。

Ⅲ類. 陶製有頸甕形蔵骨器

A. 身

甕形で頸部が立ち上がるもので、マンガン釉が施されているもの。

1. 口径の外径が胴部の最大径よりも小さいもの。

ア. 口縁部内側がほぼ直線的で舌状を呈さないもの、底部に脚を持たないもの。(第31図3・第32図6・第34図11・第36図1～4)。

文様は正面中央部の銘書を記す部分を囲む装飾が貼付けのみで、逆「U」字状のものと、家形のものがあり、その左右に施される文様は、貼付け+線彫りと線彫りのみがあり、背面にも線彫りの文様を施すものもある(第31図3・第36図3)。貼付文は蓮華や坊主で他は線彫りである。

イ. 口縁部内側が舌状を呈するもの

①底部に脚を持たないもの。(第26図2・4・第32図8・第34図8・12)。

②底部に3個の脚が付くもの(第35図7・第32図9)。

③底部が不明なもの(第34図10)。

文様は正面中央部の銘書を記す部分を囲む装飾が貼付けと線彫りがあり、器高が40cm以上からは貼付けで、20cm以上30cm未満はほとんど線彫りとなり、この装飾の左右に施される文様は、蓮華・葉などがすべて線彫りで施される。

2. 径の外径が胴部の最大径より大きいもの(第32図11、第33図3・5、第34図7・9、第35図6)。第33図5は、窯焼の際に変形し片側が胴部の最大径の内側にあるものであるが、ここに含めた。

文様は正面中央部の銘書を記す部分を囲む装飾を持つものとなないものがあり、前者には貼付けと線彫りがあり、その左右の文様は線彫りで蓮華が施される。後者は線彫りで、肩部や胴下部に直線や波状を圍繞させており、第33図3のみに胴部下半の直線文の下位に文様を施している。

3. 口径の外径が胴部の最大径より大きいもので、胴部の膨らみが弱いもの(第34図6)。

文様は線彫りで、直線文と波状文を肩部や胴下部に施す。器高は、底部を失っており不明であるが、残存部での器高は22.2cmである。

4. 不明(第32図7・10、第33図1)

本類に施された、マンガン釉は底面には施されず、大半が口唇部と底面・内面を除く表面に施されているが、内器面の口縁下まで施すものもある（第34図9・11・12）。

身の器高は50cm以上60cm未満、40cm以上50cm未満。30cm以上40cm未満。20cm以上30cm未満に大別され、40cm以上50cm未満に施される文様は貼付け＋線彫り、線彫りのみの両者が見られるが、これ以下は線彫りのみ、これ以上は貼付け＋線彫りである。

B. 蓋

陶製有頸甕形蔵骨器の蓋の分類を記す。

1. つまみが饅頭形。

ア. 「き」を持つもの。

①. 鏝の部分を強く折るもの（第26図3、第34図3、第32図3、第34図2（6）、第35図5、第35図3、第35図1）。

②. 鏝の部分が緩やかなもの（第34図6）。

イ. 「き」を持たないもの。

①. 鏝の部分を強く折るもの（第34図5、第32図2、第34図4、第33図4）。

②. 鏝の部分が緩やかなもの（第32図4）。

2. つまみが宝珠形（第34図1、第35図2、第31図4、第35図4）。

ア. 「き」を持つもの。鏝を強く折るもの（第26図1、第31図4、第35図4）。

イ. 「き」を持たないもの。鏝を強く折るもの（第34図1、第35図2、）。

3. 不明（第32図1、第32図5）

蓋の高さが10cm以下のものは、口径（外径）が20cm以下であることから、20cm以上30cm未満の小型の身と対になるものと考えられる。

IV類. 陶製軒付甕形蔵骨器

A. 身（第31図2）

肩部に軒を有するもので降棟が4個付く。文様は張り付け＋線彫りで、背面まで施される。正面中央の銘書を記す部分を囲む装飾は家形である。

B. 蓋（第31図1）

上層の軒には降棟が4個付き、下層は無文で鏝となる。つまみは宝珠形で「き」を持つ。

以上に述べた、蔵骨器には銘書〔名前・洗骨が行われた年号や死亡年・位階などを記す。〕が記されたものがあり、これに見られる年号で最も古いものは、中国年号の道光2年（1822年）で180年前、他には同治・光緒があり、日本年号の明治（同治7年から日本年号は明治）・大正・昭和が見られた。もっとも新しいものは昭和19年（1944年）で58年前であった。また、位階には、築登・親雲上が見られた。

（山城安生）

第2表 出土蔵骨器銘書と造営年号比較

出土地 年号	1号墓			2号墓			3号墓			4号墓			5号墓			8号墓			13号墓			15号墓			17号墓		
	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)	蔵骨器No	洗骨年 (西暦)	死亡年 (西暦)
道光	1	1822年	道光2年																								
咸豊																											
同治																											
光緒																											
明治	2	1892年	明治25年																								
大正	4	1914年	大正3年																								
	6	1914年	大正3年																								
	7	1914年	大正3年																								
昭和	5	1927年	昭和2年																								
	3	1934年	昭和9年																								
備考																											

* 5号墓の年号は、墓に刻まれていた造営年月日。

第4表a 蔵骨器観察一覧

*口径はすべて外径で、家型については横は長軸、縦は短軸。

挿図番号 図版番号	出土地			分類	計測値 a:器高 b:口径(横) c:口径(縦) d:底径(横) e:底径(縦)	銘書	観察事項			
	地区	墓番号	蔵骨器No					出土地点		
第21図1 図版17	A地区	1号墓	No1	墓室	Ⅱ類	B1イ	蓋	36.5 44.4 29 -	窓孔10(正面:3、左右側面:各2、裏面:3)。「き」なし。	
第21図2 図版17						A1	身	41.7 42 26.9 34.7 20.4	道光二年辛巳八月四日死去 次男樽嶋袋	死亡年は、1822年道光二年。窓孔6窓孔(正面2、左右側面:各2)。底孔2。
第22図1 図版18	A地区	1号墓	No2	墓室	Ⅱ類	B2	蓋	36.7 39.4 29.4 -	先骨日/明治廿五年七月十日 仲本ノ鳥袋築登ノ妻ナベ	洗骨年は、1892年明治25年。「き」なし。
第22図2 図版18						A1	身	40.2 36.2 26 29 19.5	先骨日/明治廿五年七月十日 仲本ノ鳥袋築登ノ妻ナベ	洗骨年は、1892年明治25年。白化粧に緑釉と鉄釉を掛け分け。窓孔13(正面:5、左右側面:各4)。底孔3。
第23図1 図版19	A地区	1号墓	No3	墓室	Ⅱ類	A2	身	46.5 46.5 34.9 35.4 25.2	昭和九年旧十二月日洗骨/ 鳥袋加那妻仲本鳥袋マカト	洗骨年は、1934年昭和9年。窓孔12(正面3、左右側面:各4、裏面:1)。底孔2。
第24図1 図版20	A地区	1号墓	No4	墓室	Ⅱ類	B2	蓋	41.5 35.5 24.5 -	仲本ノ鳥袋加那父ノ樽姉ウシ 丑ノ骨/大正三年旧十一月洗骨	洗骨年は、1914年大正3年。窓孔8(正面:2、左右側面:各2、裏面:2)。「き」なし。
第24図2 図版20						A2	身	44.3 36.2 27 29.1 20.5		窓孔7(正面:1、左右側面:各2、裏面:2)。底孔2。
第25図1 図版21の1	A地区	1号墓	No5	墓室	Ⅱ類	B1ア	蓋	42.9 36.6 - 28.2 -	金加那ノ鳥袋義正/昭和二年十二月先骨卯年	洗骨年は、1927年昭和2年。「き」なし。窓孔7(正面:2、左右側面各2、裏面:1)。
第25図2 図版21の2						B2	身	44 35 27.8 27.2 20.9		窓孔8(正面:3、右側面:4、裏面:1)。底孔2。
第26図1 図版22の1	A地区	1号墓	No6	墓室	Ⅲ類	B2ア	蓋	12 23.7 - - -	伊礼ノ次男ノ鳥袋次口長 ノ男蒲骨/口時死/大正三年旧十一月洗骨	洗骨年は1914年大正3年。「き」なし。「台」1段。
第26図2 図版22の2						A1	身	38.8 21.4 - 13.5 -		窓孔3底孔8
第26図3 図版22の3	A地区	1号墓	No7	墓室	Ⅲ類	B1ア①	蓋	12.7 26.3 - -	仲本ノ鳥袋加那ノ三女カメ 骨/大正三年旧十一月洗骨	洗骨年は1914年大正3年。「き」あり。「台」3段。
第26図4 図版22の4						A1イ①	身	56.5 28 - 18.5 -		正面左側で口縁部から胴上部にかけて、石灰が付着がみられ、墓室天井からの滴によるものとみられる。窓孔3。底孔9。
第32図11 図版28の11	A・B地区	1号墓、6号墓		1号墓屋根、6号墓室	Ⅲ類	A2	身	28.5 18.9 - 9.5 -		窓孔なし。底孔9(底部5/底部際側面4)。
第32図1 図版28の1	A地区	2号墓		墓庭	Ⅲ類	B3	蓋	12.8 27.6 - -	大正五年・・・照屋仁王	1916年大正5年。洗骨・死亡年のいずれかは不明。「き」なし。「台」3段。
第32図4 図版28の4	A地区	3号墓		墓庭	Ⅲ類	B1イ②	蓋	7 18.9 - -	昭和十二年/旧十月二十七日 新骨/女ウシ	洗骨を方言で「シンクチ」に起因するとみられる「新骨」と書かれている。「き」なし。「台」なし。

第4表b 蔵骨器観察一覧

*口径はすべて外径で、家型については横は長軸、縦は短軸。

挿図番号 図版番号	出土地			分類	計測値 a:器高 b:口径(横) c:径(縦) d:底径(横) e:径(縦)	銘書	観察事項			
	地区	墓番号	蔵骨器No					出土地点		
第32図9 図版28の9	A地区	3号墓		墓外	Ⅲ類	A1イ②	身	53.7 26.4 21.4-		窓孔3?。底孔24。
第35図6 図版31の6	A地区	3号墓		墓室	Ⅲ類	A2	身	30.1 19.5 12.5-		窓孔3。底孔不明。
第27図1 図版24の1	B地区	4号墓		墓室	Ⅱ類	B2	蓋	39.6 49.6 35.5 -	光緒三十二年□□八月廿七日 明治廿年旧八月照屋鍋 父蒲光緒三十二年丁酉八月 廿七日洗骨ノ照屋鍋母加ま	洗骨年は1906(光緒32)年、1897(明治30)年。窓孔10(正面:3、左右側面:各2、裏面:3)。「き」なし。
第28図1 図版24の2							A1	身		
第32図10 図版28の10	B地区	4号墓		墓庭	Ⅲ類	B3	身	- - 19 -		窓孔不明。底孔6。
第32図2 図版28の2	B地区	4号墓		墓庭	Ⅲ類	B1イ①	蓋	7.5 19.0 -		「き」なし。「台」2段。
第32図3 図版28の3	B地区	4号墓		墓室	Ⅲ類	B1ア①	蓋	10 23 -		「き」あり。「台」1段。
第32図7 図版28の7	B地区	4号墓		墓庭	Ⅲ類	A4	身	- - 19 -		窓孔不明。底孔15。器高残存(19)。
第32図8 図版28の8	B地区	4号墓		墓庭	Ⅲ類	A1イ①	身	50.7 23.8 19.4 -		窓孔不明。底孔13。
第32図5 図版28の5	B地区	7号墓		墓室	Ⅲ類	B3	蓋	28.1 -		「き」なし。「台」2段。器高残存(10.9)。
第32図6 図版28の6	B地区	7号墓		墓室	Ⅲ類	A1ア	身	26 -		貼付+線彫り。波線と蓮の花の貼付が一部残存。窓孔不明。底孔不明。
第31図1 図版27の1	C地区	8号墓		墓庭	Ⅳ類	B	蓋	16 33 -		「き」あり。「台」1段。
第31図2 図版27の2							A	身	65.5 30.2 25.4 -	貼付+線彫り。窓孔3。底孔11。
第31図3 図版27の3	C地区	8号墓		墓室	Ⅲ類	A1ア	身	55.8 29.5 20.8 -		背面側は線彫りで、風景を描いていると思われる。窓孔3。底孔5。
第31図4 図版27の4	C地区	8号墓		墓室	Ⅲ類	B2ア	蓋	14 28 -		「き」あり。「台」1段。
第30図1 図版26の1	C地区	8号墓		墓室	Ⅰ類	IB	蓋	42.5 57.6 45.5 29 25.4		石灰岩製。「き」なし。棟の左右端と中央に削りだしの装飾を施す。
第30図2 図版26の2							IA	身		
第33図1 図版29の1	B地区	11号墓		墓室	Ⅲ類	A4	身	- - 24 -		窓孔3。底孔19。器高残存(57.2)。

第4表c 蔵骨器観察一覧

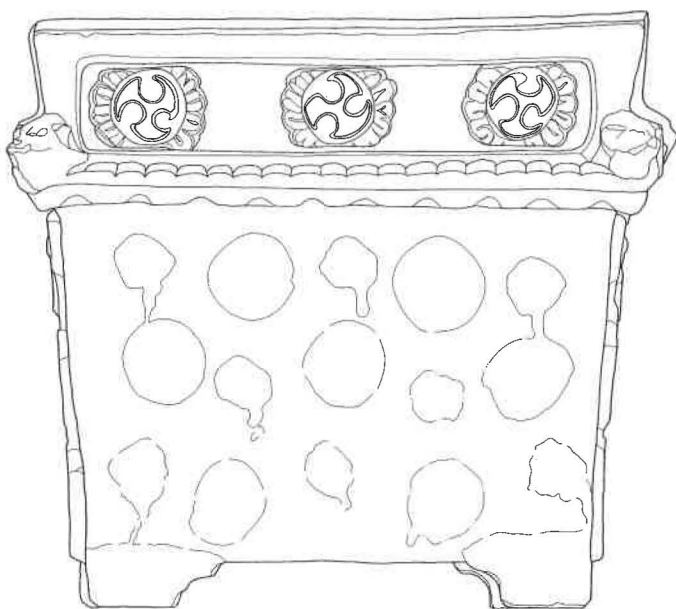
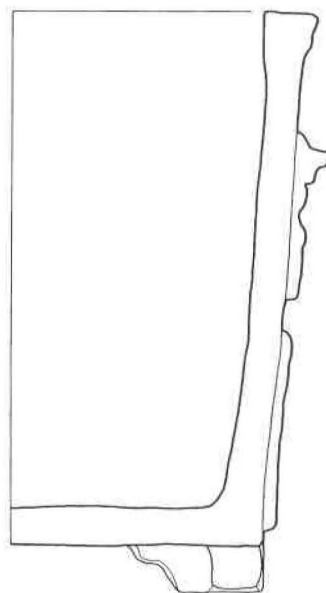
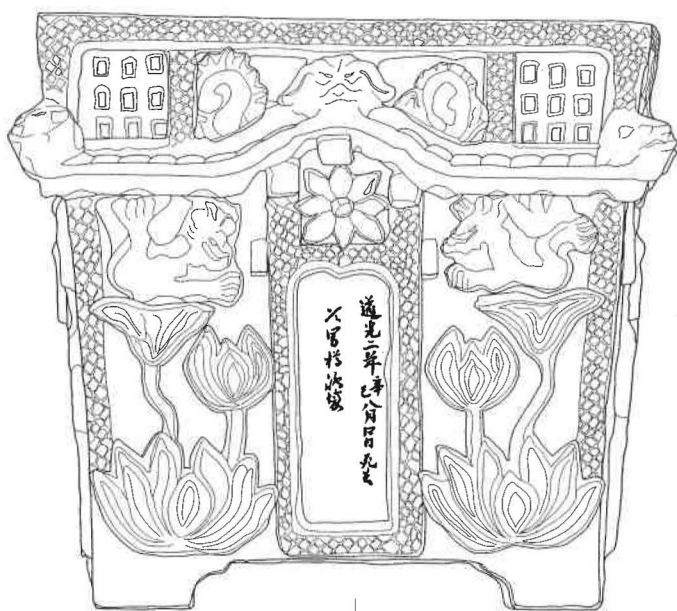
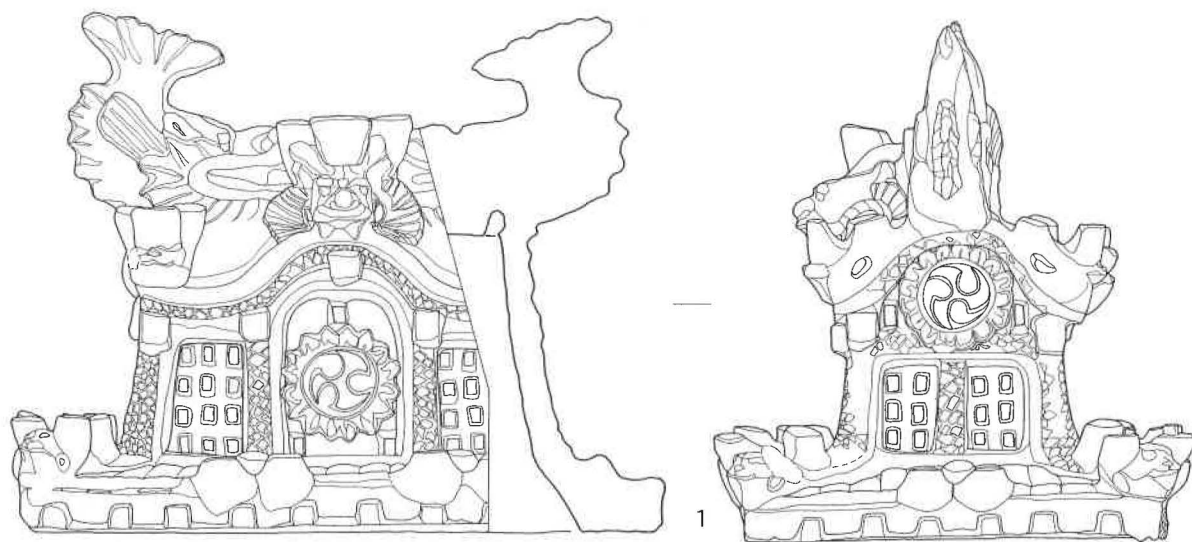
*口径はすべて外径で、家型については横は長軸、縦は短軸。

挿図番号 図版番号	出土地			分類	計測値 a:器高 b:口径(横) c:ク(縦) d:底径(横) e:ク(縦)	銘書	観察事項			
	地区	墓番号	蔵骨器No							
第33図2 図版29の2	B地区	12号墓		墓外	Ⅲ類	B1ア①	蓋	6.7 16.8 - -		「き」なし。「台」なし。器高残存(6.7)。つまみの頂部中央に穴あり。
第33図3 図版29の3				墓室	Ⅲ類	A2	身	27.5 16.9 10.2 -		窓孔不明。底孔12(底部5、胴下部側面7)。
第34図7 図版30の7	B地区	12・13号墓		墓外	Ⅲ類	A2	身	37.5 23.2 13.2 -		窓孔3/円形。底孔7。
第34図8 図版30の8	B地区	12・13号墓		墓室	Ⅲ類	A1イ②	身	42.3 23.7 12.6 -		窓孔3/円形。底孔8。
第34図5 図版30の5	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	B1イ①	蓋	7 18.6 - -	旧七月六日洗骨四男松	洗骨年は不明。「き」なし。「台」2段。
第34図6 図版30の6	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	A3	身	7.2 10.4 -		窓孔不明底孔不明。底部際側面残存2。高残存(22.2)
第34図2 図版30の2	B地区	13号墓		墓庭	Ⅲ類	B1ア②	蓋	7.7 18.6 - -	□大正(7年?)年十二月十五日洗骨日セン□□ウシ	洗骨年は、1918年?大正7年?。「き」あり。「台」段。
第34図3 図版30の3	B地区	13号墓		墓外	Ⅲ類	B1ア①	蓋	14.3 31.6 - -	なし	「き」あり。「台」2段。
第34図4 図版30の4	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	B1イ①	蓋	10.5 22.6 - -		「き」なし。「台」1段。
第34図9 図版30の9	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	A2	身	26.6 17.4 10.8 -		窓孔3。底孔22(底部6/底部際側面16)。
第34図10 図版30の10	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	A1イ③	身	21 - -		窓孔2。底孔不明。
第34図11 図版30の11	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	A1ア	身	37.1 20.5 13.2 -		窓孔3。底孔5。底面に目土が窯着している。
第34図1 図版30の1	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	B2イ	蓋	7.6 16.4 - -/..../..../..../ /□□年/九五日	「き」なし。「台」2段。
第34図12 図版30の12	B地区	13号墓		墓室	Ⅲ類	A1イ①	身	36.7 23 14 -		窓孔2。底孔40(底部16/底部際側面24)。
第33図5 図版29の5	C地区	15号墓		墓庭	Ⅲ類	A2	身	48.4 25.5 19 -		窓孔3。底孔9。
第33図4 図版29の4	C地区	15号墓		墓庭	Ⅲ類	B1イ①	蓋	11.8 27.6 - -	照屋□□/昭和一九年/旧八月../門../	1944年昭和19年が洗骨か死亡かは不明。「き」なし。「台」2段。つまみは、饅頭形(頂部中心に穴あり)。
第29図1 図版25の1	C地区	17号墓		墓室、墓庭	Ⅱ類	B2	蓋	45.5 49.8 36.5 -		「き」なし。
第29図2 図版25の2				墓室、墓庭	Ⅲ類	A1	身	45.5 47.6 37.2 38.6 27	□一年己□三月十□□□□ 親雲上	窓孔計18(正面:4、左右側面:各4、裏面:6)。底孔5。

第4表d 蔵骨器観察一覧

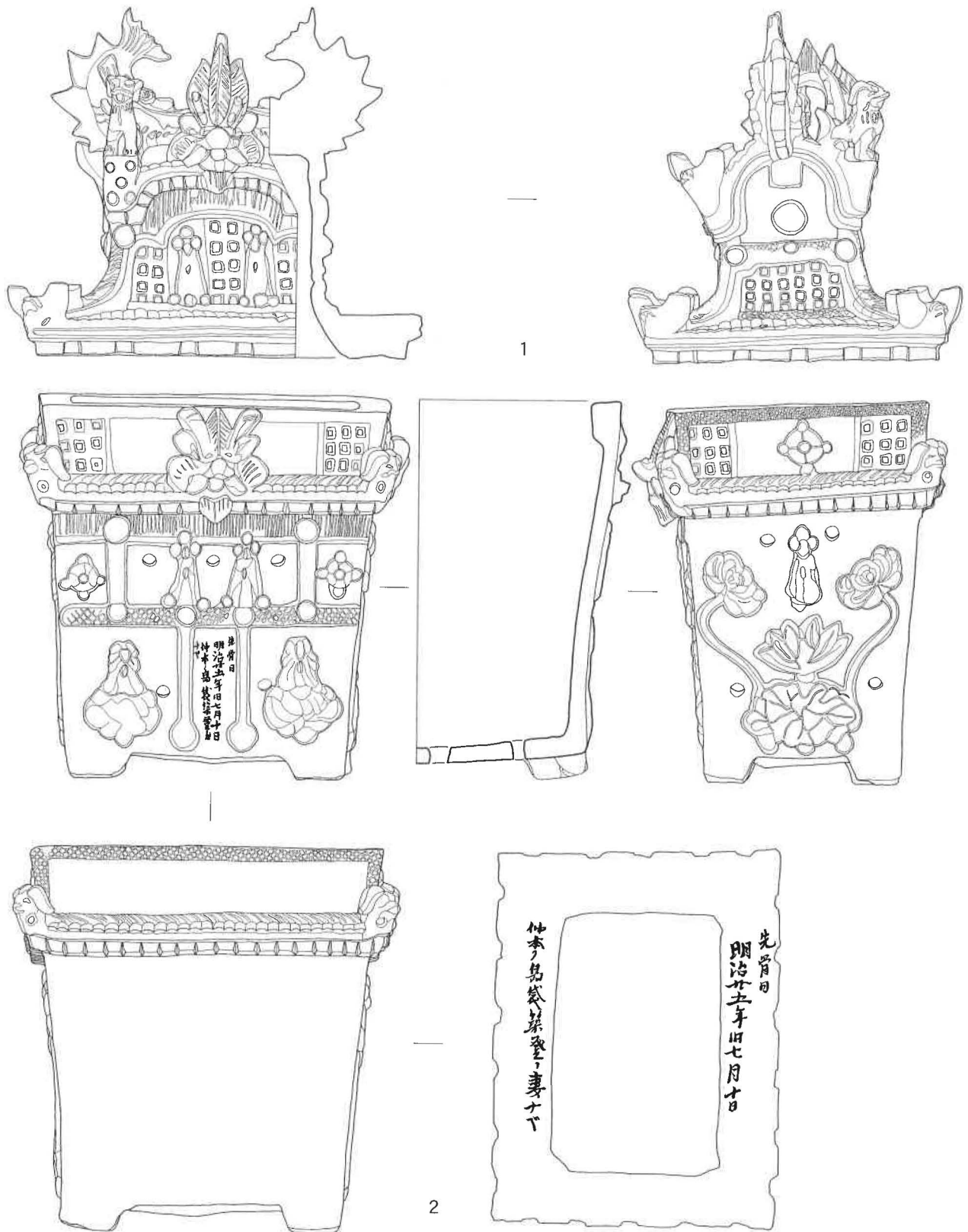
*口径はすべて外径で、家型については横は長軸、縦は短軸。

挿図番号 図版番号	出土地			分類	計測値 a:器高 b:口径(横) c:口径(縦) d:底径(横) e:底径(縦)	銘書	観察事項			
	地区	墓番号	蔵骨器No					出土地点		
第36図1 図版32の1	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	A1ア	身	54.5 29 - 19.7 -		窓孔3。底孔6。
第36図2 図版32の2	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	A1ア	身	42.5 24.3 - 15.9 -		窓孔3。底孔底部残存10。
第36図4 図版32の4	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	A1ア	身	54 27.2 - 18.8 -		窓孔3。底孔14。
第36図3 図版32の3	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	A1ア	身	56 27.6 - 23 -		貼付+線彫り。背面側に線彫りで唐破風屋根の家形状の文様。窓孔3/長方形:1、円形:2。底孔底部5。
第35図7 図版31の7	C地区	17号墓		墓室	Ⅲ類	A1イ②	身	57.3 29.1 - 19.3 -		窓孔なし。底孔7。
第35図1 図版31の1	C地区	17号墓		墓室	Ⅲ類	B1ア①	蓋	14 26.6 - - -	光緒十五年己丑十二月廿五日洗骨稻嶺盛政女子松金次男真五良	洗骨年は年。「き」あり。「台」1段。
第35図2 図版31の2	C地区	17号墓		墓室	Ⅲ類	B2ア	蓋	13.2 25.4 - - -	明治廿七年ウマ年/旧ノ拾貳月/女ウシ死亡セリ	死亡年は、1894年明治27年。「き」あり。「台」3段。。
第35図3 図版31の3	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	B2イ	蓋	13.1 29.1 - - -		右半分窯変。「き」あり。「台」2段。
第35図4 図版31の4	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	B2ア	蓋	14.4 29.2 - - -		「き」あり。「台」2段。
第35図5 図版31の5	C地区	17号墓		墓庭	Ⅲ類	B1ア①	蓋	15.2 28.5 - - -		「き」あり。「台」2段。
図なし 図版23	B地区	4号墓		墓庭	Ⅲ類	A1ア	身	37.5 20.8 - 18.6 -		窓孔1。底孔5。(未判読)

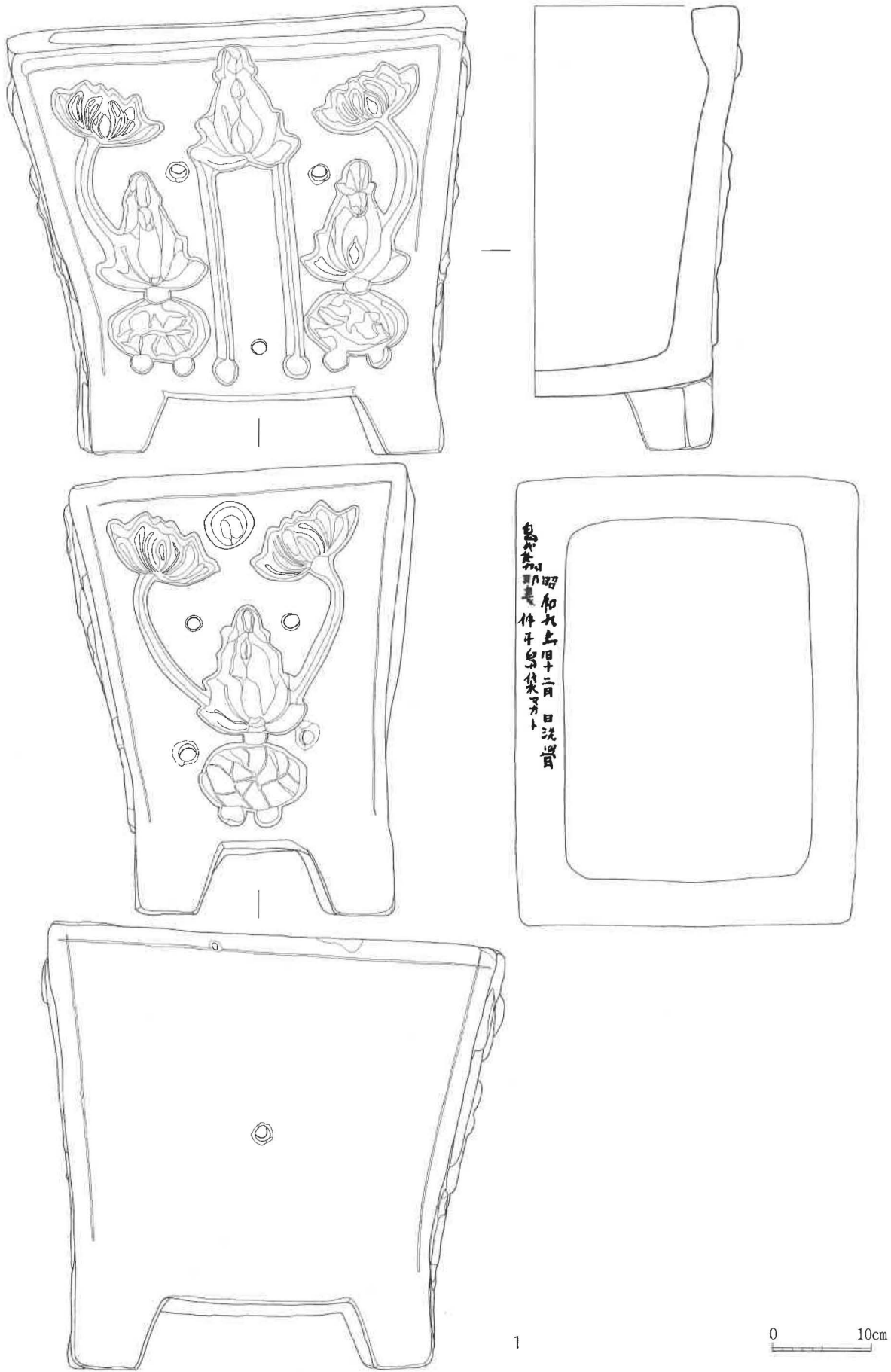


0 10cm

第21图 藏骨器〈1〉 1号墓 II類 陶製家形藏骨器 No.1 (蓋・身)

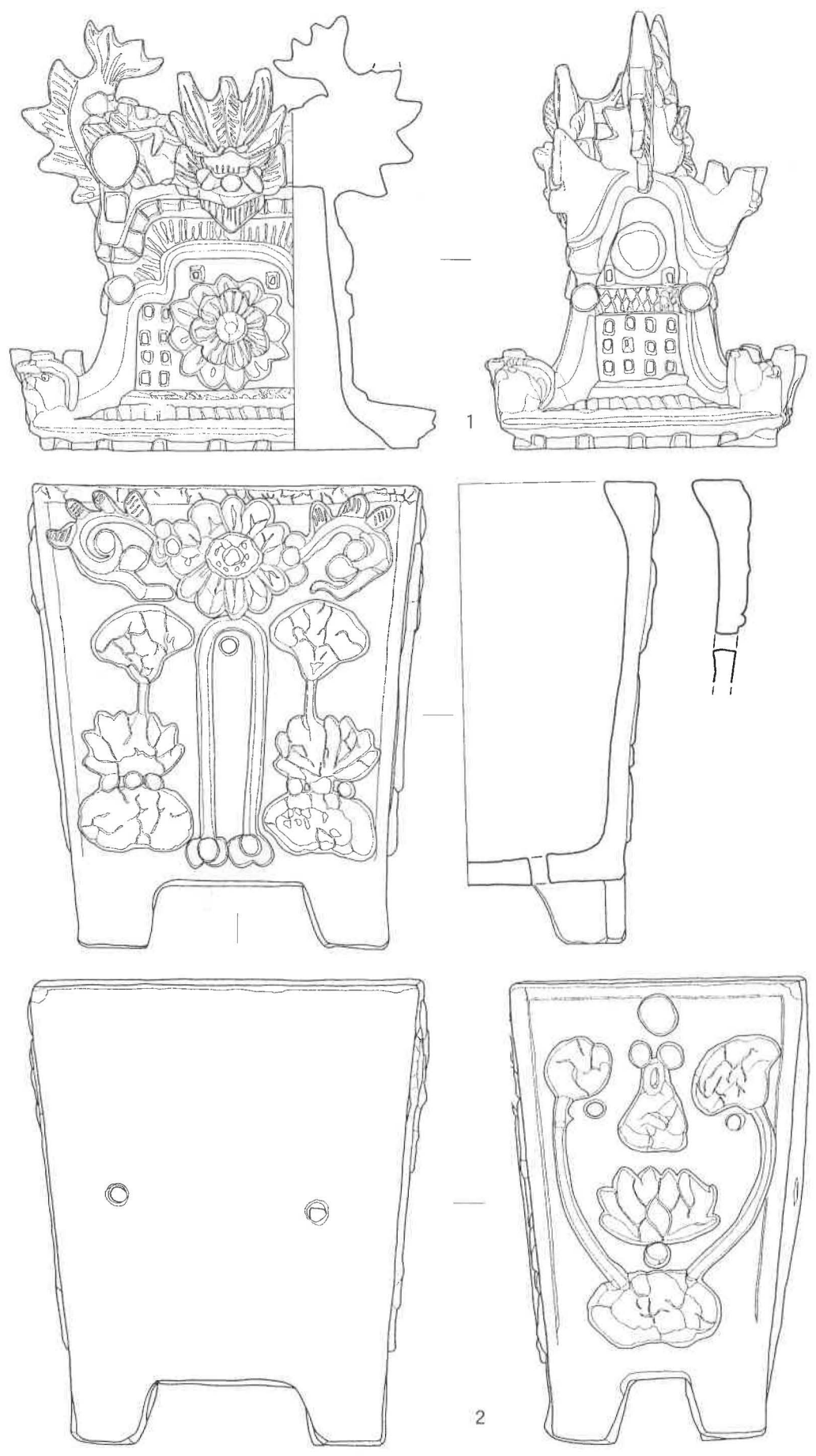


第22図 蔵骨器〈2〉1号墓 II類 陶製家形蔵骨器 No.2 (蓋・身)

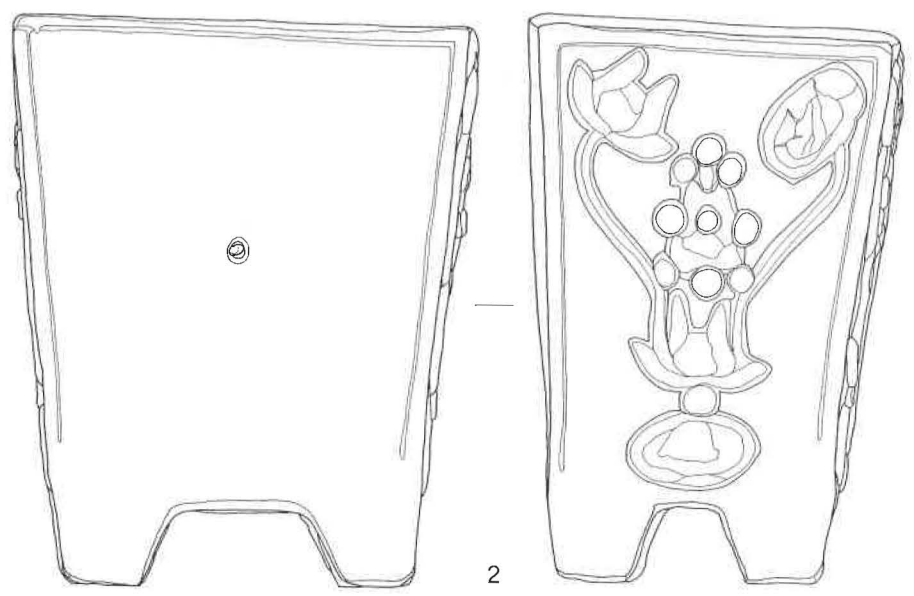
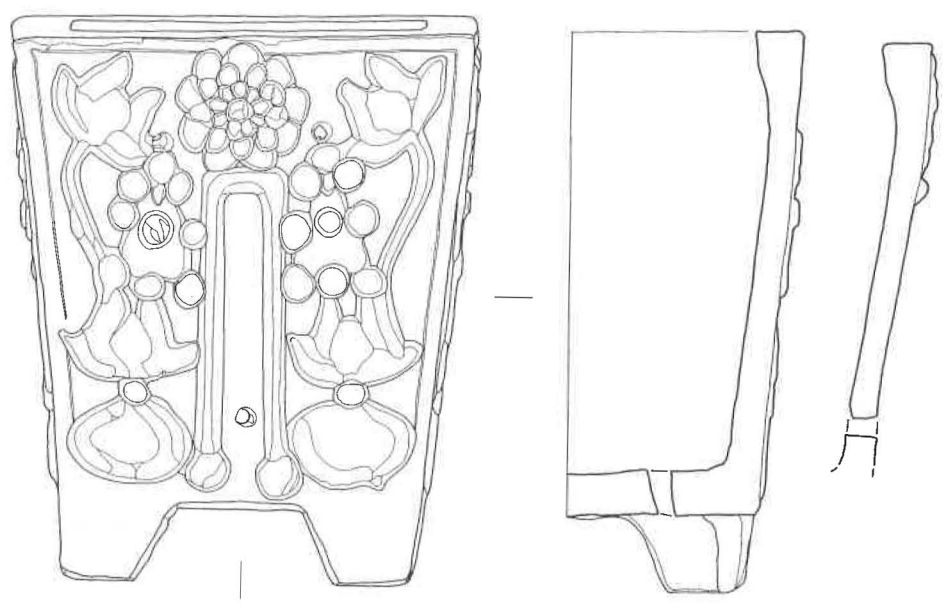


第23図 蔵骨器〈3〉1号墓 II類 陶製家形蔵骨器 No.3 (身)

仲衣島家加那父種跡ノシノ骨
大正四年四月九日発見

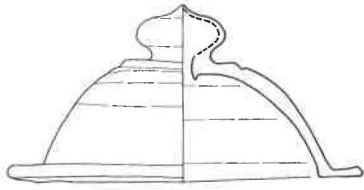


第24図 蔵骨器〈4〉1号墓 II類 陶製家形蔵骨器 No.4 (蓋・身)

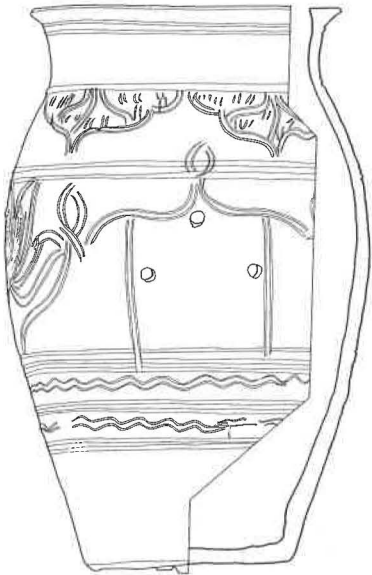


第25图 藏骨器〈5〉1号墓 II類 陶製家形藏骨器 No.5 (蓋・身)

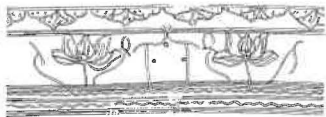
伊弉册次男
 自依次 长
 男 翁 骨
 天 叶 无



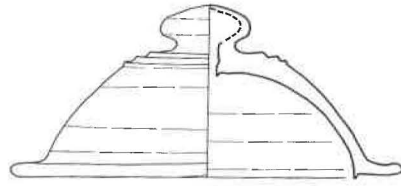
1



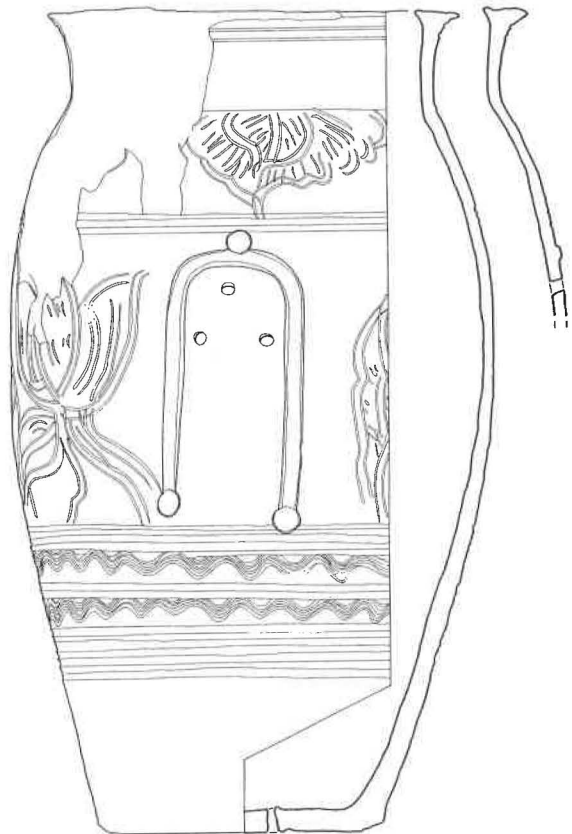
2



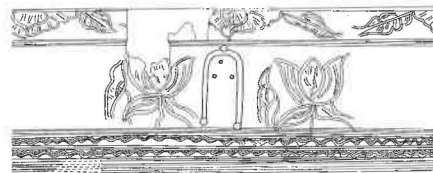
伊弉册次男
 三女 力 骨
 大 叶 无



3

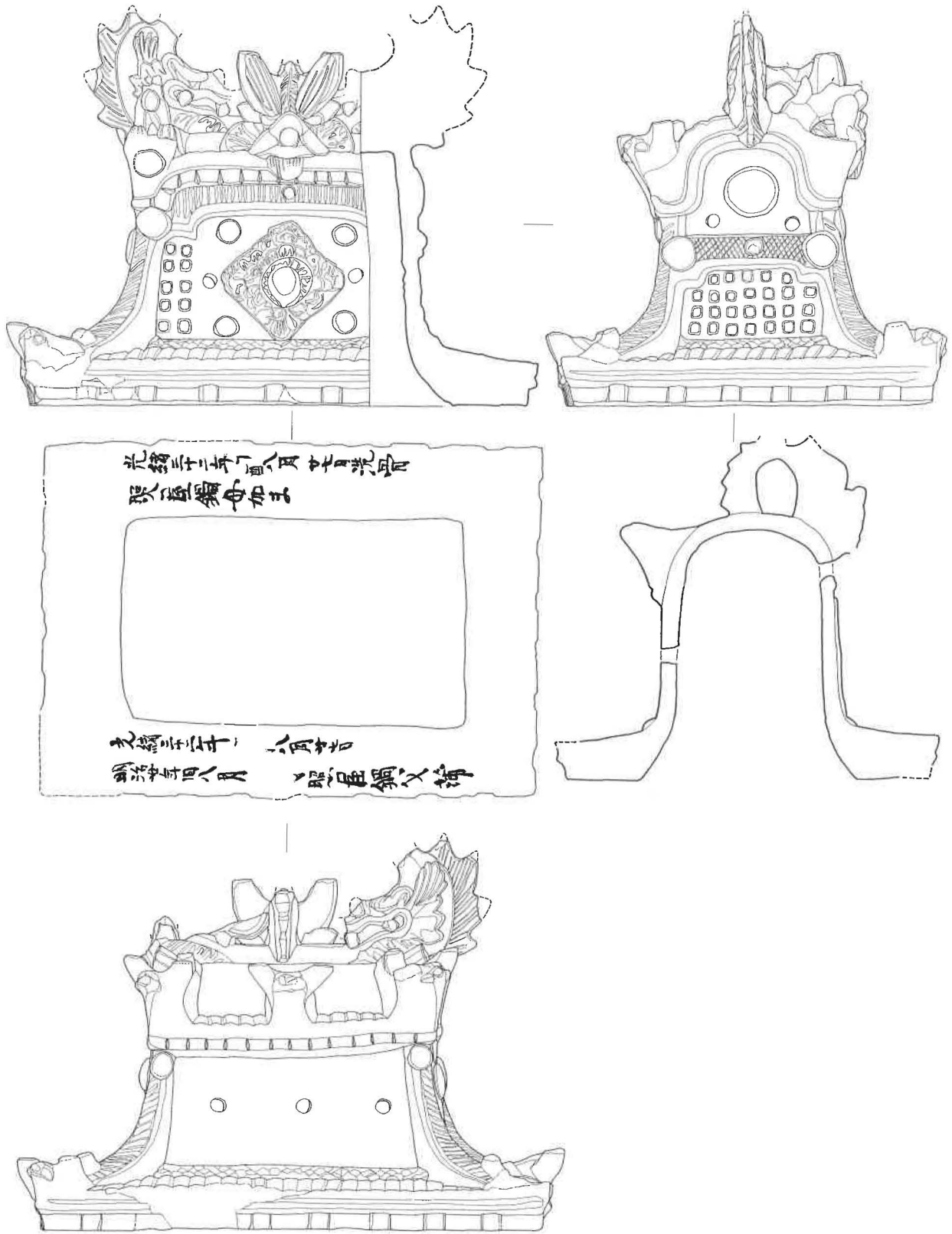


4



0 10cm

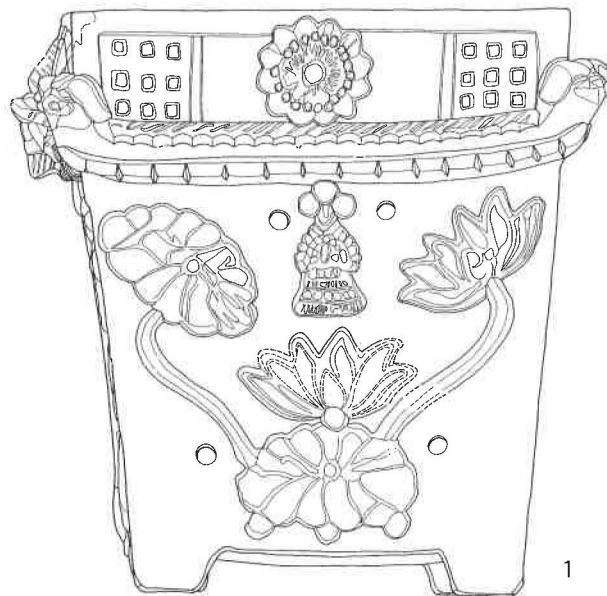
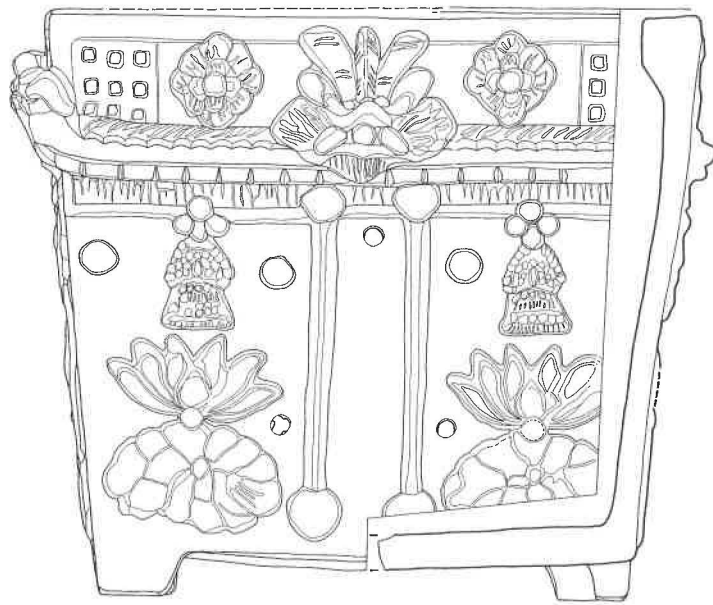
第26图 藏骨器〈6〉1号墓 III類 陶製有頸甕形藏骨器 No.6 (1・2) No.7 (3・4)



1

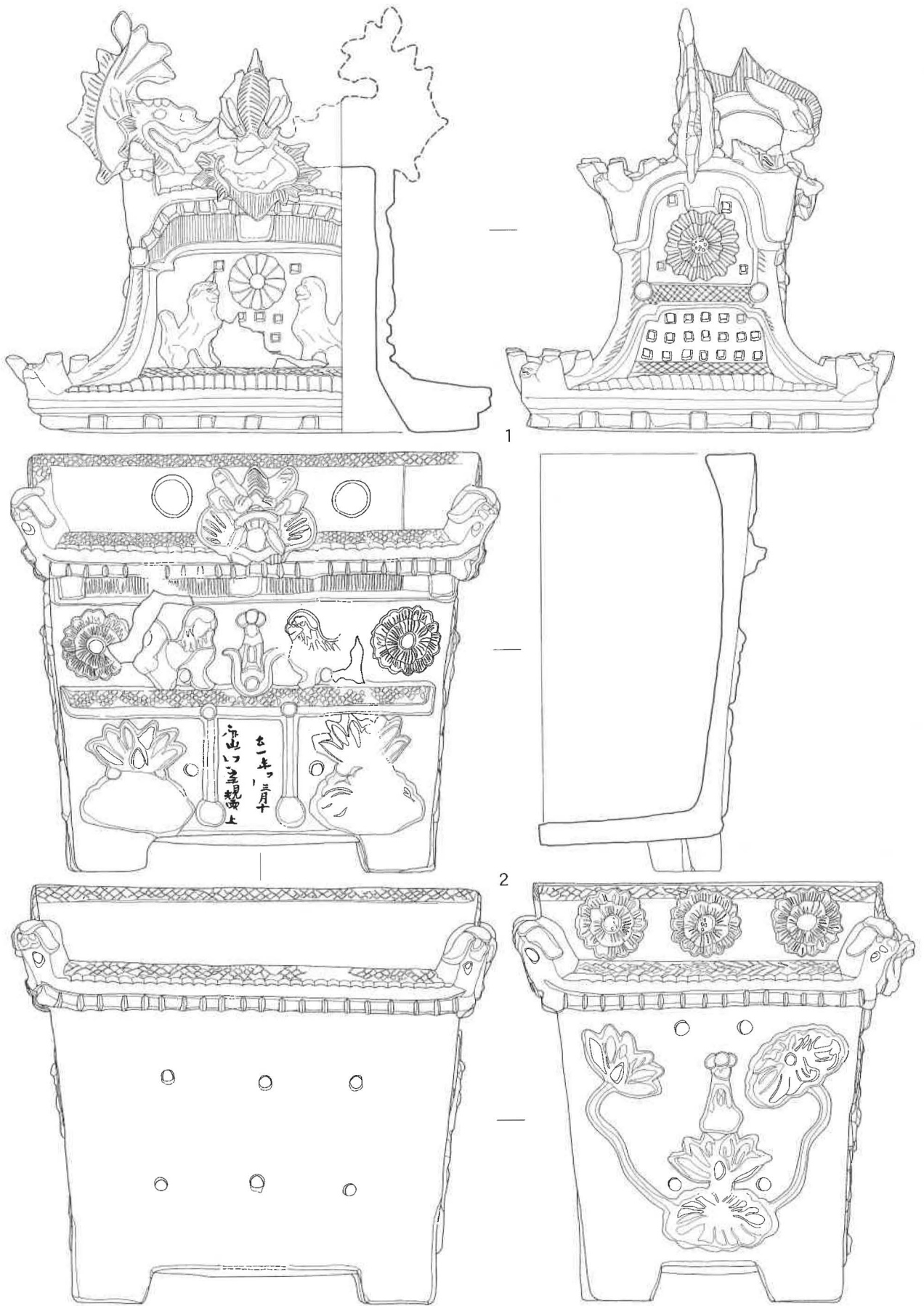
0 10cm

第27图 藏骨器〈7〉4号墓 II类 陶製家形藏骨器

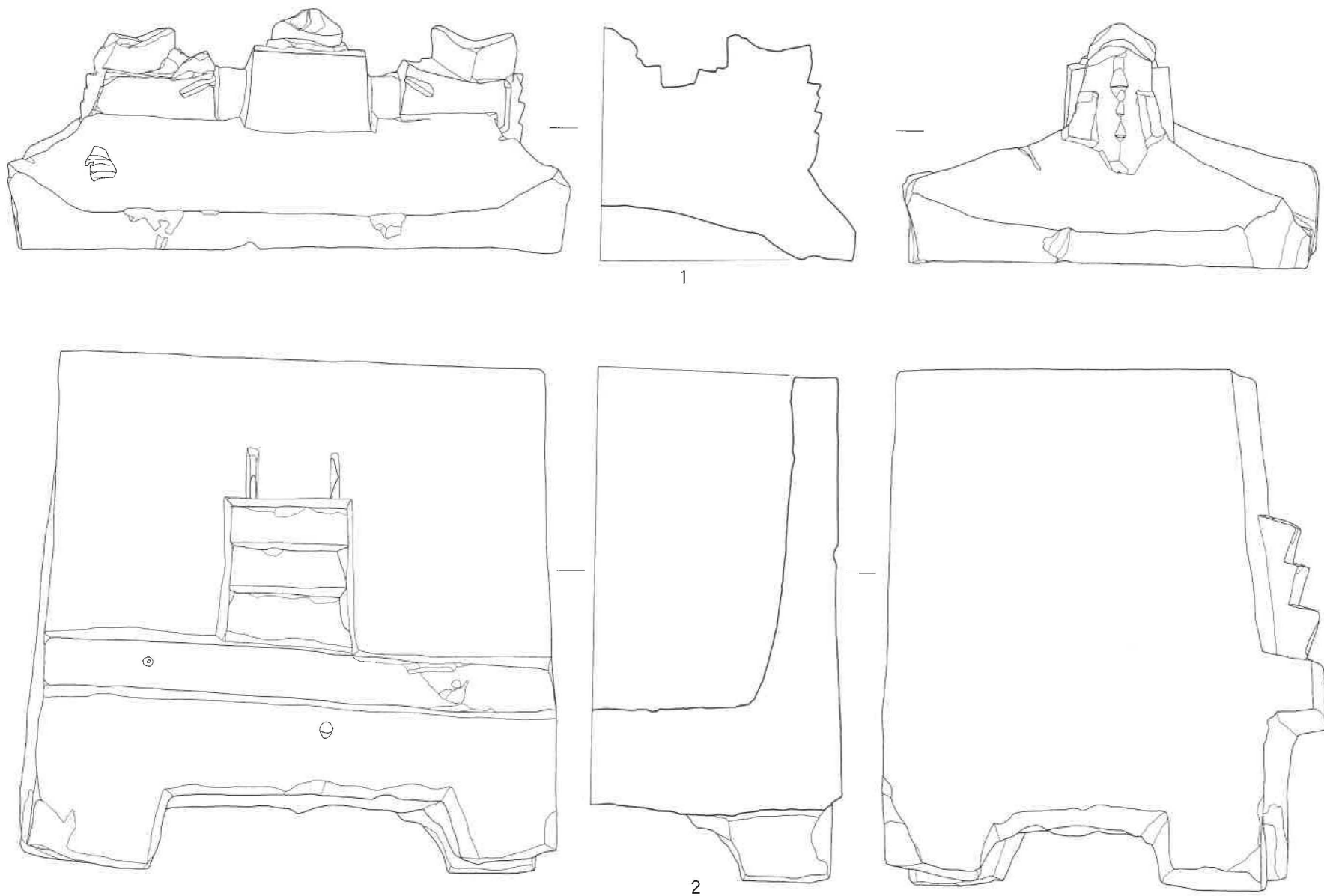


0 10cm

第28图 藏骨器〈8〉4号墓 II類 陶製家形藏骨器

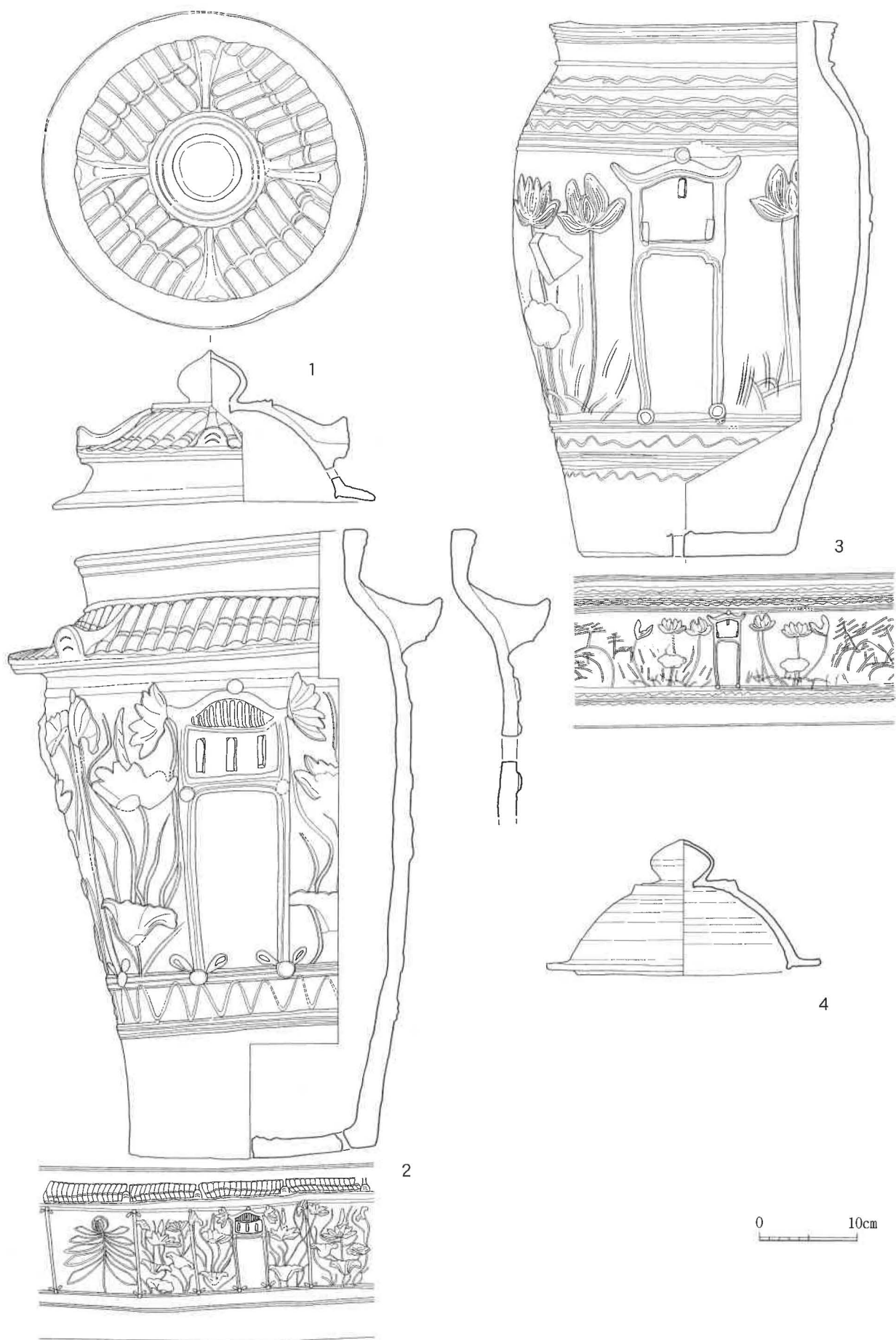


第29図 藏骨器〈9〉17号墓 II類 陶製家形藏骨器

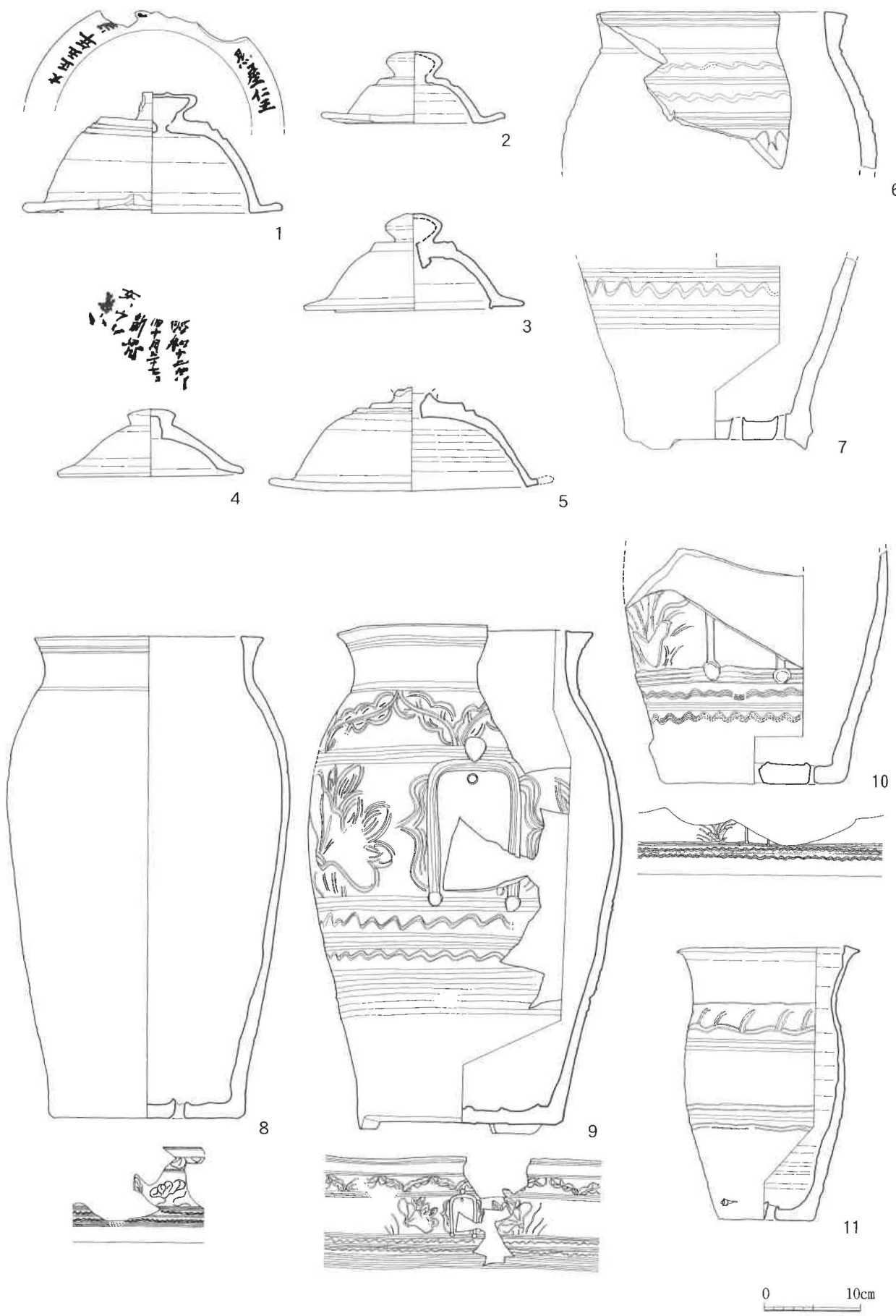


第30图 藏骨器〈10〉8号墓 I類 石製家形藏骨器

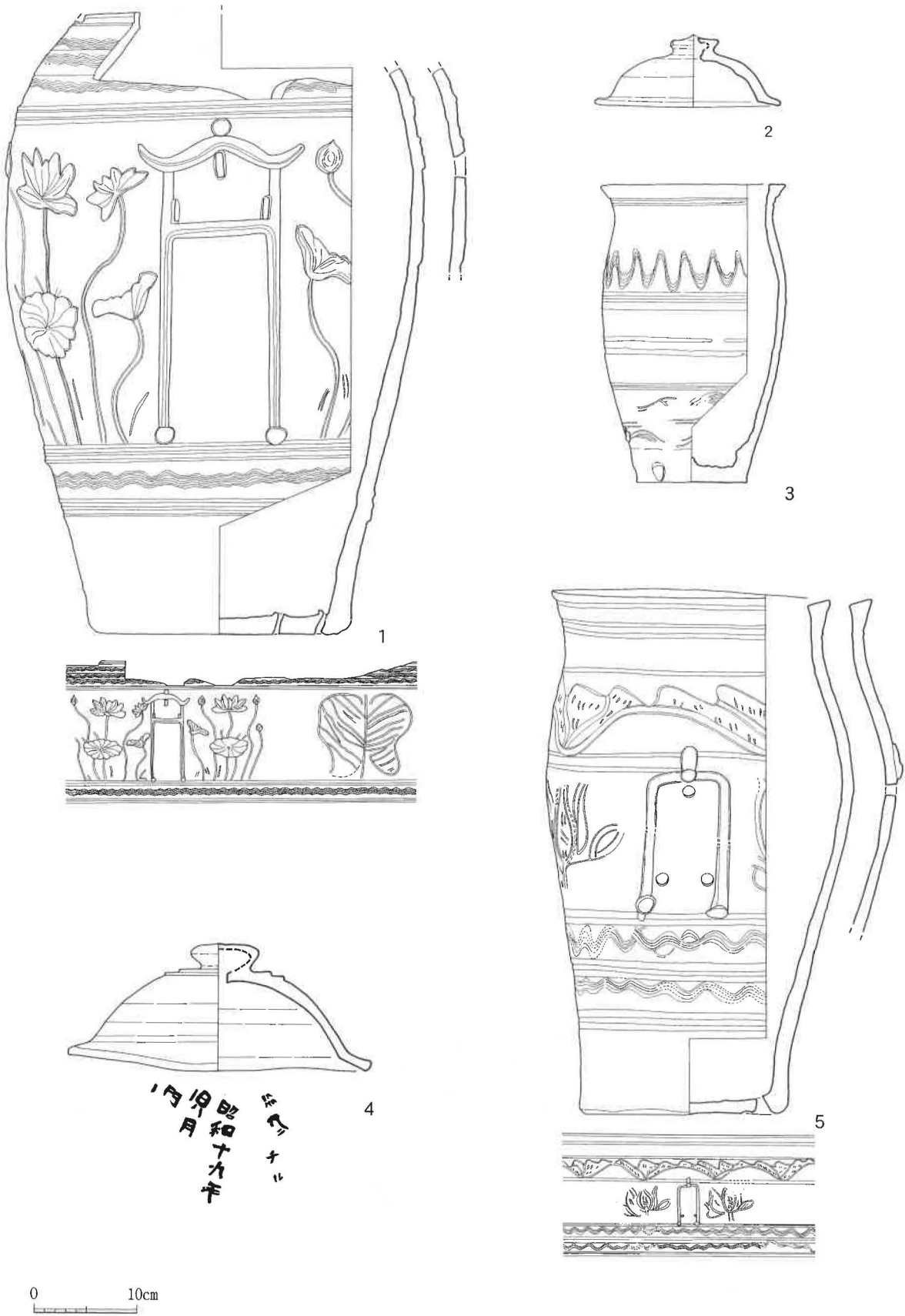
0 10cm



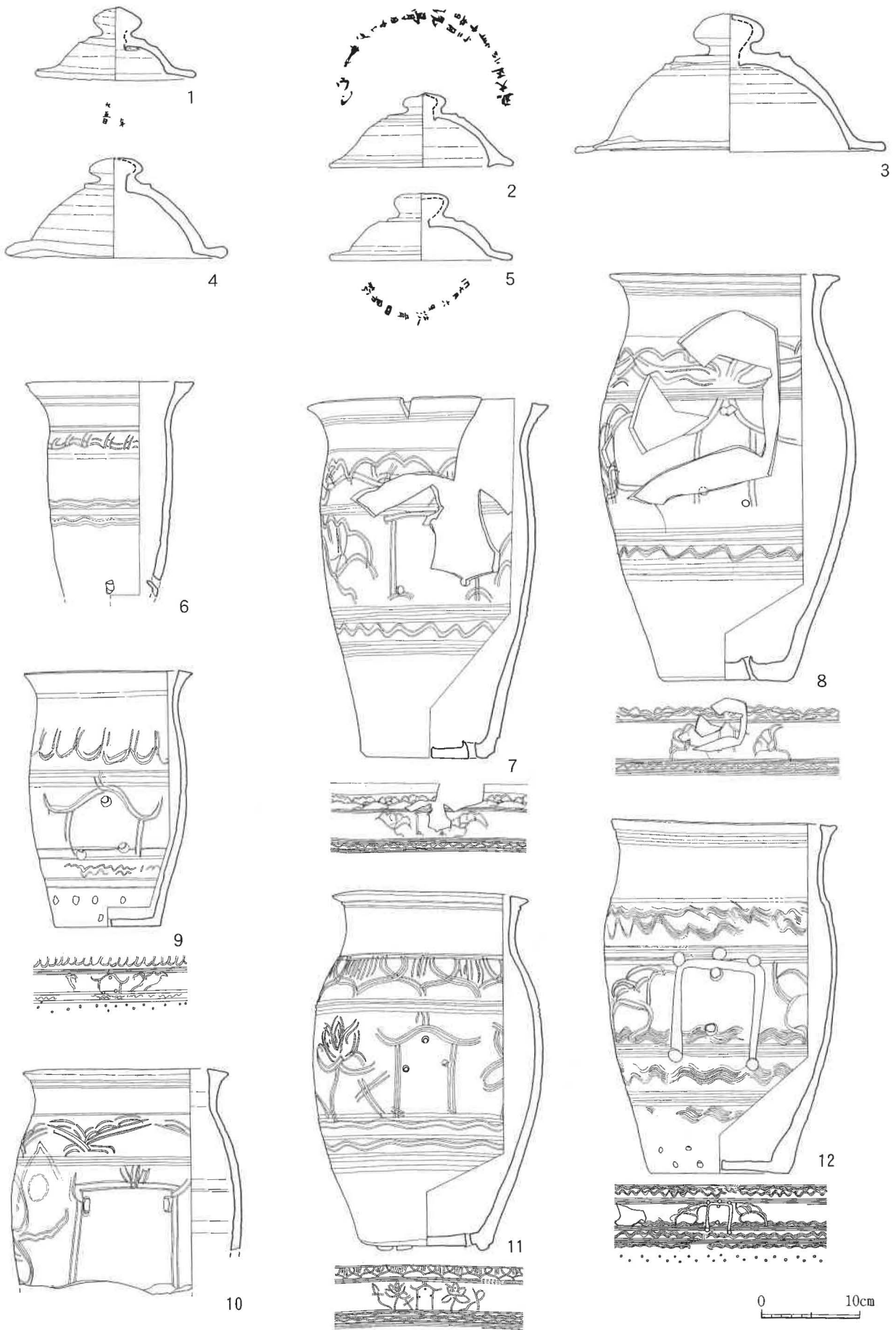
第31图 藏骨器〈11〉 8号墓 Ⅲ類 陶製有頸甕形藏骨器(3·4)、Ⅳ類 軒付甕形藏骨器(1·2)



第32図 蔵骨器 (12) 2号墓 (1)、3号墓 (2~10) Ⅲ類 陶製有頸甕形蔵骨器



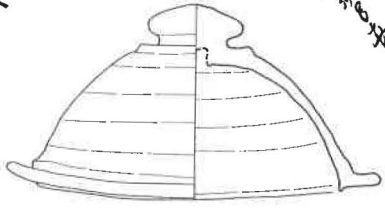
第33図 藏骨器〈13〉11号墓(1)、12号墓(2・3)、15号墓(4・5)Ⅲ類 陶製有頸甕形藏骨器



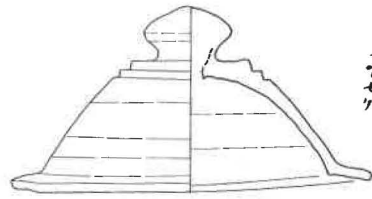
第34図 蔵骨器 (14) 12・13号墓 (7・8)、13号墓 (1~6、9~12) Ⅲ類 陶製有頸甕形蔵骨器

明治七年三月廿七日
 女ウシ死ニセリ

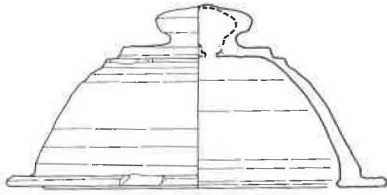
明治七年三月
 旧格哉月
 女ウシ死ニセリ



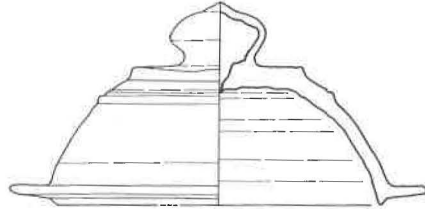
1



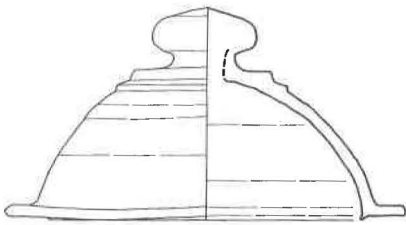
2



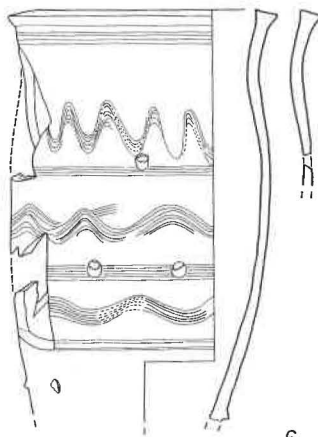
3



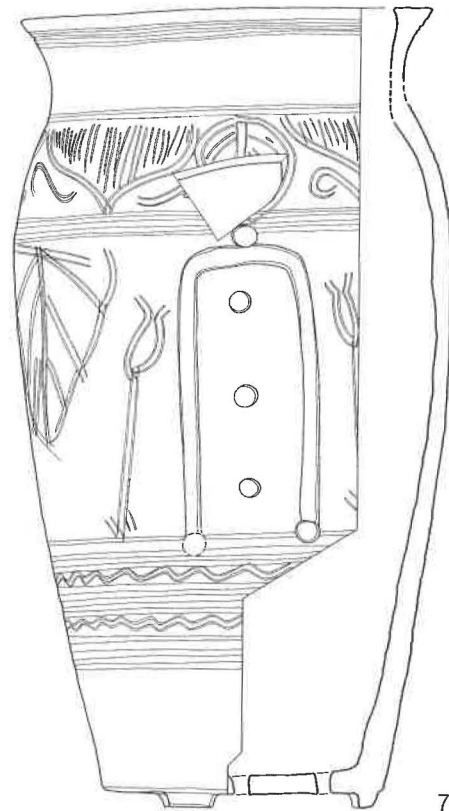
4



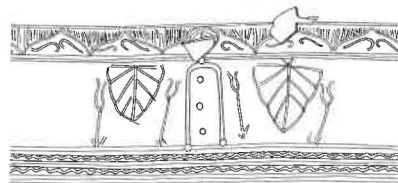
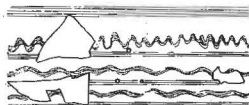
5



6

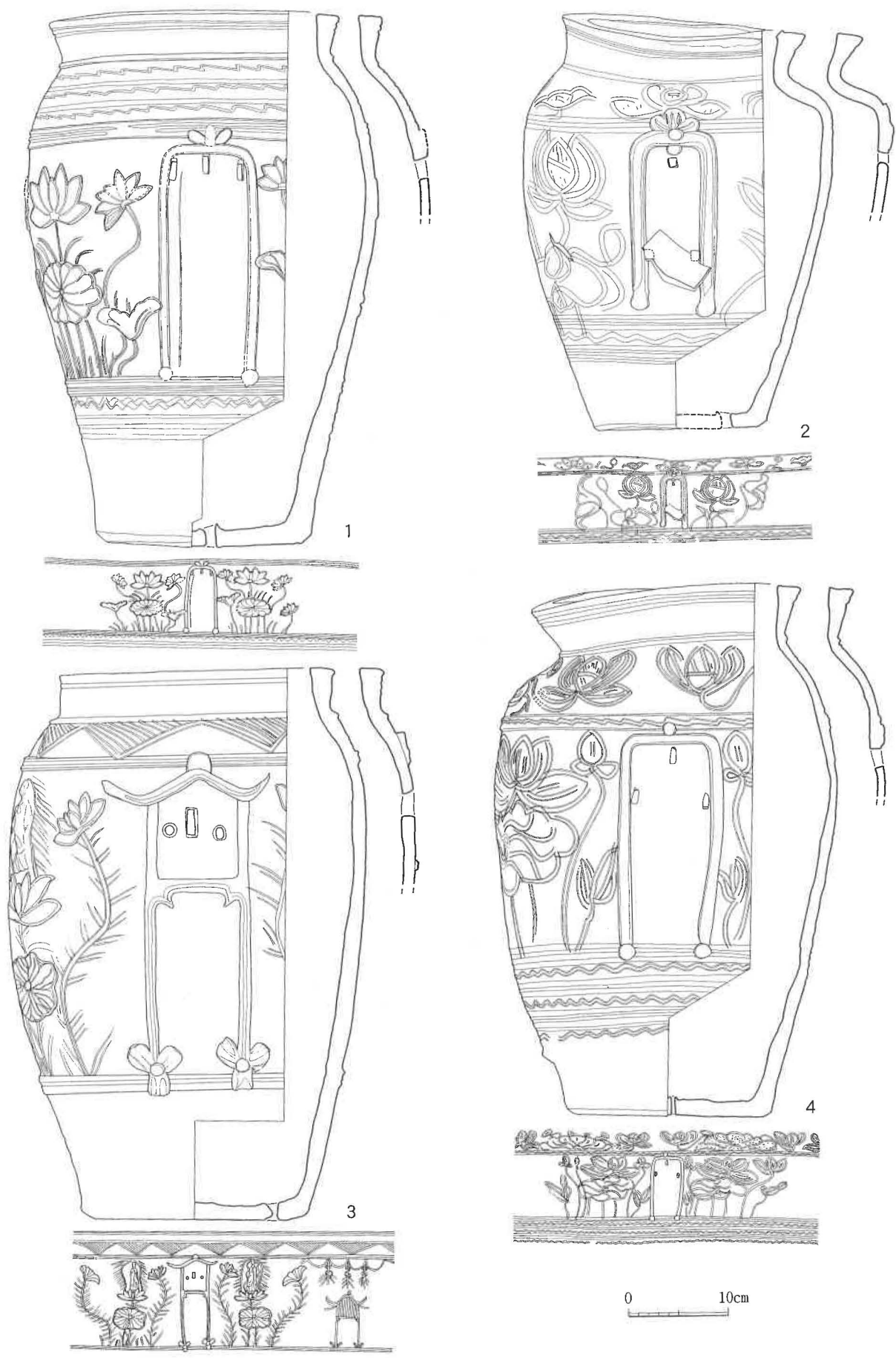


7



0 10cm

第35図 蔵骨器〈15〉17号墓 III類 陶製有頸甕形蔵骨器(1~7)



第36図 藏骨器 (16) 17号墓 III類 陶製有頸甕形藏骨器 (1~4)

第2節 青磁

総数13点得られたが、器形のうかがえるものは第37図の碗3点、第37図の皿の2点で、他の8点は小片の為、器形を判別することはできなかった。以下図示したものについて述べる。

A. 碗

第37図1の口縁部は直口する。内面に沈線文が4本見られる。釉は薄く施され、緑灰色を呈す。貫入は見られない。素地は灰白色で微粒子。出土地点は試掘No.1 VI b層石列層上。

第37図2の口縁部は僅かに外反し、口唇部は角を持つ。内面に櫛描きの文様がみられる。しかし小片の偽文様構成は不明である。釉は透明で薄く施され、貫入は両面ともに細かい。素地は灰白色で微粒子。出土地点は試掘No.1 VI b層最下部。

第37図3の口縁部は直口し、口唇部はやや尖る。釉は透明で薄く施され、貫入は外面に細かく見られ、内面には見られない。素地は淡灰色で微粒子。出土地点は17号墓。

その他、蓮弁文碗と思われる胴部片が6号墓覆土から1点得られた。

B. 皿

第37図4の皿は推定口径は12.8cmで、口縁部は直口し口唇部はやや尖る。釉は透明で薄く施され、貫入は見られない。両面に気泡が観察される。素地は灰白色で微粒子。出土地点は不明。

第37図5の皿は推定口径は9.4cmで、口縁部はやや尖る。釉は透明で薄く施され、内外面とも胴部中位から下を露胎とする。貫入は見られない。素地は灰白色で微粒子。出土地点は試掘No.1 VI b層石列。

第3節 白磁

総数4点得られたが、器形のうかがえるものは第37図の1点で他3点は細片の為、器形を判別することはできなかった。

A. 碗

第37図6の碗は推定口径は17.7cmで腰部は丸味をおび、口縁部はやや外反する。釉は白色で全体的に薄く、緑錆が施されている。貫入は内外面ともに粗く見られる。素地は灰白色で微粒子。年代は15世紀^註と考えられている。出土地点は6号墓左石積覆土。(尾木 綾)

<註>年代については金武正紀氏の御教示を戴いた。

第4節 染付

総数11点得られたが、器形のうかがえるものは第38図の碗4点、他の7点は小片の為、器形を判別することはできなかった。第38図の4点は釉・素地などから福建・広東窯系と考えられる^註。以下図示したものについて述べる。

第38図1の推定口径は14.3cmで、口縁部は僅かに外反する。外面に雲状の文様を有する。釉は明緑灰色で、やや厚く施されている。貫入はみられない。外面に気泡が観察される。素地は灰白色で細粒子。出土地は試掘No 1 VI c 層上部。

第38図2の推定口径は13.4cmで、口縁部は外反する。外面の口縁部付近に2条の圈線がみられる。釉は透明で薄く、内面は見込み際まで施されている。貫入はみられない。素地は灰白色で細粒子。出土地点は17号墓。

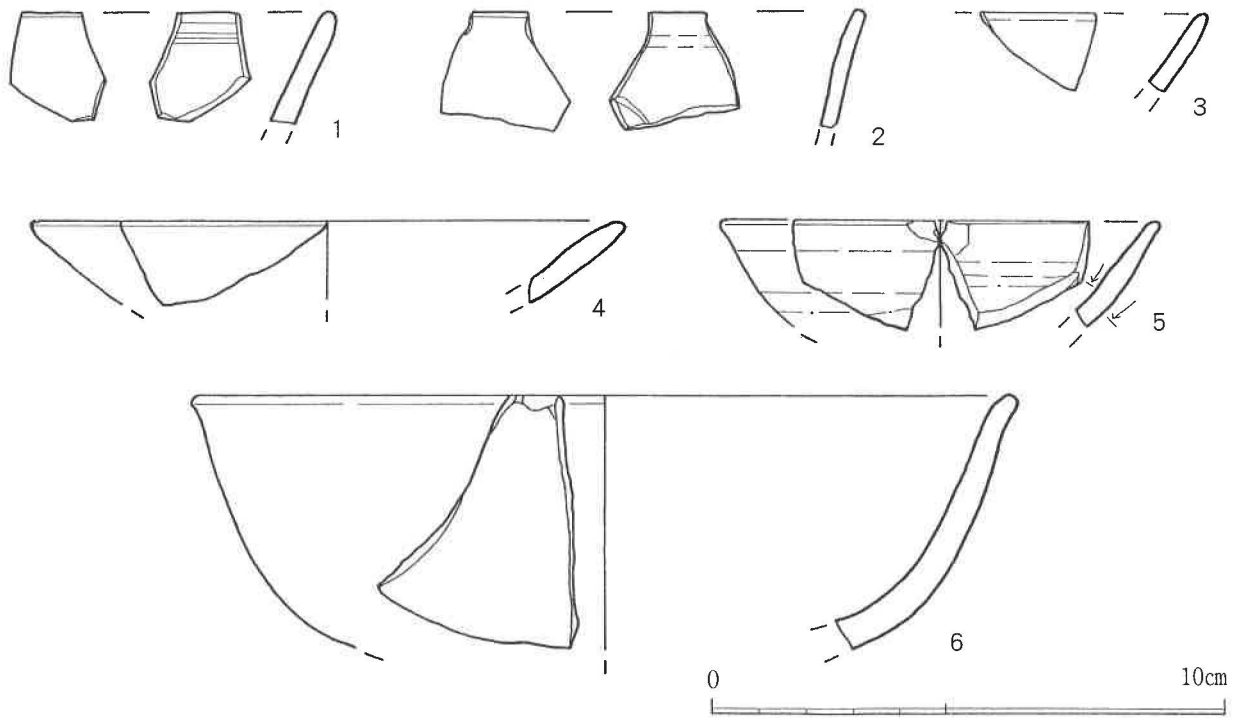
第38図3の推定口径は13.3cmで、器高5.2cm、底径6.8cmである。口縁部は僅かに外反する。外面口縁部に雲状、胴部に花唐草文様を有する。釉は明青灰色で薄く、口唇部に縁錆を施す。内面は胴下部および見込みを露胎とし、見込みは中心部径4.4cmの円形に釉を掛け、蛇の目状になる。外面は胴下部および底部を露胎とする。以上の事からおそらく、重ね焼をする為の手法と思われる。貫入はみられない。素地は灰白色で細粒子。出土地点は9号墓墓口岩盤平坦部覆土。

第38図4の推定底径は3.6cmである。高台脇と腰部に細い圈線がみられ、外にも僅かに文様がみられる。釉は透明で薄く施されている。外面に粗い貫入がみられる。素地は細粒子。出土地は4号墓屋根左側清掃時表採。

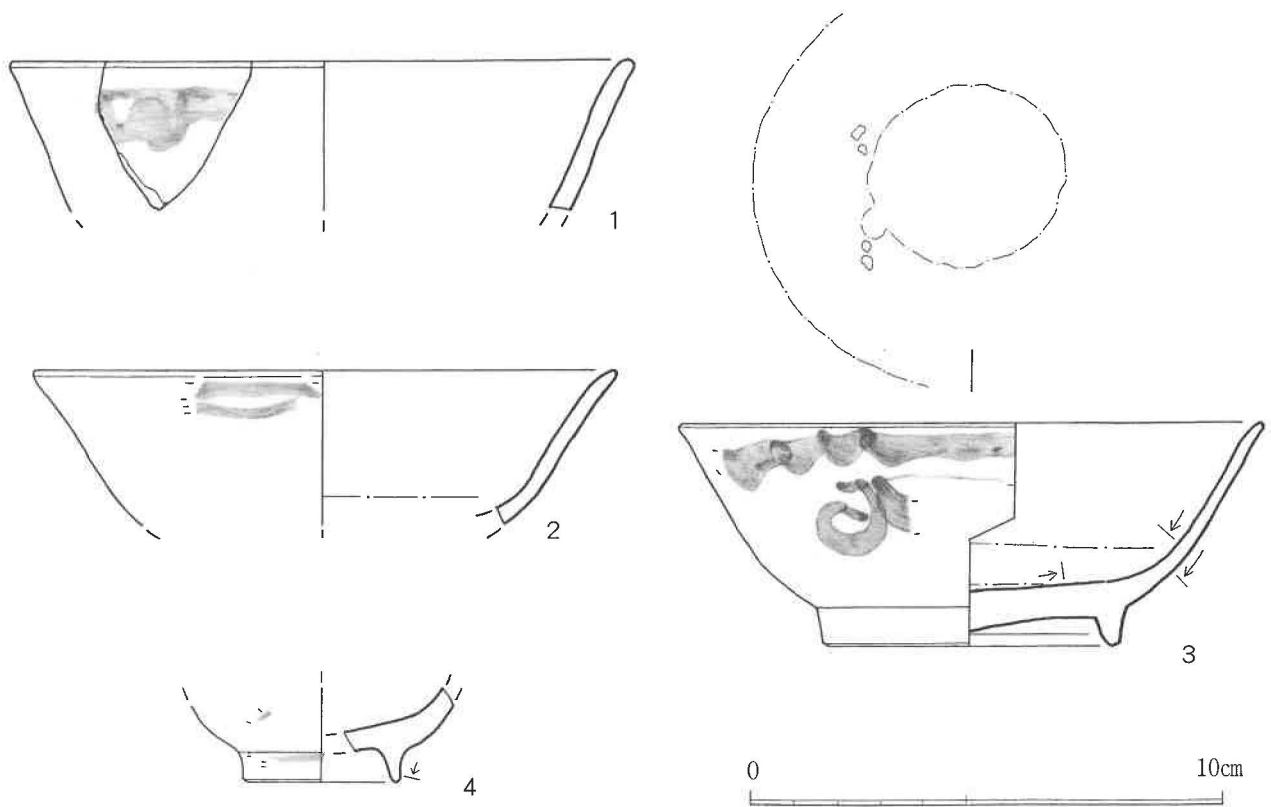
類例として天界寺跡（Ⅰ）—首里杜館地下駐車場入口新設工事に伴う発掘調査—（第29図18～21）、湧田古窯跡（Ⅱ）—県庁舎議会棟県建設に係わる発掘調査—（第27図17，第30図10，17）が挙げられる。

<註>産地については金武正紀氏の御教示をいただいた。

（尾木 綾・安里美紀）



第37図 青磁・白磁



第38図 染付

第5節 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は小片も合わせると61点出土し、器種は碗・小碗・猪口・皿・瓶・大鉢・蓋・急須・火取・酒器・壺の11種類が確認された。得られた遺物は使用されている釉薬で分類を行った。以下に分類概念を記し、図版を設けた資料は第5表bにて個々の観察事項を紹介する。第5表aに出土一覧を示す。

I類 a・・・施釉する素地により灰色に見える透明釉（灰釉と呼ばれる）

b・・・施釉する素地により灰色以外に見える透明釉

II類・・・白化粧後透明釉を施している資料

III類 a・・・鉄釉を施している資料

b・・・黒釉を施している資料

c・・・褐色釉を施している資料

IV類・・・上記以外の釉の使用や残存状況が無釉になる資料

A. 碗（第39図1～5、7～13、20）

碗は15点得られた。口縁部7点、底部8点で、全体の様相が窺える資料は無かった。碗は灰釉を施すものと白化粧後透明釉を施すものに大別され、飴釉を施すものも1点確認された。口縁部形態で見ると、直線的に口縁部が開くもの（第39図1、2、8）や、緩やかな「S」字状を呈し胴部へ移行するもの（第39図7）があり、底部形態で見ると、高台から腰部へ「く」の字状に折れ曲がるもの（第39図10、12）や、高台からなめらかに腰部へ移行するもの（第39図9）等が得られた。

B. 小碗（第39図14～18）

小碗は6点得られ、内1点は完形資料であった（第39図16）。小碗の特徴として、内器面は灰釉か白化粧後透明釉を施し、外器面を鉄釉若しくは黒釉で掛け分けをする資料が6点中3点あった事が挙げられる。

C. 猪口（第39図19）

猪口は完形品が1点のみ得られた。

D. 皿（第39図6）

皿は底部資料が1点得られた。小破片の為、フィガキーや見込みを蛇の目状に釉剥ぎした痕跡は認められない。

E. 大鉢（第39図21）

ワンブーと称される。口縁部と底部付近の資料が1点ずつ得られた。共に内器面を白化粧

後透明釉を施し、外器面を鉄釉で掛け分けしている。

F. 火取（第40図1、2）

火取は口縁部資料が2点得られた。いずれも白化粧後透明釉を施すが、第40図1は呉須による圈線も見られる。

G. 瓶（第40図3～5）

瓶は5点得られ、そのうち器形の判明する資料が2点あった。第40図3は接合によるもので、第40図4は完形資料である。第40図5は花瓶の脚台と思われる。

H. 蓋（第40図6）

蓋は撮みが破損している資料が1点得られた。

I. 急須（第40図7）

急須は、底部資料が1点得られ、同資料からは脚が1つ確認できた。

J. 酒器（第40図8）

カラカラとも呼ばれる。酒器はほぼ完形の資料が1点と、胴部資料が1点の計2点得られた。

K. 壺（第40図9、10）

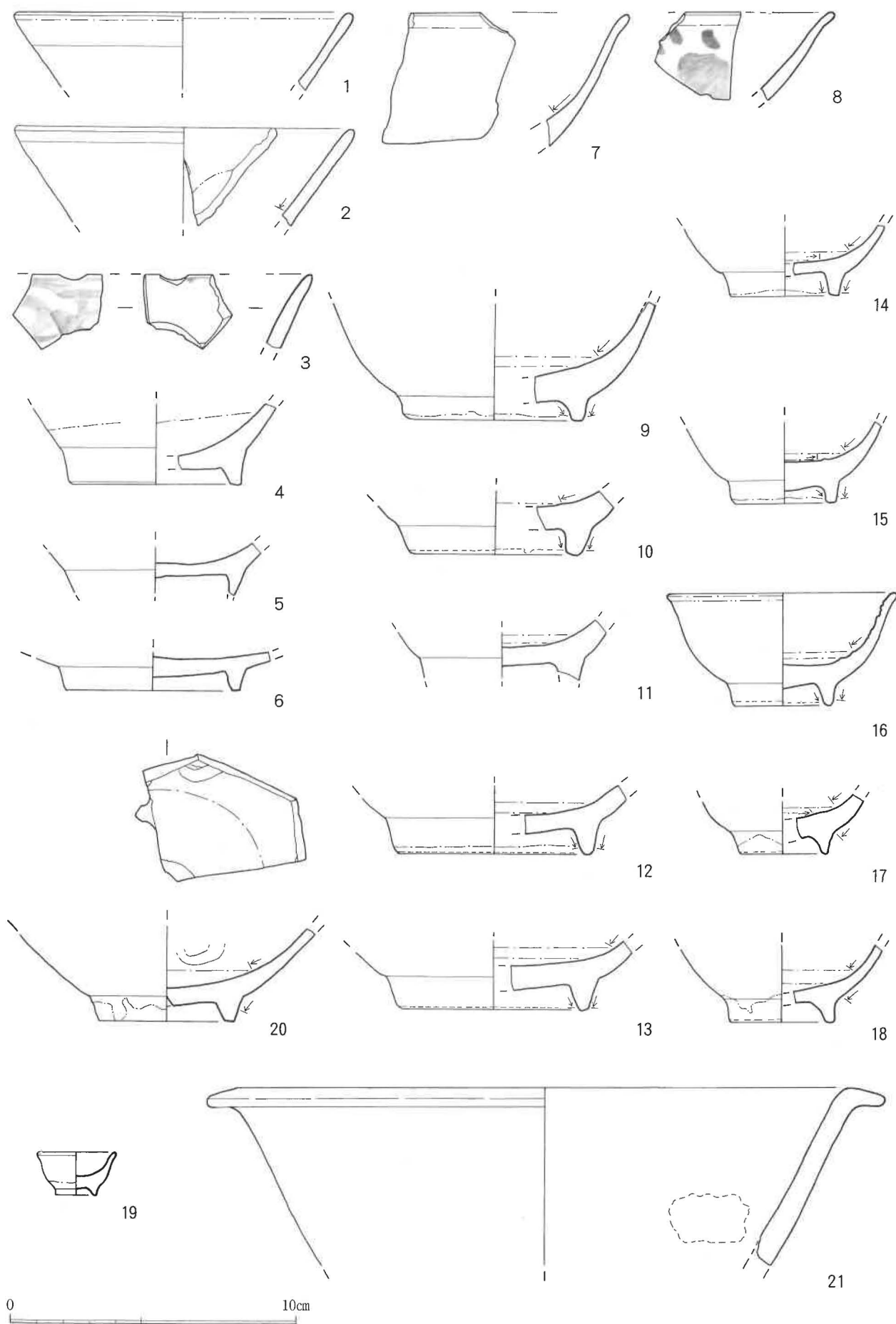
壺は2点得られ、共に黒釉の短掛けが施されている。第40図10はいわゆるアンダガーマの底部資料である。

（松原哲志）

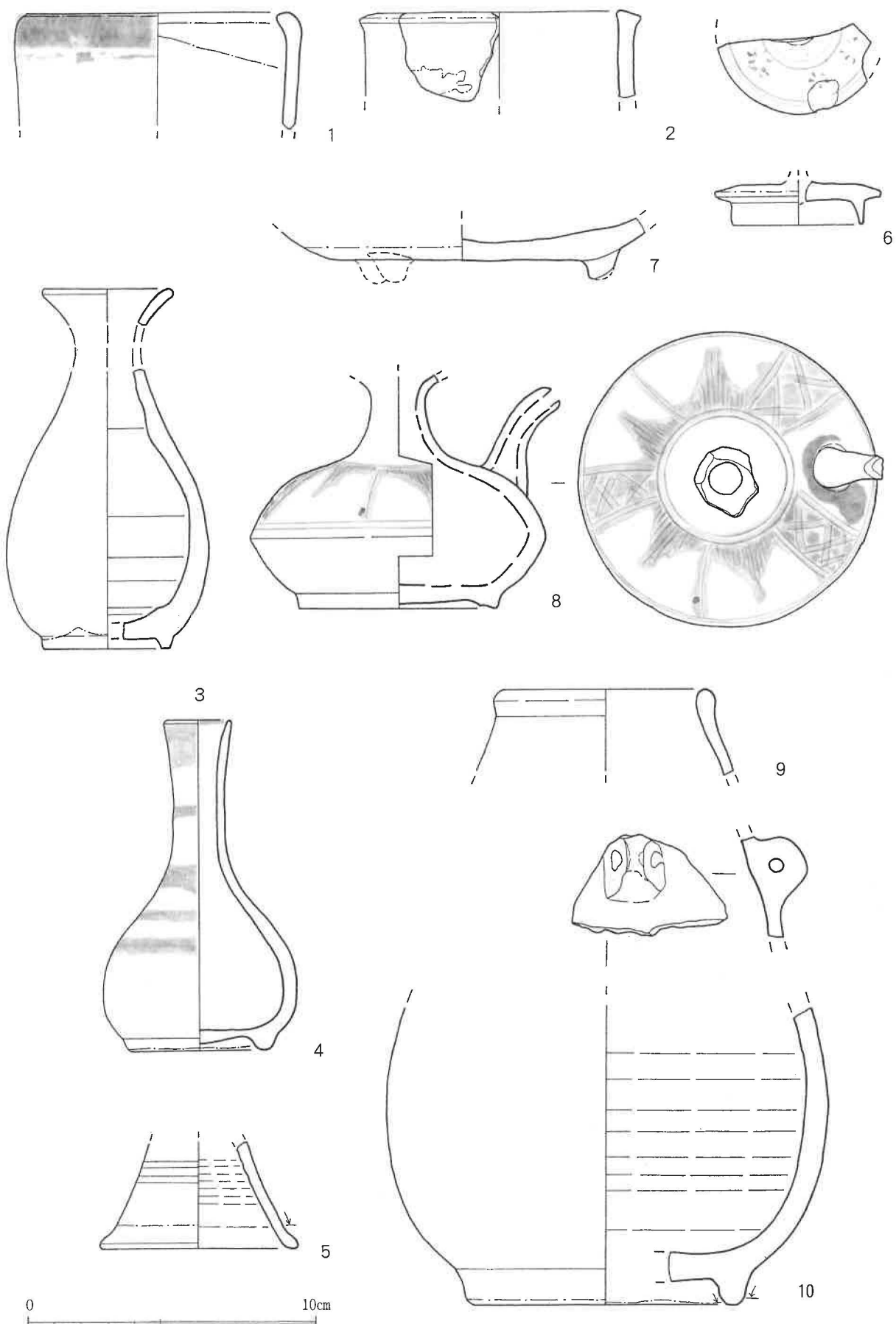
第5表b 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位：cm

図版挿入	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	貫入	粒子	文様	出土地点	
第39図・図版37	1	碗	I a	口縁部	13.0 — —	口唇部は舌状で、口縁部は直線的に開き、やや膨らみを持つ。灰釉の単掛けで、外器面口径下1.3cmの箇所に線彫りが一条施される。	灰白色	有	細	無	17号墓西側丘陵前庭部	
	2		I a	口縁部	13.1 — —	口唇部は舌状で、口縁部は直線的に開く。口唇部下0.9cmの外器面に線彫りが一条施される。灰釉による単掛け。焼成不良のため釉薬がやや黄色味がかかる。	淡灰白色	無	粗	無	13号墓墓底覆土	
	3		I a	口縁部	— — —	口唇部は尖り気味で、やや外反する。外器面には草花文が施され、施文範囲は口唇直下の内器面まで及ぶ。内外器面とも灰釉が施される。	灰白色	無	細	有	不明	
	4		I a	底部	— 6.6	高台脇は段を形成し、胴部へは直線的に開く。畳付けは平坦で、内底は丸味を帯びる。フィガキーにより腰部、見込み部まで灰釉を単掛けする。	灰色	無	細	無	8号墓右袖垣覆土	
	5		IV	底部	— 6.2	高台はやや内側に窄まり、腰部へはやや直線的に開く。内底は平坦。釉は確認できない。	灰色	無	細	無	7号墓東石積エンボ掘下時	
	7		II	口縁部	— — —	口唇部はやや尖り気味で、口縁部は玉縁状で外反する。口縁部から腰部に向かって緩やかなS字を描きながら移行する。内外器面とも白化粧後、透明釉が施される。内面下部に釉剥ぎの痕が確認できる。	淡黄色	有	粗	無	不明	
	8		II、IV	口縁部	— — —	口唇部は丸く、口縁部は外側にやや屈曲する。胴部へは直線的に開く。外器面には呉須と鉦釉を用いて花卉文が施されている。内外器面とも白化粧後、透明釉を施す。	淡黄色	有	粗	有	不明	
	9		II	底部	— 6.8	高台から腰部へは緩やかにカーブし、腰が張る。高台は低く畳付けは平坦である。内底は丸味を帯びるようである。内外器面とも白化粧後、透明釉が施され、畳付け及び見込みは蛇の目状に釉剥ぎを施している。	淡茶色	有	粗	無	17号墓左袖垣外側覆土	
	10		II	底部	— 6.6	高台から腰部へ「く」の字状に移行する。畳付けはやや丸味を帯びる。内外器面とも白化粧後、透明釉が施され、畳付けと見込みは蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。	淡黄色	有	粗	無	17号墓左袖垣外側覆土	
	11		II	底部	— 6.4	高台脇は段を成す。高台下部は破損。内外器面とも白化粧後、透明釉を施し、見込みは蛇の目状に釉剥ぎを施す。	淡黄色	有	粗	無	6号墓右側	
	12		II	底部	— 7.6	高台から腰部へは「く」の字状に折り曲がる。畳付けは丸みを帯び、高台は高くなる。内底は平たい。内外器面とも白化粧後、透明釉が施され、畳付け及び見込みは蛇の目状に釉剥ぎされている。	淡黄灰色	有	粗	無	不明	
	13		II	底部	— 7.4	高台脇は段を形成し、腰部へは開き気味に立ち上がる。畳付けは平たく、高台は高い。内底は平たくなりようである。畳付けと見込みは蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。	淡黄色	有	粗	無	不明	
	第40図・図版38		20	I a	底部	— 5.2	高台から腰部へは「く」の字状に折れ、直線的に開きながら胴部へ移行する。畳付けは平坦で、内底は丸くなる。外器面はフィガキーにより高台中程まで灰釉が施される。内器面は見込み部まで灰釉が施される他、白釉を用いての蛇の目文や、見込み中央部に鉄釉での丸文が見られる。	灰白色	有	細	有	6号墓左石積1段目覆土
14		I b	底部	— 4.2	高台は直線的に立ち上がり、高台脇は段を形成し張りの弱い腰部へと移行する。畳付け、内底は平坦。透明釉の単掛けで、焼成不良の為か器面は黄白色を呈す。畳付けと見込みの蛇の目釉剥ぎ取り部は白色になる。	淡灰白色	無	粗	無	2, 3号墓前庭部斜面礫層集中部		
15		II	底部	— 4.0	高台は直線的に立ち上がり、腰部の張りは弱い。見込みは平坦になる。内底は中央部がやや盛り上がる。白化粧後、透明釉を施されている内外器面は焼成不良の為か、やや黄白色になる。畳付け及び、見込みが蛇の目状に釉剥ぎされている。	淡黄色	有	粗	無	不明		
16		II、III a	口縁部 ~底部	8.8 3.8 4.4	口唇部は丸くなり、口縁部は外反する。口縁部から腰部を経て高台脇へは緩やかな「S」字状になる。畳付けはやや丸く、内底は中央部が盛り上がる。外器面は鉄釉、内器面は白化粧後、透明釉の掛け分け。畳付けと見込みは蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。内器面は焼きの際に出来た気泡が顕著に見られる。	灰色	無	粗	無	不明		
17		I a、III a	底部	— 3.4	高台は逆三角形で高台から腰部へは曲線を描く。内底は丸くなる。外器面はフィガキーにより鉄釉が高台脇まで施されるが、外底は無釉。内器面の灰釉は見込み部で蛇の目状に剥ぎ取られている。	黄白色	無	粗	無	4号墓左斜面覆土		
18		I a、III b	底部	— 4.0	高台から腰部へは曲線を描きながら移行する。畳付けは丸くなる。外器面はフィガキーにより黒釉が高台中程まで施され、内器面は灰釉が施される。外底は無釉で、見込みは蛇の目状に釉が剥ぎ取られている。	灰色	無	粗	無	12号墓墓口前覆土		
19		猪口	I b	口縁部 ~底部	3.0 1.6 1.7	完形資料。口唇部は尖り、口縁部は外反する。腰は張り、高台へなめらかに移行する。畳付けはやや尖る。透明釉の単掛けで、外面は腰部以下釉を剥ぎ取っている。外底は無釉である。	灰白色	無	細	無	17号墓左袖垣覆土	
6	皿	IV	底部	— 6.8	高台から直角に近い形を呈しながら腰部へ移行する。畳付けは平坦で、内底は中央部が肥厚する。無釉である。	灰色	無	粗	無	6号墓墓庭表探		
21	大鉢	II、III a	口縁部	26.0 — —	口縁部が造「L」字状に屈曲し、胴部はストレートな形になる。外器面は、口唇内器面側から鉄釉を施し、内器面は白化粧後、透明釉を施す。内器面には凝固した砂が付着している。	黄白色	有	粗	無	6号墓墓庭表探		
第40図・図版38	1	火取	II	口縁部	10.0 — —	口唇部は丸みを帯び、口縁部は内側に湾曲する。胴部へはやや内側に傾きながら直線を描き移行する。外器面は口唇部下から呉須による圓線を一条施し、圓線直下には線彫りを一条施す。フィガキーにより透明釉を施すが、内器面は口縁付近のみに止まる。	淡黄褐色	有	細	有	15号墓東側斜面客土	
	2		II	口縁部	10.6 — —	口唇部は平坦で、口縁部はやや外側に尖る。胴部へはやや外側に反りながら移行する。内外器面とも白化粧を施すが、外器面のみ白化粧後透明釉を施す。	淡黄褐色	有	粗	無	17号墓左袖垣外側覆土	
	3		III b	口縁部 ~底部	5.0 — 4.8	接合により全体の様相が窺える資料。口唇部は丸く、口縁部は強く外反し頭部でくびれる。胴部で張りをもち、高台へは「く」の字状に折れ曲がる。畳付けは平坦で、内底は丸くなる。フィガキーによる黒釉単掛けである。畳付けと外底及び、内器面は一部底部付近まで施釉される。	茶褐色	無	細	無	9号墓 9号墓左石列 9号墓墓前斜面部表土	
	4		II	口縁部 ~底部	2.6 5.6 12.8	完形資料。口唇部はやや尖り、口縁部は弱く外反し長頸である。胴部は張り、高台へなめらかに移行する。畳付けは平坦になる。呉須による圓線が五条見られ、口縁部に施されるものは口縁内面にまで及ぶ。白化粧後、透明釉を施し、畳付け部は釉剥ぎが認められる。	淡茶色	有	粗	有	17号墓左袖垣前墓底覆土最下層	
	5		III c	底部	— 7.6	花瓶の脚台資料。末広がりに畳付けへ移行、畳付けは部はやや肥厚する。内器面はロク口痕が明瞭に残る。外器面は褐色の釉が施され、線彫りが二条認められる。畳付け、脚台内底は無釉。	黄白色	無	粗	無	不明	
	6		蓋	I a	口縁部 ~底部	5.2 — —	撮みが欠損し、頸から脚までは直角に近い形を呈す。二条一組の線彫りを二組施し、線彫り間を花卉文で充填する。外器面は頸まで灰釉を施す。	灰白色	有	細	有	17号墓
	7		急須	II	底部	— 12.0	底部から胴部へと立ち上がる境に、円錐状であったと思われる先端が破損した突起が一つ見られる。内外器面とも白化粧を施し、外器面は突起部まで透明釉が施される。	黄白色	有	粗	無	13号墓右側斜面覆土
	8		酒器	I b、IV	胴部 ~底部	— 7.6	口縁部付近、注口先端欠損。胴部中程に稜を持ち、箕状になる。二条一組の線彫りを胴部付近と胴部の稜近くに同心円状に施す。線彫り間は頸部を中心として放射状に線彫り、格子文三組が呉須と鉦釉を用いて充填され、透明釉で覆う。外底は露胎を呈す。	灰白色	有	細	有	17号墓左袖垣外側岩盤出土
	9		壺	III b	口縁部 +把手	8.4 — —	口唇部は丸く、口縁部は玉状になる。胴部へはストレートに開きながら移行し、縦耳は一箇のみ確認された内外器面とも黒釉を施す。	灰色	無	粗	無	12・13号墓前トレンチ旧表土
	10			III b	底部	— 10.4	丸味がかかる畳付けからなめらかに高台へ胴部へと移行する。内底は平坦で、内器面にはロク口痕が残る。内外器面とも黒釉の単掛けで、畳付けは釉剥ぎが行われている。	灰色	無	粗	無	1号墓屋根左側石積覆土



第39図 沖縄産陶器〈1〉



第40図 沖縄産陶器〈2〉

第6節 陶質土器

陶質土器は15点出土し、2器種得られた。急須が1点、火炉が4点で、火炉は接合作業により器形が判明した資料が1点あった。急須は注ぎ口の破片が得られた。他の資料は細片であるため、器種を特定するに至らなかった。以下、各資料の特徴を記述する。

A. 急須

注ぎ口の根元資料で先端部は欠損し、約2cm程残存する。胴下部は屈曲し、天界寺跡の急須Ⅱ類に属するものと思われる。注口は、胴部に穴を設けた後貼り付けている。注口のサイズは、先端部で長径1.5cm、短径1.1cm、根元で長径2.1cm、短径1.8cmになり、器厚は0.4～1cmになる。淡燈色を呈し、焼成は良い。胎土は精選され、雲母片や石灰質砂粒、微細な赤色粒を含む。外面はナデ、内面は回転擦痕が見られる。17号墓庭覆土（ユンボ掘下土）より出土（第41図1）。

B. 火炉

第41図2は、火炉の把手と思われる。略台形状の把手が胴部器面に対して横位に貼り付けられ、中央に直径約0.9cmの孔を穿っている。器厚は0.6cm～1cmで、器色は淡燈褐色を呈し、焼成は良好で堅い。胎土は粗く、赤色粒は0.1cm以上の物も見られ、他に雲母片を含む。外面はナデ及び回転擦痕、内面は回転擦痕が見られる。3号墓左側斜面より表採。

3は火炉の底部から口縁部にかけての資料で、口径16.2cm、外底径10cm、器高9cm、高台0.3cmになる。底部は緩やかなカーブを描きながら立ち上がり、胴上部で最大になり口縁部へ向けて内弯する。器壁は底部から口縁直下にかけて0.4～0.8cmと徐々に厚くなり、口縁部では1cmとやや肥厚する。器色は燈褐色を呈し、焼成は良好。胎土は粗く、混入される赤色粒も0.1cmを越えるものが多く、雲母片も確認される。内外面とも回転擦痕が見られる。3号墓左側斜面出土。2の把手と器色や胎土が酷似し、出土地点も同じであることから同一個体の可能性がある。

4・5は火炉の底部資料である。4は、外底径は10cmを計り、やや直線的に立ち上がる。器厚は0.5cm、高台の高さは0.3cm、である。器色は明燈色で、焼成は良い。胎土は粗く、雲母片や石灰質砂粒、赤色粒を含む。内外面に回転擦痕が見られる。17号墓庭覆土（ユンボ掘下土）出土。

5の外底径は10cm、高台の高さ0.2cm、器厚0.5～0.7cmを計り、緩やかな弧を描きながら立ち上がる。器色は淡燈褐色を呈し、焼成は良い。胎土は粗目で、雲母片や石灰質砂粒、赤色粒を含む。内外面に回転擦痕が残る。3号墓庭覆土出土。4・5の資料は外底径、高台の高さ、器厚等から、3と同様な器形になるものと思われる。

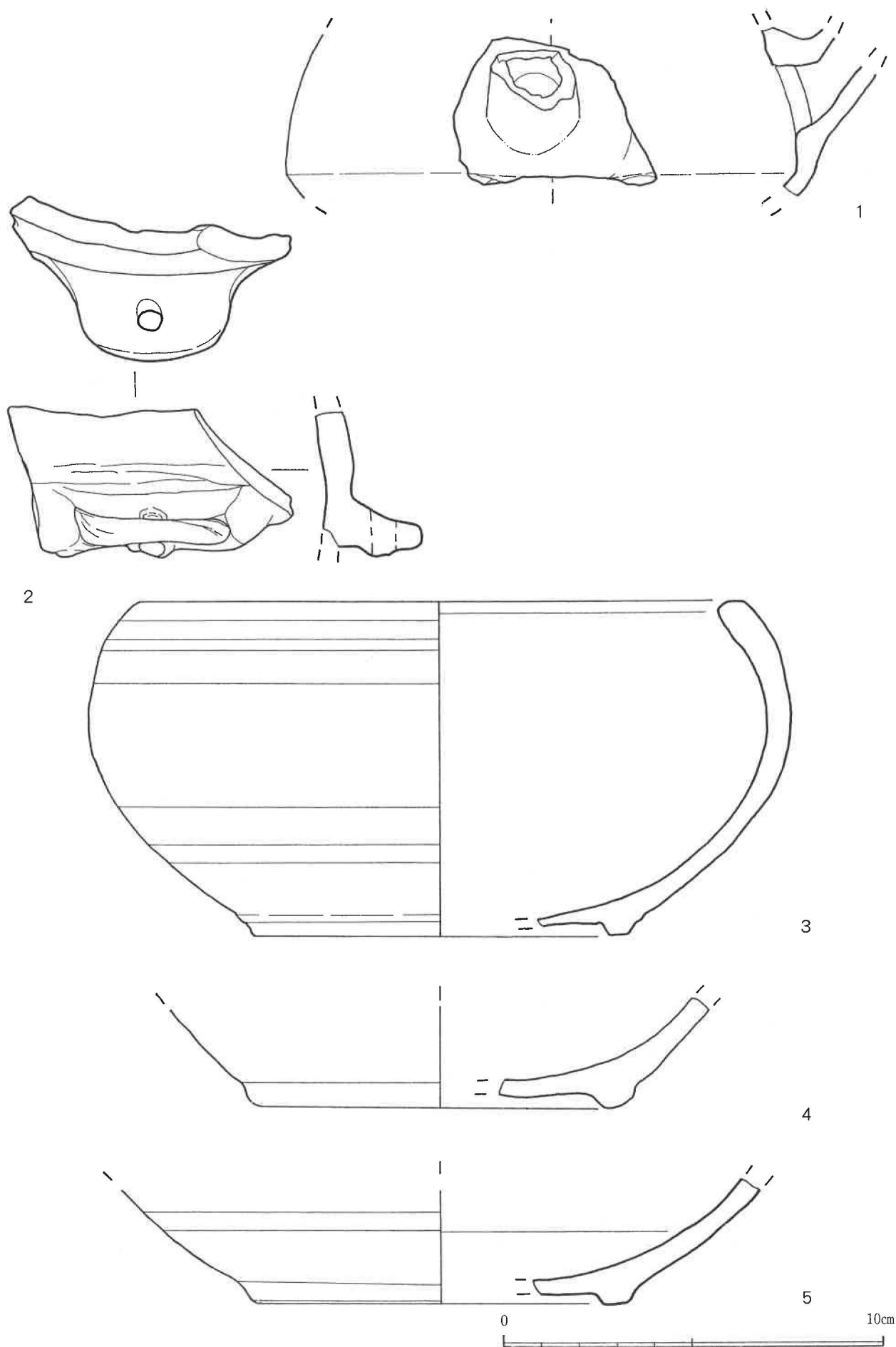
第6表 陶質土器出土一覧

出土地点		器種			
		急須	火炉	不明	合計
2号墓	前庭部覆土			5	5
3号墓	左側斜面		2	2	4
	墓庭覆土		1		1
6号墓	右石積			1	1
12・13号墓トレンチ	客土壁面清掃			1	1
17号墓	墓庭覆土	1	1		2
不明				1	1
合計		1	4	10	15

（松原哲志）

（註）

註1 島袋 洋・編「天界寺跡（I）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001.3



第41図 陶質土器

第7節 本土産磁器

本土産磁器は総数78点が得られ、その内18点を第42図に示した。近代以降の型紙摺り、吹き付け文、ゴム印、鉄釉、銅版転写、クロム青磁などが出土しており、器種は碗・小碗・皿・急須・花瓶・杯などがある。型紙摺りを主体とする印版手は主に1号墓から、その他の磁器は主に6号墓から出土した。以下、遺物を概略し、詳細は観察表に示す。

1. 印版手

<型紙摺り>碗、皿があり、文様は一つの単位を三回繰り返して摺る。

A. 碗：碗は外反口縁と直口口縁に分けられる。

(外反口縁) ①外面に菱形の窓に八弁花文、内唇に文様帯の組み合わせをもつもの(第42図5)、②外面に点描による草花文、内唇に文様帯の組み合わせをもつもの(第42図4)などがある。

(直口口縁) 外面に菱形の窓に点描による草花文、内唇に文様帯の組み合わせをもつ(第42図1)。

B. 皿：外反口縁である。点描により口唇部内面に文様帯を施す(第42図4)。

<吹き付け文>第42図8は口径8.6cmの小碗である。外面に葡萄を描き、茎の部分に絵具を吹き付ける。

<銅版転写>第42図7は口径11.4cmの皿である。直口口縁で、内面に正方形・円・葉文・花文を施す。

<ゴム印>第42図9は口径8cmの小碗である。直口口縁で、外面に菱形と矢をくみあわせた文様帯を施す。

<鉄釉>第42図13は口径6.4cmの口折れ杯である。口縁部の三箇所鉄釉で文様を施す。

<クロム青磁>第42図12口径5.2cmの杯である。内外面に乳緑色の釉を施す。

2. その他の磁器

急須：すべて丸型で、圏線と正方形を組み合わせた文様を描くもの(第42図16)、蜻蛉と渦巻きを描くもの(第42図17)、桃(?)の木と果実を描くもの(第42図15)がある。

花瓶：第42図14は口径6.6cmの花瓶である。外面に紫色の、内面には乳白色の釉を施す。

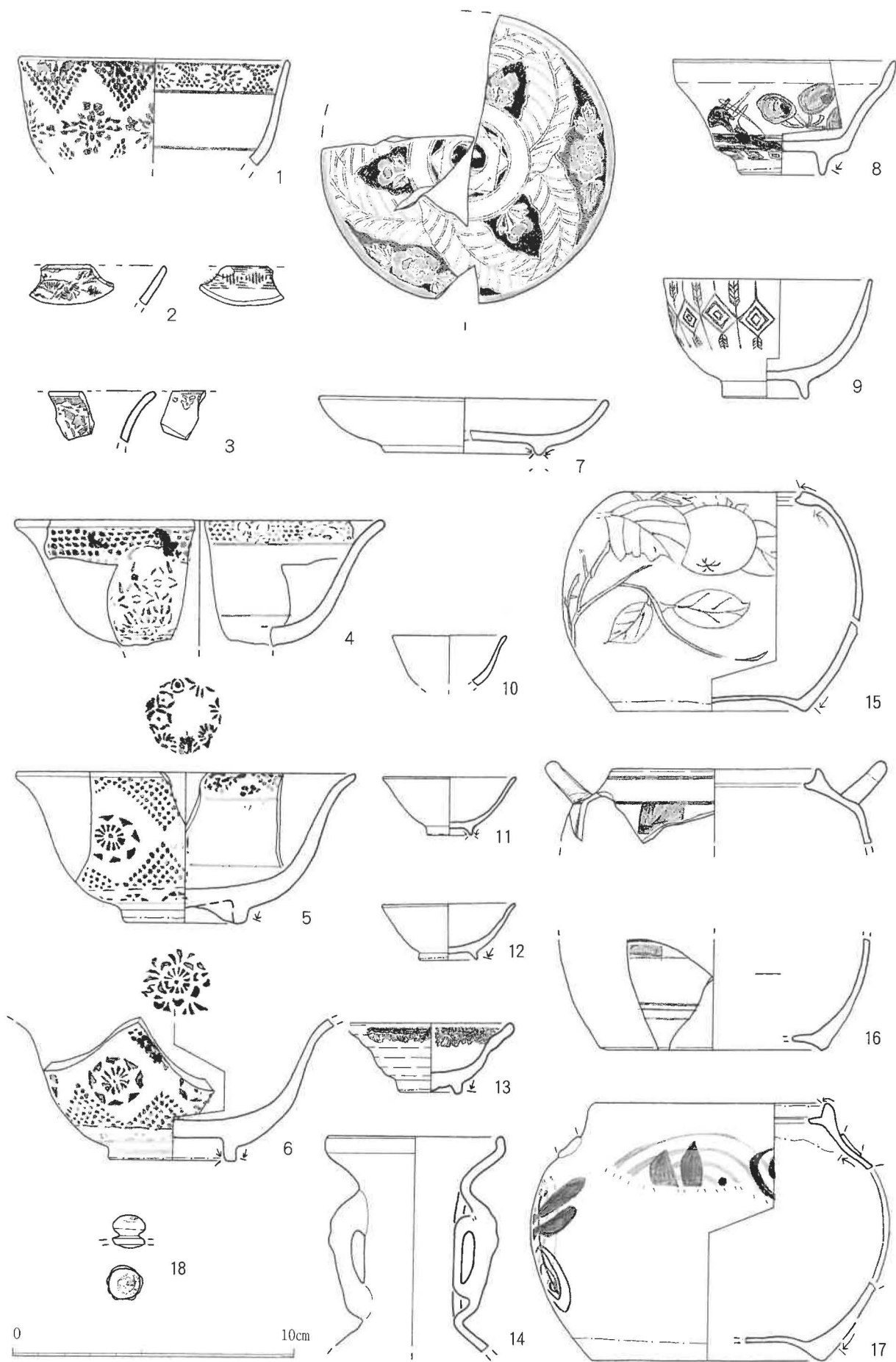
杯：いずれも外反口縁で、乳白色の釉を施す。口径が4.4cmのもの(第42図10)、5.2cmのもの(第42図11)がある。

(砂川正幸)

第7表 本土産磁器観察一覧

単位：cm

挿図 図版	番	種類	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地点
第42 図・ 図版 39	5	型紙摺り	碗	口～底	13.2	5.8	4.8	形態：外反口縁。文様：外面－菱形の窓の中に八弁花文。内面－内唇に点描を逆三角形に配する文様帯、内底に圏線と複花文。直径3～5mmの目痕。施釉：畳付け無釉。呉須：濃紺色。	1号墓屋根左側石積み
	6		碗	口～底	—	—	5	形態：外反口縁。文様：外面－菱形の窓の中に八弁花文。内面－内唇に点描による文様帯、見込みに圏線と五弁花文（菊花文）。直径3～5mmの目痕。施釉：畳付け無釉。呉須：淡青色。	1号墓庭左土砂除去時
	4		碗	口～底	14.4	—	—	形態：外反口縁。文様：外面－五弁花窓の中に花文、地文に松竹文。内面－内唇に松竹梅の文様帯と2条の圏線。呉須：濃紺色。	1号墓庭土砂除去時
	1		碗	口縁部	10.4	—	—	形態：直口口縁。文様：外面－菱形の窓の中に十字草花文。内面－内唇に略六角形の花文を施す文様帯と2条の圏線。呉須：濃青色。	1号墓屋根左側石積み内
	3		碗	口縁部	—	—	—	形態：外反口縁。文様：外面－点描による葉文。内面－内唇に点描による文様帯。施釉：畳付け無釉。呉須：淡青色。	1号墓庭入り口階段
	2		皿	口縁部	—	—	—	形態：わずかに外反。文様：外面－点描により施文。内面－内唇に菱形文の文様帯。呉須：淡青色。	1号墓庭左土砂除去時
	8		吹きつけ文	小碗	口～底	8.6	4.5	3.2	形態：口折れ口縁。文様：外面－一部に葡萄(?)の絵。高台脇に雷文のレリーフ。内面－無文。施釉：畳付けと高台内無釉。色：淡青色（葡萄）、黄茶褐色（雷文）。
	9	ゴム印	小碗	口～底	8	4.7	3.2	形態：直口口縁。文様：外面－口縁部から腰部にかけて、菱形の回線と上下逆の矢を交互に配する文様帯。内面－無文。施釉：畳付け無釉。色：淡青色。	3号墓前覆土
	13	鉄釉	杯	口～底	6.4	2.75	2.5	形態：口折れ杯。文様：外面の口縁部から茶巾摺にかけて、3箇所鉄釉を施す。施釉：畳付け無釉。成形：外面と腰部に轆轤目。高台内は渦上の巴形に成形。	1号墓墓庭覆土
	7	銅版転写	皿	口～底	11.4	2.2	6	形態：直口口縁。文様：外面－無文。内面－見込み中心部に八角形と円を組み合わせて描き、その周縁に葉文と花文を配する。	6号墓右前石積み覆土
	12	クロム青磁	杯	口～底	5.2	2.2	2.3	形態：やや外反。文様：茶巾摺に紅葉(?)を釉色：乳緑色、高台内は乳白色。施釉：クロム青磁。畳付け無釉。	1号墓庭縁（正面崖縁）
	15	その他	急須	口～底	8.2	—	—	形態：受け口状の直口口縁、短頸。文様：口縁部と底部付近に淡紺色の圏線。胴部は圏線と正方形の模様を格子状に配する。施釉：口縁部内面と高台裏は無釉。	1号墓庭土砂除去時
	16		急須	口～底	9.1	10.1	9	形態：底部から胴部にかけて張りながら立ち上がる。文様：濃紺色で蜻蛉と渦巻きを描く。施釉：底部立ち上がり付近から、高台裏にかけて無釉。	6号墓右石積み
	17		急須	口～底	7	8.6	7.4	形態：底部から胴部にかけて張りながら立ちあがる。文様：口縁部から底部にかけて桃の木(?)を描く。釉色：乳白色。施釉：底面から底部立ち上がりに向け無釉。	6号墓左前石積み覆土
	14		花瓶	口縁部	6.6	—	—	形態：受け口状の直口口縁。断面が楕円形の把手（耳）を付ける。文様：無文。釉色：外面－紫色。内面－乳白色。施釉：全面施釉。	6号墓右斜面表採
	10		杯	口縁部	4.4	—	—	形態：外反口縁。文様：無文。釉色：乳白色。施釉：全面施釉。	1号墓屋根左側石積み内
	11		杯	口～底	5.2	2.3	1.7	形態：やや外反。文様：無文。釉色：乳白色。施釉：畳付け無釉。	1号墓庭左土砂除去時
	18		摘み	—	—	—	—	形態：楕円状。蓋の内面はやや張り出す。文様：頂部に朱色の花文。施釉：内・外面ともに乳白色の釉を施す。	11号墓墓室右側タナ厨子壺内



第42図 本土産磁器

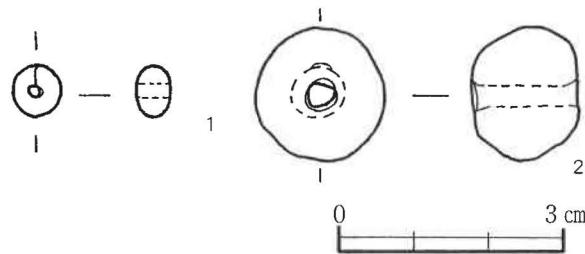
第8節 玉類

玉類は第43図（図版46）に示した2点が得られている。共に素材はガラス製で、形態・サイズの点からみると一般に丸玉あるいは小玉と称されるものの範疇に含まれる。

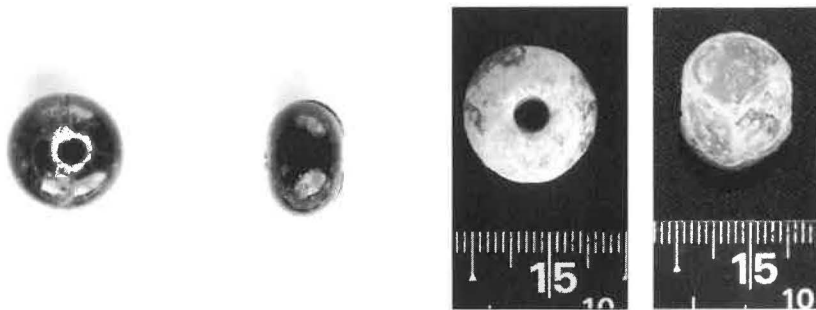
同図1は直径6.8mmに対して高さは4.5mmで側面観は楕円形を呈する。全体が丁寧に磨かれ、上・下面は平坦に仕上げられている。表面は光沢のある黒色で不透明だが、玉内部の細かな傷が光を乱反射するため、散りばめられた金属粉が透けているかの様に見える。孔径1.5mmで、孔を中心として縦に走る亀裂は全体をきれいに二分割していることから偶発的なものとは考えにくく、また螺旋状の巻き上げ痕も明瞭には認められないことから鑄型による成形の名残とも思われる。重量0.3g。1号墓墓室内厨子甕No.6より出土している。

同図2は直径17.7mmで、上・下面は平坦に加工され、高さ14.5mmと数値的には僅かに扁平である。しかし楕円を意図したものではなく、全体として上面観・側面観共に円形の輪郭を持つ。孔径は4mmで、孔内奥に比して開口部が広く、両端から穿孔したものと考えられる。表面は淡い緑色で、本来透明感のある光沢を持っていたと考えられるが、全体を覆う微細な亀裂と磨耗で白く濁っている。重量6.33g。3号墓墓庭覆土より出土している。

（菊池恒三）



第43図 玉類



図版46 玉類

第9節 円盤状製品

本製品は、日常生活で使用した器等を転用した二次製品である。用途に関しては、遊戯具としての見解があるもので、器の破片の縁を打ち欠いて円形に仕上げるものが一般的である。なかには、楕円形・方形・多角形も含み、若干のバラエティーがある。

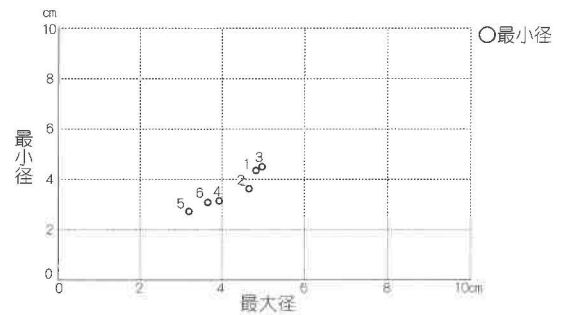
古墓群では、総数6点出土し、第45図（図版41）に示した。大きさは、3～5cm未満のものがほとんどで、第44図に大きさの分布を示した。形状は、楕円形・方形・多角形・不定形を呈するものが確認された。素材は、すべて本土産磁器で、利用部位は口唇部から腰部にかけてのものが1点、胴部が2点、胴部から底部にかけてのものが3点得られた。

出土状況を見ると1号墓墓庭から5点、8号墓左側斜面から1点出土している。

なお、個別の観察は、第8表に示した。

上原 静 「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 1986年

第44図 円盤状製品の大きさ分布

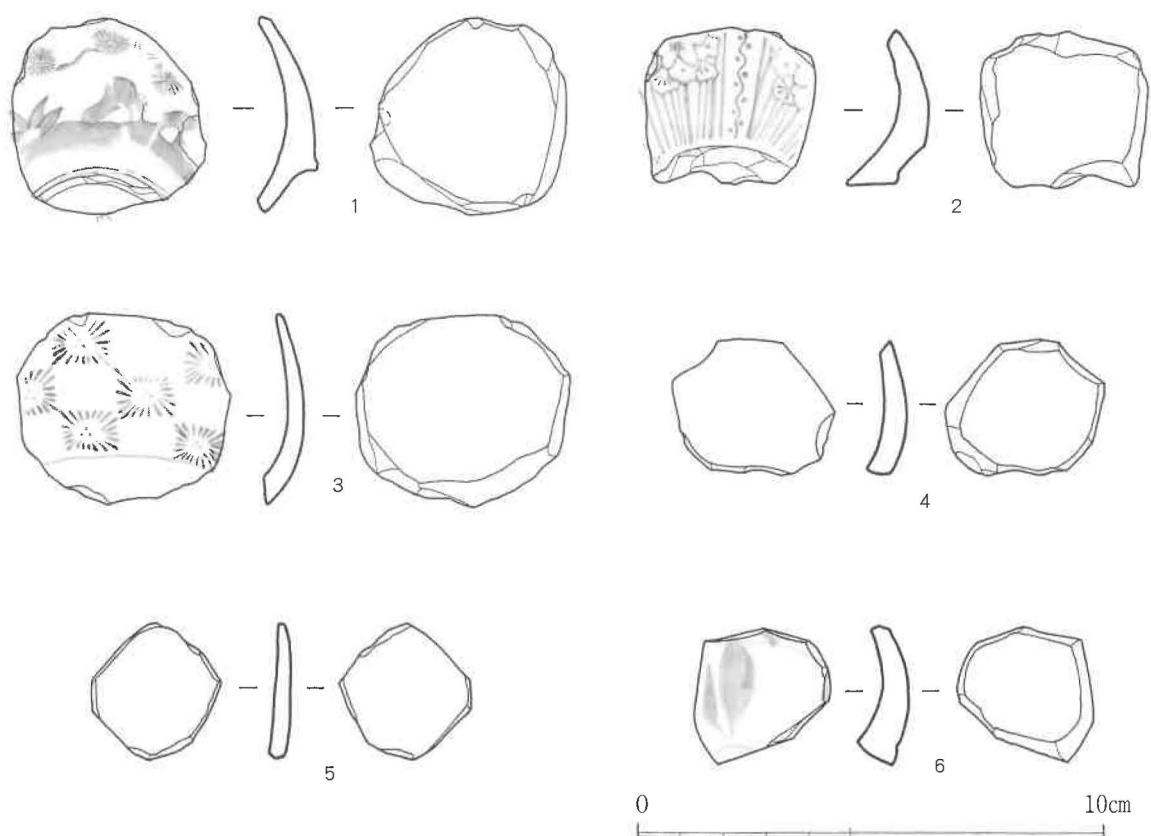


(安里美紀)

第8表 円盤状製品観察一覧

単位cm/g

挿図番号	番号	器種/部位	平面形断面	最大径 最小径 厚さ 重さ	観察事項	出土地点
第45図・ 図版41	5	器種不明 胴部	方形 平	3.18 2.7 0.26、0.4 5.85	角は丸く整える為にやや細かく調整されるが、他の部分は粗く調整がされている。調整は、内面と外面の交互に行われている。	1号墓墓庭 左土砂除去時
	4	小碗 胴部	多角形 湾曲	3.93 3.1 0.4、0.58 10.1	調整は主に内側から外側に向けて行われ、特に角は丸く整えるために細かく打ち欠いている。部分によっては、整形途中と思われる箇所がみられる。	1号墓墓庭 左土砂除去時
	6	小碗 胴部～底部	不定形 湾曲	3.65 3.09 0.52、1.01 10.68	調整は内側から外側に向けての打ち欠きが多くみられる。調整は角を取るため、細かく打ち欠かれるが、他の部分はやや粗めに調整される。	8号墓左側 斜面覆土
	2	小碗 胴部～底部	方形 湾曲	4.65 3.59 0.51、0.88 17.29	調整は主に内側からの打ち欠きで、全体的に粗めである。四角あるうちの三角は、角を丸くする為に粗くではあるが、調整されるが、残り一箇所は調整がみられない。高台部分は内（裏）から打ち欠かれている。	1号墓墓庭 土砂除去時
	3	小碗 口唇部～ 腰部	楕円形 湾曲	4.98 4.47 0.17、0.63 17.94	口唇部を残し、その周りの角を取るように内側から外側に向けて打ち欠いている。調整は比較的丁寧に行われている。	1号墓墓庭 左土砂除去時
	1	小碗 胴部から 底部	楕円形 湾曲	4.83 4.35 0.28、0.94 21.18	高台部分は、内（裏）から打ち欠いている。角は丸く整えるためにやや細かく調整されている。調整は、主に内側から行われている。	1号墓墓庭 左土砂除去時



第45図 円盤状製品

第10節 銭貨

総数6点得られ、その内3点を図示した(図版40)。同図1は寛永通寶である。「寶」字下部が「ハ」の字となるいわゆる「ハ貝宝」で、1668年以降に鑄造された新寛永と考えられる。^{註1}本資料に関しては伝世品の可能性もあるが、出土状況から六道銭として用いられたものと考えられる。同図2、3は十銭硬貨でいずれの資料も「昭和十六年」の銘記が確認できる。この他に米貨の1セント硬貨が3点得られている。これらのサイズは2cmで、重量は約3gの範囲で収まる。

出土銭貨からみた本遺跡の年代は、その鑄造年代から近世・第2次大戦以前(昭和初期)・第2次大戦以降(米軍統治下時代)の三つの時期にわけられる。

墓室から寛永通寶が出土する例としてはナーチャー毛遺跡^{註2}などがある。

註1 「図説 江戸考古学研究事典」 江戸遺跡研究会 2001年

註2 「ナーチャー毛遺跡」 那覇市教育委員会 2000年

第9表 銭貨観察一覧

図版	番号	銭貨名	直径	孔径	重量	鑄造年代	残存状態	出土地
図版 40	70	寛永通寶	2.6cm	0.5cm	2.75 g	1668年(寛文期)以降	完形	15号墓室床面
	71	十銭	2.2cm	—	1.50 g	昭和16年	完形	15号墓室覆土
	72	十銭	2.2cm	—	1.07 g	昭和16年	一部破損	4号墓覆土
	227	1セント	2 cm	—	3.10 g	1958年	完形	15号墓室覆土
	227	1セント	2 cm	—	3.10 g	—	完形	15号墓室覆土
	227	1セント	2 cm	—	3.05 g	1945年	完形	15号墓室覆土

(砂川正幸)

第11節 金属製品、その他

金属製品は釘・用途不明品・刃物類・指輪・簪・煙管・銅板・砲弾片・弾丸・葉莖・用途不明の鉄片の12種類、総数249点得られた。ここでは釘・用途不明品・刃物類・指輪・簪・煙管・銅板を報告する。また、プラスチック製ではあるが、煙管とセットで使用することから、煙管入れについてもここで報告する。その他の遺物としては砲弾片・弾丸・葉莖・用途不明の鉄片があるが、明らかに古墓とは関係がないので、今回の報告では割愛した。

第10表に出土状況、第46図・図版43に示す。

A. 釘（第46図1～25）

出土した釘の総数は27点で、うち残りのよい25点を図示し、さらに1点（図版43No2）をレントゲン撮影した。

出土した釘はすべて鉄製の丸釘で、同図25のC地区出土の1点を除いて、すべて17号墓左袖垣前からまとまって出土した。また、同図6～24の指輪も同一地点から出土している。

全ての釘には木片が付着し、そのうち同図1～4は、頭部付近に横位木目の木片が、その下位には縦位木目の、木目方向の違った木片が付着する。このことから、棺箱の縦板と横板を固定する際に、使われた釘ではないかと考えられる。

久米島ヤッチのガマでは、木製厨子の部材や木棺材の出土例があり、厚みは平均約1.28cmである。このことから、第46図1～4の横位木目の木片は、残存の状態では厚みは0.5cm前後であるが、腐蝕して失われた部分も考え合わせると、1cm程度の厚さが想定される。

部材の厚み約1cm、X線写真（図版43No2）、釘の残存長などから釘の長さの復元を試みると、45mm^註（1寸5分）の釘が復元される。

第11表に釘の観察表を示す。

第10表 金属製品出土一覧

出土地点	種類	釘	用途不明品	刃物類	指輪	簪	煙管			銅板	煙管入れ	合計
							雁首	吸口	延べ煙管			
1号墓	墓室	1										1
	墓庭											0
2号墓	墓室				5	1		1				7
	墓庭											0
3号墓	墓室								2		1	4
	墓庭	1										0
6号墓	墓室						1					0
	墓庭							1				1
15号墓	墓室						1					1
	墓庭							1				1
16号墓	墓室									1		1
	墓庭											0
17号墓	墓室											0
	墓庭	26		1	55			2				84
その他	墓室											0
	墓庭											0
合計		1			3	1						5
合計		27	1	2	63	2	2	5	2	1	1	106

参考文献：「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

註：現在使用されている丸釘の規格には、18mm・25mm・32mm・45mm・50mm・65mm・75mmなどがある。

第11表 a 釘観察一覧

挿図 図版	番号	材質	残存状況	長さ(最大) 太さ(最小) 重さ	観 察	出土地点
第46 図・ 図版 43	1	鉄	基部残存	3.94 0.36 1.48	木片付着。 頭部付近には横位に木目が入り、それ以下には縦位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	2	鉄	基部残存	4.01 0.25 1.45	木片付着。 頭部付近には横位に木目が入り、それ以下には縦位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	3	鉄	基部残存	3.66 0.36 1.29	木片付着。 頭部付近には横位に木目が入り、それ以下には縦位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	4	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	3.06 0.38 1.37	木片付着。 頭部付近には横位に木目が入り、それ以下には縦位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	5	鉄	頭部・基 部残存 (先端部 欠損)	1.74 0.35 0.91	頭部は直径：0.55cmで、円形。上部に格子文が入る。縦の釘に直交してもう1つの釘が入る。木片付着。横位に木目が入る。2つの釘が赤錆により接着。	17号墓 左袖垣前
	6	鉄	頭部・基 部残存 (先端部 欠損)	1.66 0.3 0.35	頭部は直径：0.6cmで、円形。 木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	7	鉄	基部残存	3.14 0.3 1.6	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	8	鉄	基部残存	2.93 0.26 0.98	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	9	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	3.86 0.29 1.36	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	10	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	3.89 0.27 1.37	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	11	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	2.41 0.27 0.98	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	12	鉄	基部残存	2.63 0.29 0.75	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前

第11表 b 釘観察一覧

cm/g

挿図 図版	番号	材質	残存状況	長さ(最大) 太さ(最小) 重さ	観 察	出土地点
第46 図・ 図版 43	13	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	2.43 0.35 2.06	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	14	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	1.7 0.31 0.73	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	15	鉄	基部残存	2.25 0.36 0.74	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	16	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	2.22 0.35 1.47	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	17	鉄	基部残存	3.64 0.28 1.28	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	18	鉄	基部残存	3.48 0.4 0.95	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	19	鉄	基部残存	3.07 0.35 1.01	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	24	鉄	基部残存	3.56 0.36 1.37	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	20	鉄	基部残存 (先端部 欠損)	2.95 0.37 0.89	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	21	鉄	基部残存	3.28 0.31 0.86	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	22	鉄	基部残存	3.22 0.4 1.35	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	23	鉄	基部残存	3.45 0.31 0.93	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	17号墓 左袖垣前
	25	鉄	基部残存	3.3 0.36 0.76	木片付着。 横位に木目が入る。 赤錆付着。	C地区

B. 用途不明品 (第46図26)

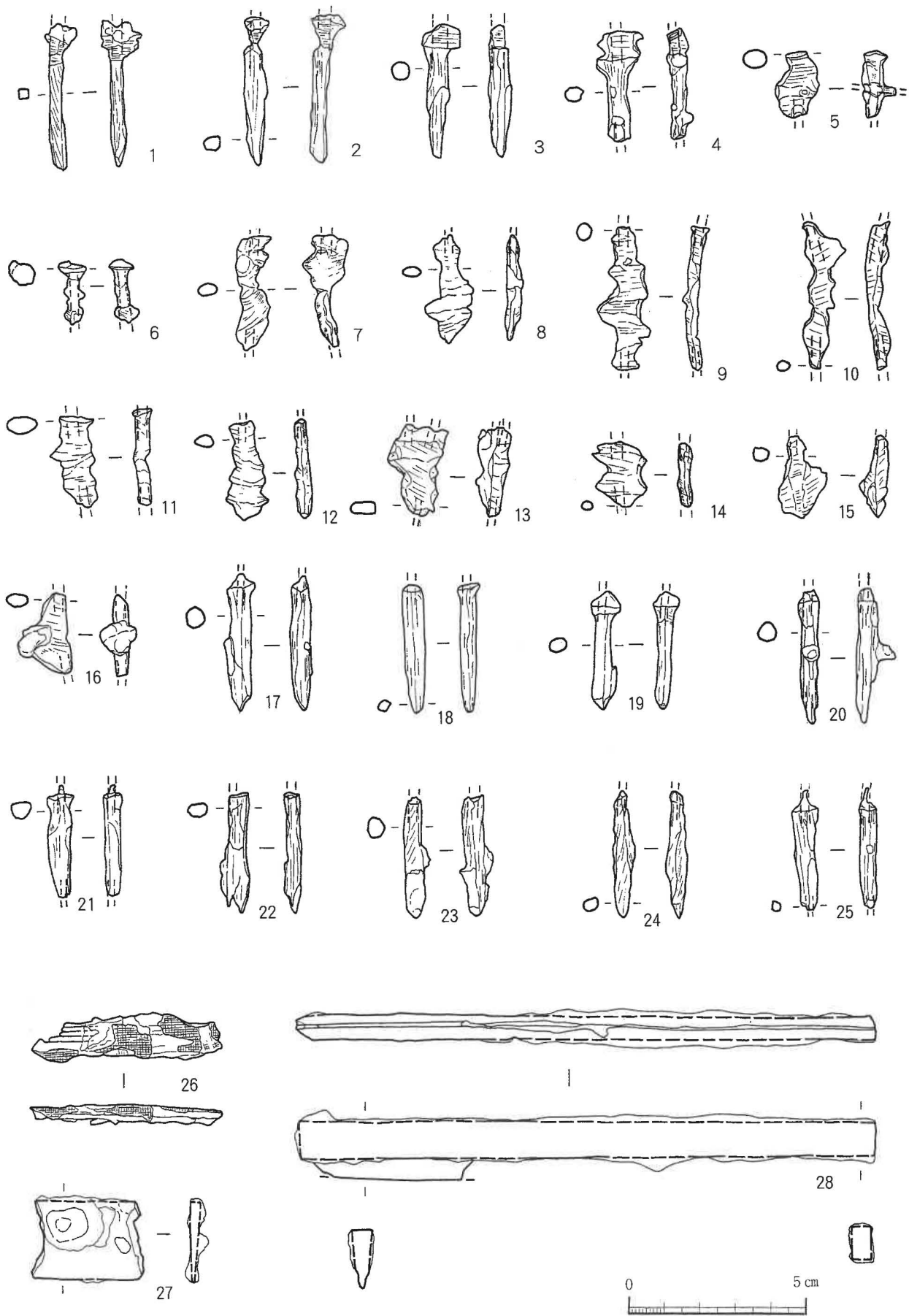
直径1mm前後の針金状の鉄が6条、板状にならんだものである。黒く変色し接着しているため、後に熱が加わったと考えられる。また、両面に約0.5mm幅の糸で平織りされた布が付着している。劣化が激しく用途は不明だが、1号墓No3蔵骨器^註(第23図1)中から検出されていることから、副葬品の一部ではないかと考えられる。

長軸5.18cm 短軸：1.17cm 厚さ：0.49cm 重量：1.93g

註：この蔵骨器には「昭和九年旧十二月〇日洗骨……」の銘あり

C. 刃物類 (第46図27, 28)

同図27は鉄製の刀片で、小破片であり、全体を窺い知ることはできない。残存長：3.0cm 刃部幅：2.38cm 厚さ：0.4cm 重量：4.48gで、17号墓左袖垣前の出土である。



第46図 鉄製品

同図28は鉄製の刃物で、ほぼ完形である。刃部を柄部に挟みこんで固定されており、その形状から剃刀ではないかと考えられる。長さ：15.6cm 幅：1.11cm 厚さ：0.83cm 残存刃部長：4.72cm 刃部幅：0.62cm 刃部厚：0.16cm 重量：35.36gで、3号墓墓庭覆土の出土である。

D. 指輪 (第48図1~24)

出土した指輪の総数は63点で、うち完形を含め残りの良い24点を図示した。すべて銅製で、指輪の幅が3.5~5.5mmのやや幅広のもの(同図1~5)と、1mm前後の細いもの(同図6~24)に分けられる。

同図1~5は2号墓墓庭縁(正面)からまとまって出土した。同図1は外面上部に唐草文が施される。直径：1.91cm、幅：0.35cm、厚さ：0.06cm 同図2は外面は丸みを持ち、継ぎ目部から上部に向かって肉厚、幅広になる。直径：1.85cm 幅：0.44cm 厚さ：0.18cm

同図6~24は、17号墓左袖垣前出土の指輪55点のうちの19点である。指輪の幅が1mm前後と細いタイプで、釘の説明で既述のように、17号墓左袖垣前から釘(第47図1~24)と共に出土している。幅が細いことや、まとまって出土していることから、単独で装着したとは考えにくく、同時に複数使用したと考えられる。

第12表に観察表、第48図・図版45に示す。

第12表 a 指輪観察一覧

図版	番号	材質	残存状況	直径 幅 厚さ	観察	出土地点
第48図・ 図版44	1	銅	9/10 残存 註1	1.91 0.35 0.06 0.57	外面上部に唐草文が施文される。 継ぎ目部分註2から折れる。 青錆が付着。	2号墓 墓庭縁 (正面)
	2	銅	完形	1.85 0.44 0.18 1.68	外面は丸みを持ち、継ぎ目部から上 部に向かって肉厚、幅広になる。 青錆付着。	2号墓 墓庭縁 (正面)
	3	銅	完形	1.83 0.32 0.07 0.65	幅広で、継ぎ目部から歪む。 青錆付着。	2号墓 墓庭縁 (正面)
	4	銅	完形	2.17 0.68 0.13 1.53	幅広で、継ぎ目部から歪む。 青錆付着。	2号墓 墓庭縁 (正面)
	5	銅	完形	1.93 0.55 0.09 1.24	幅広で、継ぎ目部から歪む。 青錆付着。	2号墓 墓庭縁 (正面)
	6	銅	完形	1.97 0.11 0.1 0.38	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	7	銅	完形	1.94 0.11 0.1 0.26	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	8	銅	完形	1.96 0.1 0.1 0.36	赤錆・青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	9	銅	完形	1.96 0.05 0.08 0.14	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	10	銅	完形	1.96 0.1 0.1 0.28	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	11	銅	完形	1.95 0.07 0.08 0.14	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	12	銅	完形	1.97 0.09 0.11 0.31	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	13	銅	完形	1.99 0.09 0.1 0.21	青錆付着。	17号墓 左袖垣前

第12表 b 指輪観察一覧

図版	番号	材質	残存状況	直径 幅 厚さ	観察	出土地点
第48図・ 図版44	14	銅	完形	1.87 0.07 0.09 0.25	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	15	銅	完形	2.05 0.18 0.1 0.62	2つの指輪が錆により接着。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	16	銅	完形	1.99 0.1 0.09 0.23	若干歪む。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	17	銅	完形	1.95 0.05 0.08 0.16	若干歪む。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	18	銅	完形	1.98 0.09 0.1 0.29	継ぎ目部から開く。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	19	銅	8/10 残存	2.02 0.08 0.09 0.16	継ぎ目部は折れ、若干開く。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	20	銅	完形	2.12 0.12 0.12 0.63	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	21	銅	完形	2.13 0.13 0.15 0.85	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	22	銅	完形	2.15 0.13 0.13 0.78	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	23	銅	完形	2.15 0.13 0.13 0.78	青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	24	銅	完形	2.1 0.15 0.14 0.63	継ぎ目部から開く。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前

註1 残存状況は指輪を10等分にした数値。

註2 継ぎ目部分とは、指輪を製作する過程で、細い板状の金属を円形に整形した際の、端部のことである。

E. 簪 (第48図25, 26)

出土した簪の総数は2点でいずれも銅製である。

同図25は、ジーファーで、カブ部は匙型、首部・竿部ともに横断面は六角形である。ムディ部で稜が交差し、竿部の端に向かって太くなる。2号墓墓庭縁(正面)出土である。

計測値	長さ：15.2cm (カブ部：1.71cm 首部：2.56cm 竿部：10.93cm)
	カブ部幅：1.49cm 首部幅(最小)：0.48cm ムディ部幅：0.57cm
	竿部幅(最大)：0.7cm 重さ：28.74g

同図26は、押差で、カブ部は耳かき型、竿部の横断面は円形である。また竿部中央から「く」の字状に屈曲する。那覇市の天界寺跡註でも同じように「く」の字状に屈曲する簪が複数出土している。これらは角がつくように屈曲しており、故意に曲げられた可能性も否定できない。2・3号墓前トレンチ北側である。

計測値	長さ：8.32cm (カブ部：0.91cm 竿部：7.41cm)
	カブ部幅(最大)：0.43cm 竿部幅：0.27cm 重さ：2.06g

参考文献：「日本の伝統工芸12 九州Ⅱ・沖縄」 ぎょうせい 1985

「沖縄文化史辞典」 東京堂出版 1972

註：「天界寺跡(Ⅰ)」 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001

F. 煙管 (第48図27~35)

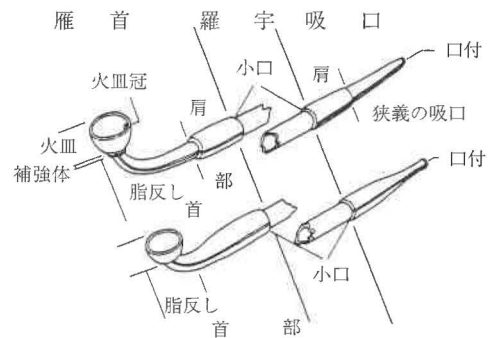
出土した煙管の総数は9点で、うち雁首2点、吸口5点、延べ煙管2点である。

同図34はアルミ製で、それ以外はすべて銅製である。同図27,29~31には、小口に羅宇が残存する。同図29,32,34にはメッキが施され、同図29は小口側に、斜位に格子文が施される。

同図35の延べ煙管の火皿部内にはスス状のタバコと思われるものが残存する。また出土した際、第48図37の煙管入れに納められていた。3号墓墓庭覆土の出土である。

雁首と吸口は出土地点の相違からセットになるものはないと考えられる。

第13表に観察表を示す。なお、観察の項の名称は第47図に示す。



「図説 江戸考古研究辞典」より

第47図 煙管の呼称

参考文献：江戸遺跡研究会 「図説 江戸考古学研究事典」 柏書房 2001

第13表 煙管観察一覧

cm/g

挿図版	番号	種類	材質	残存状況	法 量	観 察	出土地点
第48図・図版45	27	雁首	銅	ほぼ完形	長さ：3.43cm 小口径：0.94cm 火皿部径：1.09cm 油反らし部：0.7cm 重量：5.06g	羅字が残存。 左側に縦位の継ぎ目あり。 青錆付着。	15号墓 墓室覆土
	28	雁首	銅	首部残存	長さ：3.09cm 小口径：1.3cm 火皿部径：— 油反らし部：0.81cm 重量：5.57g	左側に縦位の継ぎ目あり。 青錆付着。	8号墓 墓庭覆土
	29	吸口	銅	ほぼ完形	長さ：3.84cm 小口径：0.96cm 口付径：0.57cm 重量：2.57g	羅字が残存。メッキが施され、小口側に、斜位に格子文が施される。縦位に継ぎ目あり。 青錆付着。	15号墓 墓庭覆土
	30	吸口	銅	完形	長さ：4.75cm 小口径：0.9cm 口付径0.71cm 重量：6.73g	羅字が残存。 縦位に継ぎ目あり。 青錆付着。	17号墓 左袖垣前
	31	吸口	銅	完形	長さ：5.22cm 小口径：0.86cm 口付径：0.55cm 重量：9.28g	羅字が残存。 縦位に継ぎ目あり。 青錆付着。	17号墓 覆土
	32	吸口	銅	完形	長さ：6.02cm 小口径：0.79cm 口付径：0.56cm 重量4.26g	メッキが施される。 青錆付着。	2号墓 墓庭縁 (正面)
	33	吸口	銅	完形	長さ：6.54cm 小口径：1.3cm 口付径：0.48cm 重量15.14g	縦位に継ぎ目あり。 青錆付着。	6号墓 右側石積み 付近覆土
	34	延べ煙管	アルミ	完形	長さ：11.64cm 火皿部径：1.01cm 油反らし部：0.65cm 吸管部径：0.88cm 口付径：0.53cm 重量：8.19g	首部から口付にかけて上部に縦位の継ぎ目があり。メッキが施される。 赤錆付着。	3号墓 墓庭覆土
	35	延べ煙管	銅	完形	長さ：19.35cm 火皿部径：1.01cm 油反らし部：0.71cm 吸管部径：0.91cm 口付径：0.6cm 重量：43.11g	首部から口付にかけて左側に縦位の継ぎ目あり。火皿部内にはスズ状のタバコと思われるものが残存。 青錆付着。 第48図37とセット。	3号墓 墓庭覆土

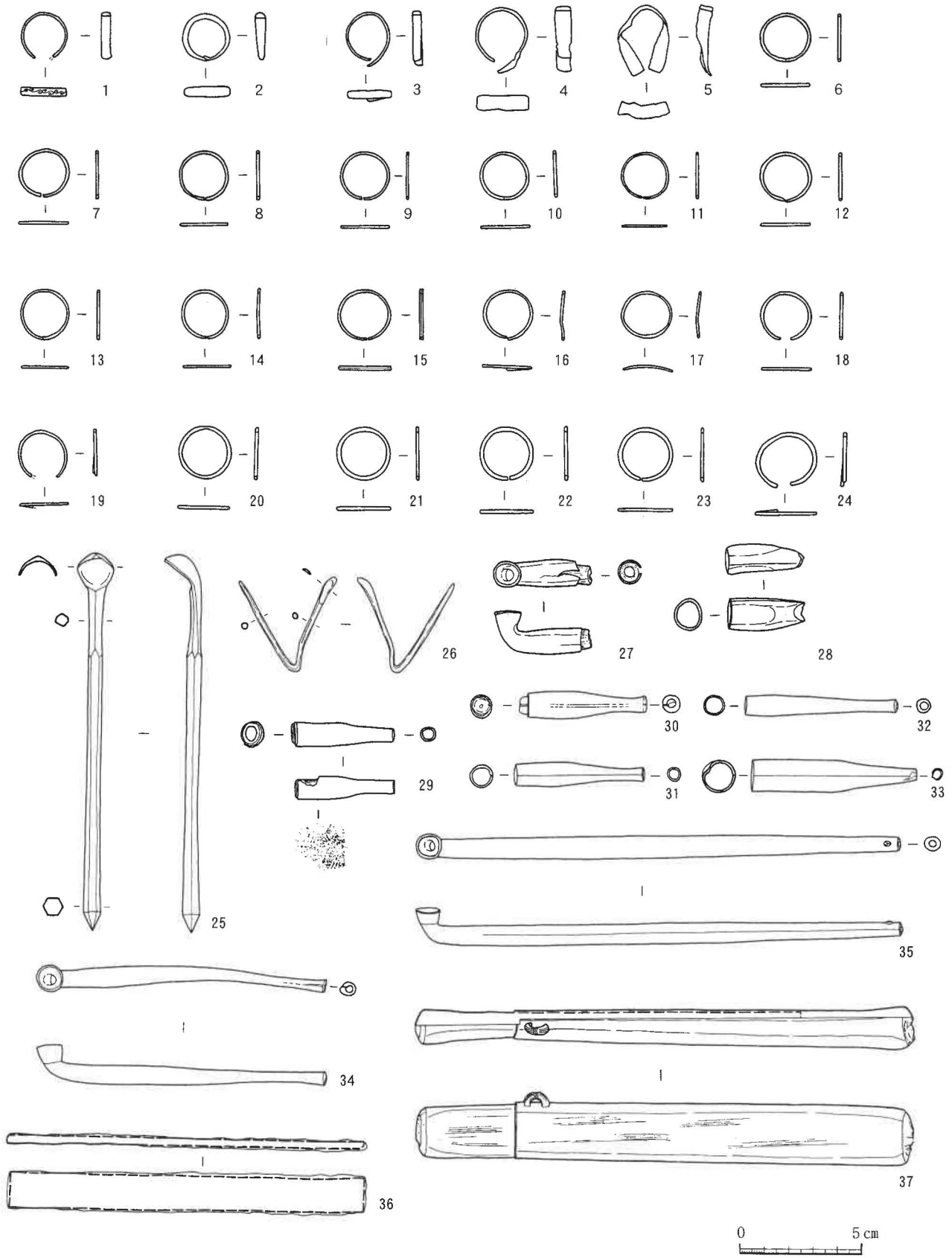
G. 銅板 (第48図36)

長軸：14.42cm 短軸：1.54cm 厚さ：0.32cm 重量：26.25gの、扁平で細長い銅製の板で用途は不明である。16号墓墓室覆土の出土である。

H. 煙管入れ (第48図37)

煙管入れは、プラスチック製で蓋と身に分けられる。側面観は長さ：18.35cm 幅：2.46cmの長方形、横断面は厚さ：1.32cmの楕円形で、プラスチックの厚みは、約0.08cm、重量：13.13gである。側面には直径0.51cmの紐通しが付く。蓋身の表面には縦位に細線が見られ、紐通し部には縦3条、横2条の沈線を組み合わせた文様が施される。煙管の説明で既述のように、第48図35の延べ煙管を納めていた。3号墓墓庭覆土の出土である。

(縄田雅重)



第48図 指輪、簪、煙管、煙管入れ

第12節 ガラス製品

ガラス製品は薬瓶・レンズ・鏡・用途不明の瓶・現代瓶の5種類、総数35点得られた。ここでは薬瓶・レンズ・鏡・用途不明の瓶・ガラス瓶の栓と考えられるコルク栓について報告する。その他に現代瓶があるが、古墓とは直接関係がないので、今回の報告では割愛した。第14表に出土状況、第49図・図版42に示す。

第14表 ガラス製品出土一覧

種類		薬瓶	用途不明瓶	鏡	レンズ	合計
3号墓	墓室					
	墓庭		1	1	1	3
	墓外					
5号墓	墓室		1			1
	墓庭					
	墓外					
12号墓	墓室					
	墓庭	1				1
	墓外					
15号墓	墓室			1		1
	墓庭					
	墓外					
その他						
合計		1	2	2	1	6

A. 薬瓶 (第49図1)

薬瓶は1点の出土である。

透明色で、底面は楕円形である。肩部から頸部にかけてすぼまり、口縁部は段を有し、方形に肥厚する。外面に「100」の数字と、約10ccごとに目盛りが入る。またガラス内には気泡が多く入り、側面には鋳型の接合痕が見られる。口径：2.0cm 高さ：11.3cm 幅：5.42cm 奥行：3.35cm 重量：86.14g 容量：100ccで、12号墓墓口前覆土の出土である。

B. 用途不明の瓶 (第49図2, 3)

小ぶりの瓶で2点の出土である。

同図2は透明色で、底面はほぼ正方形である。口縁部には蓋のねじ込み用の溝が入る。また底面には「13」の数字が入る。口径：2.45cm 幅・奥行：3.44cm 高さ：4.92cm 重量：43g 容量：25ccで、5号墓シルヒラシの表採である。

同図3は透明色で、底面は円形である。肩部から頸部にかけて2つの段を有してすぼまり、口縁部は段を有し、方形に肥厚する。またガラスの厚みにムラがあり、若干歪む。口径：1.74cm 胴部径：3.87cm 高さ：8.68cm 重量：57.22g 容量：48ccで、3号墓墓庭覆土の出土である。

同図2, 3共に瓶の形状から液体を入れたものと考えられる。

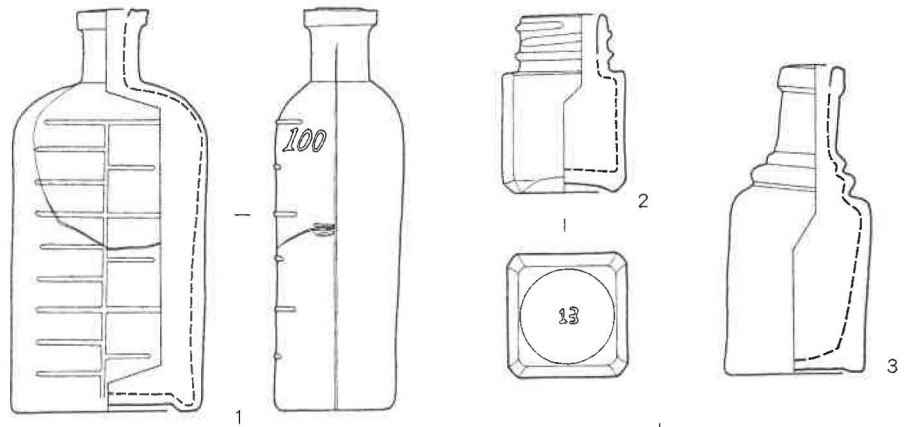
C. 鏡 (第49図4, 5)

鏡は2点の出土である。

同図4は透明色で、平面形は長方形である。片面の縁は面取りされる。長軸：14.82cm、短軸：9.83cm、厚さ：0.29cm、重量：77.09gで、15号墓墓室覆土の出土である。

同図5は透明色で、平面形は楕円形である。4と同様に面取りされる。長軸：11.99cm、短軸8.28g、厚さ：0.8cm、重量：182gで、3号墓墓庭覆土の出土である。

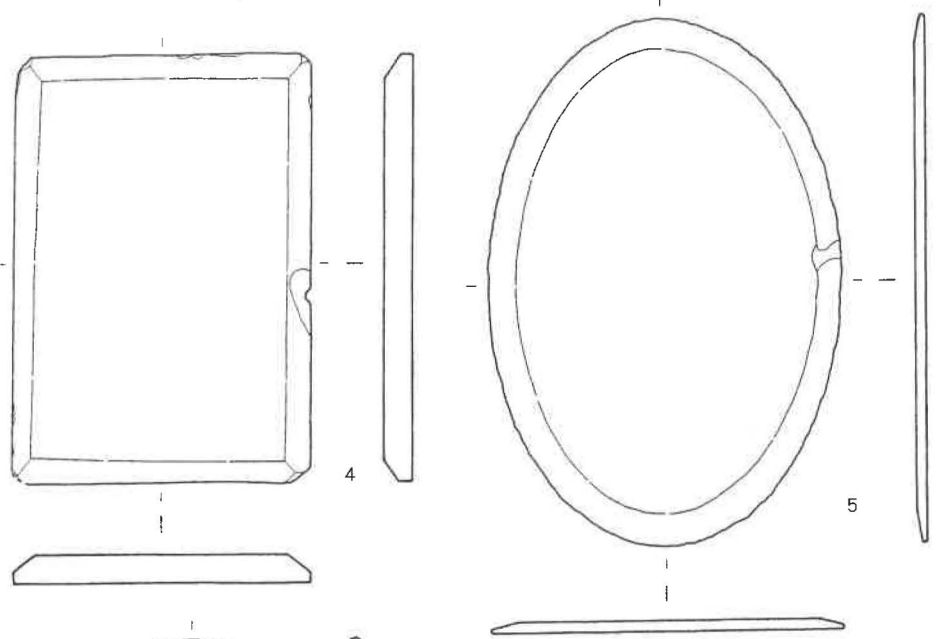
山川原古墓群^註で、類例があり、表面は面取りされ、裏面に塗膜が若干残っていたため、特定にいたっている。よって本古墓のものも、同じように鏡であったと考えられる。



D. レンズ (第49図6)

レンズは1点の出土である。

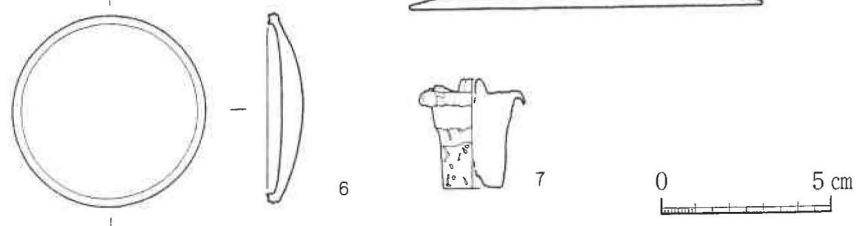
透明色で上面観は円形である。端部に段を有し、側面観は凸状に湾曲する。直径：5.37cm 厚さ(最大)：0.6cm、重量：18.67gで、3号墓墓庭覆土の出土である。



E. コルク栓 (第49図7)

コルク栓は1点の出土である。

上面にのみ薄い鉄板が付く。上面観は円形、側面観は逆台形で上部から下部に向かって細くなる。最大径：2.97cm、最小径：1.68cm、高さ：3.15cm、重量：7.45gで、5号墓シルヒラシの表採である。



第49図 ガラス製品、他

註：「山川原古墓群 (2)」 北谷町教育委員会 2001

(縄田雅重)

第13節 根付

根付とは、18～19世紀にかけて印籠や巾着、煙草入れなどの提げ物を腰の帯にぶらさげて携帯する為の、彫刻の留め具のことである。

根付はその形状から、形彫根付、鏡蓋根付、差根付、饅頭根付、柳左根付、面根付、印象根付などに分類されている。

第50図（図版47）は法衣と袈裟を纏い、右手に払子を持つ僧侶を立体的に刻す形彫根付である。

象牙製と考えられ、両足の下面から腹部にかけて笹状の紋様が陰・陽刻により相対的に表現されている。法衣には六角形と蔦、袈裟には蔦の絵柄が細線で刻まれている。左肩袈裟の環の上には緑色の石が、両目は白目を緑色に塗り、黒目には黒色の石がはめ込まれ、法衣下面には「藻登」の文字が細く刻まれているなど、きめ細かな細工を施している。

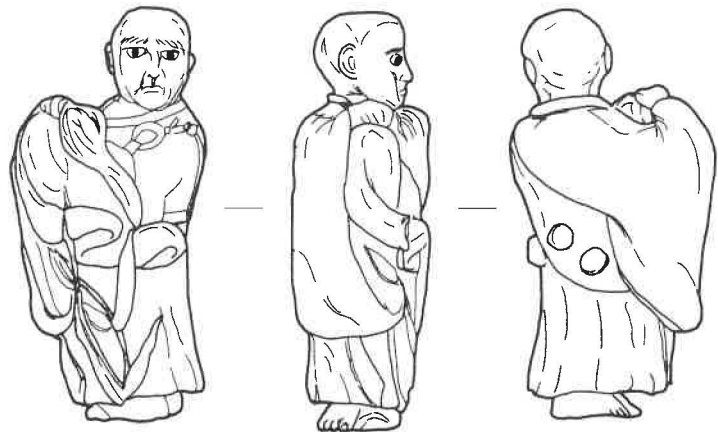
根付の計測値は高さ5.59cm、幅1.9cm、重量21.24gである。背面中央には対の紐通し穴が斜めに配され、紐ずれがみられる。孔径は長軸4.5mm、短軸3.5mmである。4号墓の出土である。

樹昌院住職 喜瀬 守氏によると、

- ①根付の僧侶の口元は引き締まり、目は見開き正面を見据える様は強い意志を表している。
- ②正式な袈裟を纏い払子を持つ下の法衣の膨らみは経蔵を抱え持つと思われる。
- ③菩薩と同様に素足を揃える並足立ちをする姿から儀式最中の一場面を捉えたものではないか。

以上の事について御教示頂いた。

(尾木 綾)



藻
登

第50図 根付



図版47 根付

第V章 まとめ

大作原古墓群発掘調査は、那覇防衛施設局の提供施設建設工事である送油管移設に伴って平成12・13年度にまたがって、移設計画の米軍嘉手納基地部分の約1.6km、幅約30mの計画範囲内について調査を行った。

本古墓群では総数17基が確認され、A地区3基（1～3号墓）、B地区8基（4～7・11～14号墓）、C地区6基（8～10・15～17号墓）であった。聞き取り調査によるとA・B地区の墓は、字平安山・浜川、C地区は字伊礼の人々の墓が築かれている。

これらの古墓群は、標高約20～30mの北東から南西方向に伸びる丘陵の斜面中腹などに形成された近世～現代の古墓群で、3つの谷間に位置しており、A・B地区は谷間を挟んで向かい合うように位置し、C地区は舌状を呈する丘陵先端などの岩盤部分に築かれていた。

地区別に墓についてみると、A・B地区に大型墓があり、A地区は大型の亀甲墓（15号墓）中型の掘込墓（2・3号墓）、B地区は大型の平葺墓（6・11号墓）、中型の掘込墓（4号墓）、不明（14号墓）、小型の掘込墓（7・12・13号墓）、C地区は中型の掘込墓（8・17号墓）、小型の掘込墓（10・15・16号墓）や岩陰墓（9号墓）であった。

これらの墓は亀甲墓・平葺墓・掘込墓・岩陰墓であるが、墓室の構築方法は丘陵の石灰岩岩盤に横穴を掘り込んで築いた（方言で「フィンチャー」）墓（1～4・7・8・10～17号墓）と墓室を石灰岩の切石を積んで築いた（方言で「マチ墓」と呼称される）もの（5・6号墓）、岩陰を利用した墓（9号墓）であった。

大型墓である亀甲墓・平葺墓には、横穴を掘り込んだ墓室と石灰岩の切石を積んで築く両方があり、前者は1・11号墓、後者は5・6号墓で、6号墓では墓室天井に使用されている切石に漢数字「一・二・三」や片仮名「イ」、「×」が墨で記されており、「一」と「一」が隣り合うものが見られたことから、石を積む際の記号と推察される。

5号墓は同様な造りの亀甲墓であるが、このような記号は見られなかったが、「JAN. 25 1937 MADE IN 昭和十二年」の文字が、サンミデーに刻まれていた。この墓は聞き取り調査で、ハワイに移民していた方が墓を造るために帰沖して、造ったとのことで、それを物語るものであった。

5号墓（亀甲墓）・6号墓（平葺墓）はいずれも屋根は、セメント仕上げの墓であった。また、6号墓では土留めの石積が施された墓道を伴っており、この墓道には谷間側に渡るためのものと見られる、石橋が検出され、それはやや扁平な大型の石灰岩を利用したものであった。また、谷間を挟んで反対側に位置する5号墓墓庭の入口前面は、谷間から一段高くなっており、約1.5m程度の幅を持って東側に続く墓道と見られるものが続いていたが、6号墓の墓道は墓庭入口の部分までであった。

1号墓（亀甲墓）は、墓右袖側の石積が最大で約4mと高く積み上げて築き、屋根には敷石が施されていた。屋根の敷石は11号墓（平葺墓）でも施されていた。

B地区で米軍嘉手納基地のフェンス下に位置していることが確認された14号墓は、聞き

取り調査で戦時中に直撃弾を受けた墓と場所が一致しているものであった。表土剥ぎで僅かに検出された石積は、亀甲墓又は平葺墓と見られるものであった。

中型墓の中で8号墓は、墓口の両側に大型の石灰岩を配して築いていた。他の中型墓は大型墓でも見られるような長方形に整形された切石が使われていた。

小型墓は墓面を約40～50cm程度の石灰岩の自然礫を積んで、礫の隙間を土や漆喰で塞ぐものも見られた。また、7・14号墓の墓室は、器高の低い小型の蔵骨器を納められる程度のものであった。

本古墓群の墓室の大きさは、0.50～9.99㎡までと、さまざまであるが中型墓で「タナ」を持たない墓の墓室の大きさは、概ね亀甲墓・平葺墓に見られるシルヒラシの大きさ（約1.5×1.5m）に近いものであった。小型墓では墓室の幅がおおむね1.5mであった。

10基の墓（1・2・4・5・7・8・11～13・15・17号墓、12・13号墓前トレンチ）から人骨が出土した。詳細は附記で述べられており、それによると合計で31体分の人骨が出土している。そのうち、1号墓に納骨されて納められていた蔵骨器No1～7には、総数11体（男性7体、女性3体）が納められていた。11号墓出土のものは、口縁部を失い横倒しにされた蔵骨器からの出土であった。その他は、墓室内や墓室シルヒラシや墓庭・墓外からの出土であった。

本古墓群から出土した蔵骨器に記された銘書には、中国年号の道光・同治・光緒、日本年号の明治・大正・昭和が見られ、最も古いものは1号墓蔵骨器No1に記された1822年（道光2年）で180年前、もっとも新しいものは15号墓出土のものに昭和19年（1944年）で58年前であった。また、銘書には17号墓出土のものに親雲上の位階を記したのものも見られた。さらに、「洗骨」の文字を「新骨」・「先骨」と記したものがあり、前者は方言で「シンクチ」と呼称することによる誤記ではないかと見られる。以上、本古墓群の調査で外観からは見えない石積による墓室の構築方法や銘書などから人々の歴史の一端を知ることができた。今後、得られた資料をさらに分析・検討を行っていきたい。

第VI章 後期遺物散布地（試掘No 1 トレンチ）

第1節 調査経緯

本古墓群発掘調査の際に、B地区の南側に位置する6・7号墓ある石灰岩岩盤の東側を、墓の有無確認のために表土剥ぎ作業を行った。その際に黒褐色土層が検出されたことから、幅約1m、長さ約5m、谷間側の深さが約2.5m、丘陵側が約50cm。トレンチ掘り（試掘No 1 トレンチ）を行った。それによって丘陵側から谷間に流れ込む遺物包含層の堆積が検出された（図版16）。そのため、やや西側にある5号墓の前面の谷間部分にもトレンチを設定し（試掘No 3 トレンチ）谷間の状況を確認した。ここでは幅約1m、長さ約5m、深さ約4mの掘り下げた。深い谷間に流れ込んで堆積している状況が確認された（図版16）。

この試掘の状況から包含層は、6・7号墓が位置する丘陵の南側に続いていると見られるが、そこは現在、県道23号線があり丘陵は大きく失われている。

尚、本古墓群の墓検出作業の際にA地区で石斧や土器片が出土し、B地区の4号墓の位置する丘陵斜面からも土器片の出土があったことから、先史遺跡の存在を裏付けるものと考えられる。なお、A地区は別の谷間であることから、この一帯にも遺跡がある可能性が考えられる。

本トレンチは確認作業で終了し、バックホーによる掘り下げの土から出土遺物の取り上げを行った。遺物はこの土から取り上げたものと掘り下げ時の壁面や床面からのものと墓検出の際に出土したものである。

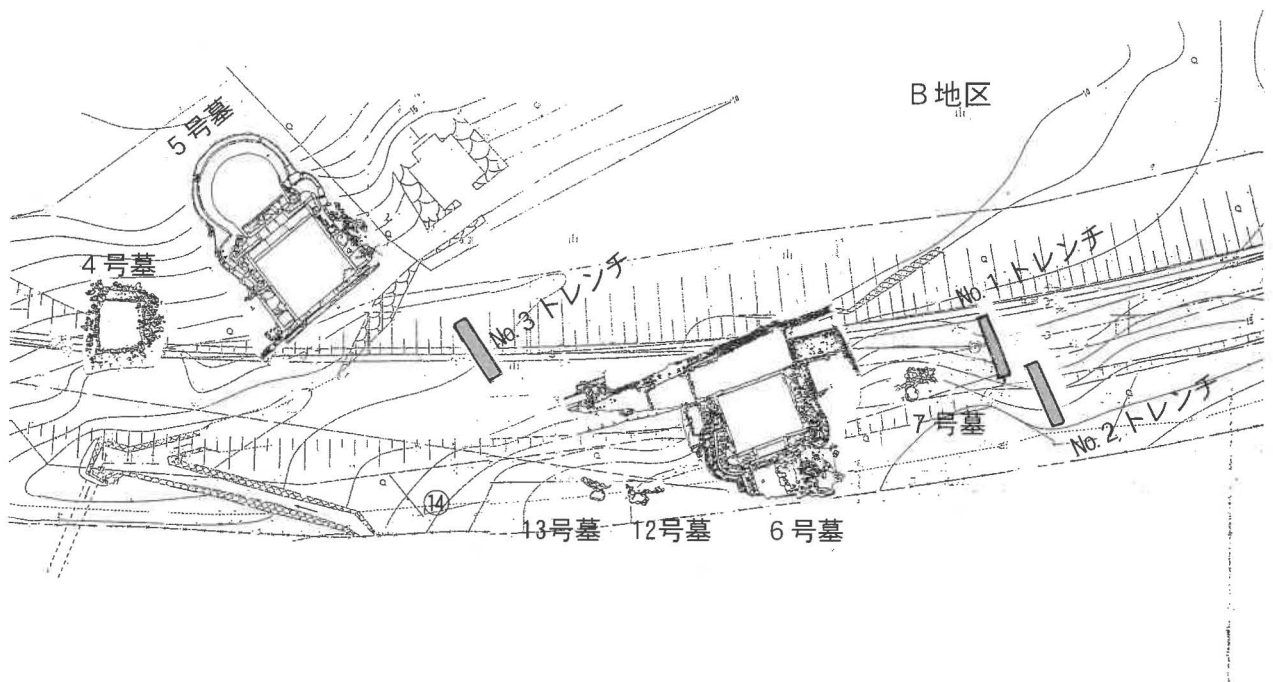
遺物は、くびれ平底土器・須恵器・中国産磁器・石器・自然遺物（貝類）が出土した。以下、これらの遺物について個々に述べる。第52図に試掘No 1 トレンチの柱状略図を示した。

第52図 試掘No.1 トレンチ層位柱状模式

2.45m	I	客土	約15cm	米軍による造成土。	
	II	旧表土	約20cm	淡褐色土層。	
	III	褐色土層	約30cm		
	IV	淡暗褐色土層	約20cm	土器破片・マイマイ混じり。石灰岩礫検出。	包含層
	V	赤褐色土層	約20cm	谷間側で堆積。東へは途切れる。	
	VI a	褐色土層	約20cm	流れ込み状を呈する。二次堆積と思われる。	包含層
	b	暗褐色土層	約15cm	赤味を帯びた石灰岩が目立つ。	包含層
	c	淡褐色土層	約10cm	石灰岩礫検出。赤味を帯びたものもある。	包含層
	d	淡暗褐色土層	約15cm	微粒砂岩出土	包含層
	e	淡褐色土層	約10cm	偏平な石灰岩礫・磨石出土・くびれ平底土器底部出土。	包含層
VII	地山 (黄褐色土層)	約70cm	遺物混じる。		



第51図 a 大作原古墓群 B地区試掘トレンチの位置



第51図 b 大作原古墓群 B地区試掘No.1～3トレンチの設定

第2節 土器

土器は総数874点得られ、そのうち特徴的なものを選別して図示した。いわゆる沖縄編年後期の系統を引く土器（以下、「後期土器」）と、グスク遺跡などから出土する土器（以下、「グスク土器」）とに大別できる。大半が細片資料で、復元して全形を窺えるものはなく、土器型式・器種の判別は困難を極めた。よって、以下に記す各土器群の出土総数は、判別できる範囲でのものである。出土資料において、主体となるのは後期土器で、No.1 試掘トレンチから出土する傾向が強く、本試掘トレンチの时期的な指標になると考えられる。以下、各々の遺物を概略し、詳細は第16表 a・b 観察表と第53・54図、図版48・49に記載する。

A. 後期土器

後期土器は判別可能なもので66点得られている。その形状・胎土などの諸属性から、おおむね高宮暫定編年の後Ⅳ期に属するものと考えられる。

〈口縁部資料〉

口縁部は27点得られており、そのうち25点を第53図に示した。器種は甕と壺があり、甕は口縁部の形状から2種類に大別できる。ほとんどが無文資料であるが、頸部に格子文を施す資料（第53図3）が1点得られている。器種と文様の有無、口縁部の形態から以下のように分類した。

・甕形土器

I類：有文の甕形で口縁部が外反するもの（第53図3）。

II類：無文の甕形で口縁部が外反するもの（第53図1, 2, 4～13）

III類：無文の甕形で口縁部が直口するもの（第53図15～20）

・壺形土器

I類：無文の壺形で口縁部が直口するもの（第53図14）

〈底部資料〉

底部は39点得られており、そのうち22点を第54図に示した。沖縄後期下半に特徴的な、いわゆるくびれ平底で、底厚・くびれ部から胴部への立ち上がりの角度等に若干のバリエーションがみられる。これらの差違が時期差なのか、あるいは器種による違いであるのかという点については今後型式学的検討を要するところである。底部形態から以下のように分類した。

I類：底面の器壁が薄く、ゆるやかに立ち上がるもの（第54図1～9）

II類：内底の器壁が薄く、くびれ部が顕著なもの（第54図10～14）

III類：内底の器壁が薄く、外底面の外周が反りかえり、接地面から浮くもの（第54図15～17）

IV類：底面の器壁と器厚がほぼ同じ厚さで断面観においてかかちができるもの（第54図18～20）

V類：底面の器厚が厚く、ゆるやかに立ち上がるもの（第54図21、22）

B. グスク土器

グスク土器は71点得られている。フェンサ上層式土器・鍋形土器・壺形土器などがあるが、いずれも細片資料で、復元して全形を窺えるものはない。

〈口縁部資料〉

口縁部は8点得られている。そのうち7点を図示した（第53図21～26）。鍋形土器（第53図21,22）、壺形土器（第53図26）、器種不明（第53図23,24,25）などがある。

〈底部資料〉

底部は4点得られている。その内1点を図示した（第54図23）。フェンサ上層式土器の底部で、器表面は石灰岩が欠落シアバタ状を呈する。（砂川正幸）

第15表 土器出土一覧

地区	層	分類	後期土器										フェンサ上層式		グスク土器				不明胸部	小計	
			甕									壺 口縁部	胴部	底部	鍋		壺 口縁部	器種不明 口縁部			
			口縁部			底部					口縁部				底部	口縁部					口縁部
			I	II	III	I	II	III	IV	V											
A 地区	1号墓覆土											1							1	2	
A 地区	2号墓覆土																		1	1	
A 地区	3号墓墓庭前覆土																		1	1	
B 地区	4号墓左側斜面覆土											1				1			52	54	
B 地区	5号墓		1	1	1	1	1	2				4		1*					75	87	
B 地区	6号墓墓庭覆土		4	2	1	2	2				1	6				1	1		134	154	
B 地区	7号墓			1	3		1				3	1							43	52	
B 地区	12号墓墓室覆土							1											4	5	
B 地区	13号墓前庭前覆土			1															23	24	
試掘No 1	V				2		2													4	
	VIa						1					6							54	61	
	VIb		2			1	1					10		1					49	64	
	VIc						1			1			1						19	22	
	VIe		2	3	2	3						7		1	1		1		70	90	
	VII		3	2	2	1					1		1						52	62	
	小計		12	10	11	8	9	3	5	1	37	1	3	1	2	2			578	683	
試掘No 2											1							16	17		
試掘No 4			1															3	4		
出土地点不明		1	2		1	1	1				21	1		1		1		140	170		
合計		1	15	10	12	9	10	3	5	1	59	2	3	2	2	3		737	874		

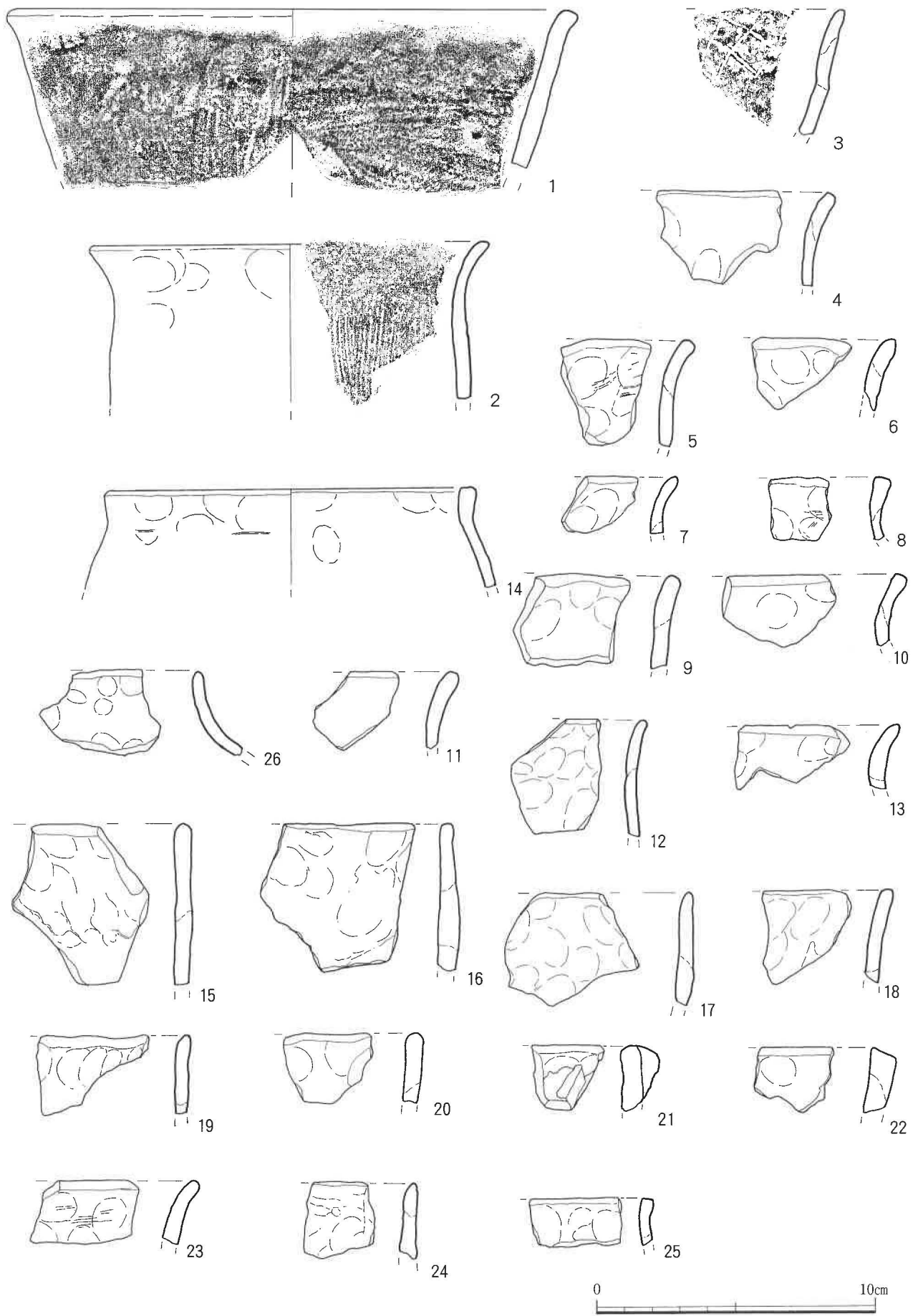
註*は滑石混入土器

第16表 a 土器口縁部観察一覧

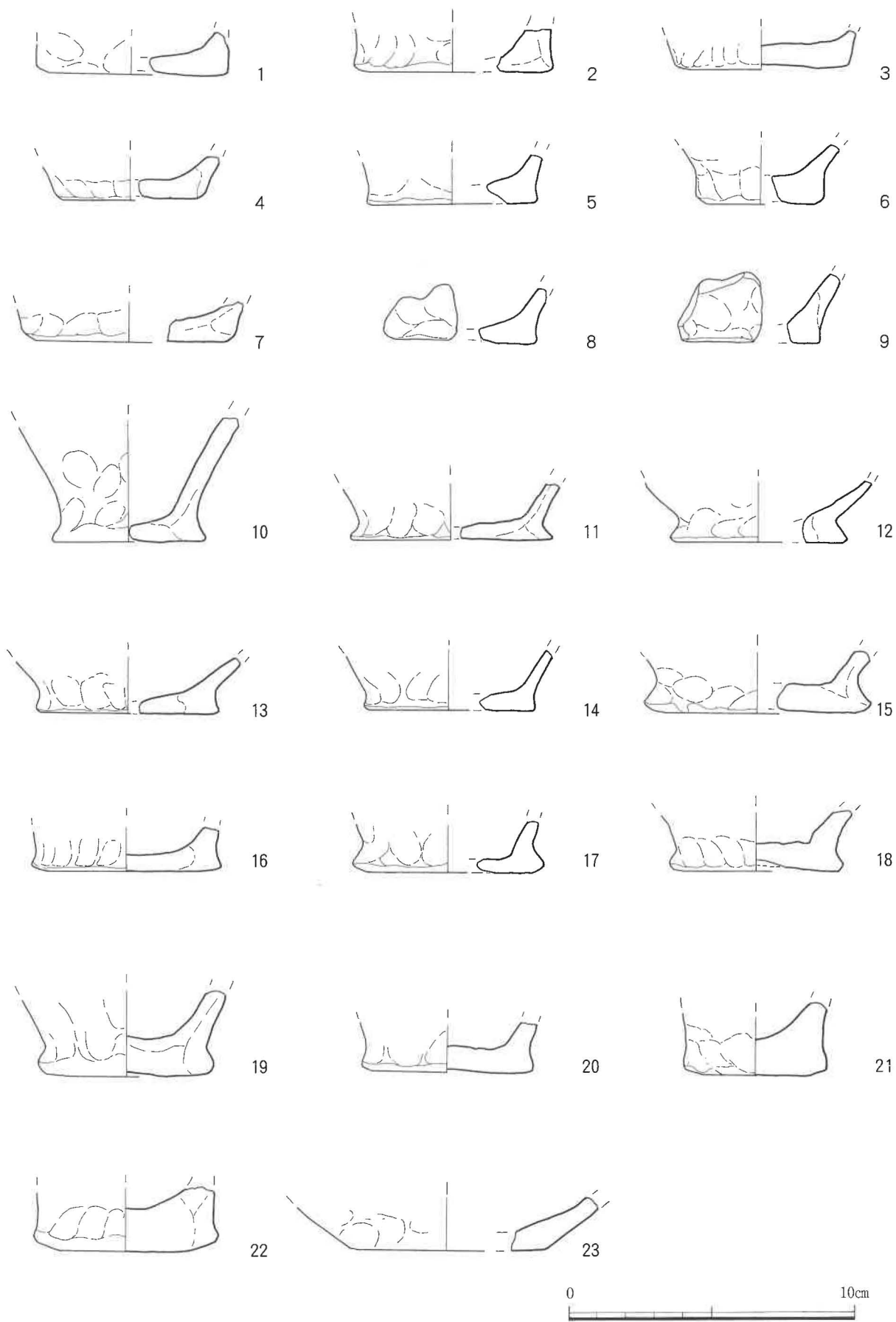
挿図 図版	番号	出土地点・層位	器種	分類	口径	特 徴	土質	色 調	混和材
第 53 図 ・ 図 版 48	1	試掘No 1, VIe層	甕	II	20.4cm	口縁部内外器面に指圧痕	泥質	黄褐色	赤色粒
	2	試掘トレンチ掘下土	甕	II	14.4cm	波状口縁。 内器面に刷毛目	泥質	黄褐色	燈色粒
	3	出土地不明	甕	I	—	口縁部に格子文	泥質	燈褐色	赤色粒
	4	6号墓墓庭覆土	甕	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	黒色粒
	5	出土地不明	甕	II	—	内器面に篋状工具の痕	泥質	燈褐色	赤色粒
	6	試掘No 1 VIe層	甕	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	燈色粒
	7	試掘No 1 VII層	甕	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	燈色粒
	8	出土地不明	甕	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	黒色粒
	9	試掘No 1 VIb層 (石列層の上)	甕	II	—	内器面に刷毛目	泥質	燈褐色	燈色粒
	10	6号墓墓庭覆土	甕	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	赤色粒
	11	試掘No 1 VII層	甕	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	赤色粒
	12	6号墓右側石積み(一段目) 覆土	甕	II	—	内器面に篋状工具の痕	泥質	燈褐色	赤色粒
	13	試掘No 1 VII層	-	II	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	白色粒
	14	6号墓墓庭覆土	壺	III	—	口唇部を面取り。 内器面に篋状工具の痕	泥質	燈褐色	赤色粒
	15	試掘No 1 VII層	甕	III	—	内器面に篋状工具の痕	泥質	赤褐色	白色粒
	16	試掘No 1 VII層	甕	III	—	内器面に刷毛目	泥質	燈褐色	赤色粒
	17	試掘No 1 VIe層	甕	III	—	波状口縁。 内・外器面に指圧痕	泥質	黄褐色	赤色粒
	18	7号墓	甕	III	—	内器面に刷毛目	泥質	黄褐色	黒色粒
	19	試掘No 1 VIe層	甕	III	—	内・外器面に指圧痕	泥質	黄褐色	赤色粒
	20	試掘No 1 VIe層	甕	III	—	内・外器面に指圧痕	泥質	燈褐色	赤色粒
	21	試掘No 1 VIb層 (石列層の上)	鍋	グスク	—	外耳を縦位に貼付。 内器面に指圧痕。	砂質	赤褐色	貝殻粉末
	22	試掘No 1 VIe層	鍋	グスク	—	内湾口縁。口唇部を面取 りし、滑石を塗布。	砂質	赤褐色	赤色粒
	23	試掘No 1 VIe層	-	グスク	—	外器面に指圧痕	泥質	赤褐色	赤色粒
	24	出土地不明	-	グスク	—	内・外器面に指圧痕	泥質	赤褐色	白色粒
	25	6号墓右側石積み(一段目) 覆土	-	グスク	—	内器面に刷毛目	泥質	赤褐色	赤色粒
	26	4号墓左側斜面覆土	壺	グスク	—	肩部に刷毛目	泥質	赤褐色	赤色粒

第16表 b 土器底部観察一覧

挿図 図版	番号	出土地点・層位	分類	サイズ	土質	色調	混和材
第54図・図版49	1	7号墓	I	6 cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	2	試掘No.1 VII層	I	4.8cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	3	試掘No.1 VII層	I	6 cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒・石英
	4	B地区5号墓	I	7 cm	泥質	赤 褐 色	赤色粒
	5	7号墓ユンボ掘り下げ	I	6 cm	泥質	赤 褐 色	黒色粒
	6	試掘No.2 包含層最下部より10cm上	I	4.4cm	泥質	黄 褐 色	黒色粒
	7	試掘No.1 V層	I	7 cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒・石英
	8	試掘No.1 V層	I	—	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	9	出土地不明	I	—	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	10	B地区5号墓	II	5.4cm	泥質	黄 褐 色	貝殻細片
	11	試掘No.1 VII層	II	7 cm	泥質	赤 褐 色	赤色粒
	12	試掘No.1 VIe層	II	6.2cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	13	6号墓墓庭覆土	II	6.4cm	泥質	赤 褐 色	赤色粒
	14	6号墓右側石積み(一段目)覆土	II	6.0cm	泥質	赤 褐 色	赤色粒
	15	B地区5号墓	III	8.0cm	泥質	燈 褐 色	黒色粒
	16	出土地不明	III	6.6cm	泥質	燈 褐 色	黒色粒
	17	試掘No.1・a層	III	6.8cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	18	B地区5号墓	IV	6.0cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	19	B地区5号墓	IV	6.2cm	泥質	黄 褐 色	赤色粒
	20	B地区	IV	6.0cm	泥質	燈 褐 色	赤色粒
	21	7号墓墓口付近・覆土	V	5.0cm	砂質	赤 褐 色	赤色粒
	22	試掘No.1 VII層	V	6.6cm	砂質	赤 褐 色	赤色粒
	23	試掘No.1 VIc層上部	フェンサ 上層式	7.0cm	泥質	黄 燈 褐 色	白色細片



第53図 土器（口縁部）



第54图 土器 (底部)

第3節 須恵器

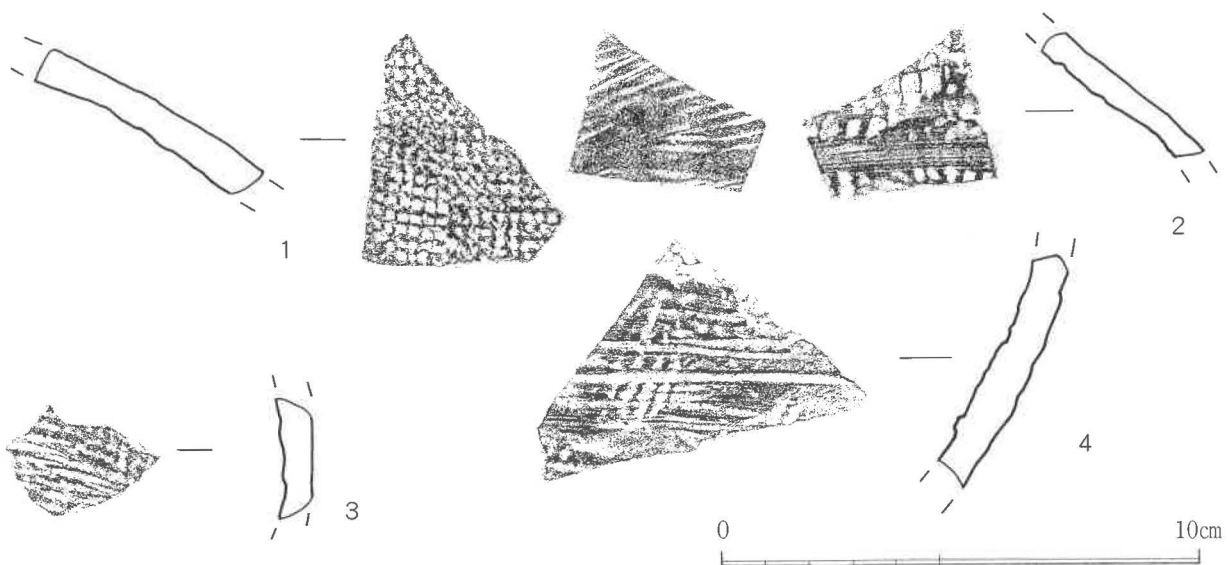
総数5点が得られ、うち4点を第55図(図版35)に示した。いずれの資料も胎土に白い微粒子を混入し、いわゆる南島須恵器に特徴的な様相を持つ。すべて胴部片で器形を復元できる資料は得られなかったが、いずれも器種は壺と考えられる。以下、各遺物について記す。

同図1は肩部と考えられる。外面は格子目の叩き、内面は指頭押圧と微かな撫で調整が施されている。胎土はきめの細かい粘土質で、白い粒のほかに黒い微粒子も混入する。焼成は脆弱ではないものの、他の資料に比して締まりは弱い印象を受ける。内面は若干褐色がかかった灰色で外面は淡い灰色である。器厚9.1~10.1mm。6号墓墓庭覆土より出土。

同図2は肩部と考えられる。外面は綾杉文の叩き、内面は格子目の押圧による調整が施されている。また、内面の格子目を消去するように撫でも行われるが徹底しておらず、明瞭に格子目を残す箇所がある。胎土は緻密で白い微粒子を混入する。焼成は良好で全体に一様な灰色を呈す。器厚6.8~7.9mm。試掘No2より出土。

同図3は胴下部と考えられる。外面は微かな撫でが認められる。内面は樹枝文ないし綾杉文の原体を使用した押圧が見られ、その上から撫でによる消去を施しているが徹底していない。胎土は緻密で焼成も良好である。表面付近の褐色がかかった灰色が内側に黒味の強い層を挟み込み、断面はいわゆるサンドウィッチ状を呈す。器厚6.5~7mm。6号墓右側石積み一段目覆土より出土。

同図4は胴下部と考えられる。外面は平滑で目立った施文・調整痕を残さないが、横位に走る微かな稜線は、叩き後の撫で回しとも考えられる。内面は格子目の押圧を撫で消しているが完全ではなく、格子目を明瞭に残す箇所や撫での条線の深い箇所がある。胎土は精選され、焼成も良好である。表面付近の灰色が内側の黒褐色を挟み込み、断面はサンドウィッチ状を呈す。器厚9.2~10.8mm。試掘No1のVI d層より出土。そのほか、試掘No1からは肩部と考えられる破片も得られている。器厚7~8.5mm。e層最下部より出土。(菊池恒三)



第55図 類須恵器

第4節 石器

石器は11点出土した。器種が判別できるものに、石斧、敲石、磨石があり、石斧が2点、敲石が3点、磨石が5点、不明が1点であった。完形品は敲石1点のみで、あとは破損品、又は破片であった。出土地点として、墓庭や、袖垣、屋根等の覆土から出土したものと、No1 試掘トレンチ内から得られたものがあり、石斧2点と磨石5点、敲石1点は墓付近から得られた。No1 試掘トレンチではグスク期に相当する遺物包含層が確認され、出土した石器は同包含層と何らかの関係があるものと思われる。得られた石器の特徴として、磨石の破片の断面を利用して敲打器として二次使用したものや、磨石の破片の角を若干成形し、ポイント状に仕上げた後敲打作業を行ったと思われる資料が11点中3点あった事が挙げられる。出土した石器は特徴的なものを図示し、第17表にそれぞれの観察事項を示した。その他の破片資料、及び石材については出土状況を第18表に示した。

(松原哲志)

第17表 a 石器観察一覧

*計測値の単位は (cm) と (g) を使用

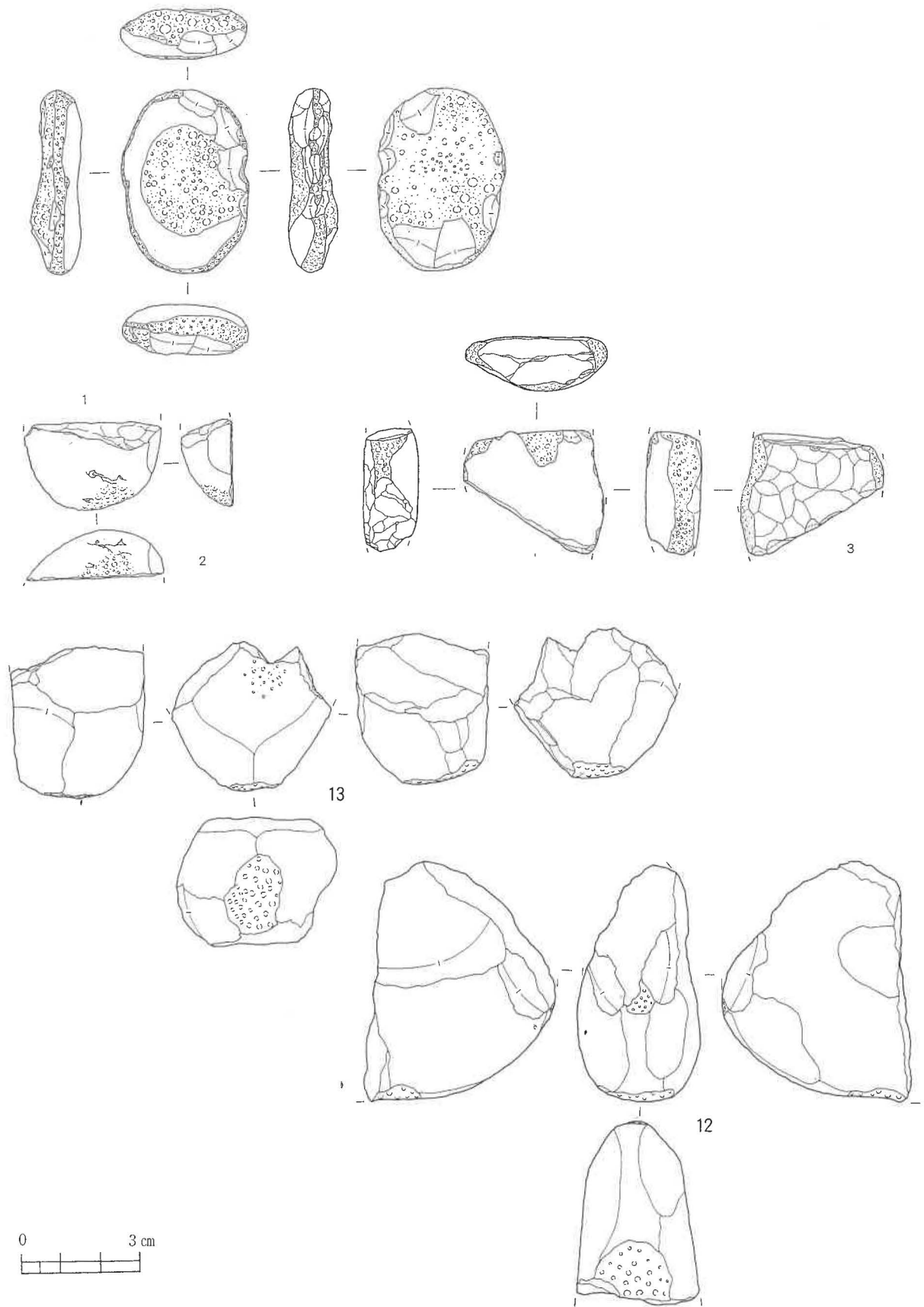
挿図 図版	番号	器種	残存状況	長さ 幅 厚さ 重量	観 察 事 項	出土地点
第56図・ 図版50	1	敲石	完形	9.5 — 2.6 200	扁平の円礫を使用。表裏面とも大きく剥離し、剥離面はそのまま敲打面として利用している。平面、横断面共に長楕円形である。正面中央は敲打面があり、その周りを磨面がC字状に展開する。側面のほとんどは敲打により潰れ、右側面は剥離痕が多く見られる。	不明
	2	敲石	破片	— 6.9 2.5 78.2	円礫の一部で、平面、断面とも半円状を呈する。正面下部には浅い敲打痕が、右側面には磨面が確認できる。二次使用の痕は見られない。	7号墓
	3	敲石	破片	— 7.2 2.8 180	上部、下部とも切損している。平面形は三角形に近く、横断面は、長楕円状になる。表面の多くは磨面を残し、上部は敲打痕が若干見られる。両側面とも浅い敲打痕が密に見られる。	12号墓墓庭覆土
第57図・ 図版50	4	石斧	刃部	— 4.5 1.5 58.8	平面形は短冊形で、横断面は長楕円形と、扁平な石斧である。上部は切損し、刃部は半分程剥離している。刃部は片刃で、裏面は表面より研磨面が少ない。左側面は研磨、右側面は若干潰されており、両側面とも調整後に剥離した痕が残る。	1号墓右側斜面表採
	5	石斧	刃部	— 5.7 3.9 240	基部は折損している。平面形は短冊形で、横断面は隅丸長方形を呈する蛤刃状の石斧である。刃部は両刃で、刃縁は弧状を呈する。器表面は、破損面を除き全面研磨されている。裏面の刃縁部には、斜めに走る擦痕が確認できる。両側面には研磨の際にできた稜が1本ずつ確認できる。	1号墓ヤジョーマーイ外右石積付近覆土
	6	磨石	破片	6.5 6.7 2.6 115.9	円礫の一部で、平面形は略三角形である。正面上部に磨面が認められ、磨面上部から下部にかけて縦方向に1本稜が確認できる。裏面は、三箇所剥離の痕が見られ、中央がやや潰れている事などから、二次使用されたものと思われる。	不明
	7	磨石	破片	— — — 200	円礫の一部で、平面形は逆台形状である。表面右端は顕著に研磨されている。上面は敲打による二次使用の為、正面との境の縁が強く潰れている。下面も微弱に潰れている。	1号墓屋根左側石積覆土
	8	磨石	破片	— — — 130	平面形は三日月状で、横断面は三角形を呈す。正面の磨面では長軸方向に擦痕が確認できる。左右両縁は角が潰れ、滑らかになる。上下先端部は潰れも強く、所々剥離している。磨石として使用後、敲打器に転用されたものと思われる。	6号墓右側石積み(一段目)覆土
	9	磨石	破片	— 3.4 2 51.4	平面形は略台形状で、横断面は三角形を呈する。正面中央部に磨面が確認でき、磨面の両側は自然面が残る。正面下部は、表裏面から剥離調整を行い三角錘状に成形しており、敲打器類として二次使用した可能性が考えられる。	5号墓
	10	磨石	破片	— — — 68.4	棒状の礫を使用。平面形は長方形状で、横断面は略扇状に近い形を呈する。左側面上部と、右側面下部が剥離している。正面には磨面がフラットな状態で残る。裏面から右側面にかけて、微弱な磨面が残る。	6号墓右側石積み(一段目)覆土
	11	不明	破片	— — — 22.2	正面の大部分は磨面で、左端は数ヶ所の剥離が見られる。二次使用の痕は見られない。	試掘No1 VIa層

第17表 b 石器観察表一覧

挿図 図版	番号	器種	残存状況	長さ 幅 厚さ 重量	観察事項	出土地点
第56図 (図版ナシ)	12	敲石	破片	6.4 6.9 5.9 334	平面観は多角形で縦横断面とも略四角形になる。正面観の下部には弱い敲打痕が見られる。左側面には縦長な剥離痕が確認できる。二次使用の痕は見られない。	試掘No1 VIc層 最下部
	13	敲石	破片	10.2 5.3 7.9 569	平面観は長楕円状で、横断面は半長楕円状、縦断面は半円形になる。正面観の中央と下部、右側面の中央には敲打による痕が見られる。左側面には大きな剥離面が見られ、割れ面以外は磨面である。二次使用の痕は見られない。	試掘no1 VIe層 最下部

第18表 石器出土一覧

出土地点	種類	石 斧	磨 石	敲 石		不 明	合 計
		破 片	破 片	完 形	破 片		
1号墓	右側斜面表採	1				1	1
	右側斜面覆土						1
	屋根左側石積		1				1
	ヤジョーマーイ外 右石積覆土	1					1
3号墓	墓庭前覆土					1	1
5号墓	墓外		1			1	2
6号墓	右側石積(1段目)		2			1	3
7号墓	不明				1		1
12号墓	墓庭覆土				1		1
試掘 no 1	表採					1	1
	VIa層					2	2
	VIa層(褐色土) 赤色石灰岩出土レベル					1	1
	VIc層上部					1	1
	VIc層最下部				1		1
	VIe層最下部				1		1
	VII層					1	1
	不 明		1	1			2
	合 計	2	5	1	4	10	22



第56図 石器〈1〉（敲石類）



第57图 石器〈2〉(石斧·他)



図版1 1段左：A地区遠景（南西から） 1段右：C地区伐採後（西側から）
 2段：B地区伐採後{5号墓（右）・11号墓（奥）}
 3段左：5号墓の伐採作業風景 3段右：6号墓周辺検出作業風景



図版2 1号墓

1段 : 全景

2段左 : 墓室内

3段左 : 墓室内 (左タナ)

2段右 : 1号墓 (東側より)

3段右 : 墓室裏正面



図版3 2・3号墓

1段 : 2・3号墓全景 (右から)

2段左 : 3号墓左袖垣 (外側)

3段左 : 3号墓室内

2段右 : 2号墓左袖垣 (内側より)

3段右 : 2号墓室



図版 4 4号墓

1段左：全景

2段左：左袖垣

3段左：墓室正面

2段右：4・5号墓伐採後（左から）

3段右：墓外出土状況



図版5 5号墓

1段 : 全景

2段左 : 墓室内

2段右 : 裏正面

3段左 : 築造月日 (サンミデー左角)

3段右 : シルヒラシ



図版 6 6号墓

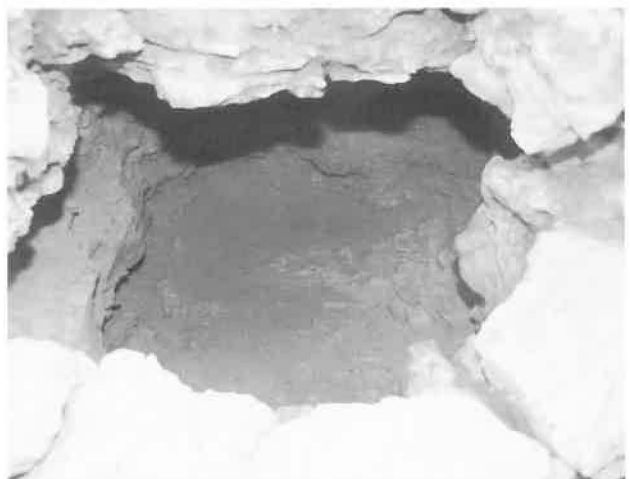
1段 : 全景

2段左 : 墓正面

3段左 : 墓室

2段右 : 墓室天井に残る漢数字 (「一」「二」)

3段右 : 墓室天井に残る漢数字と片仮名 (「三」「口」「イ」)



図版7 7号墓

1段 : 全景

2段左 : 7号墓 (奥は6号墓)

3段左 : 6号墓左側の石積

2段右 : 墓室

3段右 : 墓室



図版 8 8号墓
 1段 : 全景
 2段左 : 墓庭
 3段左 : 裏正面

2段右 : 石厨子の墓室での検出状況
 3段右 : 左側タナ



図版9 9・10号墓

1段左：9号墓 正面

2段左：9号墓 墓室

3段：8～10号墓（左側）

1段右：10号墓 墓室

2段右：10号墓 墓室右側



図版10 11号墓

1段 : 全景

2段左 : 墓室正面

3段左 : 墓右タナ

2段右 : 墓口 (内側から)

3段右 : シルヒラシ



図版11 12・13号墓

1段 : 12・13号墓と墓道への石橋

2段左 : 12号墓正面

3段左 : 12号墓の蔵骨器出土状況

2段右 : 13号墓正面

3段右 : 13号墓の蔵骨器出土状況



図版12 15号墓

1 段 : 近景 (右は8号墓)

2 段 : 墓正面

3 段左 : 墓室

2 段右 : 裏正面

3 段右 : 伐採後の状況



図版13 16号墓
 1段 : 遠景 (右は8号墓)
 2段 : 全景
 3段左 : 墓室

3段右 : 伐採後の状況



図版14 17号墓

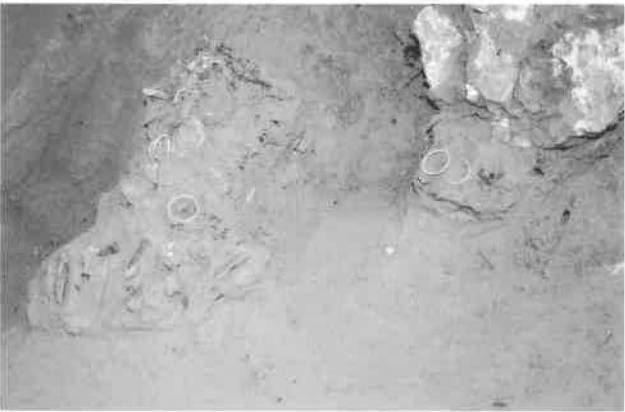
1 段 : 全景

2 段左 : 墓室内の蔵骨器出土状況

3 段左 : 墓室

2 段右 : 裏正面 (右側)

3 段右 : 裏正面 (左側)



図版15 17号墓

1 段左：墓口

2 段左：蔵骨器・瓶・指輪・釘の
検出状況（墓庭）

3 段左：指輪・釘の検出（左袖垣端下）

4 段左：指輪・釘の一部取り上げ後

1 段右：瓶（沖縄産施釉陶器）の検出状況

2 段右：蔵骨器の検出状況

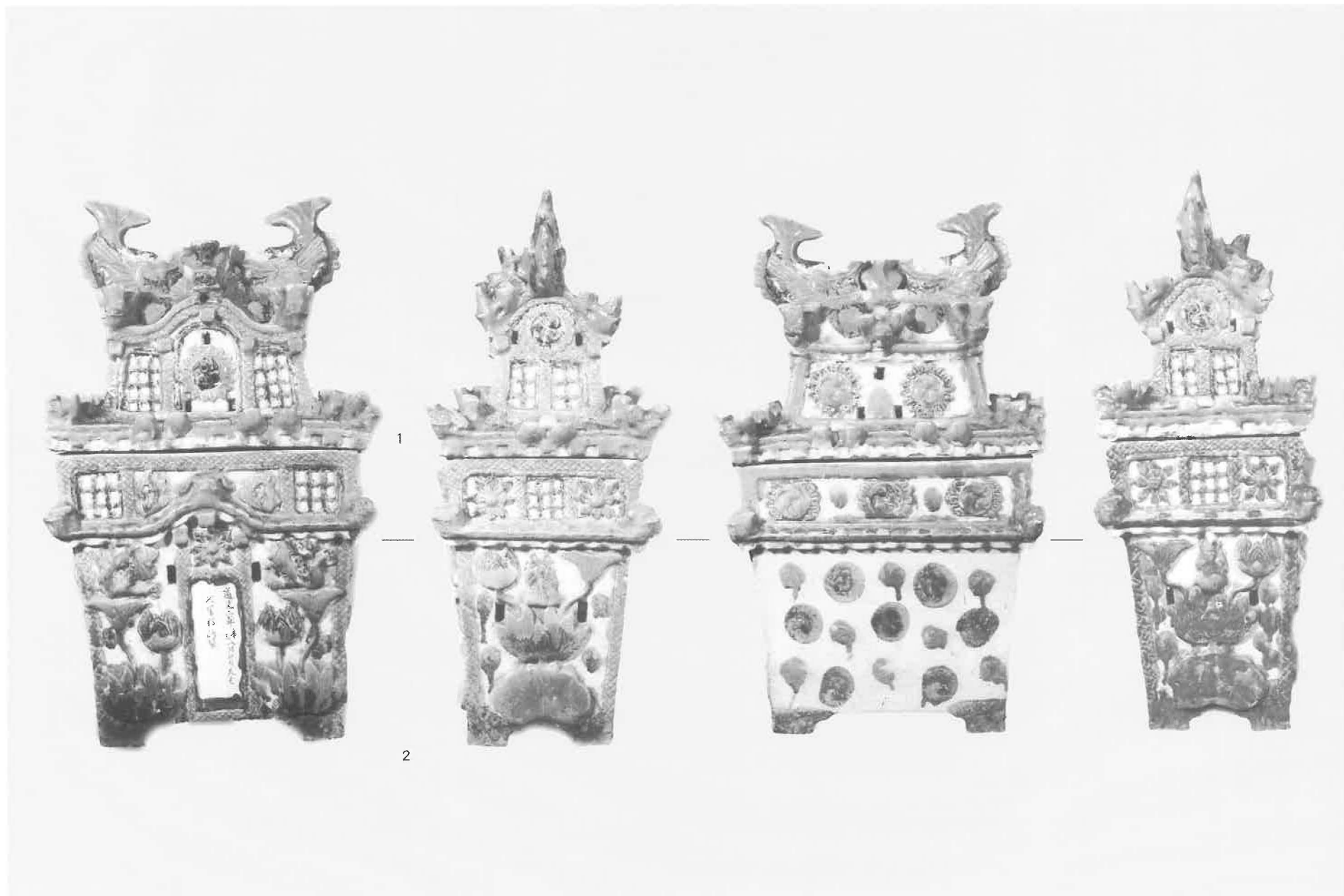
3 段右：酒注（沖縄産施釉陶器）の検出状況

4 段右：土坑完掘状況（墓庭外）

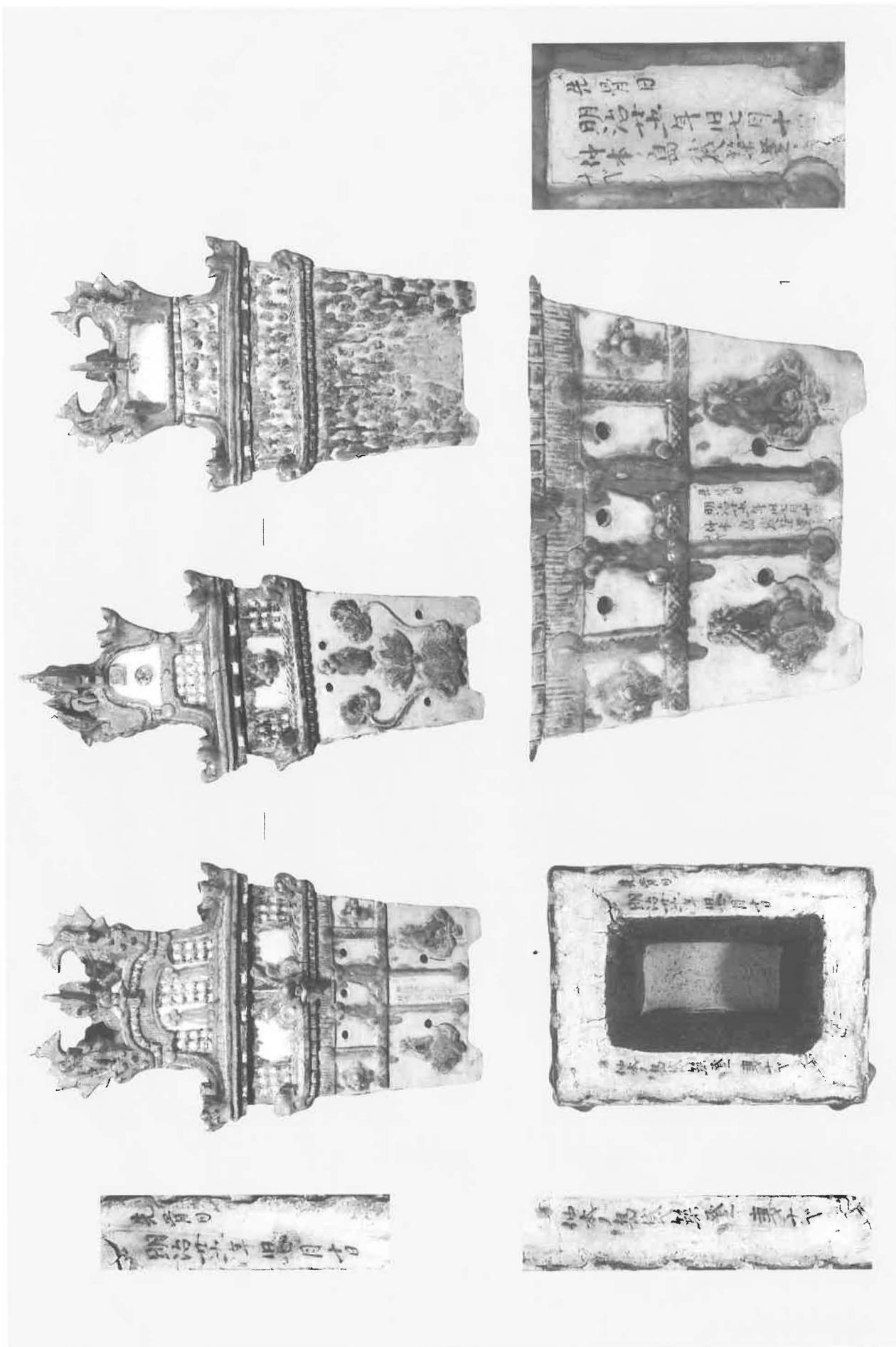


図版16 1段左：14号墓検出状況
 2段左：D地区の石積
 3段左：D地区の石積裏側
 4段左：劔の検出状況

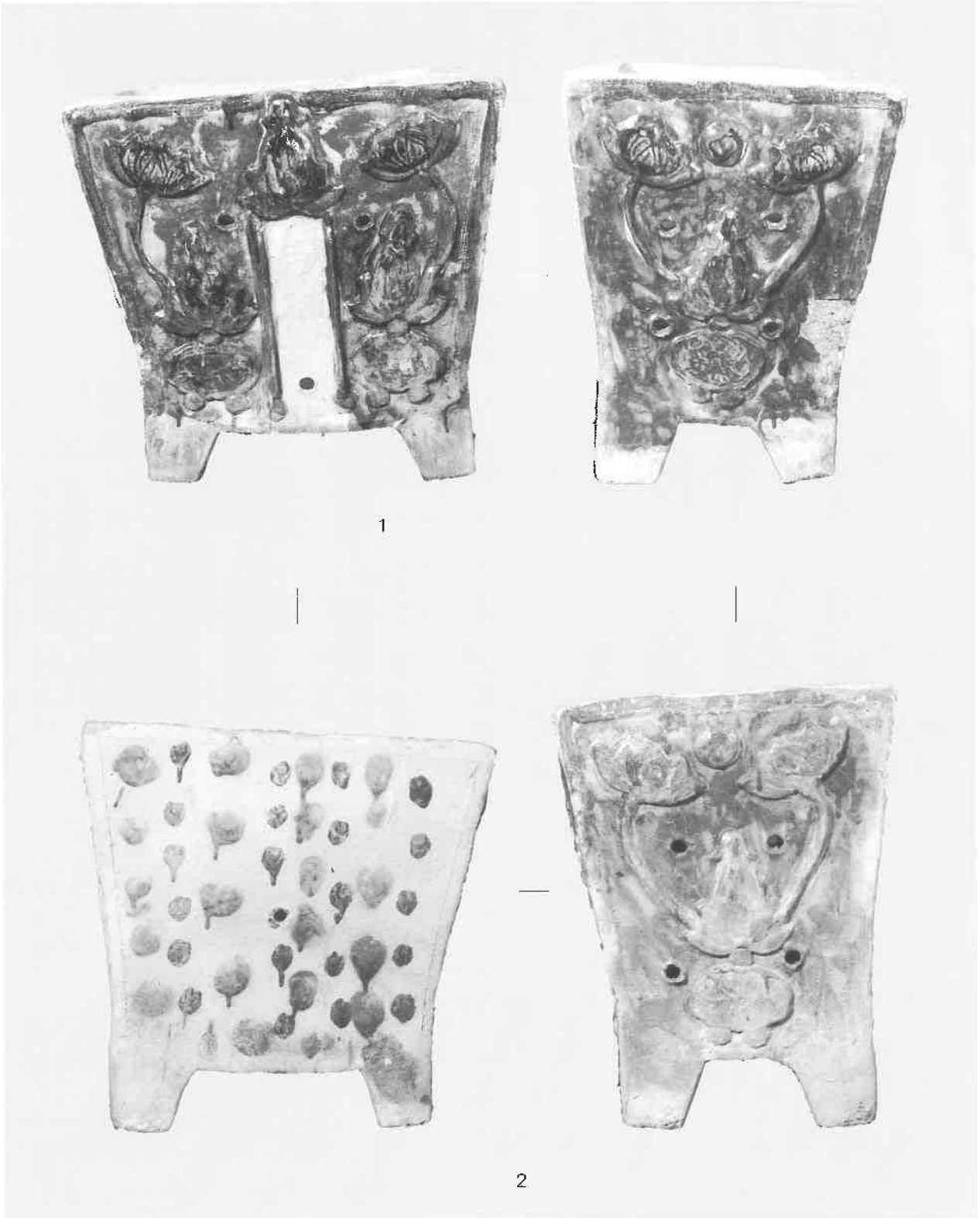
1段右：試掘No.1 トレンチ (全景)
 2段右：試掘No.1 トレンチ (東壁)
 3段右：試掘No.2 トレンチ (北壁)
 4段右：試掘No.2 トレンチ (南壁)



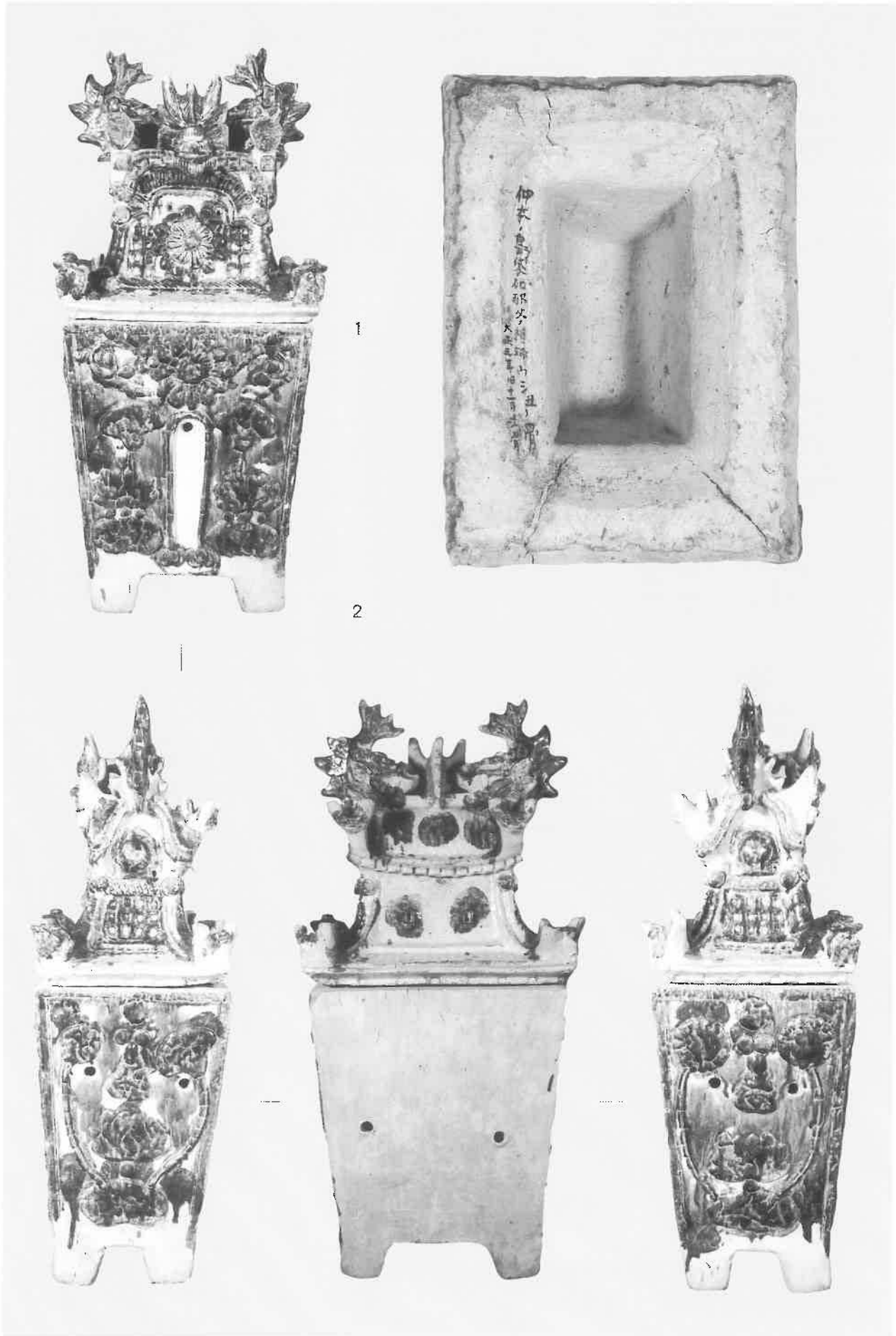
图版17 藏骨器〈1〉1号墓 II類 陶製家形藏骨器 No.1 (蓋・身)



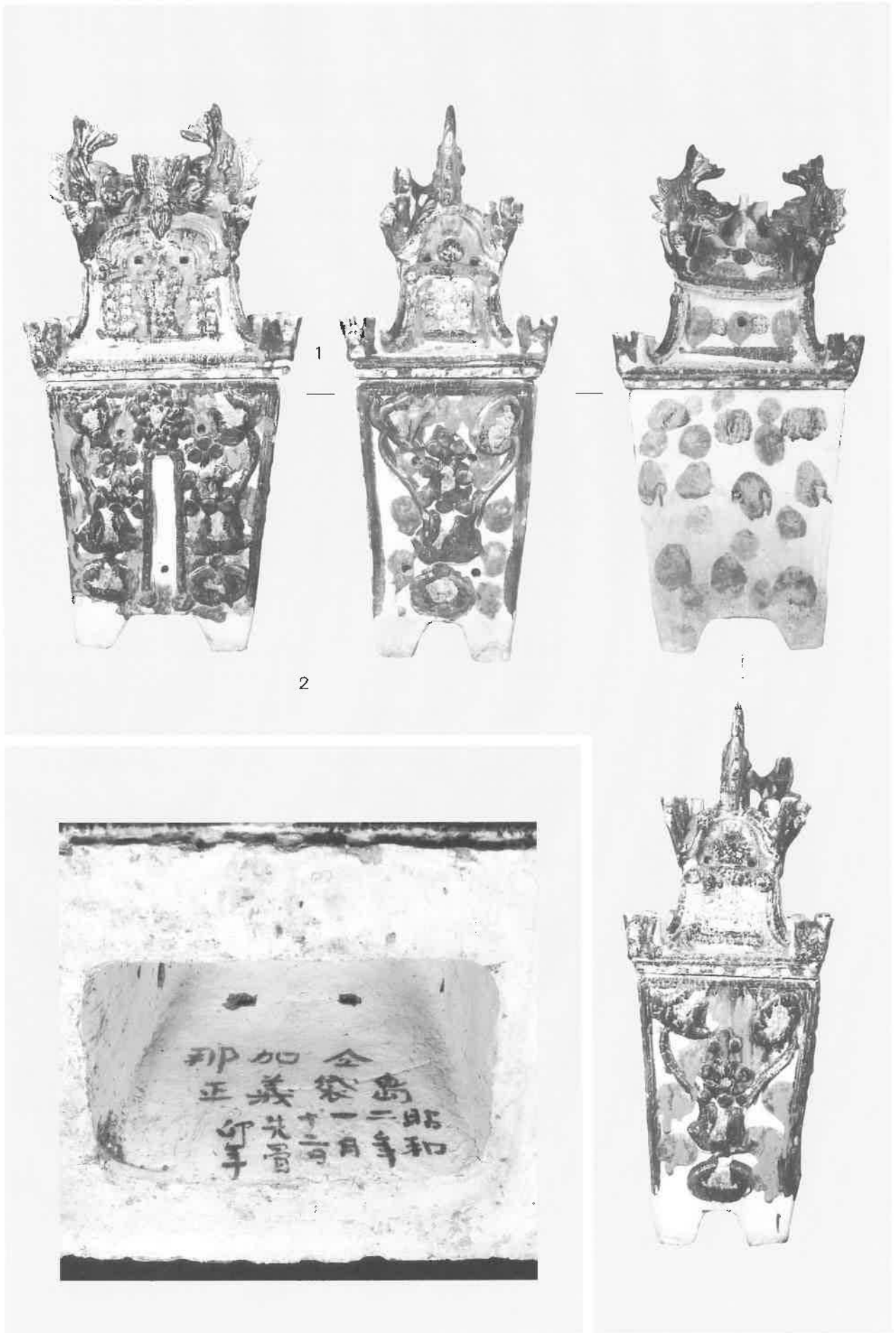
図版18 蔵骨器〈2〉1号墓 II類 陶製家形蔵骨器 No.2 (蓋・身)



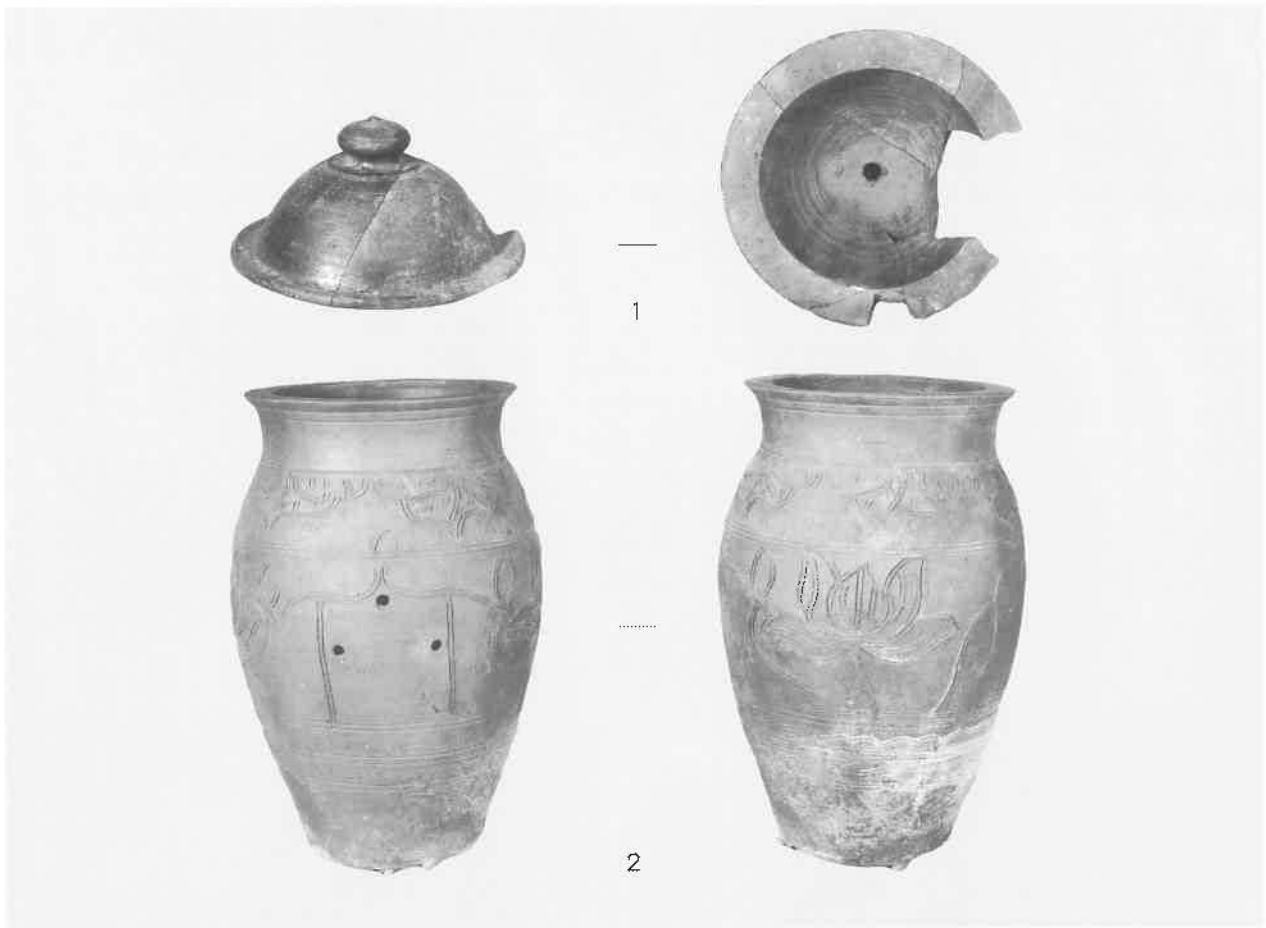
图版19 藏骨器〈3〉 1号墓 II類 陶製家形藏骨器 No.3 (身)



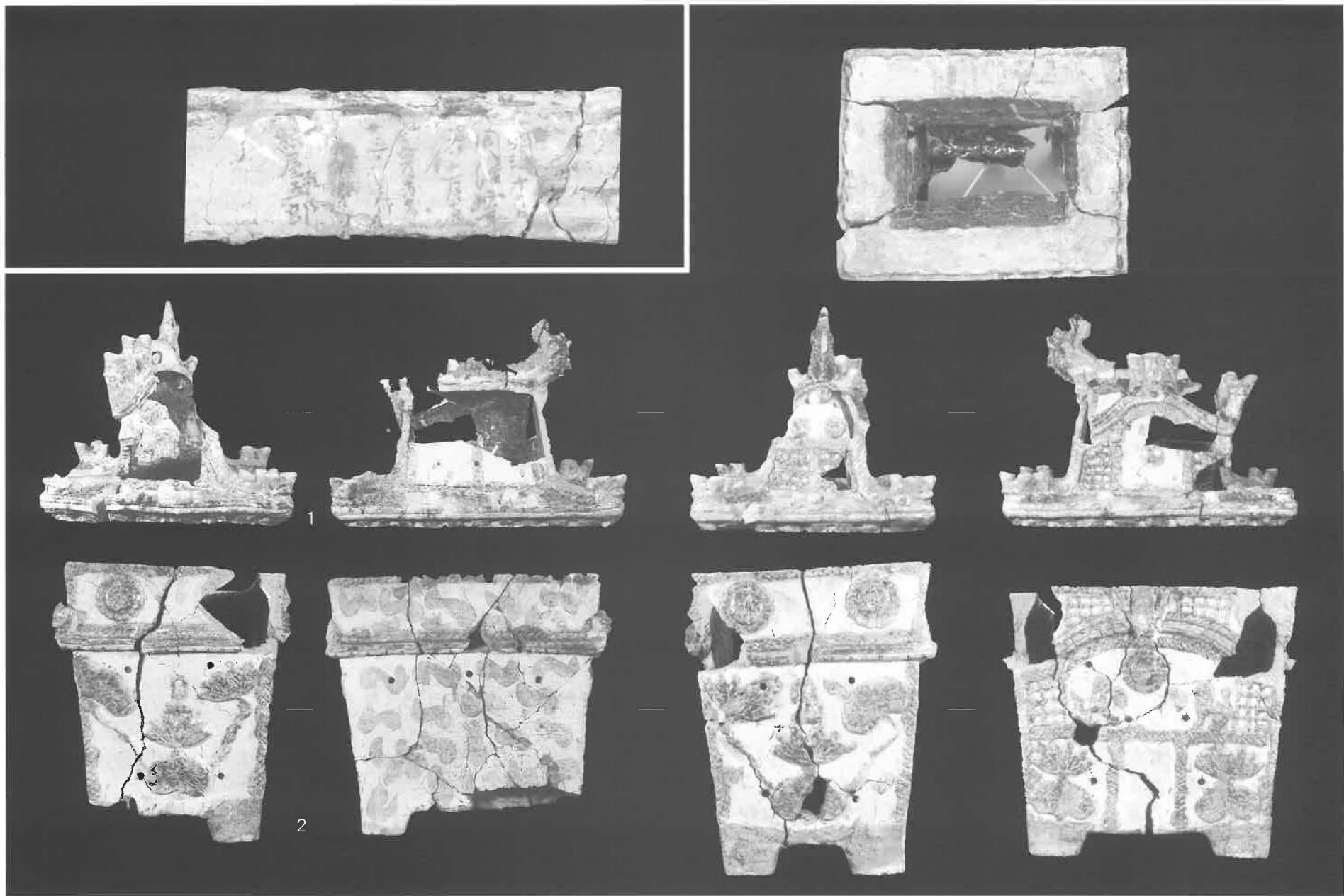
図版20 蔵骨器〈4〉1号墓 II類 陶製家形蔵骨器 No.4 (蓋・身)



图版21 藏骨器〈5〉1号墓 II类 陶製家形藏骨器 No.5 (盖·身)



图版22 藏骨器〈6〉1号墓 Ⅲ類 陶製有頸甕形藏骨器 No.6 (1・2)、No.7 (3・4)



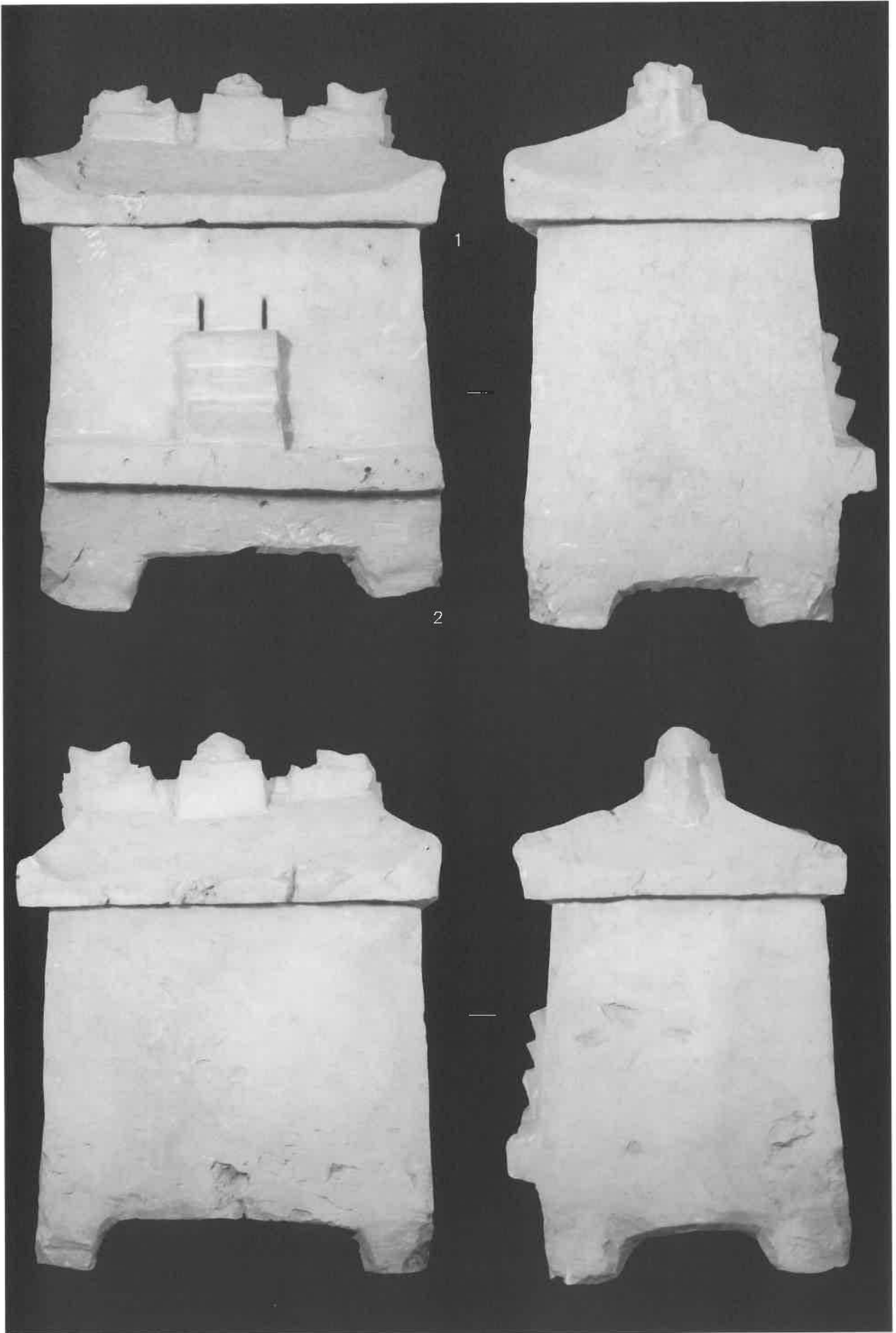
图版23 藏骨器〈7〉4号墓 II類 陶製家形藏骨器



图版24 藏骨器〈8〉4号墓 II类 陶製家形藏骨器



图版25 藏骨器〈9〉17号墓 II类 陶製家形藏骨器



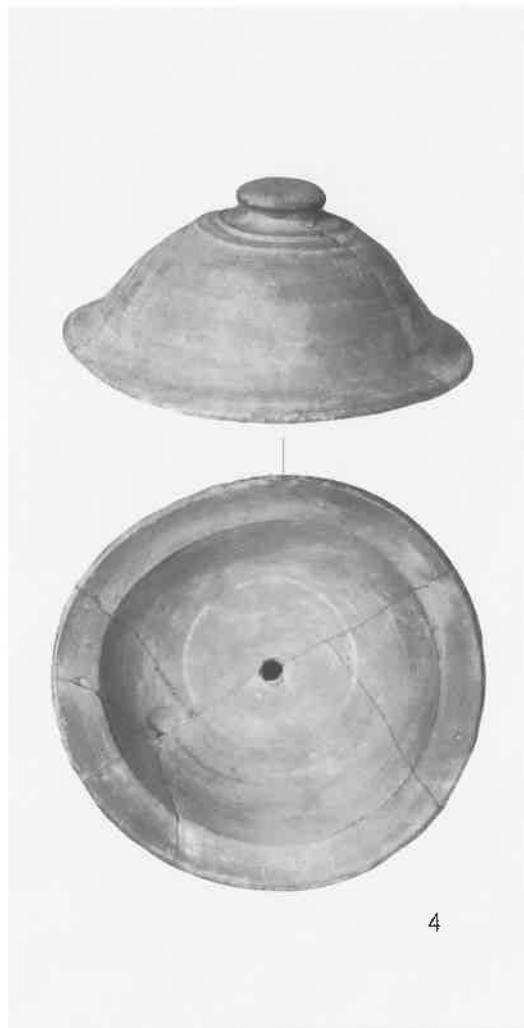
图版26 藏骨器〈10〉8号墓 1类 石製家形藏骨器



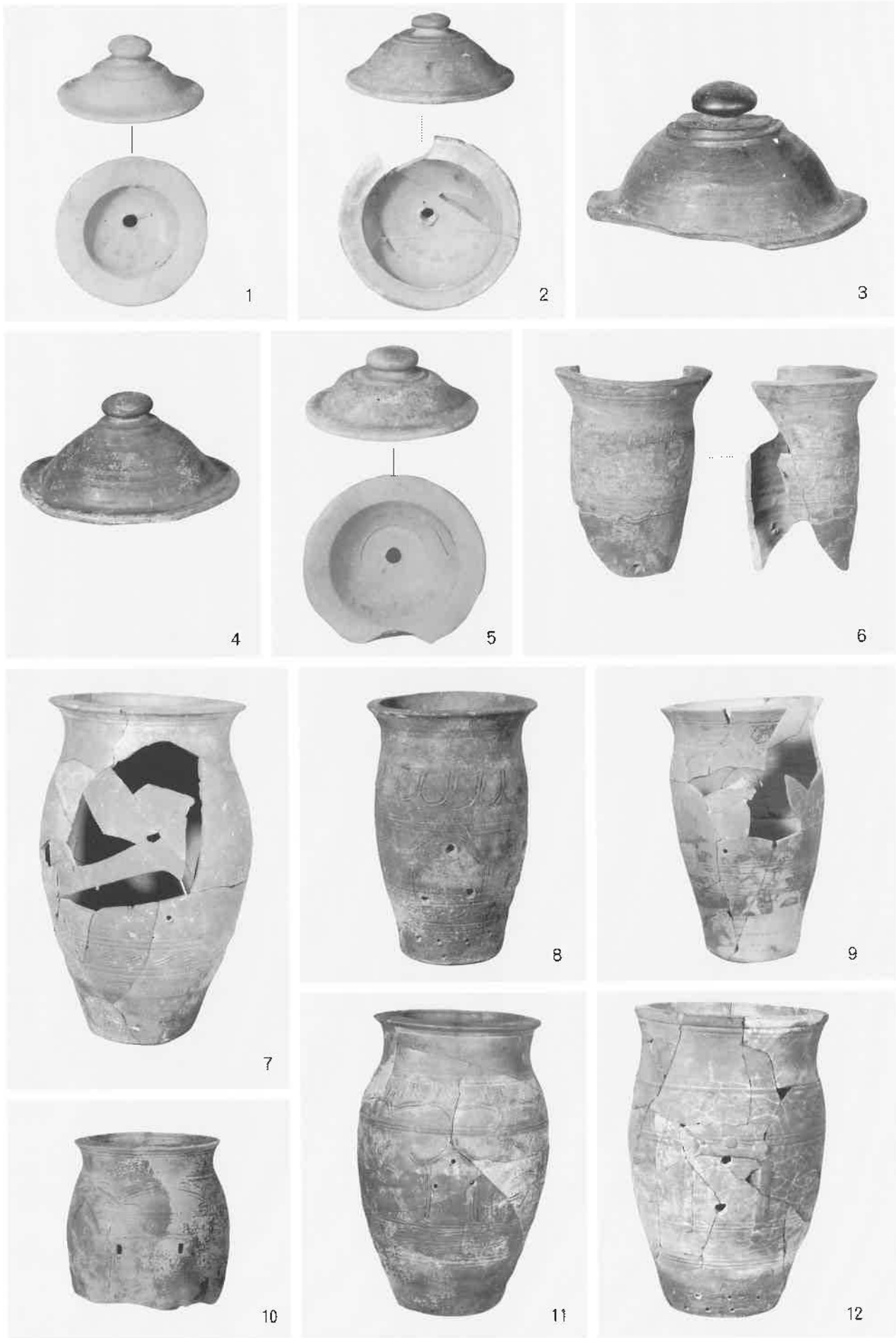
图版27 藏骨器 (11) 8号墓 Ⅲ类 陶製有頸甕形藏骨器(3·4)、Ⅳ类 軒付甕形藏骨器(1·2)



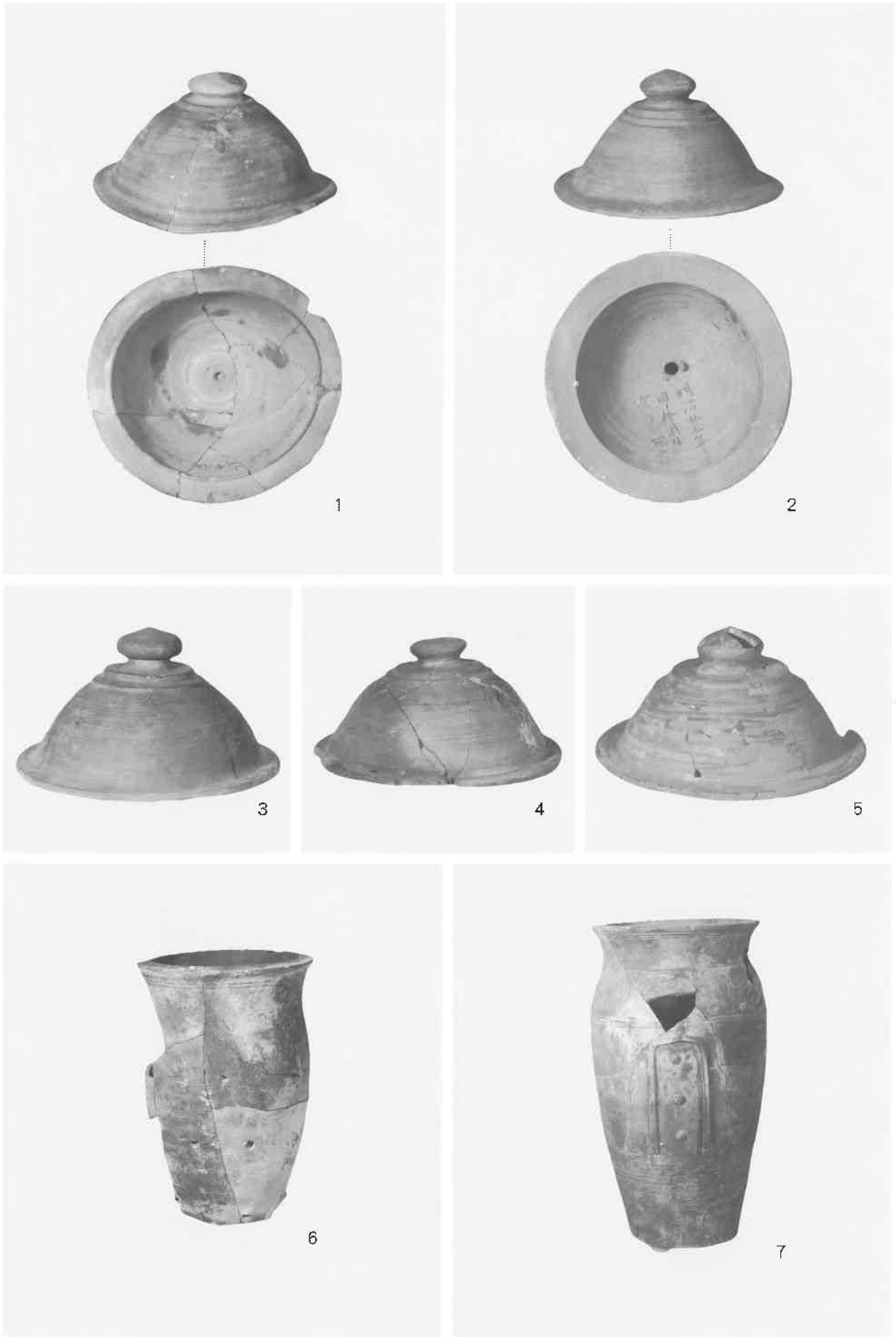
图版28 藏骨器 (12) 2号墓(1)、3号墓(2~11) Ⅲ類 陶製有頸甕形藏骨器



图版29 藏骨器 (13) 11号墓(1)、12号墓(2·3)、15号墓(4·5) Ⅲ类 陶製有頸甕形藏骨器



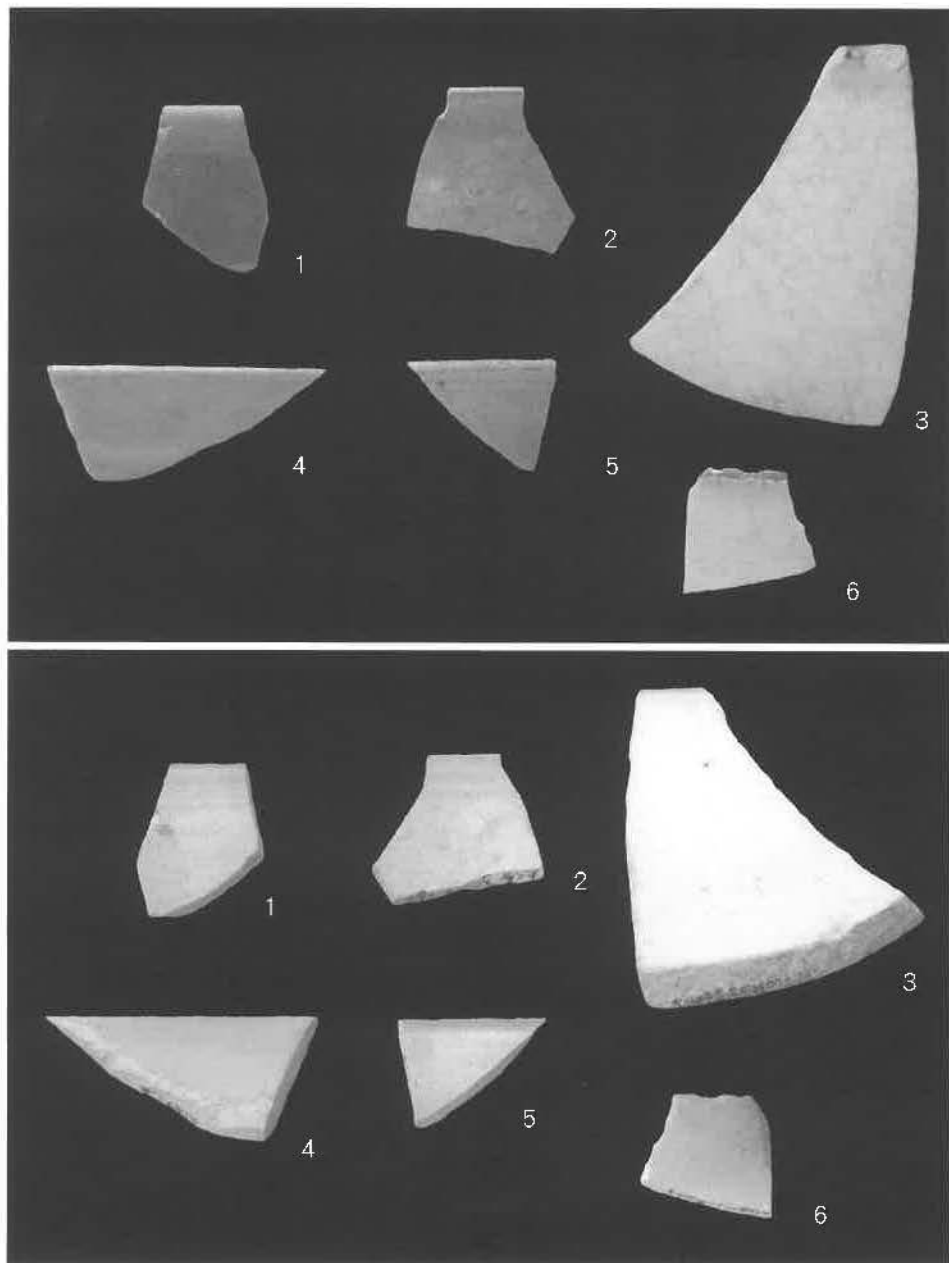
图版30 藏骨器 (14) 12·13号墓(7·8)、13号墓(1~6、9~12) Ⅲ類 陶製有頸甕形藏骨器



图版31 藏骨器 (15) 17号墓 Ⅲ類 陶製有頸甕藏骨器 (1~7)



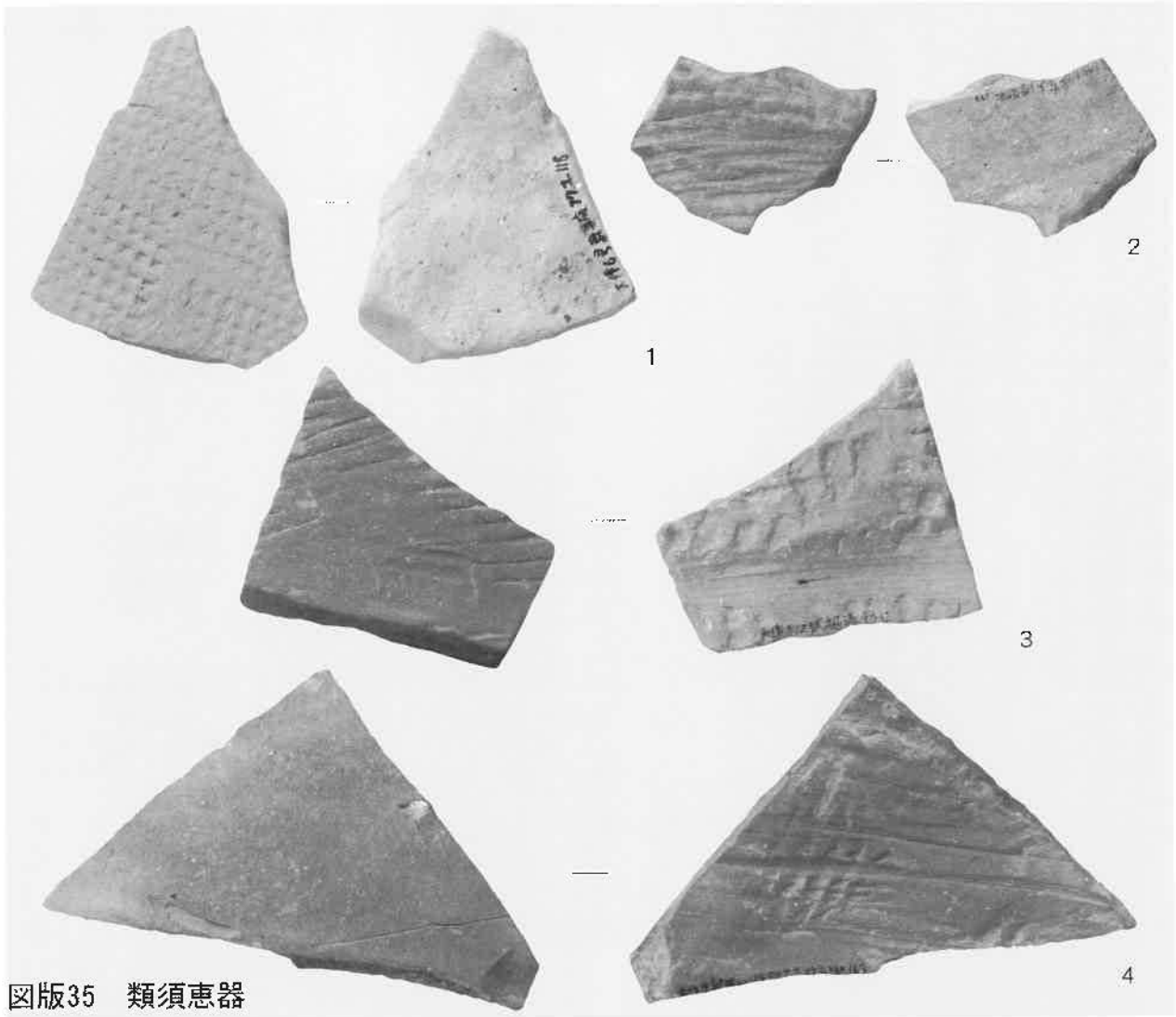
图版32 藏骨器〈16〉17号墓 Ⅲ類 陶製有頸囊藏骨器(1~4)



图版33 白磁・青磁 (上：外面・下：内面)



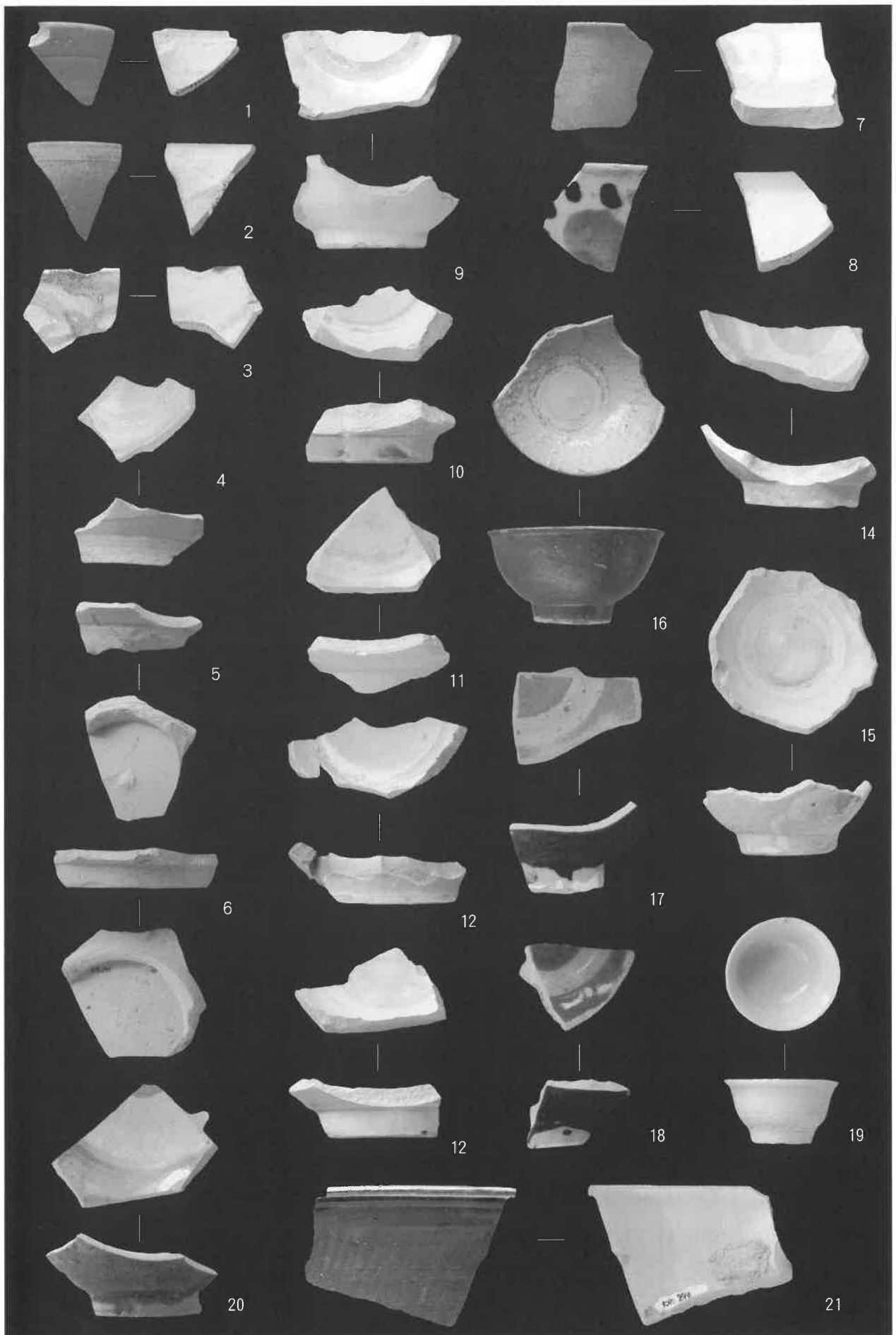
图版34 染付



図版35 類須恵器



図版36 陶質土器



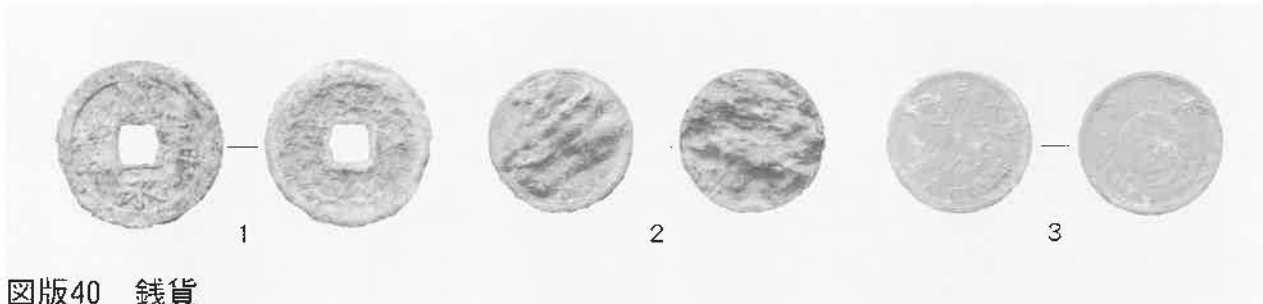
図版37 沖縄産施釉陶器 (1)



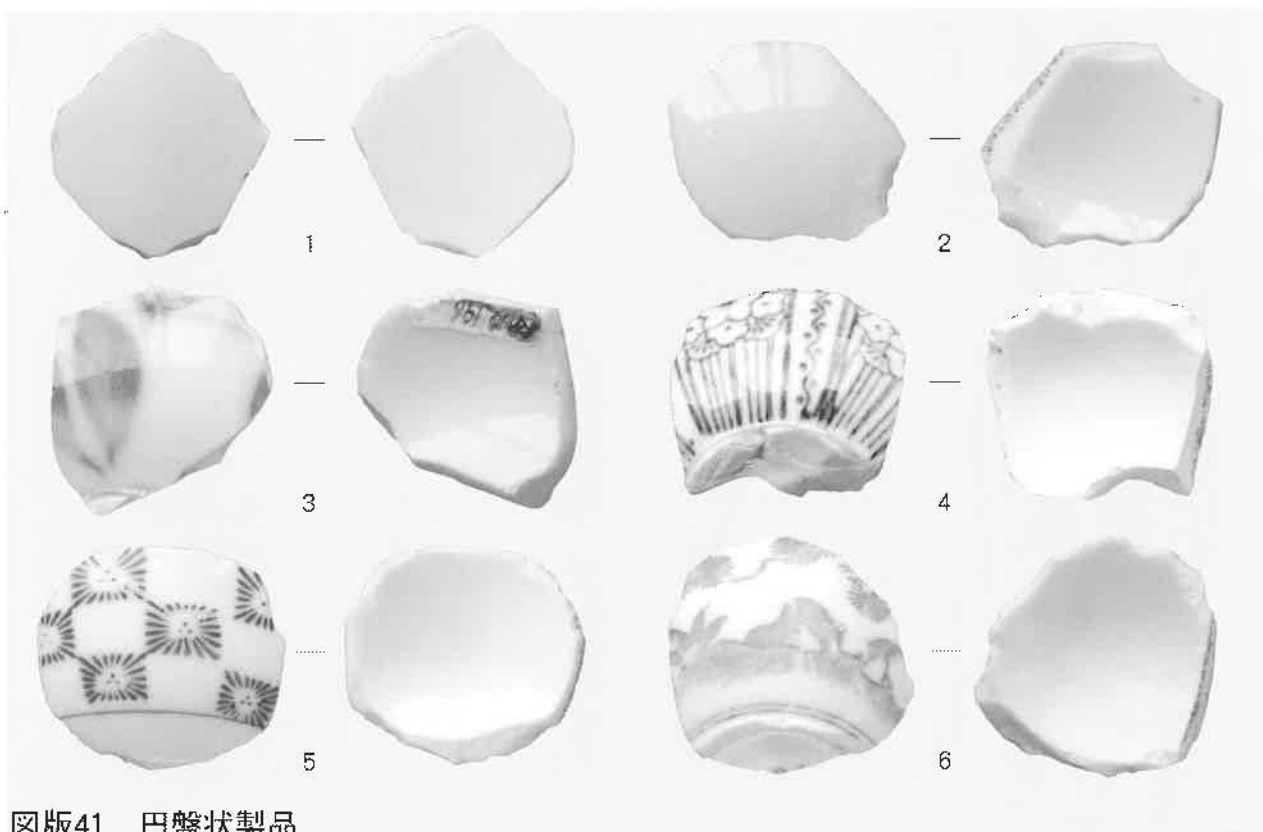
図版38 沖縄産施釉陶器（2）



图版39 本土産磁器



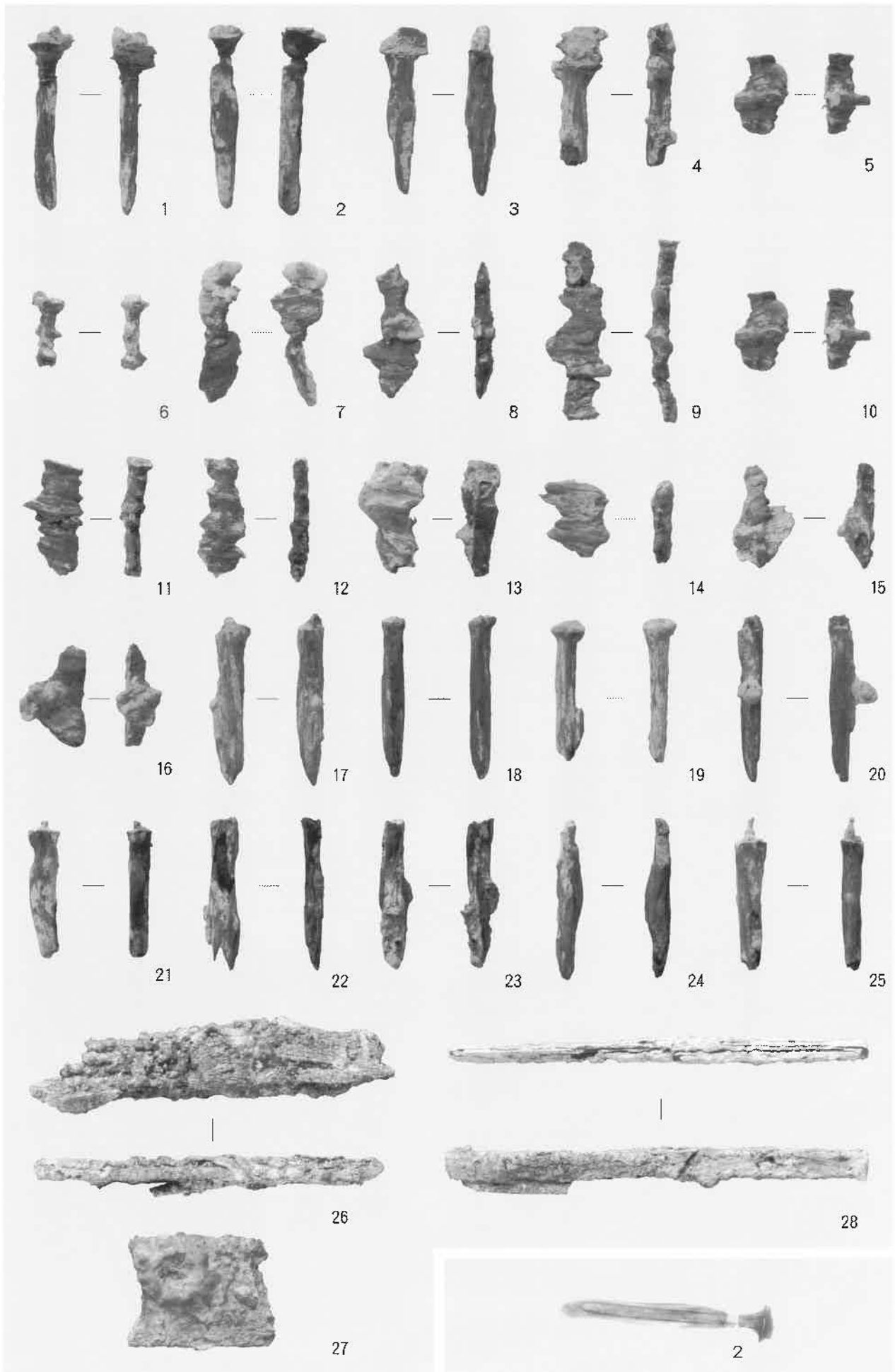
図版40 銭貨



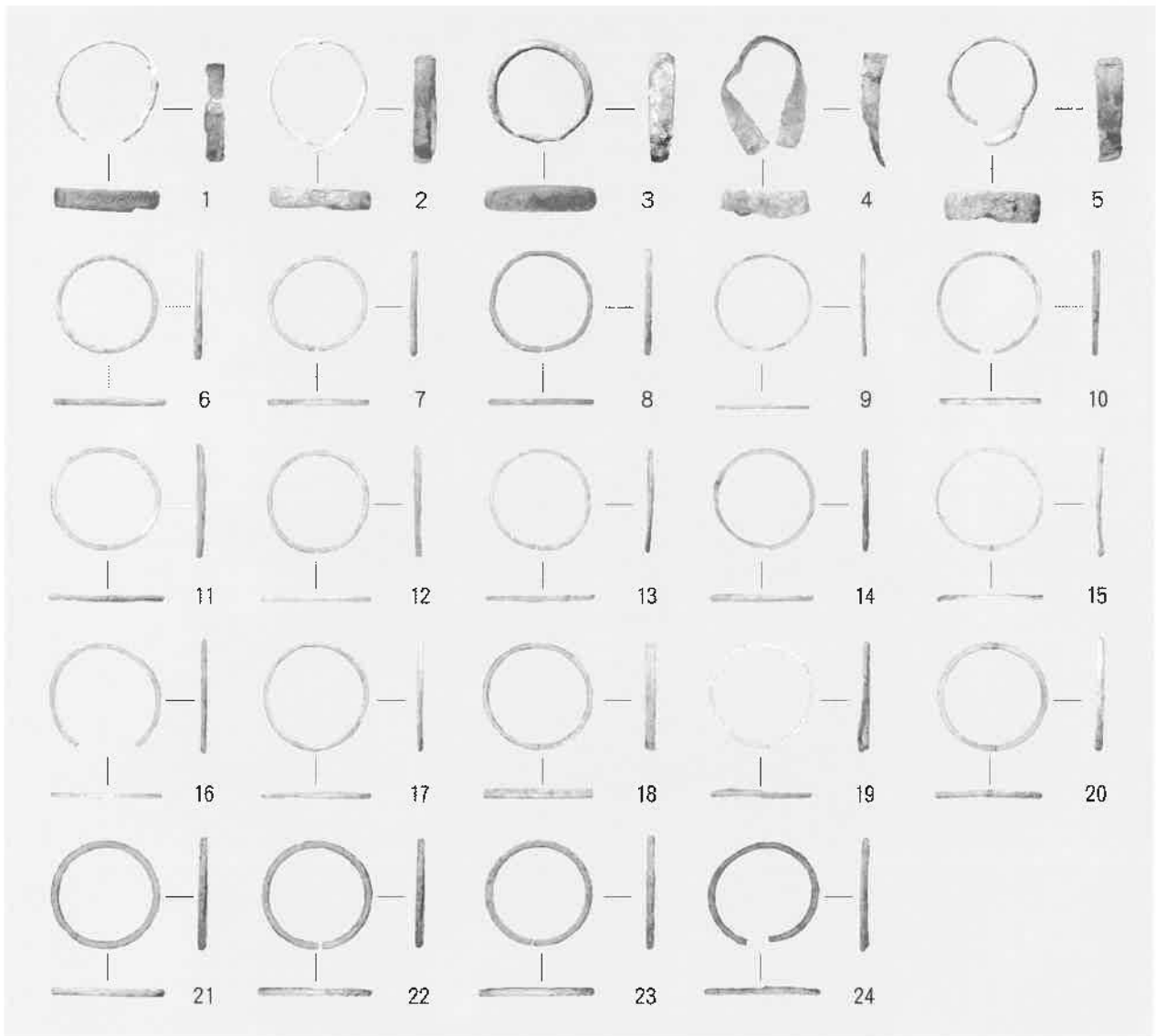
図版41 円盤状製品



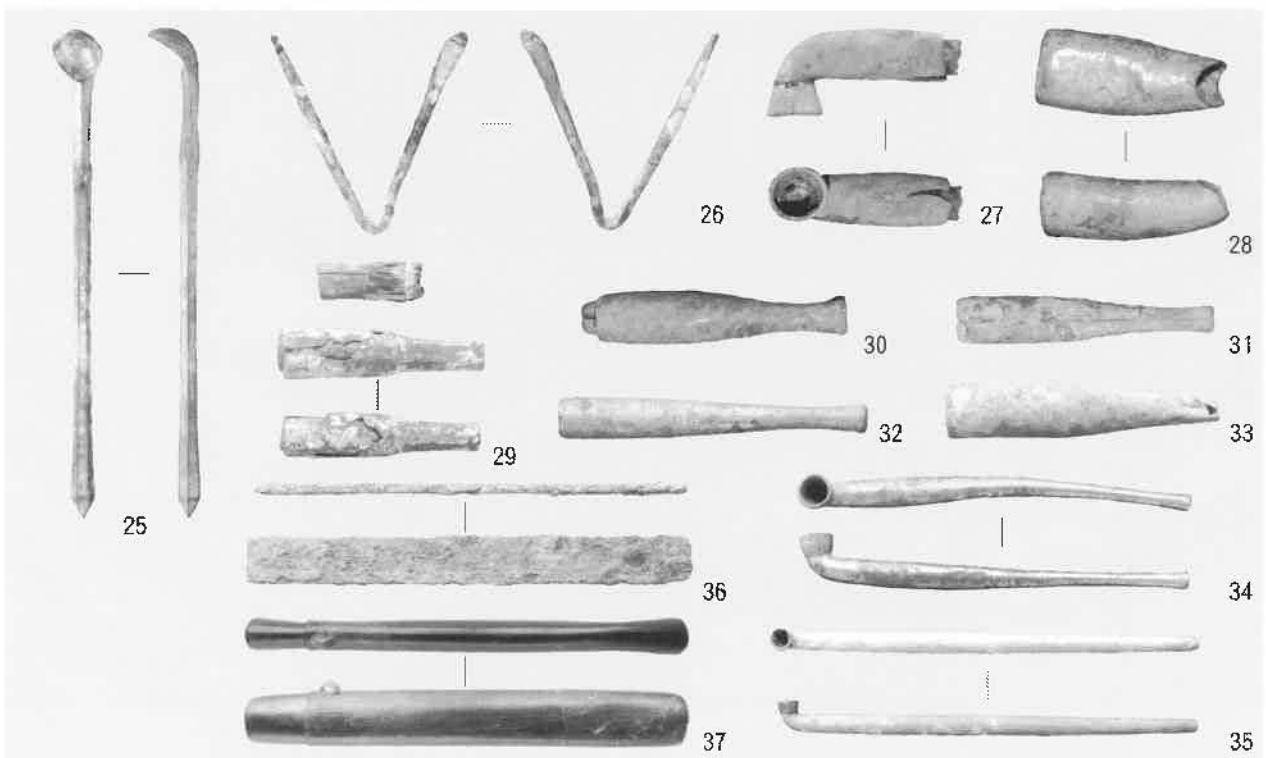
図版42 ガラス製品



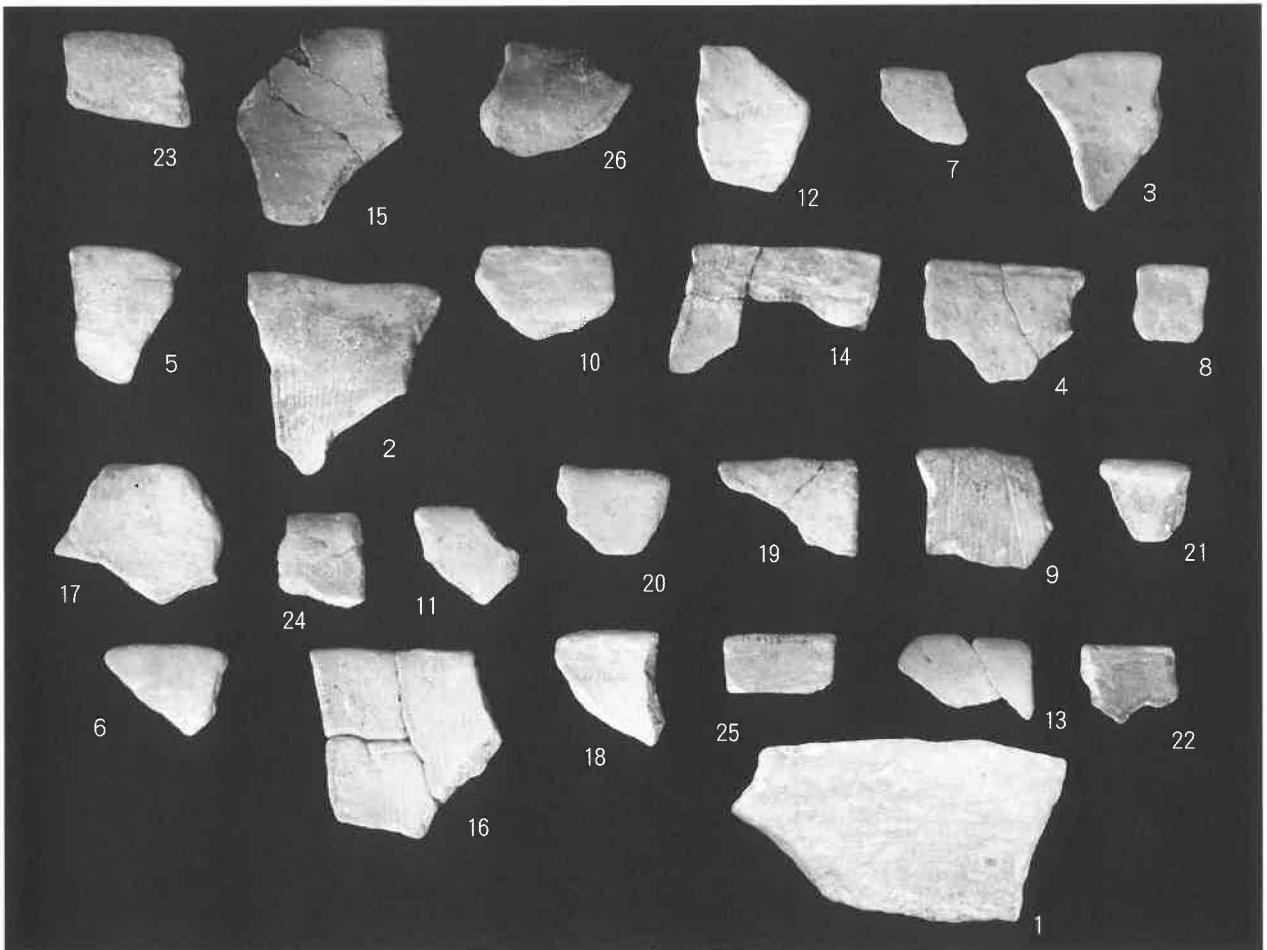
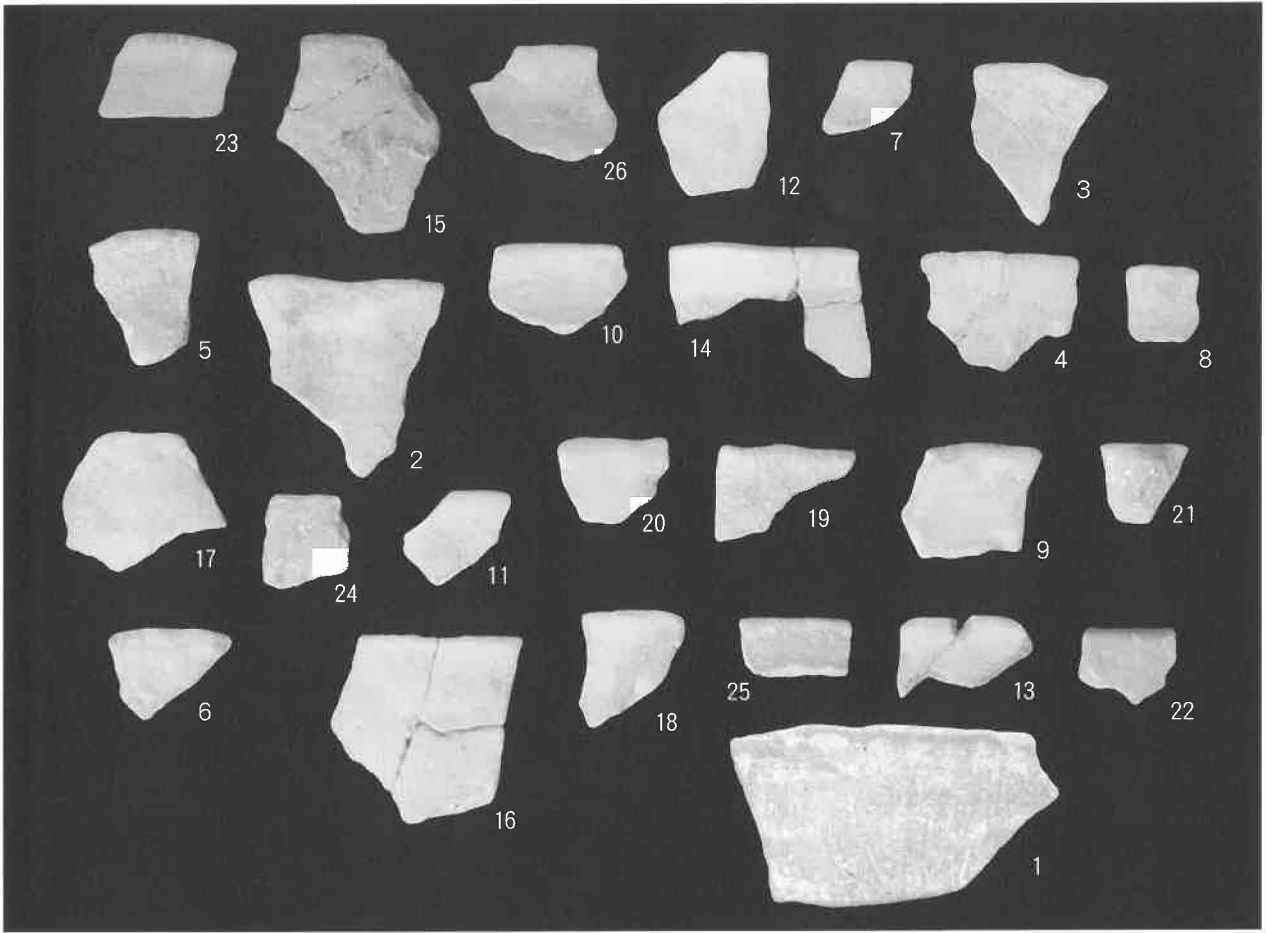
図版43 鉄製品 (右下：レントゲン写真)



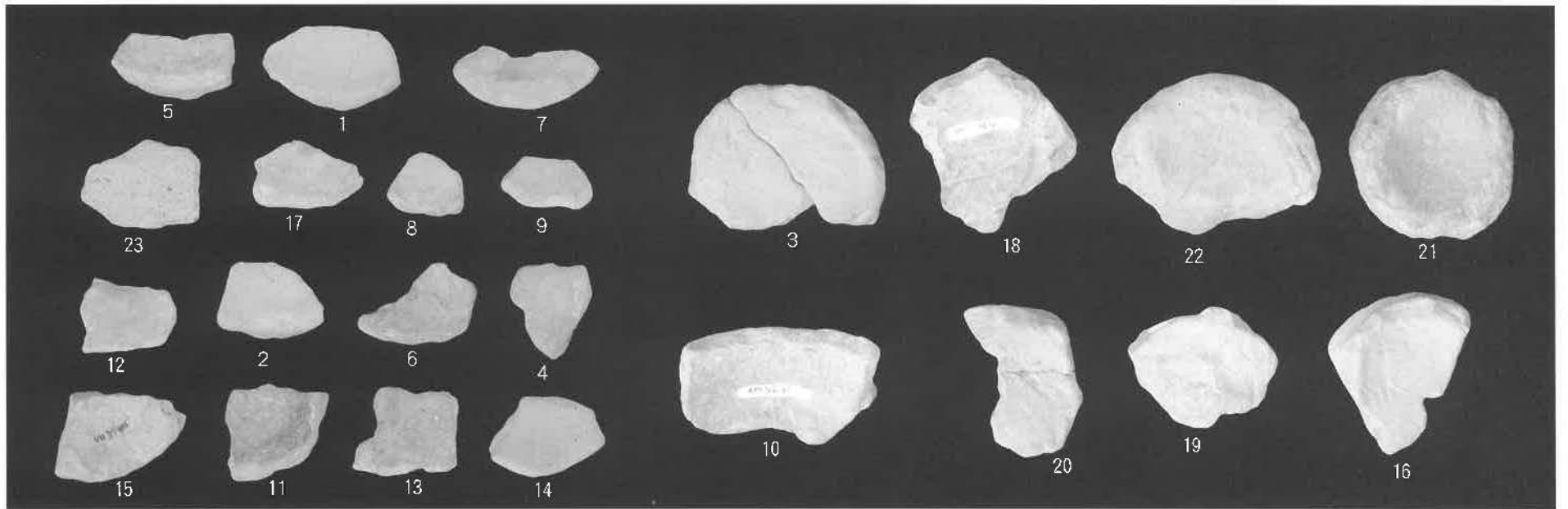
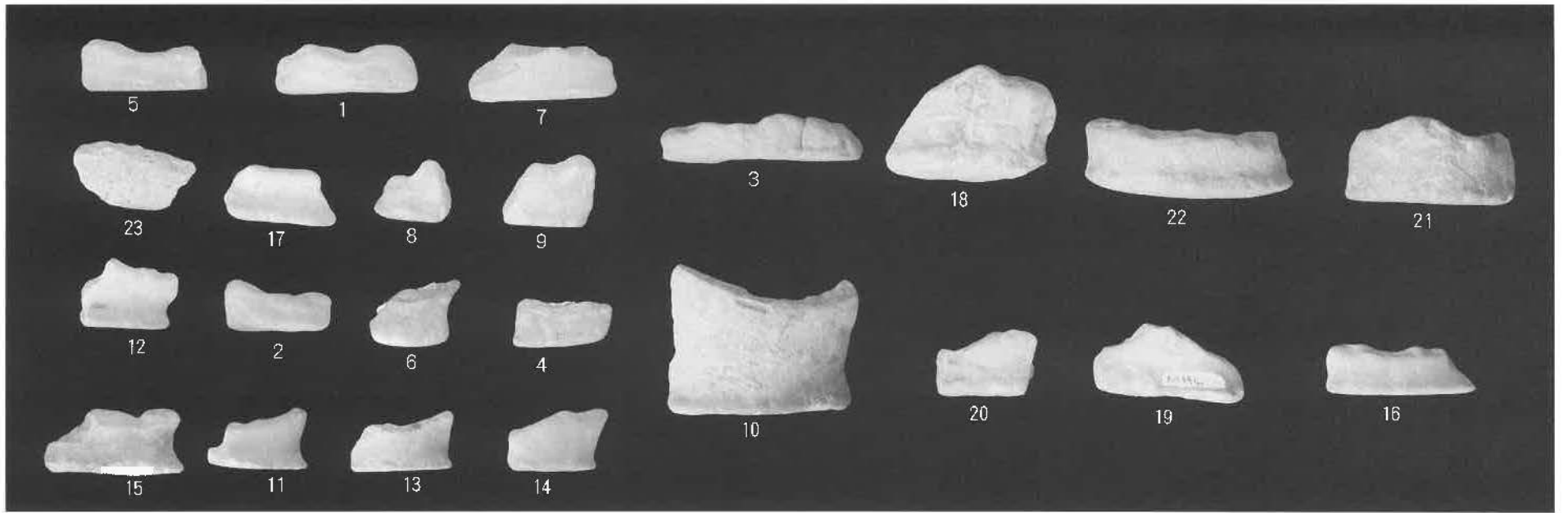
图版44 金属製品（1）指輪



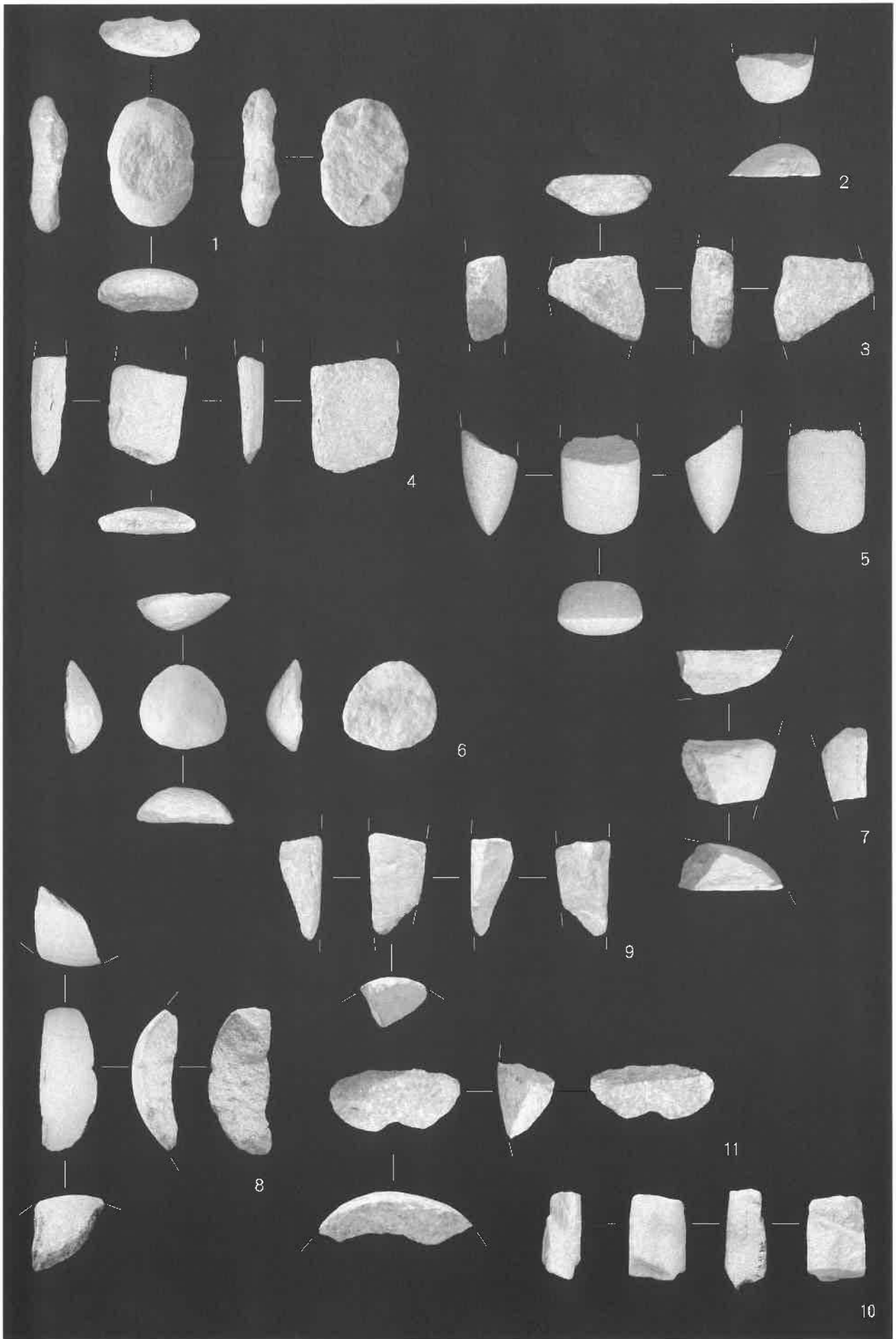
图版45 金属製品（2）・簪・煙管・他



図版48 土器口縁部（上：表面 下：裏面）



图版49 土器底部 (上: 表面 下: 裏面)



图版50 石器

附 篇

沖縄県北谷町大作原古墓群出土の人骨

*
松下 孝幸

キーワード：沖縄県、近世・近代・現代人骨、亀甲墓、厨子甕

はじめに

沖縄県中頭郡北谷町字伊平大作原（ちゃたん うふさくぼる）に所在する大作原古墓群の発掘調査が、米軍送油管の移設工事に伴って2000年(平成12年)と2001年(平成13年)におこなわれ、亀甲墓（かめこうばか）などの古墓群から人骨が出土した。

これまで、沖縄県内で、筆者が古人骨の調査に加わったり、報告したもののうち、近世人骨は、宜野座村のクジチ墓(松下・他、1988)、浦添市の城間古墓(松下・他、1990)、北谷町の上勢頭古墓群（かみせど やまかわぼる）(松下、1996)、山川原古墓群や宜野湾市の奥間ノロ墓がある。クジチ墓からは合計48体分の、城間古墓からは合計136体分の人骨が検出されており、頭型や身長値が得られている。これらの近世人には短頭性や高身長といった予想もしなかった結果が得られ、沖縄県での形質の多様性がうかがえた。

本古墓群から出土した人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが、厨子甕などから検出された人骨の残存部位や性別などを推測することができたので、その結果を報告しておきたい。

資 料

今回調査がおこなわれた古墓は17基で、そのうちの8基に人骨が残っており、人骨は合計で31体分あった。1号古墓を除く古墓では以前に改葬がおこなわれて、厨子甕なども移設されてしまっており、今回の調査で検出・採集された人骨はごくわずかで、これらは改葬時に取り残された人骨と思われる。

1号古墓では改葬がおこなわれておらず、厨子甕7基が残されていた。各厨子甕からはそれぞれ人骨が検出されたが、その残存量は少なく、また、高温多湿な環境のために、保存状態もよくなかった。1号墓からは合計11体の人骨が検出された。そのうち男性が7体、女性が3体で、1体は4歳前後の幼児骨であった。また、7基の厨子甕のうち4基からは2体分の人骨が検出された。7基の厨子甕にはそれぞれ銘書があり、1号蔵骨器がもっとも古く道光2年(1822年)で、その他は明治、大正、昭和の記載がある。

従って、1号墓から検出された人骨は近世・近代・現代の人骨であり、その他の墓から検出・採集された人骨もほぼ同時期の人骨と考えられる。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によった。なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。年齢区分に関しては表2の基準のとおりである。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

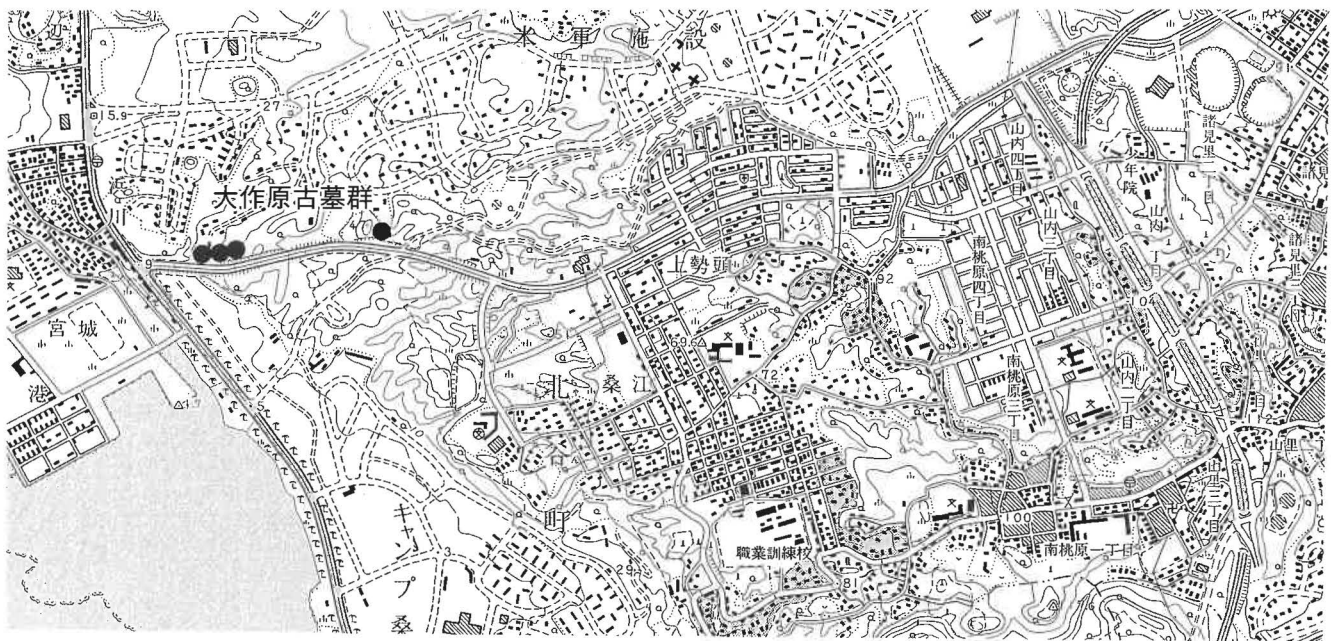


図1 遺跡の位置 (1/25,000) (fig.1 Location of the ufusakubaru tumuli,
 chatan cho, Okinawa prefecture)

表1 1号墓出土人骨一覧 (Table 1. List of skeletons of tomb 1)

遺構番号	人骨番号	性別	年齢	備考
1号蔵骨器	1号人骨	男性	不明	2体のうち1体は熟年、道光2年(1822年)死去
	2号人骨	男性	不明	
2号蔵骨器	1号人骨	男性	壮年	明治21年(1888年)
	2号人骨	女性	不明	
3号蔵骨器	1号人骨	男性	不明	昭和9年(1934年)
	2号人骨	女性	不明	
4号蔵骨器	1号人骨	男性	不明	大正3年(1914年)
5号蔵骨器	1号人骨	男性	不明	昭和2年(1927年)洗骨
6号蔵骨器	1号人骨	—	幼児(4歳前後)	大正3年(1914年)洗骨
7号蔵骨器	1号人骨	男性	不明(高齢)	大正3年(1914年)洗骨
	2号人骨	女性	不明(高齢)	

表2 出土人骨の体数 (Table 2. Number of materials)

墓番号・他	体数	備考
1号墓	11	
2号墓	1	歯1本、明治末期頃築造
4号墓	2	
5号墓	2	昭和12年(1937年)築造
7号墓	1	
8号墓	4	
11号墓	4	
12号墓	1	幼児骨(5歳前後)
13号墓	1	
15号墓	1	
17号墓	2	
12・13号古墓前トレンチ	1	
合計	31	

所見

・1号墓出土人骨

1号蔵骨器(家型厨子甕)人骨

1号蔵骨器からは少なくとも2体分の人骨が検出された。

頭蓋片4点、左側の大腿骨体2本、右側の大腿骨体1本、右側の脛骨体1本が残っていた。左側大腿骨が2本あるので、この蔵骨器に納められていたのは大腿骨から少なくとも2体分の人骨である。どちらの大腿骨体も径がかなり大きいので、2体とも男性と思われる。頭蓋

片には矢状縫合がみられた。内板は癒合していたが、外板は開離していたので、年齢は熟年と思われる。この頭蓋片と大腿骨2本のうち1本が同一個体と仮定すれば、2体のうち1体は熟年男性骨である。

2号蔵骨器(家型厨子甕)人骨

2号蔵骨器からは2体分の人骨が検出された。

頭蓋片、右側大腿骨体が2本、左側の尺骨体、左側の膝蓋骨、右側の距骨が残っていた。頭蓋は後頭骨で、外後頭隆起部が残っており、この隆起は発達していた。大腿骨体、尺骨体および膝蓋骨の径は大きい。ラムダ縫合の一部が観察できたが、内外両板とも開離していた。右側大腿骨体はやや大きいものとやや細いもので、前者は男性、後者は女性大腿骨と推定した。頭蓋片と骨体の径が大きい大腿骨と尺骨は同一個体と思われ、性別は男性と推定した。年齢は縫合の状態から壮年の可能性が強い。従って本蔵骨器には成人男女1体ずつ合計2体分の骨が納められていた。

3号蔵骨器(家型厨子甕)人骨

少なくとも頭蓋と大腿骨から2体分の人骨が検出された。

残存していたのは、頭蓋片、肩甲骨棘片、上腕骨片、橈骨片、大腿骨体4本(右：2本、左：2本)、脛骨体片、椎骨片、右側第5中手骨、手の指骨などである。前頭骨が2体分存在する。1体は前頭結節の発達が良好であることから女性の前頭骨と考えられる。上腕骨は左側の遠位端が、橈骨は右側の遠位端が残っていた。ともに径はあまり大きくない。また、左側上腕骨には滑車孔が認められる。大腿骨は4本あり、左右がそれぞれ2本ずつで、2体分に分けることができた。1体分は骨体の径がやや大きく、もう1体分の骨体の径はやや小さい。骨体の大きさから男女それぞれ1体ずつの大腿骨と推定した。

計測ができたのは、男性の右側大腿骨で、骨体中央矢状径は28mm、骨体中央横径は25mm、骨体中央断面示数は112.00で、中央周は85mmである。

本蔵骨器から検出された人骨群には、頭蓋が2体分、大腿骨も2体分認められたことから、本蔵骨器には少なくとも、2体分、多ければ4体分の人骨が納められていたことになり、2体分の場合は男女それぞれ1体ずつ、4体分の場合は男女2体ずつということになるが、いずれにしても年齢は不明である。

4号蔵骨器(家型厨子甕)人骨

4号蔵骨器に残存していたのは1体分の人骨である。

残存していたのは、左右不明の大腿骨体、右側距骨、椎体片1個、足の第1基節骨、大菱形骨である。大腿骨体は大片に壊れており、復元できないので、計測できないが、骨体の径は大きい。

性別は大腿骨体の径が大きいことから男性と推定したが、年齢不明である。

5号蔵骨器(家型厨子甕)人骨

5号蔵骨器からは1体分の人骨が検出された。

1号古墓の蔵骨器から出土した人骨では本例が一番残りが少なかった。残っていたのは左右不明の大腿骨頭、手の指骨片1点、肋骨片数点のみ。大腿骨頭の径は大きい。

性別は、大腿骨頭の径が大きいことから男性と推定したが、年齢不明である。

6号蔵骨器(厨子甕)人骨

6号蔵骨器からは1体分の幼児骨が検出された。四肢骨は破片状態になって残っていたが、唯一左側の上腕骨体を認めた。遊離歯冠(永久歯、乳歯)が残存していた。年齢は、永久歯冠の形成状態から4歳前後と推定した。

7号蔵骨器(厨子甕)人骨

下顎骨が2体分存在した。

残存していたのは、頭蓋片、上腕骨片、尺骨体片、脛骨体、大腿骨体片、椎骨(椎体)4点、寛骨片、肋骨片、手根骨、足根骨、指骨であるが、残存量は少ない。頭蓋片には左側側頭骨が含まれており、乳様突起の観察ができた。乳様突起はかなり小さく、女性の側頭骨の可能性が高い。下顎骨は、下顎体が2体分存在した。歯槽は2体分ともすべて閉鎖しており、歯は1本も釘植しておらず、また遊離歯も存在しない。2個の下顎体のうち、1個の径はやや大きい。この2体の下顎骨の年齢は、歯槽がすべて閉鎖していることから、高齢だったことが推測されるが、熟年か老年かの判別ができないので、高齢と表現しておきたい。脛骨は左側骨体が、大腿骨は左側骨体の後面が残っていた。脛骨は計測できないが、骨体の径はやや大きい。

下顎骨が2体分存在することから、7号蔵骨器には少なくとも2体分の骨が納められていたことになり、そのうちの1体は男性骨で、もう1体は性別を推測することができなかったが、この下顎骨と側頭骨とを同一個体とみなせば、女性の可能性が高い。

従って、本厨子甕には少なくとも高齢と思われる男女各1体ずつの人骨が存在したことになる。

・2号墓出土人骨

墓庭前の斜面の覆土から歯が1本検出された。これは上顎左側の第二大臼歯である。咬耗はエナメル質のみで、径は大きい。男性の歯であろう。年齢は咬耗が弱いので、高齢ではなかろう。

・4号墓出土人骨

墓室から採集された人骨は少なく、幼児の左側上腕骨体と成人の中足骨など4点である。従って、体数は少なくとも2体分である。

・ 5号墓出土人骨

墓室のシルヒラシから検出されたものが大部分であり、主なものは頭蓋の破片で、四肢骨はわずかな骨片にすぎない。A-1は右側の頭頂骨と後頭骨である。外後頭隆起部はわずかに隆起している。冠状縫合とラムダ縫合の観察ができたが、両縫合とも内外両板は開離している。頭蓋の径はやや大きい。この頭蓋を壮年の男性頭蓋と推定した。A-2は、左右の側頭骨である。左側の乳様突起が観察できたが、やや大きそうである。また、左側の乳突上稜は著しく発達している。左側外耳道には骨腫はみられない。これは男性側頭骨であるが、年齢は不明である。A-3は、サンミデーから検出された右側の側頭骨である。乳様突起は小さい。右側外耳道が観察できたが、骨腫は存在しない。乳様突起が小さいことから女性頭蓋とした。年齢は不明である。その他、距骨などの足根骨や四肢骨の破片がシルヒラシから検出されたが、その量は少ない。また、遊離歯冠が採集されている。咬耗程度はいずれの歯も弱く、エナメル質にしか咬耗が及んでいない。

5号墓から今回検出・採集された人骨は、重複する側頭骨の数からは少なくとも2体分である。もし、A-1とA-2とが別個体とすれば、3体分の頭蓋ということになる。すなわち、5号墓から採集された人骨は少なくとも2体分で、多ければ3体以上ということになる。

・ 7号墓出土人骨

墓室から採集された人骨は、下顎骨、頭頂骨片、右側橈骨近位端、右側尺骨遠位端、肋骨片と中手骨、足根骨、指骨などが数点である。下顎骨の大きさはそれほど大きいものではないが、性別は判別しがたい。橈骨と尺骨の径はやや大きく、男性骨と推定した。

今回採集された人骨には重複部分はないので、少なくとも1体分は存在するが、人骨は厨子甕から検出されたものではなく、墓室内から得られたものであるから、1体分の人骨の一部であると断定することはできない。

・ 8号墓出土人骨

(1)墓室内(シルヒラシー)出土人骨

墓室から採集された人骨片の量は多い。頭蓋片は6点であるが、椎骨片や肋骨片、足根骨、手根骨、指骨などを含めた四肢骨の破片が多い。同定ができたのは右側肩甲骨片、鎖骨の一部、右側上腕骨体遠位部、左側橈骨体、右側尺骨体、両側の腓骨体、脛骨粗面部、寛骨大坐骨切痕部である。このうち橈骨、尺骨は計測ができた。橈骨、尺骨は骨体の径が大きいので男性骨と思われる。腓骨も計測できたが、性別を特定することはできなかった。また、遊離歯14本が採取されている。この中には上顎右側第二大臼歯が2本、上顎左側犬歯が3本、下顎左側第一小臼歯が2本存在した。咬耗はいずれも弱い。

今回墓室から採集された人骨には骨種の重複は認められないが、遊離歯冠に最高3本の重複(犬歯)が認められたので、少なくとも3体分の人骨(歯)が存在することになる。そのうち1体は男性(年齢不明)と思われる。

(2) 厨子甕内出土人骨

厨子甕から頭蓋小片1点と遊離歯2個が検出された。遊離歯は上顎右側中切歯と下顎右側の第二小臼歯である。咬耗は両歯ともきわめて弱い。この歯は径が大きいことからおそらく男性の歯であろう。年齢は不明である。

11号墓出土人骨

11号墓の右棚に置かれていた厨子甕から検出された人骨は、大部分が四肢骨の破片ばかりである。量が多いが、細片のためにほとんど同定できない。同定できたのは頭蓋片数片、椎体1個、右側距骨1個、指骨である。距骨は径が大きいので、男性距骨である。この他に乳児の肋骨などや成人の火葬骨片が少量残存していた。また、遊離歯が残っており、成人の歯が2体分、幼児の歯が少なくとも1体分存在し、火を受けた歯も存在する。従って、この厨子甕には少なくとも4体分(成人2、幼児1、火葬骨1)の骨が入っていたことになる。

12号墓出土人骨

採集されていたのは未成人骨のみで、下顎骨を含む頭蓋片、左側上腕骨体、左側橈骨体、右側脛骨体遠位半分、右側腓骨体、肋骨片、椎骨片である。下顎右側の第一大臼歯には咬耗の痕がみられないことから、未萌出だったと思われる。従って、年齢を5歳前後と推定した。

13号墓出土人骨

幼児の頭蓋片数片と肋骨2本が採集されていた。年齢を特定できる部位が残っていないが、大きさから幼児骨である。

15号墓出土人骨

割れた厨子甕からこぼれた人骨が採集されていた。この人骨は右側の鎖骨、右側寛骨片、仙骨、左側寛骨および左右の舟状骨などを含む足根骨と中足骨、指骨や肋骨片などである。寛骨は大坐骨切痕の観察が可能で、この角度は小さい。遊離歯が5本残っていた。咬耗は1本を除いてエナメル質のみにわずかにみられるだけで、咬耗は弱い。人骨と歯には重複部分がみられないことから、この人骨は1体分と思われる。

性別は、大坐骨切痕の角度が小さいことから、男性と推定したが、年齢は不明である。

17号墓出土人骨

採集されたのは大腿骨片、上顎右側第二小臼歯と幼児骨である。前者は成人の大腿骨であるが、左右の別や性別は不明である。第二小臼歯の咬耗はエナメル質のみである。後者は幼児の左側上腕骨体と思われる。従って、採集された人骨は成人骨と幼児骨の2体分である。

12・13号墓前トレンチ旧表土出土人骨

左側の頭頂骨が採集されていた。骨質はやや厚く、大きそうである。おそらく男性頭頂骨

であろう。年齢は不明である。

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

	年齢区分	年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～ 5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成 人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

考 察

男性大腿骨が1本計測できたので、若干他の資料との比較をおこなっておきたい。表4は沖縄県と与論島の計測値を掲げている。骨体中央周で骨体の大きさを比較してみると、大作原は85mmで、クジチの平均値86.17に比較的近く、山川原、城間、与論島よりはやや大きい。また、骨体中央断面示数をもてみると、本例は112.00と大きく、他の資料よりは大きい。計測できた大腿骨は1号古墓3号蔵骨器1号人骨で、被葬者は昭和9年に死亡しているので、おそらく明治生まれと思われる。この近代人の大腿骨は沖縄県内ではやや大きい方に属しており、粗線の発達は良好だったと考えられる。

表4 大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 4. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	大作原		城 間		クジチ		山川原		与論島	
	近・現代人		近世人		近世人		近世・近代人		近世人	
	沖縄県		沖縄県 (松下・他)		沖縄県 (松下・他)		沖縄県 (松下)		鹿児島県 (平田)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6. 骨体中央矢状径	1	28	13	26.00(左)	6	27.67(左)	2	24.50	23	26.87
7. 骨体中央横径	1	25	13	26.54(左)	6	27.00(左)	2	26.00	23	25.83
8. 骨体中央周	1	85	13	82.92(左)	6	86.17(左)	2	80.00	23	83.96
6/7 骨体中央断面示数	1	112.00	13	98.31(左)	6	102.52(左)	2	94.65	23	104.23

要 約

沖縄県中頭郡^{ちやたん}北谷町字伊平大作原にある大作原^{うふさくぼる}古墓群の発掘調査が、2001年(平成13年)におこなわれ、^{かめこうばか}亀甲墓などの古墓群から人骨が出土した。調査された古墓は17基で、うち8

基に人骨が残っていた。今回の調査で検出・採集された人骨の解剖学的・人類学的考察をおこない、以下の結果を得た。

1. 1号古墓を除く古墓では過去に改葬が終わっており、厨子甕などもなく、検出・採集された人骨は少量で、これらは改葬時に取り残された人骨と思われる。従って、人骨の体数はこの体数以上に埋納されたことを意味しており、埋葬された被葬者の体数を示すものではない。
2. これらの人骨は近世から現代にいたるまでの人骨である。
3. 今回の調査では合計31体分の人骨が検出・採集された。
4. 1号墓には7基の厨子甕が残されており、各厨子甕から人骨が検出された。7基のうち4基の厨子甕からは2体分の、3基の厨子甕からは1体分の合計11体の人骨が検出された。11体のうち男性は7体、女性は3体、残りの1体は幼児である。
5. 人骨の保存状態は悪く、頭蓋については、頭型や顔面の特徴、鼻根部の形態などを明かにすることはできなかった。四肢骨については、大腿骨や尺骨など計測できるものがあり、また観察ができたものもある。男性四肢骨はおおむね骨体がやや太かったが、最大長を計測することができるものは存在しなかった。骨体が太ければ長さも長いというわけではないので、長さについては不明である。
6. 計測ができた大腿骨は男性の右側1本（1号古墓3号蔵骨器1号人骨）で、骨体中央矢状径は28mm、骨体中央横径は25mm、骨体中央断面示数は112.00で、この値は近代人としては大きい方である。また中央周は85mmであった。

謝 辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた沖縄県北谷町教育委員会文化課の皆様方に感謝致します。

《参考文献》

1. 平田和生、1958：鹿児島県大島郡与論島島民の下肢骨の研究。人類学研究、5：263-315.
2. 広沢正彦、1959：奄美群島与論島住民上肢骨の人類学的研究。人類学研究、6：241-278.
3. MARTIN-SALLER, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart：429-597.
4. 松下孝幸・他、1988a：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財第6集(クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書)：107-140.
5. 松下孝幸・他、1988b：与論島における形質人類学的研究。奄美諸島における日本基層文化とその変容に関する総合的研究〔昭和60年-62年度文部省科学究費補助金(総合研究A)研究成果報告書〕：6-26.
6. 松下孝幸・他、1989a：沖縄県宜野湾市真志喜安座間原第1遺跡出土の縄文・弥生相当期の人骨(予報)(会)。人類学雑誌、97：265.
7. 松下孝幸・他、1989b：沖縄県北谷町クマヤ洞穴出土の古人骨(縄文時代晩期相当期人骨)(会)。解剖学雑誌、64：362.
8. 松下孝幸・他、1990a：沖縄県読谷村木綿原遺跡出土の弥生時代人骨(会)。解剖学雑誌、65：244.
9. 松下孝幸・他、1990b：沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群一牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査一：75-112.
10. 松下孝幸・他、1993a：具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群(伊是名村文化財調査報告書第9集)：215-244.
11. 松下孝幸、1993b：沖縄県石垣市石垣貝塚出土の人骨。石垣貝塚(石垣市文化財調査報告書第17)：31-50.

12. 松下孝幸、1993c：沖縄県石垣市平川貝塚出土の人骨。平川貝塚(石垣市文化財調査報告書第18号)：87-91。
 13. 松下孝幸、1996：沖縄県北谷町上勢頭古墓群出土の近世人骨。上勢頭古墓群(北谷町文化財調査報告書第16集)：105-115。
 14. 松下孝幸、沖縄県大里村大里城出土のグスク時代人骨。大里城-都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(2)-：109-122。
 15. 松下孝幸、沖縄県北谷町山川原古墓群出土の近世・近代人骨。山川原古墓群(北谷町文化財調査報告書第16集)：239-273。
 16. 大山秀高、1956：鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究。人類学研究、3：396-434。
 17. 佐野一、1978：木綿原遺跡出土の人骨について。木綿原遺跡(読谷村文化財調査報告書第5集)：112-114。

表5 橈骨(mm) (Radius)

		大作原古墓群 8号墓人骨 男性 左	
1.	最大長	-	-
1 b.	平行長	-	-
2.	機能長	-	-
3.	最小周	42	-
4.	骨体横径	17	-
4 a.	骨体中央横径	17	-
4(1).	小頭横径	21	-
4(2).	頸横径	15	-
5.	骨体矢状径	11	-
5 a.	骨体中央矢状径	12	-
5(1).	小頭矢状径	-	-
5(2).	頸矢状径	16	-
5(3).	小頭周	-	-
5(4).	頸周	48	-
5(5).	骨体中央周	45	-
5(6).	骨下端幅	-	-
3/2	長厚示数	-	-
5/4	骨体断面示数	64.71	-
5 a/4 a	中央断面示数	70.59	-

表6 尺骨(mm) (Ulna)

		大作原古墓群 1号墓 2号藏骨器1号人骨 男性 左		大作原古墓群 8号墓人骨 男性 右	
1.	最大長	-	-	-	-
2.	機能	-	-	-	-
2(1).	肘頭尺骨頭長	-	-	-	-
3.	最小周	-	-	-	-
6.	肘頭	-	-	-	-
6(1).	上幅	-	-	-	-
7.	肘頭深	-	-	-	-
8.	肘頭高	-	-	-	-
11.	尺骨矢状径	14	12	12	12
12.	尺骨横径	16	18	18	18
S	中央最小径	13	12	12	12
L	中央最大径	16	18	18	18
C	中央周	48	49	49	49
3/2	長厚示数	-	-	-	-
11/12	骨体断面示数	87.50	66.67	66.67	66.67
S/L	中央断面示数	81.25	66.67	66.67	66.67

表7 大腿骨(mm) (Femur)

		大作原古墓群 1号墓 3号藏骨器1号人骨 男性 右	
1.	最大長	-	-
2.	自然位全長	-	-
3.	最大転子長	-	-
4.	自然位転子長	-	-
6.	骨体中央矢状径	28	-
7.	骨体中央横径	25	-
8.	骨体中央周	85	-
9.	骨体上横径	-	-
10.	骨体上矢状径	-	-
15.	頸垂直径	-	-
16.	頸矢状径	-	-
17.	頸周	-	-
18.	頭垂直径	-	-
19.	頭横径	-	-
20.	頭周	-	-
21.	上顆幅	-	-
8/2	長厚示数	-	-
6/7	骨体中央断面示数	112.00	-
10/9	上骨体断面示数	-	-

表8 上腕骨 (mm) (Humerus)

		大作原古墓群 12号墓人骨 (5歳前後) 左	
1.	骨体最大長	134	-
2.	骨体中央最大径	12	-
3.	骨体中央最小径	9	-
4.	骨体中央周	35	-
5.	骨体上端幅	20	-
6.	骨体下端幅	-	-
7.	骨体最小周	34	-
3/2	骨体中央断面示数	75.00	-
7/1	長厚示数	25.37	-

表9 橈骨 (mm) (Radius)

		大作原古墓群 12号墓人骨 (5歳前後) 左	
1.	骨体最大長	102	-
2.	骨体中央横径	8	-
3.	骨体中央矢状径	7	-
4.	骨体中央周	25	-
5.	骨体最小周	23	-
5/1	長厚示数	21.90	-
3/2	骨体中央断面示数	87.50	-

表10 脛骨 (mm) (Tibia)

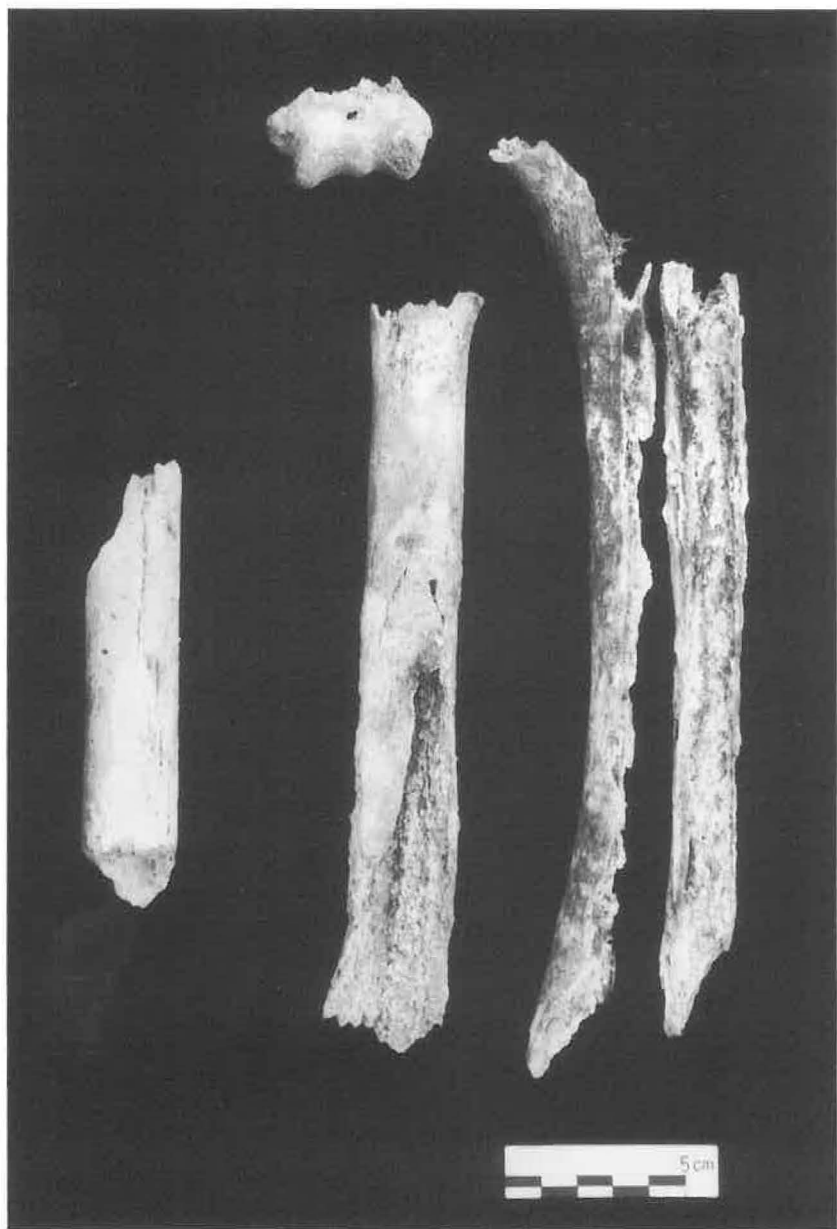
		大作原古墓群 12号墓人骨 (5歳前後)	
		右	
1.	骨体最大長	-	-
2.	骨体中央横径	-	-
3.	骨体中央最大	-	-
4.	骨体中央周	-	-
5.	骨体上端幅	-	-
6.	骨体下端幅	23	-
7.	骨体最小周	42	-
7/1	長厚示数	-	-
2/3	骨体中央断面示数	-	-

表11 腓骨 (mm) (Fibula)

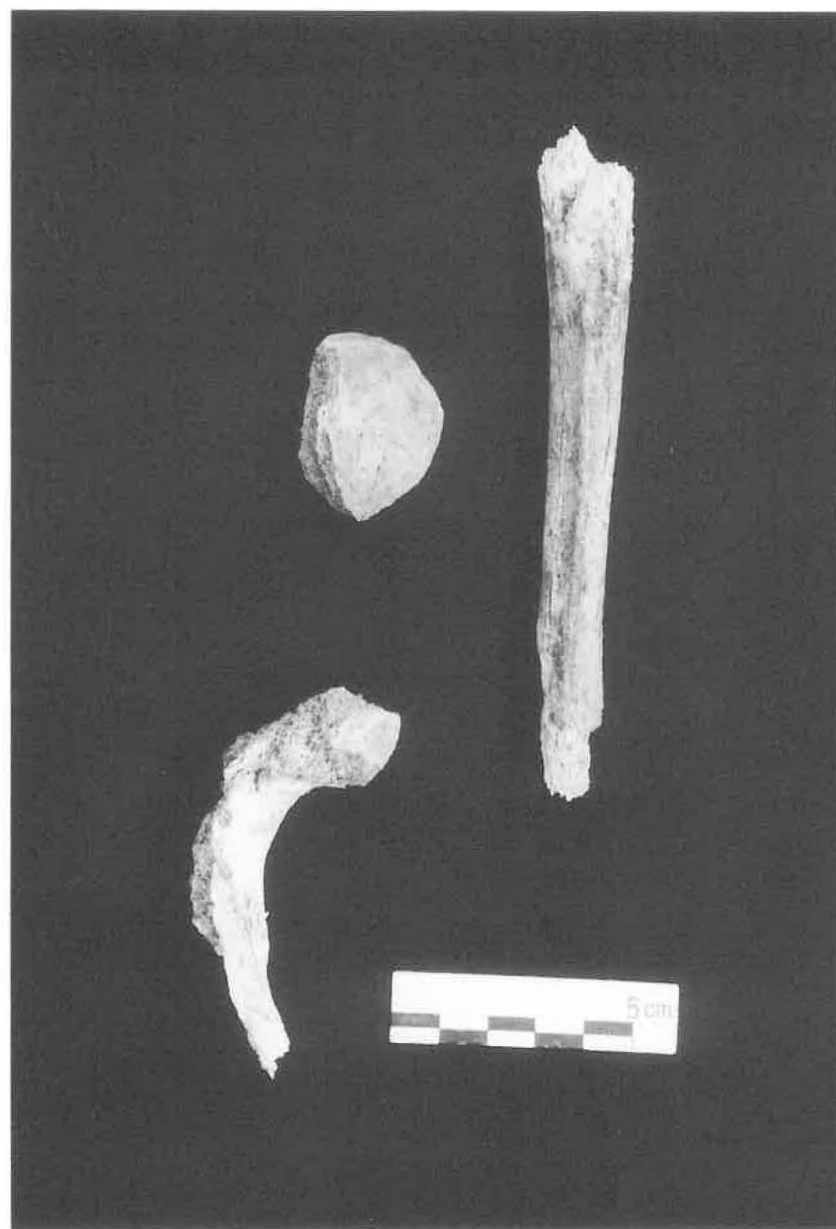
		大作原古墓群 12号墓人骨 (5歳前後)	
		左	
1.	骨体最大長	-	-
2.	骨体中央最大径	7	-
3.	骨体中央最小径	5	-
4.	骨体中央周	20	-
5.	骨体最小周(頸周)	-	-
5/1	長厚示数	-	-
3/2	中央断面示数	71.43	-

表12 形態小変異(Non-metric crania variants)

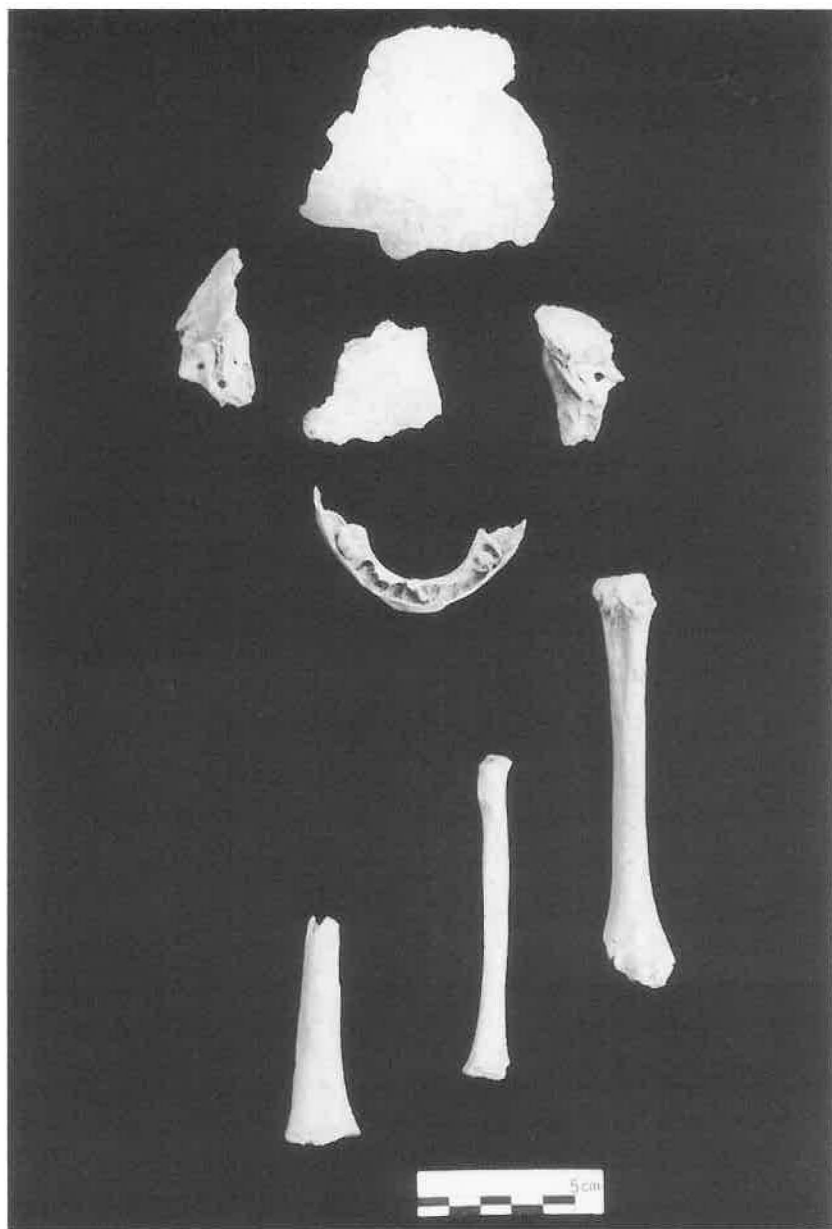
		大作原古墓群 12号墓人骨 (5歳前後)	
		右	左
1.	Medial palatine canal	/	/
2.	Pterygospinous foramen	/	/
3.	Hypoglossal canal bridging	/	/
4.	Clinoid bridging	/	/
5.	Condylar canal absent	/	/
6.	Tympanic dehiscence, Foramen of Huschke (>1mm)	+	+
7.	Jugular foramen bridging	/	/
8.	Precondylar tubercle	/	/
9.	Supra-orbital foramen (incl. frontal foramen)	/	/
10.	Accessory infraorbital foramen	/	/
11.	Zygo-facial foramen absent	/	/
12.	Aural exostosis	-	-
13.	Metopism	/	/
14.	Os incae	/	/
15.	Ossicle at the lambda	/	/
16.	Parietal notch bone	/	/
17.	Transverse zygomatic suture (>5mm)	/	/
18.	Asterionic ossicle	/	/
19.	Occipitomastoid ossicle	/	/
20.	Epipteric ossicle	/	/
21.	Frontotemporal articulation	/	/
22.	Biasterionic suture (>10mm)	/	/
23.	Mylohyoid bridging	/	/
24.	Accessory mental foramen	/	/
25.	Mandibular torus	/	/
26.	滑車上孔	/	/



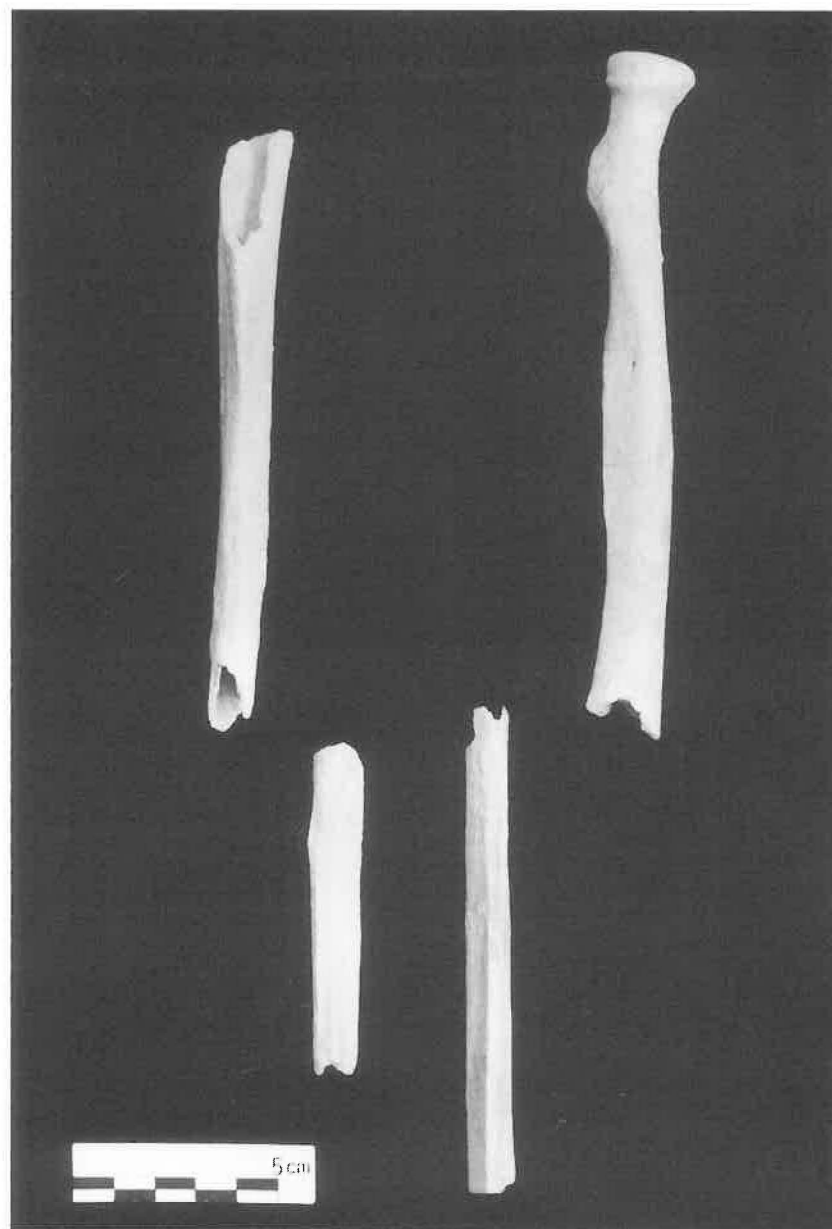
大作原古墓群
1号墓3号藏骨器出土人骨



大作原古墓群
1号墓2号藏骨器出土人骨



大作原古墓群
12号墓出土人骨（幼兒）



大作原古墓群
8号墓出土人骨

貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

今回対象とした本遺跡の貝類遺体は、試掘トレンチからくびれ平底土器を中心に貝塚時代後期の遺物と共に出土したものと、古墓（古琉球から近世）から得られたものである。

貝類遺体は、発掘中にピックアップ法で得られたものを対象とした。その詳細は、表*1～4*に示した。

本遺跡に近接した地域ではグスク時代の貝類遺体組成が報告されており（北谷城・玉代勢原遺跡・後兼久原遺跡等）、今回の結果は、貝類遺体の時代差を考慮することができるということと、古墓出土の貝類を詳細に検討できたという点で成果があったと考えられる。

貝塚時代後期のくびれ平底土器を主体とした試掘トレンチでは、マガキガイが極めて多く、イモガイ類も比較的多い。一方、二枚貝類では、種数は多いが、優占する種は認められなかった。巻貝類では、ほとんどの種と出土個体数の多くが外洋－サンゴ礁域に生息するものであった。二枚貝類では、内湾－転石域のものが多い傾向にあった。また、シャコガイ類のサイズでは、5－10cmのものがほとんどであった。また、死サンゴ片も多少得られている。

今回の試掘トレンチでは、後代の遺物が出土したり、戦争中に国外から持ち込まれたアフリカマイマイが得られているので、当然多少の攪乱は存在するものの、得られた貝類遺体の組成はグスク時代の組成とは異なっていた。もっとも大きな相違は、他のグスク時代の遺跡に多い内湾－転石域のカングクや河口干潟－マングローブ域のアラスジケマンが得られていないことである。さらに、グスク時代の遺跡では、ウミノナ類やカニモリ類の割合の増加することが知られているが、本遺跡ではこの仲間は、極めて僅かしか確認されていない。つまり、グスク時代と異なり、サンゴ礁域のみを貝類採集の場として利用していたと言える。しかし、サンゴ礁域でも、干瀬に多いチョウセンサザエやサラサバテイは比較的少なく、同じサンゴ礁でもこの部分での採集活動は少なかったと考えられる。同様に貝塚時代後期の砂丘遺跡で優占するシャコガイ類でも、本遺跡の出土個体は10cm以下と小形であった。後期遺跡との比較で明らかな本遺跡の貝類遺体の特徴は、遺跡前面の海域環境や貝類採集空間といった立地条件に帰結する可能性も否定できないが、むしろ、貝塚時代後期からグスク時代への移行期の様相を示していると考えられる。

古墓のうち、5号墓の組成は前述の貝塚時代後期のものと類似しており、同一の堆積物と考えられる。古墓の調査でも、二枚貝片に色の残った新しいものがあり、最近の混入物の存在は否定できない。しかし、全体として見ると、明らかに古いシャコガイ類とマガキガイ・チョウセンサザエ・ギンタカハマ等の中・大形の食用貝類、さらには種々の二枚貝が出土しており、これらは古墓の時代のものと考えられる。シャコガイ類に関しては、さらに古い時代から死者に対して特徴的な利用が認められており、ここでもその流れの中での出土と考えられよう。中・大形の食用貝類は、もしかしたら供物としての利用や墓前での食後の投棄なのかも知れない。二枚貝類の多くは水磨を受けたものであり、死サンゴ片等と共に墓域に持ち込まれたものの可能性も考えられる。その用途は、現在でも時折見られるような墓の一面に海岸の打ち上げ物を敷くことであったとも推測される。これらの可能性の検証のために、今後も古墓出土貝類遺体の詳細な調査が必要であろう。

第1表 古墓貝類出土量 (巻貝)

地 区 層 貝種名			1号墓 表採			2号墓 前庭部覆土			3号墓 墓庭前覆土			3号墓 墓前庭部客土			4号墓 墓外		
			完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
アケカ ^イ 科	アカイカ ^{レイシカ} イ	Druparubusidaeus															
アケカ ^イ 科	ガンゼ ^{キホ} ラ	Chicoreusbrunneus															
アケカ ^イ 科	ツルレイシ	Mancinellatuberosa															
アケカ ^イ 科	ムラサキイカ ^{レイシカ} イ	Drupamorum															
アマオブ ^{ネカ} イ科	アマオブ ^{ネカ} イ	Theliostylaalbicilla															
イトマキホ ^ラ 科	イトマキホ ^ラ	Pleuroplocatrapezium															
イトマキホ ^ラ 科	チトセホ ^ラ	Fusinusnicobaricus															
イモカ ^イ 科	アカシマナシ	Conusgeneralis															
イモカ ^イ 科	アンホ ^{ンクワサ} メカ ^イ	Lithoconuslitteratus															
イモカ ^イ 科	カハ ^{ミナシカ} イ	Conusvexillum															
イモカ ^イ 科	キヌカヅキ ^{イモカ} イ	Virgiconusflavidus															
イモカ ^イ 科	クロミナシカ ^イ	Conusmarmoreus															
イモカ ^イ 科	コママイモカ ^イ	Puncticulispuliearius															
イモカ ^イ 科	サヤカ ^{タイモカ} イ	Virroconusfulgetrum															
イモカ ^イ 科	ササミナシカ ^イ	Rhizoconuscapitaneus															
イモカ ^イ 科	ササモト ^キ	Dauciconusvitulinus															
イモカ ^イ 科	中形イモ	Conusspp(middlesize)						1									
イモカ ^イ 科	ニシキミナシ	Conusstriatus															
イモカ ^イ 科	マク ^{ライモカ} イ	Virroconusebraeus				1											
イモカ ^イ 科	ヤキイモカ ^イ	Pionoconusmagus															
イモカ ^イ 科	ヤナキ ^{シホ} リイモカ ^イ	Rhizoconusmiles															
イモカ ^イ 科	タカ ^{ヤサ} ミナシ	Darioconustextilis															
ウミナシ科	リュウキュウウミナシ	Batillariaflectosiphonata															
オキニシ科	オキニシ	Bursabufonia															
オニコフ ^{シカ} イ科	オニコフ ^{シカ} イ	Vasumturbineum															
オニツノガ ^イ 科	オニツノガ ^イ	Cerithiumnodulosum															
オニツノガ ^イ 科	イワカニモリ	Clypeomorusbatillariaeformis															
キセルカ ^イ 科	ツヤギ ^{セルカ} イ	Luchuphaedusapraeclara															
ソテ ^ホ ラ科	イホ ^{ソテ} カ ^イ	Lentigolentiginosus	1														
ソテ ^ホ ラ科	クモカ ^イ	Lambislambis			1								1				
ソテ ^ホ ラ科	ネジ ^{マカ} キカ ^イ	Strombusgibberulus															
ソテ ^ホ ラ科	ヘ ^{ニソテ} カ ^イ	Euprotomusbulla															
ソテ ^ホ ラ科	マカ ^{キカ} イ	Conomurexluchuanus				2					1						
タカラカ ^イ 科	キイロタ ^{カラカ} イ	Monetariamoneta															
タカラカ ^イ 科	コモンタ ^{カラカ} イ	Erosariaerosa															
タカラカ ^イ 科	ハナヒ ^{ラタカラカ} イ	Monetaria(Ornamentaria)annulus															
タカラカ ^イ 科	ハナマルユキタ ^{カラ}	Ravitronacaputserpentis															
タカラカ ^イ 科	ホシキヌタ ^カ イ	Ponda(Mystaponda)vitellus															
タカラカ ^イ 科	ヤクシマタ ^{カラ}	Arabicaarabica															
タマカ ^イ 科	リスカ ^イ	Mammillaopaca															
ナンバ ^{ンマイ} イ科	シュリマイマイ	Satsumamercatoria															
ニシキウス ^カ イ科	キンクカハマ	Tectuspyramis	1		2												
ニシキウス ^カ イ科	サササハ ^{テイ}	Trochusmaximus															
フジ ^{ツカ} イ科	ホラカ ^イ	Charoniatritonis															
ヤマクニシ科	オキナワヤマクニシ	Cyclophorusturgidus															
リュウテンササ ^エ 科	カンキ ^{クカ} イ	Lunellacoronatagranulata															
リュウテンササ ^エ 科	チョウセンササ ^エ	Marmarostomaargyrostoma													1	1	
リュウテンササ ^エ 科	チョウセンササ ^エ フタ	M.argyrostoma(operculum)														1	
リュウテンササ ^エ 科	ヤコウカ ^{イフタ}	Lunaticamarmorara(operculum)															
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Achatinafulica															
	不明																
	合計		2		3	3			1			1		1	1	2	

第2表 古墓貝類出土量（二枚貝）

貝種名	地区	1号墓 墓庭 覆土				2号墓 前庭部 覆土			3号墓 墓庭前 覆土				4号墓 左側斜面 覆土				5号墓 墓室				
		完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	備考	
		マルスタレカ ^イ 科	アラスジケマンカ ^イ	Gafrariumtumidum	左/右 不明															0/1	
	アラスノカ ^イ	Periglyptareticulata	左/右	0/1																	
	アラスノカ ^イ	Periglyptareticulata	不明																		
	スタレハマク ^リ	Katelsysiajaponica	左/右																		1
	スタレハマク ^リ		不明																		2
	ヌノカ ^イ	Periglyptapuerpera	左/右 不明																		
	ホソジイナミカ ^イ	Gafrariumpectinatum	左/右 不明																		
	リュウキュウアサリ	Tapesliteratus	左/右 不明																		
	オミナエシ	Pitarpellucidum	左/右 不明																		
フネカ ^イ 科	エカ ^イ	Barbatia(Abarbatia)decussata	左/右 不明																		
	クロチヨウカ ^イ	Pinctadamargaritifera	左/右 不明																		
	リュウキュウサホ ^ウ	Anadaraantiquata	左/右 不明																		2/0
																					4
ツキカ ^イ 科	カブラツキカ ^イ	Tridacnidacspp	左/右 不明																		
サ ^ル カ ^イ 科	カラカ ^イ	Fragumunedo	左/右 不明																		0/1
	リュウキュウサ ^ル カ ^イ	Vasticardiumflavum	左/右 不明																		1
イタヤカ ^イ 科	キンチャクカ ^イ 類	Decatopecten	左/右 不明																		
シャコカ ^イ 科	ヒメシヤコ	TridacnacroceaLamarck	左/右 不明																		1
	ヒレジャコ	TridacnasquamosaLamarck	左/右 不明									0/1		厚い殻で溶解							
	シャコ ^ウ	Hippopushippopus	左/右 不明								1										
	シャコカ ^イ 不明	Tridacnidacspp	左/右 不明																		
	シラナミ	Tridacna(Vulgodcna)maxima	左/右 不明	0/1	1/0		89/90														1/0
	シラナミ?	Tridacna(Vulgodcna)maxima?	左/右 不明					1													10
ジミカ ^イ 科	シラジミ	Geloinapapua	左/右 不明																		
キクサ ^ル カ ^イ 科	シロサ ^ル カ ^イ	Chamabrassica	左/右 不明																		
	シロサ ^ル ?	Chamabrassica?	左/右 不明																		
チド ^リ マスオカ ^イ 科	イノハマク ^リ	Atactodeastriata	左/右 不明	0/1			色残														0/1 6/1 25,24
イホ ^カ キ科	マカ ^キ	Crassostreagigas	左/右 不明																		
シオサ ^ナ ミカ ^イ 科	マスオカ ^イ	Psmmotaeaelongata	左/右 不明																		
	リュウキュウマスオカ ^イ	Asaphisdichotoma	左/右 不明	0/1			色残														1/0
ウミキ ^ク 科	マンガ ^イ	SpondlyssquamosusSchreibers	左/右 不明	1	1	1	色残														1
ニッコウカ ^イ 科	リュウキュウシラトリ	Quidnipaguspalatam	左/右 不明																		1
不明	枝サコ ^片		左/右 不明																		
	サコ ^片		左/右 不明																		
	サコ ^片 サ ^ル バ ^イ 類		左/右 不明																		1
	二枚貝不明		左/右 不明								1	色残									3
	貝不明		左/右 不明																		
	合計		左/右 不明	0/4	1/0								0/1								1/2 9/1
				1	1	1				1											1 24

第3表 試掘No.1 貝類出土量 (巻貝)

層位 貝種名			V			VI		
			完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
アキカ ^イ 科	アカイカ ^{レイシカ} イ	<i>Drupa rubusidaeus</i>	2					
アキカ ^イ 科	カンセ ^{キホ} ラ	<i>Chicoreus brunneus</i>						
アキカ ^イ 科	ツノレイシ	<i>Mancinella tuberosa</i>						
アキカ ^イ 科	ムラサキイカ ^{レイシカ} イ	<i>Drupa morum</i>						
アマオブ ^{ネカ} イ科	アマオブ ^{ネカ} イ	<i>Theliostyla albicilla</i>						
イトマキホ ^ラ 科	イトマキホ ^ラ	<i>Pleuroploca trapezium</i>				2		
イトマキホ ^ラ 科	イトマキホ ^ラ	<i>Fusinus nicobaricus</i>						
イモカ ^イ 科	アカシマミナシ	<i>Conus generalis</i>						
イモカ ^イ 科	アンホ ^{ンクロサ} メカ ^イ	<i>Lithoconus litteratus</i>		1				
イモカ ^イ 科	カハ ^{ミナシカ} イ	<i>Conus vexillum</i>						
イモカ ^イ 科	キヌカツキ ^{イモカ} イ	<i>Virgiconus flavidus</i>				1		
イモカ ^イ 科	クロミナシカ ^イ	<i>Conus marmoreus</i>						
イモカ ^イ 科	コ ^{マフイモカ} イ	<i>Puncticulis puliearius</i>						
イモカ ^イ 科	サヤカ ^{タイモカ} イ	<i>Virroconus fulgetrum</i>						
イモカ ^イ 科	サラサミナシカ ^イ	<i>Rhizoconus capitaneus</i>						
イモカ ^イ 科	サラサモト ^キ	<i>Dauciconusvitulinus</i>						
イモカ ^イ 科	中形イモ	<i>Conus spp (middle size)</i>				3		
イモカ ^イ 科	ニシキミナシ	<i>Conus striatus</i>				1		
イモカ ^イ 科	マタ ^{ライモカ} イ	<i>Virroconus ebraeus</i>						
イモカ ^イ 科	ヤキイモカ ^イ	<i>Pionoconus magus</i>						
イモカ ^イ 科	ヤナキ ^{シホ} リイモカ ^イ	<i>Rhizoconus miles</i>						
イモカ ^イ 科	タカ ^{ヤサン} ミナシ	<i>Darioconus textilis</i>						
ウミナシ科	リュウキユウウミナシ	<i>Batillaria flectosiphonata</i>	1					
オキニシ科	オキニシ	<i>Bursa bufonia</i>						
オニコフ ^{シカ} イ科	オニコフ ^{シカ} イ	<i>Vasum turbinellum</i>						
オノツノガ ^イ 科	オノツノガ ^イ	<i>Cerithium nodulosum</i>		2				
オノツノガ ^イ 科	イワカニモリ	<i>Clypeomorus batillariaeformis</i>						
キセルカ ^イ 科	ツヤギ ^{セルカ} イ	<i>Luchuphaedusa praeclara</i>						
フテ ^ホ ラ科	イホ ^{ソテ} カ ^イ	<i>Lentigo lentiginosus</i>				1		
フテ ^ホ ラ科	クモカ ^イ	<i>Lambis lambis</i>						
フテ ^ホ ラ科	ネジ ^{マカ} キカ ^イ	<i>Strombus gibberulus</i>	6	1				
フテ ^ホ ラ科	ヘ ^{ニソテ} カ ^イ	<i>Euprotomus bulla</i>						
フテ ^ホ ラ科	マカ ^{キカ} イ	<i>Conomurex luchuanus</i>	21	20		3		1
タカラカ ^イ 科	キイロタ ^{カラカ} イ	<i>Monetaria moneta</i>						
タカラカ ^イ 科	コモンタ ^{カラカ} イ	<i>Erosaria erosa</i>						
タカラカ ^イ 科	ハナヒ ^{ラタカラカ} イ	<i>Monetaria(Ornamentaria)annulus</i>						
タカラカ ^イ 科	ハナマルユキタ ^{カラ}	<i>Ravitrona caputserpentis</i>						
タカラカ ^イ 科	ホシキヌタ ^カ イ	<i>Ponda(Mystaponda)vitellus</i>						
タカラカ ^イ 科	ヤクシマタ ^{カラ}	<i>Arabica arabica</i>						
タマカ ^イ 科	リスカ ^イ	<i>Mammilla opaca</i>						
ナンハンマイ科	シュリマイ	<i>Satsumamercatoria</i>						
ニシキウス ^カ イ科	キンタカハマ	<i>Tectus pyramis</i>						
ニシキウス ^カ イ科	サヲサハ ^{テイ}	<i>Trochus maximus</i>				1		
フシ ^{ツカ} イ科	ホラカ ^イ	<i>Charonia tritonis</i>						
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	<i>Cyclophorus turgidus</i>						
リュウテンササ ^エ 科	カンキ ^{クカ} イ	<i>Lunella coronata granulata</i>						
リュウテンササ ^エ 科	チョウセンササ ^エ	<i>Marmarostoma argyrostoma</i>	1			2		
リュウテンササ ^エ 科	チョウセンササ ^エ フタ	<i>M. argyrostoma (operculum)</i>	2					
リュウテンササ ^エ 科	ヤコウカ ^イ フタ	<i>Lunatica marmorata (operculum)</i>						
アフリカマイ科	アフリカマイ	<i>Achatina fulica</i>						
	不明							
合 計			33	24	11	3		1

VIa			VI b			VIc			VI d			VII			合計		
完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
															2		
					2												2
			1												1		2
					2											1	2
					3												3
			1		1										1		1
					1												1
	1				2											1	2
		5		1	14		1	2			2			1		2	27
					2												3
		1			1												2
		1															1
			1												1		
											1						1
								1		1					2		
			1	1											1	1	
				2										1		4	1
					3						1			1			1
			5			1						1		1	13	1	1
					1												1
6	13	1	42	11	8	7	8	3	3			3		1	85	52	14
							1									1	
					1												1
												1			1		
														1			
					1												1
		1			3												5
																	1
		2													1		4
3			1									1			7		
							1									1	
					2			3						1			7
9	14	11	52	15	47	8	11	9	4		5	6		7	115	64	91

第4表 試掘 No.1 貝類出土量 (二枚貝)

層序				V				VIa			
				完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	備考
マルステレカ ^イ 科	アラスシ ^ケ メンカ ^イ	Gafrariumtumidum	左/右不明	1/0	0/1						
	アラスノメカ ^イ	Periglyptareticulata	左/右不明								
	アラスノメカ ^イ	Periglyptareticulata	左/右不明								
	スタ ^レ ハマク ^リ	Katelsiajaponica	左/右不明								
	スタ ^レ ハマク ^リ	Katelsiajaponica	左/右不明								
	ヌノメカ ^イ	Periglyptapuerpera	左/右不明	1/0				2			
	ホソジ ^シ イナミカ ^イ	Gafrariumpectinatum	左/右不明								
	リュウキウアサリ	Tapesliteratus	左/右不明								
	オミナエシ	Pitarpellucidum	左/右不明								
フネカ ^イ 科	エカ ^イ	Barbatia(Aarbatia)decussata	左/右不明								
	クロチョウカ ^イ	Pinctadamargaritifera	左/右不明								
	リュウキウサルボ ^ウ	Anadaraantiquata	左/右不明		1/0 1	14mm		3			
ツカカ ^イ 科	カ ^フ ラツキカ ^イ		左/右不明								
サルカ ^イ 科	カラカ ^イ	Fragumunedo	左/右不明	1/0	1/0						
	リュウキウサルカ ^イ	Vasticardiumflavum	左/右不明								
	キンチャクカ ^イ	Chamabrassica?	左/右不明								
シャコカ ^イ 科	ヒメシ ^ャ コ	TridacnacroceaLamarck	左/右不明	1/0	1/0 1	51mm	1/0				
	ヒレシ ^ャ コ	TridacnasquamosaLamarck	左/右不明		2	比片大きい					
	シャコ ^ウ	Hippopushippopus	左/右不明								
	シャコカ ^イ 不明	Tridacnidaespp	左/右不明								
	シラナミ	Tridacna(Vulgodcna)maxima	左/右不明		3/0	(80,90mm)	0/1	2/1 2	50,60mm		
	シラナミ?	Tridacna(Vulgodcna)maxima?	左/右不明								
シシミカ ^イ 科	シラナシシ ^ミ	Geloinapapua	左/右不明								
キクサ ^ル カ ^イ 科	シロサ ^ル カ ^イ	Chamabrassica	左/右不明	1	1						
	シロサ ^ル ?	Chamabrassica?	左/右不明				1				
イト ^リ マスオカ ^イ 科	イト ^ハ ク ^リ	Atactodeastriata	左/右不明	1/0			1/0		18mm		
イタホ ^カ キ科	マカ ^キ	Crassostreagigas	左/右不明								
シオサ ^ナ ミカ ^イ 科	マスオカ ^イ	Psmmotaeaelongata	左/右不明								
	リュウキウマスオカ ^イ	Asaphisdichotoma	左/右不明		1						
ウミキ ^ク 科	メンカ ^イ	SpondlyussquamosusSchreibers	左/右不明								
ニッコウカ ^イ 科	リュウキウシトリ	Quidnipaguspalatam	左/右不明		1						
	枝サコ ^ノ 片		左/右不明								
	サコ ^ノ 片		左/右不明					1	massive?		
	サコ ^ノ 片クサ ^ヒ ラシ類		左/右不明								
	二枚貝不明		左/右不明					2			
	貝不明		左/右不明						1		
	合計		左/右不明	2/0 1	3/0	6/1 7	1/0 1	1/1	2/1 11		

Vb				Vc				Vd				VII			合計		
完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	備考	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
		1			0/1			1/0							1/0	1/1	0/1
																	1
1/0		2													1/0		2
1/0	1/0	9		1/0		1									2/0	2/0	12
3/2				1/0	0/1			1/0							5/2	0/1	
	1/0															1/0	
1/0		1													1/0		1
1/0		4		1/0		4/0									2/0		5/0
1/0															1/0		8
0/2	0/1	2									1				0/2	1/1	1/0
																	3
	1/2	1	(40)(50)									1/0	1/0		2/0	3/2	1/0
																	3
				1/0			85mm								1/0		2
																	1
1/1	2/1	6	※①	1/0			72mm								2/1	2/2	5/1
						1											14
		1				1											2
1						1									2		2
8/3	2/1		※②					0/1			19				10/4	2/1	
1/0		3													1/0		3
		2															3
0/1		1			0/1										0/1	0/1	3
		1															1
		0/1															2
		1				2											0/1
		2															5
																	7
18/9	7/5	0/1		5/0	0/3	4/0		2/1				1/0	1/0		29/10	12/9	12/3
1		38				6									3		75
																	2

注：「備考」は貝の計測値を表す 殻長※① 83 (60) .57/0 ※② 26, 24, 19, 29, 26, 25, 22, 24, 22, 21, 22, 26

大作原古墓群 1 号墓

* 眞喜屋 隆

第 1 節 はじめに

大作原古墳群 1 号墓の所有形態と墓室の構造について、まず参考文献をもとに、沖縄における墓の所有形態と墓室の構造を紹介し、次に大作原古墳群 1 号墓の事例を報告する。

第 2 節 所有形態と墓室の構造

1. 所有形態

沖縄における墓の主な所有形態は以下のとおりである。

① 家族墓

家族単位での墓所有。王府官人、首里那覇の士族および有力な地方役人などは直系の家族ごとに墓を所有することが原則とされた。近年では身分や地域を問わずこの形態がとり入れられている。

② 門中墓

特定の父系血縁集団である門中で墓を所有する形態。沖縄本島南部に比較的多く分布しており、大規模な門中墓から小規模な兄弟墓まで親族集団の所有形態は広範囲である。

③ 模合墓

特定の父系血縁集団の範囲をこえ、友人、隣人や複数の門中が物資や費用を出し合っ
て共同墓を所有する形態。

④ 村墓

村落共同体で墓を所有する形態。現在では使用されていないものもあり、神三月の神
清明などに拝むだけの対象になっているところもある。

2. 墓室の構造

シルヒラシ、タナ、ノーシの 3 カ所からなる。シルヒラシは墓口から入って手前にある。
火葬が普及する以前はシルヒラシに棺を置き、遺体を白骨化させた。洗骨した遺骨を厨子に
納めタナに安置した。沖縄で火葬が普及したのは 1950 年代^註であるが、現在は、火葬して遺

※ 沖縄国際大学 社会学科卒 民俗学専攻

骨を納めた最も新しい厨子をジョーバン(門番)としてシルヒラシに安置する。タナに安置した厨子は手前から新しいものを置き、古いものは奥へと移す。門中墓の場合、墓室内が厨子で狭くなると最終的に墓室内にあるノーシ(イケ)に合葬する。家族墓にはノーシのような合葬施設はなく夫婦、親子などの単位で同一の厨子に遺骨を入れて合葬する。

第3節 大作原古墓群1号墓の場合

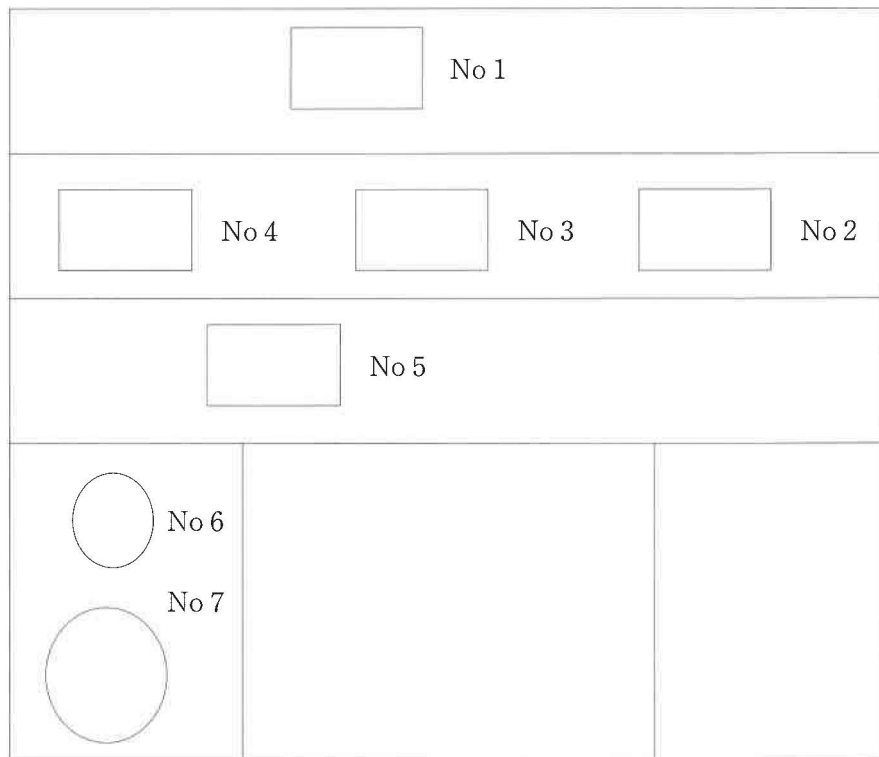
1. 墓の所有形態

1号墓に関係のある親族の話^註によると、1号墓は家族墓である。しかし親族の要望で被葬者の系譜など詳しい調査を行うことは出来なかった。

2. 墓室の構造

墓室内の構造および厨子の配置は図1の通りである。墓口から入って手前にシルヒラシがあり、左右に1段ずつ、奥に向かって3段のタナがある。墓室内にはノーシなどの合葬施設はない。

図1 墓室内・厨子の配置状況(略図)



3. 厨子・銘書

厨子の総数は7基で、内訳は御殿型5基、甕型の厨子甕2基である。No1～5は御殿型で墓室正面のタナに、No6・7は甕型で墓室左のタナにそれぞれ置かれていた。

すべての厨子に銘書が確認された。厨子に記された銘書で最も年代の古いものは道光2年(1822)で、年代の古い順に明治25年(1892)、大正3年(1914)が3基、昭和2年(1927)、昭和9年(1934)とつづく。

表1 厨子甕銘書の一覧

No	銘書の位置	銘書の内容	西暦年
1	身の正面	道光二年辛巳八月四日死去次男樽嶋袋	1822
2	身の正面・蓋の縁	先骨日明治廿五年七月十日仲本ノ島袋築登ノ妻ナベ	1892
3	身の口縁部	昭和九年旧十二月□日洗骨島袋加那妻仲本島袋マカト	1934
4	蓋の裏側	仲本ノ島袋加那父ノ樽姉ウシ丑ノ骨大正三年旧十一月洗骨	1914
5	蓋の裏側	金加那島袋義正昭和二年十二月先骨卯年	1927
6	蓋の裏側	伊礼ノ次男ノ島袋次□長男蒲骨□時死大正三年旧十一月洗骨	1914
7	蓋の裏側	仲本ノ島袋加那三女カメ骨大正三年旧十一月洗骨	1914

銘の書き方は、死去年月日・名の順に書かれたもの(No1)、洗骨年月日・名の順に書かれたもの(No2・No3)、名・洗骨年月日の順に書かれたもの(No4・5・6・7)がある。No1は死去年月日のみ、その他は洗骨年月日のみが記載されていた。名は、仲本ノ(No2・3・4・7)、伊礼ノ(No6)、といった屋号的なものがみられた。No2には築登の位階名がみられる。合葬と推定される厨子は3基(No2・3・7)で、No2・3は夫婦、No7は父・娘を合葬したと考えられる。

第4節 まとめ

大作原古墳群1号墓の所有形態と墓室の構造、厨子の配置・銘書の事例をみてきたが、以下のことが考えられる。

墓室の構造上の特徴として、墓室内には村墓や門中墓に見られるノーシなどの合葬施設はなく、合葬と推定される厨子があることから家族墓の形態であると考えられる。

厨子の配置は、御殿型が墓室正面、甕型が左側のタナに安置されており最も年代の古いもの(No1)が中央の一番奥に置かれていたが、その他の厨子に関しては配置に年代的な規則性は見出せなかった。

最も年代の古い銘書は道光2年(1822)で、シルヒラシにはジョーバンとしての厨子はな

く最も新しい厨子が昭和9年(1934)であることから大作原古墳群1号墓は、19世紀頃から火葬が普及する以前の昭和初期にかけて使用されていたことが分かる。

<参考文献>

- 藤井 正雄 1989年 「沖縄における墓供養」 『祖先祭祀』 凱風社
- 平敷 令治 1995年 「墓の形態と構造」 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房
- 名嘉真宜勝 1972年 「墓制」 『沖縄県史22 民俗1』 琉球政府
- 〃 1979年 「沖縄の葬送・墓制」 『沖縄・奄美の葬送・墓制』 明玄書房
- 〃 1980年 「墓制」 『那覇市史2 卷一 7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室
- 〃 1999年 「沖縄の墓」 『沖縄の人生儀礼と墓』 沖縄文化社
- 小川 徹 1987年 「沖縄における若干の墓型とその年代」 『近世沖縄の民族史』 弘文堂
- 田名 真之 1989年 「士族の墓」 『南島の墓ー沖縄の葬送・墓制』 沖縄出版
- 渡邊 欣雄 1994年 「現代沖縄の墓地風水について」 『風水論集』 凱風社

大作原古墓群についての聞き取り調査

※ 伊波 直樹

第1節 はじめに

本古墓群にて発掘調査を行ったA地区(1～3号墓)、B地区(4～7、11～14号墓)、C地区(8～10、15～17号墓)全17基中、1号墓と14号墓を除き、空き墓となっていることが分かった。空き墓となる主な要因としては、基地内の墓を移動する命令によって移転を余儀なくされたためだと考えられる。

空き墓の所有者については、A・B地区は平安山・浜川出身の人達の墓が混在しており、発掘期間中に、調査担当である山城と平安山・浜川郷友会の人達と一緒に、発掘現場で立ち入り調査を行った。

郷友会のメンバーの中には、2号墓の所有者であった照屋仁盛氏(浜川)、6号墓の所有者であった照屋文吉氏(平安山)も含まれており、現場で調査中の墓やその周囲の様子を見てもらった結果、A・B地区の11基の内、7基は所有者、あるいは所有していた屋号名が判明し、戦前の墓や周囲の様子、2号墓と6号墓は墓の造築年代も知ることが出来た。尚、C地区の墓6基については、墓の所有者、あるいは所有していた屋号名を特定する事が出来なかった。

発掘調査終了後、筆者が前回現場で聞き取った内容の確認と、墓を使用していた時期から空き墓に至るまでの経緯、本古墓群で出土した遺物(主に厨子甕)に関する事を聞き取りする為に、照屋仁盛氏、照屋文吉氏、前回現場で立ち入りした際のメンバーで、調査地域の近くに墓を所有していた島袋吉盛氏にそれぞれ話を伺った。

聞き取りした内容は、下記の通りである。

第2節 墓に関する聴取

1. 前回の聴取の確認

(1) 墓の所有者、あるいは所有していた屋号名

墓番号	所有者	屋号名	字名
1号墓	島袋善弘氏	ナカムトゥ	平安山
2号墓	照屋仁盛氏	ティーラペーチン	浜川
3号墓	ナカザゲンセイ氏	ナカザグァー	平安山
5号墓	島袋ゼンコウ氏(島袋善吉氏の叔父)	ハワイアガリウフヤグァー	平安山
6号墓	照屋文吉氏	照屋	平安山
7号墓	—	ウードウグァー(小渡)	平安山
14号墓	—	マティーシグァー(又吉小)	平安山

「—」は不明

(2) 墓の造築年代(2号墓・6号墓)

調査対象者	墓の造築年代
照屋文吉氏(6号墓・屋号名:照屋)	昭和6、7年頃で、文吉氏は当時小学校を卒業する年齢であった。
照屋仁盛氏(2号墓・屋号名:ティーラペーチン)	祖父が亡くなったとき(45才ぐらい。大正五年没)と、その後すぐ祖母も亡くなったので、その際に慌てて墓を造ったと思う。大正の半ば頃である。

2. 照屋文吉氏(6号墓)の墓造りの様子

(1) 墓を造る以前

6号墓を造る以前に使っていた墓は、6号墓の近く(現在の国体道路の辺り)にあり、昔の小さい墓だったので、文吉さんのお父さんが造り替えた。

(2) 墓造りの状況

- ①祖母の親戚に石大工がいたので、その人に造ってもらった。
- ②墓石は殆どが具志頭の港川石が使われており、一部は読谷からも運ばれている。
- ③港川から石を運ぶ際は、港川→汽車(桑江駅まで)→馬車(墓の近くに行ける所まで)→人力(切った松の木を組んで石に載せ、墓まで)。
- ④墓石を運ぶ時は字(平安山)全体で手伝った。
- ⑤墓室内は切り石で巻くように造った。(マチ墓)
- ⑥7～8ヶ月ぐらいで完成。

(3) 墓の完成

ハカヌスージ(墓完成のお祝い)は親戚一門と、石運びを手伝ってもらったから字の人達を呼んで、お祝いをした。

3. 戦前の墓とその周囲の景観

(1) 戦前の墓

① 2号墓(照屋仁盛氏)

『当時使っていた頃と前回立ち入り調査した時とを比べたら、随分荒らされている。昔は墓庭にも芝生が残っていたし、袖垣も左右共にあった。ナカザグァーの墓(3号墓)の脇から石組みの階段を登って、墓に入っていった。入口も少しだけ石積があった。でも戦時中の艦砲射撃で、入口の形が崩されたと思う。屋根も石積(平石)があって、高い所まであった。戦前は墓を開けた覚えはない。』

②6号墓(照屋文吉氏)

あんまり覚えていないが、シーミー(清明)の時に墓でご馳走を食べた覚えはある。墓を造った後の使用については、昭和15年に文吉氏の祖母が亡くなってこの墓に納めたが、文吉氏は兵隊に入る直前であり、内地にいて葬式には立ち合っていない。

(2) 墓の周囲の景観

①シリーヌサク

2・3号墓から北側の谷間一帯をシリーヌサクと言う。島袋吉盛氏によると、『シリーヌサクで調査区域外の墓は、吉盛さんの墓・メヌウファグワの墓・比嘉の墓・ナカンダカリグワ(門中墓みたいなもの)・ヨザの墓があり、現在も残されている。谷底は三尺(90cm)程のハルミチ(畑道)が通っていて、そこから墓に入って行った。A地区・B地区間は竹林だった。』

②カンジャーヌスバ

B地区にある墓地一帯の名称をカンジャーヌスバと言う。6号墓と5号墓の間には、畑があり、6号墓前の石積の下は下水道(幅は約1m弱)が掘られていた。カンジャーヌスバから下勢頭側へは行き止まりになっていた。

4. 戦時中の墓の状況

(1) 照屋文吉氏

『私は昭和15年(当時21才)には兵隊に入り、私の父親は鹿児島に、母親は宜野湾の野嵩に疎開していた。戦時中、私達の墓は防空壕としては多分使われていない。』終戦後、文吉氏は内地から引き上げる際に、母親が疎開していた野嵩にそのまま家族で住み付いた。

(2) 照屋仁盛氏

『私達の墓(2号墓)には避難しないで、掘ってある防空壕(14号墓近くの松林)に隠れていた。戦時中は墓の中や防空壕で生活する形になるから、隣の墓に遊びに行ったりしていた。それまでは墓は怖いところだと思っていたから、なかなか行けなかった。普段、墓というのは誰か亡くなった時以外開けないものだから、戦時中、墓口が開いていたら、避難して来ているのが分かる。墓に避難する時は中にある厨子甕を外に出して隅にまとめておいて、もし戦争が終わったら、元の状態に据え直すつもりでいたけど、大体の家族は山原に避難しているから、墓は開いたままになっていた。』

(3) 島袋吉盛氏

『私は20才の時に海軍志願で長崎(佐世保)に行った。家族は山原に避難していた。自分たち

の墓を防空壕として、使ったことはない。カンジャーヌスバに浜川の指定防空壕があり、場所は文吉さんの墓(6号墓)よりもっと東側にあった。亀甲墓は日本軍の陣地と間違われて、米軍に攻撃されたと思う。』

5. 他の墓について

(1) 14号墓(マティーシグァー)

『大きい亀甲墓だったが、戦時中墓の面に爆弾が直撃した。その時、墓の中に2, 3家族ぐらい避難していたけど、爆撃を受けて女の子一人だけ生き残って、後はみんな亡くなった。戦前は、この墓の前まで馬車道が通り、サトウキビの運搬をしていた。』

(2) 7号墓(ウードゥグァー)

照屋文吉氏によると、戦前は文吉氏より十才ほど年上の女性が二人いたが、子息がなく、後にその女性も亡くなったので、誰が跡を継いだのかは不明である。ウードゥグァーの人たちは、元々那覇から来ている士族の出身で、お祖父さん達を頼って、平安山に移り住んだ。

(3) 12・13号墓(所有者不明)

照屋文吉氏・島袋吉盛氏共に、戦前はガヤモー(茅葺き)で、墓があった記憶はないという。

(4) 11号墓(ウフヤグァーかヤマトウシマグァー)

照屋文吉氏によると、戦前5号墓の西側に、ウフヤグァーとヤマトウシマグァーの墓があり、二つ並んでいて同じように造られていたという。また、ウフヤグァーとヤマトウシマグァーは同じ島袋姓だが、親戚ではない。一つの墓しか掘り出されていないので、どちらがウフヤグァーかヤマトウシマグァーかは分からないと言っていた。5号墓と11号墓の間には、4号墓があるが、4号墓と11号墓は並んではいないので、11号墓の可能性が高いと考えられる。

6. 空き墓となる背景

(1) 墓を移転する際の経緯

先述したように、空き墓となる主な要因としては、基地内の墓を移動する命令によって移転を余儀なくされたためだと考えられる。筆者が、聞き取りした方々も同様の理由で墓を移転している。

米軍が基地内の墓の撤去命令(昭和40年頃)を出すまでは、各々の墓でシーミー(清明)等の行事は行っており、基地内でもフェンスが無くて自由に出入りできたと言う。

基地内の各墓主へ移転通知をする連絡は、市町村や各部落の公民館が行っていた。基地内にある墓は、全て国が買い取る形になり、移転補償も行っている。また、基地内の墓は立ち退きをする期間が数ヶ月間あり、移転補償金で新しく墓を造ってから、旧墓の移転作業を行

うのが通常であった。

さらに、島袋吉盛氏によると、大工廻朝盛氏〈註1〉が、基地内にある墓の評価委員をしており、墓を移転する際に吉盛氏の父親がその方を墓に案内して、墓の造り等を見せて検討してもらったと言う。

(2) 墓を移転する準備

墓を移転する前に行うことについては、筆者が聞き取りした方々からは共通点を見出すことはできなかったが、それぞれの事例として報告する。

①照屋文吉氏→終戦後、文吉氏は内地から引き上げる際に、母親が疎開していた野嵩にそのまま家族で住み付いた。文吉氏達は、戦後役場から墓を移転しなさいと連絡が来るまで、墓(6号墓)に行ったことがなかった。米軍によって墓に土が被せられた(何年頃かは不明)為である。役場から連絡を受けた文吉氏は、一人で土が被せられた墓を確認しに行った。墓を確認した後、文吉氏は墓口まで、被さっていた土をスコップで掘り出すと、既に墓口は開いていた。戦時中に開けたままになっていたのか、骨董品集めをするために墓荒らしが空けたのかは分からないが、この一帯の墓は殆ど墓口が開いていた。墓室に残っていた厨子甕は後日取り出す事にした。

②島袋吉盛氏→米軍が基地内の墓の撤去命令を出すまでは、墓でシーミー(清明)等の行事は行っていた。墓を移転するまでの経緯は、先述の(1)と同様である。吉盛氏達の新墓は北谷のウグイス谷に移転することになり、墓を移転する日取りを吉盛氏の母方の誰かが、サンジンソー(三世相)である金良宗邦氏(註2)とユタのところに行って、いつがいいか決めてもらった。

③照屋仁盛氏→米軍が基地内の墓の撤去命令を出すまでは、墓でシーミー(清明)等の行事は行っていた。墓を移転するまでの経緯は、先述の(1)と同様である。仁盛さんの新墓は浜川に移転することになったが、墓を移転する日取りを決めてもらうことはしなかった。

(3) 移転する当日

(2)と同様に事例として報告する。また、照屋仁盛氏は自分たちの墓(2号墓)と嘉手納基地のゴルフ場辺りにあった門中墓の移転も行っており、両方の事例を報告する。本来、納棺や洗骨で墓口を最初に開ける人は、本来干支が何年の人がいいといった決まりがある。これはシーヌアタトーン、アタランと言って、昔からの習慣とユタの指示で決まる場合があるのだが、基地内からの移転を余儀なくされた今回の事例では、先述した事を行っていない。

①照屋文吉氏(6号墓)

墓室にある厨子甕を持ち出す作業は文吉氏と弟達で行い、厨子甕を持ち出す時は御願以

下(ウガン)等はしなかった。墓口が開いていたため、墓室へ土が少し流れ込んでいたが、厨子甕は割れてはいなかった。が、どの厨子甕もひっくり返されて、遺骨が外へ出されていた。文吉氏達が外へ持ち出した厨子甕は甕型、御殿型、小さい壺(赤ちゃんの遺骨がはいっていたらしい)の各1個ずつだった。取り出した厨子甕は文吉氏の祖父、祖母、兄のもので、文吉氏の家族の厨子甕以外は持ち出さなかった。厨子甕を保管する場所がなかったので野嵩の家まで担いで持ち帰った。作業は一日では終わらなかったで2、3回に分けた。文吉氏の自宅に持ち帰った厨子甕は新しい墓を造るまでの間、自宅内に仮に穴を掘って石を積んだところに保管。新しい墓は野嵩に造られ、現在も使用している。

②島袋吉盛氏

移転する当日の参加者は、吉盛氏・父親・弟・いとこの総勢5名程。墓口を開ける前にウガンをした。ユタではなく親戚にウガンの出来る人がいたので、その人にやってもらった。

ウガンの後、吉盛氏のいとこが墓口を開けた。墓室内にあった厨子甕は2～3個で、御殿型とマルガーミ(甕型)があったと思う。御殿型には吉盛氏の祖父(島袋キチジョウ)と祖母(本妻)が納められ、マルガーミには祖父の二番目の妻(おそらく本妻が男の子を産まないで祖父が新たに連れてきた)が一人で納められている。同じ甕に三名は納められないからだと思う。

厨子甕を旧墓から出した後、クチウンチケーを行い、ウグイス谷に造ってある新墓に納めた。全ての作業は一日で終了した。

③照屋仁盛氏(2号墓)

『当日は仁盛氏と親戚のお婆さん、あとユタも頼んで一緒に墓に行った。本来この墓には私の祖父の厨子甕(マルガーミ)と、祖母の甕(味噌甕みたいなもの)が入っていたはずだったが、墓口が既に開いていたので中を見たら何もなかった。私の祖母の話では、戦後になって南洋から両親と兄弟の遺骨が帰ってきたが、私は当時15、6ぐらいだったので、私の叔父さんが遺骨を引取り、墓の中に入れてと言っていたが、本当は木箱の中に遺骨代わりに石ころを入れたらしい。』

石ころが入った木箱を旧墓(2号墓)から出す時と、浜川に既に造ってある新しい墓に納める時は、ユタに移転報告のウガンしてもらった。これらの作業は一日で終了。

④照屋仁盛氏(門中墓)

役場→門中(ムートゥヤー)→仁盛さんへ連絡。この門中墓は既に使用されなくなっていて(およそ明治以前までには。詳しい年代は不明)、墓室内に厨子甕も残っているので、厨子甕を新しい墓に移転することになった。

当日の参加者は総勢12、3名程で、門中のムートゥヤー(照屋姓)、ナカムートゥヤー(新垣姓)は夫婦で、仁盛氏を含めた各チネー(分家?)からは一人ずつ、そしてユタにも来てもらった。

旧墓を空ける時はユタにウガン(御願)してもらった。

墓室内の厨子甕はイシジーシ(石製)、御殿型、マルガーミ(甕型)全部で52, 3個あり、全ての厨子甕の内大半をマルガーミが占めていた。墓室から厨子甕を全部外に出す作業は重労働の為、墓室内から墓口に出す人(二人)と、墓口から墓庭に運ぶ人を交代しながら行った。外に出した厨子甕は全部蓋を開けてみた。中の遺骨はかなり風化しているものもあったが、遺骨を別の甕にまとめることはしなかった。蓋に書いてある銘書は読めるのは全部書き写したが、中には墨が薄くなり読みやすくなるからといって、鳥酒を銘書にかけてみても読めないものもあった。銘書を見るかぎり、一個に付き一人しか納められていなかった。銘書の内容から見ても家系のルーツや亡くなった年代(干支しか書かれてない等)が特定出来ないものがあり、そしてこの門中墓が使用されなくなった年代は特定出来なかった。(仁盛さんの話では明治以前ではないかと推測)

銘書の判読を終えた厨子甕は旧墓から車に載せて、既に造ってある浜川の新墓に移動。新墓の墓室内に厨子甕を配置(旧墓の通りには配置はしなかった)した。全ての厨子甕を中に入れた後、ユタに移動報告等のウガンをしてもらい、一日で全ての作業を終了した。

移転作業を終えた門中墓(新墓)は現在でもシーミー(清明)は行われているが、神墓として扱われ亡くなった人を納めてはいない。

第3節 厨子甕について

1. 厨子甕に関する聞き取り

(1) 墓に関する聞き取りの結果

筆者が聞き取りした方々からは墓を移転する際、照屋仁盛氏の墓(2号墓)を除き、厨子甕は新墓に移設した事が分かったが、発掘調査の結果、照屋文吉氏の墓(6号墓)、照屋仁盛氏の墓(2号墓)から共に厨子甕片が出土している。

(2) 墓から出土した厨子甕片

① 2号墓(照屋仁盛氏)

2号墓から出土した厨子甕片はいずれも甕型である。墓庭から出土したのは身の部分が2個分で、口縁部1点・胴部7点あり、接合できなかった。しかし、蓋は1個分で6点出土し、接合すると鏝の部分が3カ所欠損していたが、概ね復元された(実測番号 no.7)。鏝の内側には銘書が「大正五年・・・照屋仁王」と書かれており、「・・・」の部分は鏝が欠損した箇所に当たっていた。

聞き取り調査の過程で仁盛氏に、復元された厨子甕の蓋と銘書を見てもらったところ、『照屋仁王』は仁盛氏の祖父にあたり、位牌も持っていた。位牌には「大正五年旧十二月十四日死去照屋仁王」と記されており、銘書と位牌の内容から、2号墓から出土した厨子

甕の蓋が仁盛さんの祖父のものだと証明された。

また、2号墓の墓庭から先述した厨子甕の蓋の周辺で、銅製のジーファー(簪)1点・煙管1点・金属製の輪5点も出土している。これらの遺物の写真を、聴取の過程で仁盛氏に見てもらったところ、ジーファーについては私の祖母のものかもしれない、と述べていた。

②6号墓(照屋文吉氏)

6号墓から出土した厨子甕片は、墓室・墓庭・墓の外から御殿型が蓋・身合わせて2個分、甕型は蓋が1個分、身が2個分で計5個分は出土している。

その内、御殿型で蓋と身が揃いになっている厨子甕片があるのだが、出土した場所が6号墓からは墓室・墓庭前の石積・墓外左側の石積の3カ所、7号墓(ウードゥグァー)の前から、さらに離れた所にある1号墓(ナカムトゥ)の屋根左側の石積からも出土した。接合して蓋・身共にある程度復元したところ、蓋の縁の内側には銘書が「明治十八年/同治五年壬辰十一月十日/お戸/三十□濱川/照屋直五郎」と書かれていた。

聴取の過程で、復元した厨子甕と銘書部分の写真を文吉氏に見てもらったところ、「照屋直五郎」は文吉氏の祖父にあたり、亡くなった時期も今から120年程前なので銘書にある「明治十八年(1885年)」は、死亡年月日か洗骨年月日かは不明である。

しかし、文吉氏の話によると、『最初に使っていた祖父の厨子甕はマルガーミ(甕型)だったはずで、もしかしたら墓を造った時(昭和6,7年頃)か、祖母が亡くなった時(昭和15年)に買い替えたのかもしれない。』と述べていた。

(3) 厨子甕を意図的に割る可能性

墓の発掘現場において、厨子甕は割られた状態で出土するケースが多いのだが、厨子甕が割れる状況は色々な可能性が考えられるため、出土した厨子甕の状態から、原因を判断することは難しい。

しかし、聞き取りの過程で厨子甕を意図的に割る可能性について聞いたところ、主に二つのケースが考えられる事が分かった。

①墓荒らしが割る場合

照屋仁盛氏によると、『戦後14, 5年してから骨董品集めをするために墓荒らしが多かった。墓荒らしによって厨子甕も結構盗られているけど、骨董品にならない厨子甕は石や岩盤等につけて割ったのではないかな。また、墓荒らしは金目のものは何でも盗って行くから。例えば厨子甕は書いてある銘書を消してから売ったり、厨子甕の中から遺骨を出して、明治・大正の人たちは金歯をしているのが自慢だったから、金歯を盗っていったりもした』と言う。

照屋文吉氏も墓の移転で厨子甕を移設する際に、「厨子甕は割れてはいなかったが、どの厨子甕もひっくり返されて、遺骨が外へ出されていた。」と語っており、墓荒らしについても「墓の中で厨子甕が割られているのがたくさんあったらしいので、墓荒らしの仕業ではないか。」と語っている。

②遺族による民俗的儀礼によって割る場合

聞き取りの過程で、亡くなった人が三十三年忌を終えたら、厨子甕は遺骨を移し替えたりするか、と聞いたところ、照屋文吉氏は、「部落(平安山)では、三十三年忌の時は墓にウガミしには行くけど、墓を開けて厨子甕を移し替えることはしなかった。基本的に誰かが亡くなった時以外は、墓口は開けない。」と答え、照屋仁盛氏は「もし亡くなった人が三十三年忌を終えたら、厨子甕の中の遺骨はイケ(遺骨を捨てる場所)や他の甕に入れるから、戦前だったら開いた厨子甕は遺族が割って捨てたと思う。墓庭で割って捨てたのか、何処かに持って行って捨てたのかは分からないけど、墓荒らしが出る以前にも割られている厨子甕を見たことはある。」と答えた。

また、鳥袋吉盛氏は厨子甕を割ることについて、「私達はやったことないが、他の所は墓移転の時にクチウンチケーをして、いらぬ厨子甕は割って処分したかもしれない。もし厨子甕を割るとしたら、ユタの指示で余分と認めた場合は、ハンマーか何かで厨子甕(マルガーミ)を割ったと思う。御殿型を割るのはまず考えられない。」と答えた。

2. 洗骨について

(1) 洗骨に関する聞き取り

照屋仁盛氏と鳥袋吉盛氏は、洗骨に立ち会った、或いは見た事があり、その様子と洗骨時に使用する厨子甕について、事例として報告する。

①照屋仁盛氏

『洗骨の様子を見たことがある。その時はある人が亡くなって大体一年～一年半してから行った。まずシルヒラシから棺箱を外に出すの作業は、男の人が行い、棺箱から遺骨を取り出して水を入れた洗面器で遺骨を洗う作業は、女の人が行った。

遺骨を取り出した棺箱は墓の近くで場所を選んで、燃やしたり叩き割って捨てたりした。又、海辺に近い墓は、浜で燃やしたりした。

洗骨の時厨子甕は家族の誰かが買っていくけど、亡くなった人のサイズに合わせて買った。厨子甕が当時で幾らぐらいだったかはよく分からないけど、御殿型はマルガーミの4～5倍の値段はしたはず。

洗骨時はお坊さんにお経を詠んでもらい、買って来た厨子甕に銘書を書くのは大体お坊

さんに書いてもらった。お坊さんは昔から北谷町内の専属の人が何人かいた。遺族によっては洗骨の時はユタに頼んでウガンしてもらって、銘書は遺族が書く場合もあった。基本的に洗骨時にユタとお坊さん両方を呼ぶことはしなかった。』

② 島袋吉盛氏

『戦前、吉盛氏の祖母(二番目の妻)が亡くなって6～7年後に、その洗骨に立ち会った。洗骨は亡くなってから6～7年しないと、遺骨がきれいにならないと言う。洗骨の日取りも、サンジンソーかユタに決めてもらった。』

墓口を開ける前のウガンは、ユタではなく親戚にウガンの出来る人がいたので、その人にやってもらったと思う。吉盛氏は当時19～20才頃だったので、墓口を開けるとか棺箱を出すのは、吉盛氏の父親が行った。洗骨をするのは主に女性で、嫁・子供・孫がやった。また棺箱は、墓の近くの空き地に穴を掘って埋めていた。

厨子甕はマルガーミ(甕型)に遺骨を納めたと思う。銘書を書いたのは、多分吉盛氏のお父さんで、洗骨は一日かかったと思う。

厨子甕の購入経路については、戦前は桑江駅あたりに雑貨店があり、そこから買っていたと思う。また、戦後は沖縄市のゲート通りにある、花城という雑貨店から買いに行きよった。』

第4節 終わりに

今回の聞き取りの内容は、聞き取りした方々が、自身の記憶や上の世代(親や祖父母など)から聞いた事(戦前の墓の様子、他の墓について等)と、実体験に基づいた事(墓移転の作業、洗骨)を語ってもらい、それをまとめたものである。

墓に関しては、戦前的大作原にあった各墓の様子など、所有者ならではの貴重な資料が得られ、また、墓を移転する際の準備や、移転当日の作業の様子は、聞き取りした3名共に内容が異なっているため、事例報告という形をとった。

厨子甕に関しては、発掘調査で出土した厨子甕に書かれてある銘書で、持ち主が判明した厨子甕が分かる等の成果が得られた。一方、出土した厨子甕の中で、特徴的な欠け方をした甕型の蓋があり、それは鏝の部分で、1ヶ所(図版22図3)、3ヶ所(図版30図3)、11ヶ所(図版28図5)それぞれ剥離したような形跡が見られる。これらのような形にされた厨子甕が民俗的に何を意味しているのかが、今回の聞き取りでは明らかに出来なかった事であり、今後の研究課題である。

最後に、調査に御協力して頂いた照屋文吉氏、照屋仁盛氏、島袋吉盛氏に心より深く感謝を申し上げます。

<註>

1. 大工廻朝盛氏 旧越来村村長(1950～1954年)『コザ市史』p
2. 金良宗邦氏 北谷町吉原でサンジンソー(三世相)を営まれていた

[参考文献]

- 北谷町教育委員会、『北谷町史』第三卷資料編2 民俗上・下、1992年
北谷町教育委員会、『北谷町史』第五卷資料編4 北谷の戦時体験記録、1992年
北谷町教育委員会、『北谷町史』第六卷資料編5 北谷の戦後、1992年
北谷町教育委員会、『山川原古墓群(2)』、2001年
北谷町教育委員会、『上勢頭・下勢頭古墓群』、1986年
北谷町教育委員会、『金良宗邦文書 -易・擇日・風水-』、1993年
沖縄県埋蔵文化財センター、『ヤッチのガマ カンジン原古墓群』、2001年
那覇市教育委員会、『銘苺古墓群(1)』、1998年
那覇市教育委員会、『銘苺古墓群(2)』、1999年
那覇市教育委員会、『ナーチャー毛古墓群』、2000年
浦添市教育委員会、『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者』、1997年
沖縄市教育委員会、『下仲宗根門中の墓』、1985年
名嘉真宜勝、「石川市伊波焼墓調査報告」『読谷村歴史民俗資料館紀要 第16号』、1992年
名嘉真宜勝、「読谷村字大湾・山内門中墓の厨子甕銘調査報告」『読谷村歴史民俗資料館紀要 第24号』、2000年
名嘉真宜勝、『沖縄の人生儀礼と墓』、沖縄文化社、1999年
沖縄出版、『南島の墓』、1989年
上江洲均、『沖縄の厨子甕』、1980年
平敷令治、『沖縄の祖先祭祀』、1995年

22151

北谷町文化財調査報告書 第22集

大作原古墓群

—嘉手納(12)・(13)送油管移設に係る文化財発掘調査報告書—

発行 沖縄県北谷町教育委員会

2003年（平成15年）3月

沖縄県北谷町字桑江226番地

電話（098）936－1234

印刷 株式会社 東洋企画印刷

沖縄県那覇市古波蔵4-1-1

電話（098）831－7404
